Z45W4

明治四十二年二月三十日發行

博文館臨時增刊

2

太陽第十五卷第三號

明治史革七編

文藝史

附 明治四十一季史

193

新刊發行廣告

大隈伯爵、後藤男爵、有賀博士評序

英國牛津大學教授 エヂアトン原著

早稲田大學政學士 牛津大學殖民學專攻 永井柳太郎譯述

英國殖民發展史

洋裝脊皮
特製全一冊
正價 金壹圓廿錢
郵稅 金拾錢

英國民が眇たる北海の孤島に起りて現時の大帝國を建設するに至れる迄の歴史その者は殖民的膨脹の必要に迫られつゝある我日本帝國民の取て以て研究すべき一大事實たり然るに我國民は殖民事業に就て何等の定見を有せず故に我國の將來に於ける殖民的膨脹と重大の關係ある韓國及び滿洲の施設の如きも今尚糢糊の間に在るを免れず世界列强が殖民的膨脹の口實と手段とを發見するに其心肝を碎きつゝある現時に於て我朝野を擧げて殖民の事に疎きは危險の極と言はざるべからず此時に方りて本書の出づるもの豈偶然ならんや

發行所 東京牛込區早稲田 早稲田大學出版部

發賣所 東京日本橋區本町三丁目 博文館

ダイヤモンド入指環類特別販賣ニ付謹告

時計及寶玉類內外雜貨貴金屬美術品商

本堂は時計寶玉類內外雜貨貴金屬美術裝飾品乃至大聲寫聲機平圓盤類の營業販賣に從事し業運日に隆昌を極め夙に東洋無比の聲譽を全世界に博するを得たるは是れ偏に大方愛顧諸君の賜にして本堂の大に感謝する所なり抑々本堂營業の方針たる勉て私益を割讓し廣く一般顧客の利便を謀るの公義に倣ふこと備さに諸君の見證せらるゝ所たり

本堂今回更に一大奮勵を以て諸君均霑の恩に報ひんと期し殊に販賣品中に於て寶石嵌入裝身具類の如き高價の物品に至りては其轉々授受に際し殆ど通貨と其用を同じくするの狀況あり現に其實價を有するに係らず偶々事情の爲に制せられ空しく格外の低價に沈淪せしむるは本堂の頗る遺憾とする所なるを以て本堂は先づ第一に今日以後販賣の「ダイヤモンド」入指環（指環の外に首飾、腕輪、帶締、其他裝身具類にして「ダイヤモンド」を主眼とし裝嵌したる一切の物品を含む）類にして價格五百圓以上に對し苟も現品に損傷なき以上は何時にても需に應じて左記割引券の割合に據り……

寶石界空前の一大提供

ダイヤモンド入指環類
特別割引買戻券

一寶渡後一ヶ年以內は（市價の變動に拘はらず）正價の……壹割引
一寶渡後三ヶ年以內は（市價の變動に拘はらず）正價の……貳割引
寶渡後三ヶ年以上は別に時價を以て申受くべし

東京市京橋區尾張町二丁目 天賞堂本店
大阪、東京神田 横濱、長崎 天賞堂出張所

右券と引換に特別割引を以て買戻すべし此事にして幸に諸君の便益に資する所あり多年恩顧の萬一に酬ふるを得ば本堂の喜も亦大なりとす敬白

（東京市京橋區尾張町貳丁目 電話新橋特長三三三、長三一五三）

天賞堂本店

太陽定期增刊
第拾五卷第參號

明治史第七篇 文藝史 目次

寫眞銅版

◎福澤諭吉、新島襄◎坪內逍遙、森鷗外◎尾崎紅葉、幸田露伴◎加藤弘之、井上哲軒、外山、山（以上アート刷）◎帝國大學◎早稻田大學◎慶應義塾（以上二色刷）◎石橋思案、川上眉山、巖谷小波◎廣津柳浪、江見水蔭、巽庭算村◎高山樗牛、姉崎嘲風、上田柳村、大町桂月◎小栗風葉、泉鏡花、德田秋聲、柳川春葉◎大西操山、金子筑水、島村抱月、後藤宙外◎塚原渋柿園、德富蘇峰、同蘆花、三宅雪嶺、小杉天外、田口掬汀◎國木田獨歩、田山花袋、島崎藤村、正宗白鳥、小山內薰◎夏目漱石、內藤鳴雪、高濱虛子◎佐々木信綱、蒲原有明、薄田泣菫、與謝野鐵幹、同晶子、岩野泡鳴◎樋口一葉、北村透谷、落合直文、森田思軒◎我樂多文庫表紙◎同插畫似顏スケッチ

第一編 混沌世界……二
第二編 思想界の變遷……六
第一章 思想界の概觀（六）
第一節 急激なる變遷◎第二節大體の區劃
第二章 歐化主義の全盛（八）
第一節 新知識輸入◎第二節當代學問界の分野◎第三節自由思想◎第四節理想本位の思潮◎第五節國家主義和思想◎第七節反動的現象◎第二節教育勅語の發布◎第三節教育と宗教との衝突
第三章 國粹保存主義（二三）
第四章 日本主義の勃興（二六）
第一節日清戰役◎第二節日本主義の喧傳◎第三節主情主義の思潮
第五章 世紀末的思想（三〇）
第一節個人主義的思想◎第二節日露戰役◎第三節最近の思想界
第六章 哲學宇の趨勢（三六）
第三編 小說及び評論壇……三八
第一章 初期の文藝（三八）
第一節先代の殘燼文學◎第二節硬派散文家◎第三節反譯及び政治小說
第二章 純文學的活動の勃興（四九）
第一節反省的態度◎第二節新文學の急先鋒◎第三節二潮流の勃興◎第四節外國文學の紹介◎第五節皮相寫實派の全盛◎第六節幼稚なる理想主義◎第七節寫實派の變體と傳奇派◎第八節主情的傾向◎第九節評論壇の大勢
第三章 三十年代の文學（六九）
第一節日清戰役と文學◎第二節寫實派の進步◎第三節時代精神論◎第四節文壇の變徵
第四章 自然主義の勃興（八二）
第一節海外文藝の紹介◎第二節ニイチエ思想◎第三節大破壞◎第四節所謂自然派◎第五節非自然派文學
第五章 結尾（九五）
第四編 新體詩界……九七
第一章 第一期（九七）◎第二章 第二期（一〇二）◎第三章 第三期（一〇七）◎第四章 第四期（一一〇）◎第五章 第五期（一一五）◎第六章 第六期（一二〇）◎第七章 第七期（一二九）
第五編 短詩界の大勢……一五〇
第一章 國粹保存的思想と短詩界の奮起（一五〇）◎第二章 歌壇の進步（一五二）◎第三章 俳壇の改新（一五八）
第六編 演劇界……一六一
第一章 緒論（一六一）◎第二章 維新の過渡期（一六三）◎第三章 新富座全盛時代（一六四）◎第四章 史劇の刷新（一六六）◎第五章 劇壇の重鎭（一七〇）◎第六章 壯士劇・物與（一七一）◎第七章 新機運の發生（一七二）◎第八章 新劇團論（一七九）◎第九章 結論（一七七）
第七編 新聞及び雜誌……一七八
第一章 緒論（一七八）◎第二章 新聞 勃興（一八一）◎第三章 政論全盛時代の新聞（一八三）◎第四章 新聞紙の變革（一八三）◎第五章 新聞の資本的競爭（一八四）◎第六章 新聞紙の發展（一八五）◎第七章 新聞紙の讀者吸收策（一八六）◎第八章 現下の新聞紙（一八七）◎第九章 初期の雜誌（一八八）◎第十章 雜誌の發展（一八九）◎第十一章 出版界の概況（一九〇）◎第十二章 結論（一九一）

附錄 四十一年史

序論（一九三）◎第一章 政治（一九四）◎第二章 外交（二〇六）◎第三章 統監政治（二一〇）◎第四章 軍事（二一三）◎第五章 經濟（二一九）◎第六章 文學（二三一）◎第七章 數學（二四〇）

新進名家投票第二回發表

7103
1

新島襄

福澤諭吉

文章世界 第四卷第二號 增刊

新春壇

新しき人は新しき衣を着る。新しき文字は新しき人々の手を俟つて成るべし「新春壇」は天下の青年男女が苦心の餘に成れる文章詩歌を掲載せり。玆に新しき文學の曙光の輝けるを見よ。

懸賞作品

△小論 △叙 △抒 △書 △日 △小 △は △新 △短 △俳 △演 △繪

事情簡品 が き

既文……岡山花袋選
文……長谷川天溪選
文……前田木城選
文……水野葉舟選
文……四村清山選
記……田山花袋選
文……田山花袋選
文……前田木城選
詩……蒲原有明選
歌……窪田空穂選
句……内藤鳴雪選
詩……菊池幾香選
詩……橋本邦助選

（附錄）

▲新萬葉物語（伊藤左千夫）▲人形（上司小劍）▲旅（岡村清山）▲汗（米光關月）△徒勞（水野仙子）△八疊の電燈（曾川行人）△死兒（岡山落穗）△三の朝（若松綠）△檢査方（川濱夕水）

▲改訂 現代文士錄……

既成發行

洋裝菊判紙數二百四十頁
石版寫眞版依例豐富

定價廿錢 郵稅二錢

少年世界 第十五卷第三號 增刊

入學案內

二月十五日發行

洋裝菊判紙數三百頁美麗寫眞版挿入

正價金拾錢 郵稅壹錢五厘

◎表紙……中村不折案
◎口繪……尾竹國觀畫

學年試驗の時期漸く切迫して、少年社會は玆に新たに中等學校入學の準備に着手すべき事とはなりぬ、入るべき學校に多く、受驗の科目又決して易からず、平百人の志望者を凌駕して、名譽の桂冠を戴く又難事と云ふべし、即ち本誌はこゝに入學受驗者の好資料たらしむべく、其卷期增刊として、入學案內の一冊を提供するもの、深く諸君の前途を思へば也、來れ天下の少年諸君、玆に此書に聞ふて進むべき也。

◎お伽詩篇 一の谷……巖谷小波作

◎懸賞 和歌俳句披露……佳作數千篇

▲本文記事大要

◎戊申詔書略解◎光榮ある卒業式◎出京者の心得◎我が志望◎實業學校入學の目的◎出鄉の一夜◎中學一覽◎受驗準備◎受驗答案◎其他十數篇

東京日本橋本町
博文館
振替東京二百四十番

（四〇四）

森鷗外

坪内逍遙

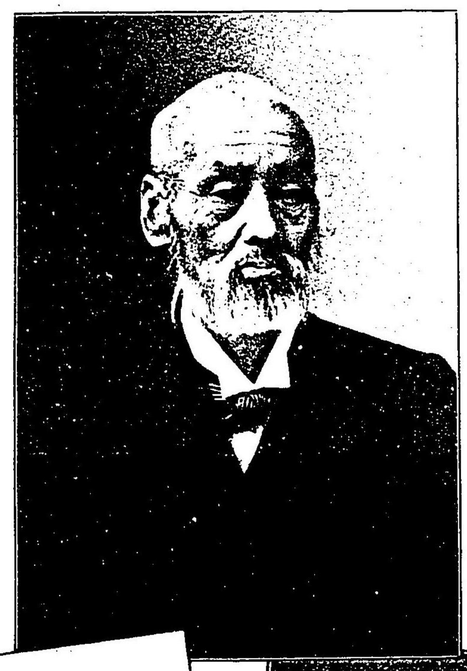
幸田露伴

尾崎紅葉

東京帝國大學赤門

同假正門

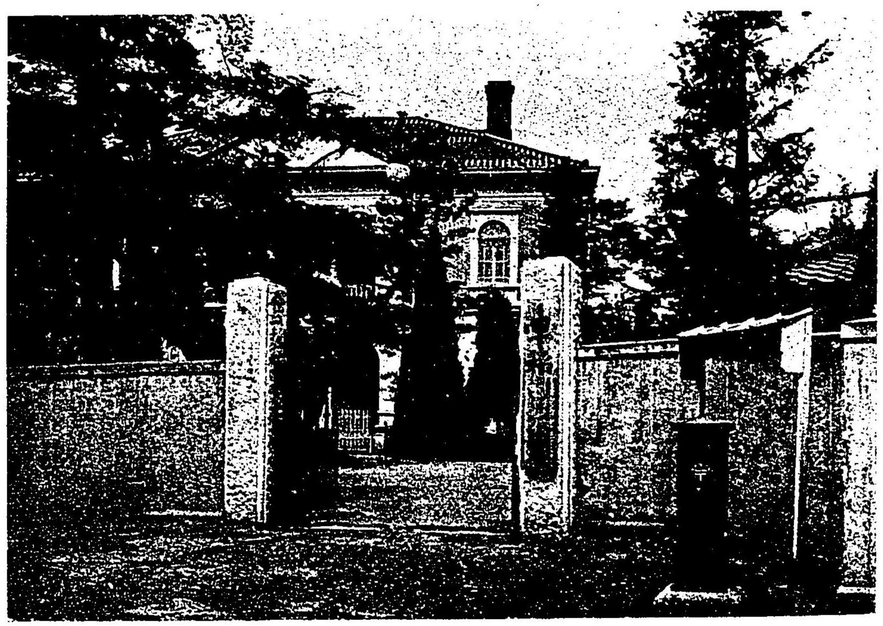
加藤弘之

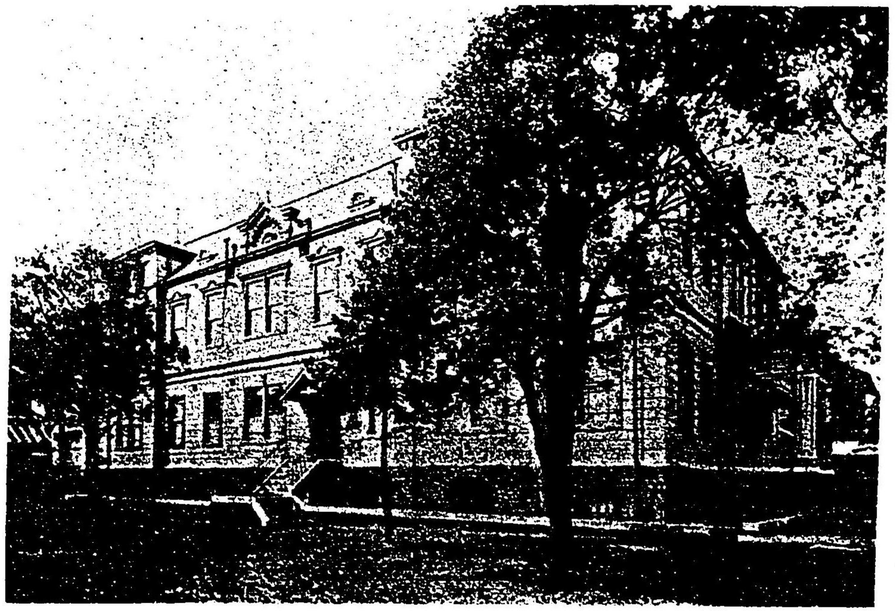


外山、山

井上毅軒

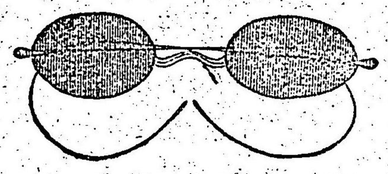
早稻田大學





慶應義塾

眼鏡



蔓掛

廿二金壹匁四分附十二圓廿錢
二十金壹匁三分附十圓七十錢
十八金壹匁二分附九圓廿錢
十四金壹匁壹分附七圓廿錢
十二金壹匁附六圓廿五錢
九金九分附四圓九十錢

繩蔓掛

二十二金貳匁附十六圓五十錢
廿金壹匁八分附十四圓十錢
十八金壹匁七分附十二圓四十錢
十四金一匁六分附九圓八十錢
十二金壹匁五分附八圓四十錢
九金壹匁三分附六圓四十錢

半掛及差込

廿二金二匁三分附十六圓九十錢
二十金貳匁貳分附十五圓
十八金貳匁附十貳圓七十錢
十四金壹匁七分附九圓三十錢
十二金壹匁六分附八圓
九金壹匁五分附六圓四十錢
▲銀蔓掛　壹圓五十錢
▲同鼈甲附　壹圓六十錢
▲同繩蔓掛　壹圓八十錢
▲同鼈甲附　金貳圓

◎注意

度附玉は遠視何度近視何度と申越を乞ふ

●各地遞送料は内地十二錢臺灣清韓共三拾錢郵券代用一割増

東京市京橋區南傳馬町三丁目
貴金屬美術細工袋物商
丸屋商店
電話本局二十番　振替口座第九五八六番

寫眞器械

並に石版及寫眞製版器械一式
プリズム式双眼望遠鏡

東京市日本橋區本町二丁目
振替貯金口座六〇〇番
本店　小西六右衛門
電話本局八三四・二一八二・二六四七
大阪市西區江戸堀下通り壹丁目
大阪出張所

▲定價表　郵券四錢に進呈

東京帝國大學文科大學教授 文學博士 芳賀矢一先生
女子高等師範學校教授 文學士 下田次郎先生 編纂

日本家庭百科事彙

全壹冊

▲裝釘極美紙數千五百餘頁（六號活字廿四字詰卅行三段振假名附大形四六二倍判◎大小項目約三萬▼精巧木版挿圖約千個▲石版二十度刷彩色寫生圖畫本文二頁大十七枚▲石版八度刷精巧鮮明（本邦世界各國並に著名都市）詳細地圖十四枚

◎定價金拾圓 ▲遞送料市內五錢市外卅二錢（臺灣、清國、韓國、各五拾錢）

本邦百科辭典の嚆矢にして東西新舊一切の知識と實用の方法とは網羅し得て餘縕なし。各項目の說明は詳細正確優に一部の書を成すに足るを以て本書の一卷は實に幾千百卷の書籍に該當す。

文學博士 坪內雄藏先生著

倫理と文學

▲紙數菊判五百六十頁 洋裝美本 全壹冊

▲定價金壹圓五拾錢、送料內地拾貳錢▼

博士の筆舌が圓轉輕妙（文學は云はずもがな。其倫理講演に至りては）論理の的確比喩の巧妙、古今に通じ、東西に亘りて最も穩健に常識涵養（の福音として天下に尊重せらるゝは固より其處なり本書は博士最近の大思想を發揮せるものにして試に其項目を見よ）◎公德訓（▲惡德の解剖及圖表▲常識善惡道德圖表及說明▲自殺の分類と其是非▲禮の分析圖表及說明▲惡德矯正法及說明道德の成立ち易からざる理由▲ベリクリーズの演說を讀みて▲千歲一遇の機）◎文學入門（▲今の小說を讀む者の心得▲年少讀書家の爲めに▲文部大臣の訓令に就きて▲文藝に關する三の異れる標準▲世界を相手にするの志等いかに）時勢に適切にして萬人（必讀の金科玉條なるかを知り給んことを）

文學博士 坪內雄藏先生著

七版

通俗倫理談

▲紙數五百餘頁▼

▲定價金壹圓貳拾錢 送料內地八錢

◎出版圖書目錄往復葉書にて御申込次第進呈す

東京神田振替貯金口座第五〇壹番 合資會社 冨山房

FATHERS AND CHILDREN

歐洲近代文藝の最も偉大なる產物——▲總洋布製最美本▲定價金壹圓▲紙數五百四拾頁▲小包拾貳錢

父と子

ツルゲーネフ作

相馬御風氏譯

『父と子』は露の文豪ツルゲーネフが作中最も傑出したる大作にして、小にしては露國、大にしては歐洲近代文藝の最も偉大なる產物なり、その深刻なる描寫方法は、自然派文藝の師表にして、その主人公たる青年は、最も勇敢なる時代思想の先驅者なり狹くしては親子の關係、廣くしては舊き時代と新しき時代との衝突は、無比の深刻公平なる觀察によつて描き出されたり。嘗て同じ作者の作『その前夜』を公にして譯筆の靈妙を世に認められたる相馬御風氏は、更に滿身の努力を集注して此の雄篇を移植す。最も進步したる時代精神に觸れんと欲するものは必ず此書を讀まざるべからず。

西園寺公望侯題辭 德富蘇峰氏序 田山花袋 小栗風葉兩氏編

六版

二十八人集

執筆諸家

二葉亭四迷	田山花袋	小栗風葉	小山內薰				
德富盧花	柳川春葉	生田葵山	三島霜川				
島崎藤村	眞山青果	水野葉舟	蓬田空穗				
德田秋聲	川山美山	岩野泡鳴	吉江孤雁				
戸川秋骨	蒲原有明	長谷川天溪	齋藤弔花				
正宗白鳥	柳田國男	沼波瓊音	太田玉茗				
中澤鹽川	德田秋江	前田木城	西本翠蔭				

▲挿畫……滿谷國四郎……小杉未醒……

◎新文藝の代表的一大全集（報知新聞批評）◎後代に傳ふ可き最善の書（早稻田文學評）

——大判最上製、裝釘最華麗背一面の金模樣——▲定價金壹圓參拾錢 ▲小包料拾貳錢

東京麴町區飯田町三丁目二十五番地 新潮社 電話番町二二二三番 振替東京九六三九番

增資廣告

當行出資額貳百萬圓ノ處今般更ニ三百萬圓ヲ拂込ミ總出資額ヲ五百萬圓トス

右廣告候也

東京市日本橋區小舟町

合名會社 安田銀行

合名會社 安田銀行 四十一年下半季 決算報告

一資本金 五百萬圓
一積立金 二百五十三萬圓
一諸預リ金 二千四百〇六萬七千〇八十五圓八十錢八厘

利益金勘定

一金二十四萬八千〇七十七圓〇四錢 純益金

內譯
金十五萬圓
金五萬圓
金一萬三千八百八十五圓二十六錢
金三萬四千百九十一圓七十八錢

第一積立金
第二積立金
賞與金
社員配當金

貸借對照表

資產之部

一貸附金及當座預金貸越	一二、九六六、八八一・七〇八
一割引手形及荷付爲替手形	一一、六七五、五九一・八二〇
一預ケ金	七、八五一・〇九〇
一雜勘定	四九八・二七三
一他店ヘ貸(五百十九ケ所)	三四二、二九一・六一二
一有價證券及金銀	一〇、〇七七、七四八・〇七〇
一地所	四五三、〇一六・七九〇
一營業用地所建物及什器	二〇六、七九九・九〇六
一質物流込	五、〇〇〇・〇〇〇
一金銀有高	二、〇六一、八五四・八八一
合計	三七、七九七、五三四・一五〇

負債之部

一資本金	五、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一積立金	二、三三〇、〇〇〇・〇〇〇
一諸預リ金	二四、〇六七、〇八五・八〇八
一仕拂送金爲替手形	一六五、七二四・一七〇
一借入金	三、〇一二、八九五・〇三〇
一再割引手形	二、〇三六、六五七・五四〇
一他店ヨリ借(七百四十ケ所)	九三七、〇九四・五六二
一當期純益金	二四八、〇七七・〇四〇
合計	三七、七九七、五三四・一五〇

右之通リニ候也

東京市日本橋區小舟町三丁目九番地

明治四十二年一月四日

合名會社 安田銀行

頭取 安田善之助
營業部長 安田善八郎
監督 安田善次郎

株式會社 日本興業銀行

第十四期營業報告

明治四十一年下半期

貸借對照表

負借ノ部

一債券發行高	一三、九二五、〇〇〇・〇〇〇
一債券募集金	一〇、九三四、五六〇・〇〇〇
一當籤債券仕拂未濟高	一、一〇〇・〇〇〇
一仕拂未濟券利息	二二六、四二四・五三五
一債券利金所得稅	六四・一八〇
一定期預り金	二、七一九、〇五七・二五〇
一當座預り金	一、四四八、五二七・六六一
一特別當座預り金	四〇二、六三五・八一〇
一別段預金	五、四九五、九六一・二一〇
一國債元利預り金	六、四八六・二三六
一信託資金	六〇二、八一一・一一二
一信託募集金	三六五・〇〇〇
一信託取立金	四一五・九八〇
一資本金	一七、五〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一損失補塡準備金	五五九、〇〇〇・〇〇〇
一配當平均準備金	三〇四、〇〇〇・〇〇〇
一別途積立金	一三〇、〇〇〇・〇〇〇
一配當金	三、三四三・五〇〇
一仕拂未濟配當金	四、五三〇・五二〇
一利益金	九二三、八二三・〇二一
合計	五五、一八八、一〇六・〇一五

資產ノ部

一定期貸付金	二四、九五一、〇九七・九七〇
一割引手形	二、〇〇〇、〇九二・二〇〇
一當座預ケ金	六二五、一〇二・一九〇
一通知預ケ金	八九四、六六一・七〇〇
一國債證券	二、四七三、九六八・一〇〇
一地方債證券	一六、四七〇、二八一・七四五
一大藏省證券	九〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一社債券	四、四七一、九七九・〇〇〇
一雜勘定	七七・一九八
一諸仕拂基金	六一五、八八〇・二〇四
一信託立替金	一、一三〇・〇〇五
一拂込未濟資本金	一、二五〇、〇〇〇・〇〇〇
一地所	五九、一四八・三〇〇
一家屋	七三、四〇六・二〇九
一什器及金庫	七、〇二〇・三八〇
一金銀有高	三九四、二六〇・八一四
合計	五五、一八八、一〇六・〇一五

損益勘定

一當期總益金	一、六九八、九九四・六二四
一前期繰越金	六二、八六〇・四二一
合計	一、七六一、八五五・〇四五
一當期總損金	八三八、〇三二・〇二四
差引	
一當期利益金	九二三、八二三・〇二一
內	
一損失補塡準備金	一〇八、〇〇〇・〇〇〇
一配當平均準備金	二七、〇〇〇・〇〇〇
一第一配當金(年五分)	四〇六、二五〇・〇〇〇
一重役賞與金	二五、〇〇〇・〇〇〇
一第二配當金(年三分)	二四三、七五〇・〇〇〇
一別途積立金	五〇、〇〇〇・〇〇〇
一後期繰越金	六三、八二三・〇二一

右之通候也

株式會社 日本興業銀行

明治四十二年二月

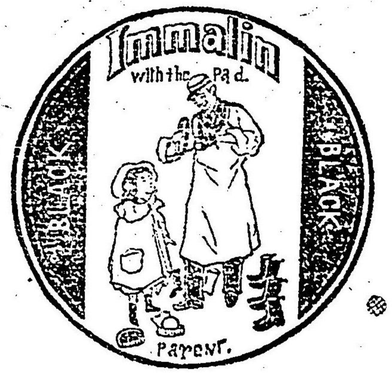
總裁 添田壽一
副總裁 佃一豫
理事 伴野乙彌
理事 井上辰九郎
理事 金子直
理事 齋藤恂

右調査ヲ遂ケ其正確ナルコトヲ認メ茲ニ同意ヲ表シ候也

監査役 澁澤榮一
監査役 大倉喜八郎
監査役 大谷嘉兵衛

世界一靴用クリーム インマリン

全國到る處靴店及洋物店にあり



實用新案ブラシ付

『インマリン』は從來の瓶入よりも品質優等なり故に小量にて高等なる好き光澤を發す。

『インマリン』は革質を軟かならしめ靴の耐久力を增す。

『インマリン』は他のクリームと異なり糟の附着することなし。

東京日本橋區通一丁目七番地

販賣元 小澤商店

電話本局 一三一八番

日本女子大學校教授文學士 鹽井正男先生著

新古今和歌集評解

▲紙數壹千六百餘頁

合本クロース製全一冊
定價金參圓八拾錢
小包料金二拾錢

金子元臣先生著

▲分本 和裝七冊 定價 一卷三拾五錢・二、三、四卷各四拾五錢。五、六、七卷各金五拾錢・郵稅 各六錢

▲紙數壹千百餘頁

古今和歌集評釋

▲分本 和裝五冊 定價卷一、二各金四拾錢・三、四各金四拾五錢・卷五金五拾錢・郵稅各六錢

合本クロース製全一冊
定價金貳圓八拾錢
小包料金拾六錢

本書は文藝界の二大快著として、國歌研究の指南車として、無前の好評を博せしもの今回更に讀者諸君の便を圖り、上の句下の句いづれよりも撿索し得る索引を附したる合本を發行す。表裝は長原止水畫伯の意匠に成りて頗る優美に、內容と相俟ちて、新樣の光彩を發揮せり。

最新刊行

國學院大學 東京高等師範講師 三矢重松先生著

高等日本文法

クロース 定價金壹圓六拾錢
製全一冊 小包料金拾貳錢

研究解釋、作文用の實際的大文法書出づ。如何に先人未發の卓見多きかを見よ。文法界の泰斗たる著者の竟見は、統合して茲に表れ、國語の眞性始めて發揮せらる。讀め！あらゆる國民！

發行所 東京神田錦町一丁目十番地 振替貯金東京四九九一番 明治書院

讀書界に大歡迎新著

鎌倉建長寺前管長 釋宗演先生新著

筌蹄錄

▲最新刊▼ (洋裝頗る美裝函入 正價金八拾錢送料八錢)

禪師が本邦現代精神界に於ける大立物たるは今更揚言を俟ざる處其內容は修養談あり教育談あり宗教論あり實業談あり而も其根底に透徹せる禪味妙趣に到つては茲に吾人の表顯し得べき限にあらず

東京帝國大學文科大學教授 文學博士井上哲次郎先生新著(好評嘖々再版)

倫理と教育

洋裝菊判形上製六百卅餘頁 正價金壹圓五拾錢 小包拾二錢

世評一般

△萬朝報＝議論堂々文脈整齊吾人は之に對すること再び三たびして遂に飽くことを知らざらんとするものなり云々。△二六新聞＝兎に角博士が精透の意見、穩健の說を知らんと欲するものに本書を薦む云々。△日本新聞＝博士の議論は由來常識に富めるを以て稱せらる奇警斬新の個所尠き代りに偏癖の處なく一般讀書界に歡迎せらるゝ價値あるべし云々。

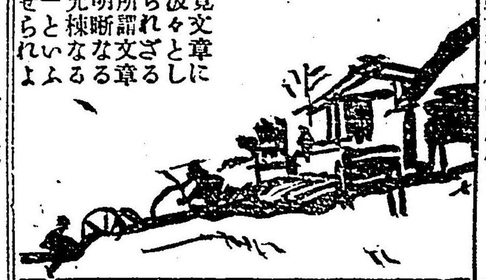
東京神田區猿樂町振替壹貳壹壹壹番
發行所 弘道館

幸田露伴君著

普通文章論

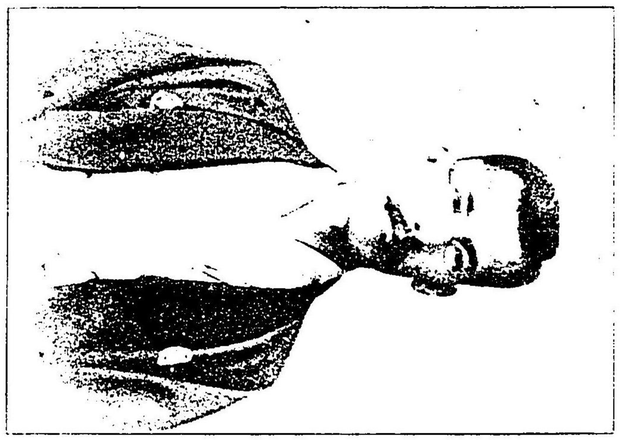
全一冊洋裝
四六判上製
定價七拾五錢
郵稅八錢

文章に二あ、一は美術的文章にして一は實用的文章なり世の作文難を唱ふる者は畢竟文章に此二種あるを知らず、又は二種の特長如何を辨別せず、一種の混合文章を作成するに汲々として實用文章か美術文章か譯の分らぬ鶴的文章に苦心せり、其の到底滿足なる文章の作られざる所以怪しむに足らず、而して世界に於ける實用的文章の範圍は極めて廣大無邊にして所謂文章の七八分を支配し占領せりこれ其文體が淺近、平凡、庸常、容易、簡單にして然かも明晰なる人間に切實なる用途を與ふるものなればなり、幸田先生茲に感あり近時作文書の汗牛充棟なるも多く實用文章の性質を誤解せるを遺憾とし遂に「如何にして普通文章を作るべきか」といふ問題を最も明快に解決せられたり、作文難の士は必ず一本を備へて先生の精論を熟讀せられよ



東京神田區猿樂町振替壹貳壹壹壹番
發行所 弘道館

波小谷嶽



三十三

栗田博石

大町桂月　樋口龍峡
笹川臨風　白川鯉洋　合編

名士百家

全一冊洋裝菊判總クロース函入美本
紙數約五百五十頁當代名書數葉挿入
●定價一圓六十錢　送料十二錢

●發行所　東京本郷天神町二丁目廿五番地　日高有倫堂

是れ嶺雲氏の慰問集也小說に漱石秋聲鏑花、風葉、青果在り論文に三宅、藤岡、姉崎の三博士美文に桂月、臨風、譯文に登張の（サラストラ）紫影の（ツルゲネフ）紅線の（英詩對句）執筆の諸大家四十餘名文星燦として輝く悉く是れ錦繡金玉の文字實に文壇の一大偉觀也

東京市麹町區錢瓶町（常盤橋內）

日本興業銀行

電話　本局（特）三、三〇〇番　四一三七番　一、一八〇二番

營業科目

資本金壹千七百五十萬圓

一、擔保附社債に關する信託業務
一、有價證券其他貴重品等の保護預
一、有價證券の賣買元利金の支拂及收立
一、地方債、社債、株式等の發行募集事務
一、各種の信託業務
一、國債證券、地方債證券、社債券、株券の擔保貸付及手形の割引
一、國債證券、地方債證券、社債券の應募又は引受
一、法律の規定に依り設定したる財團を抵當とする貸付
一、定期預金、當座預金、特別當座預金

現代思潮

二十一家講話

全一冊　南宮崎三郎君編

洋裝四六判並製　正價卅五錢
紙數二百十八頁　郵稅四錢

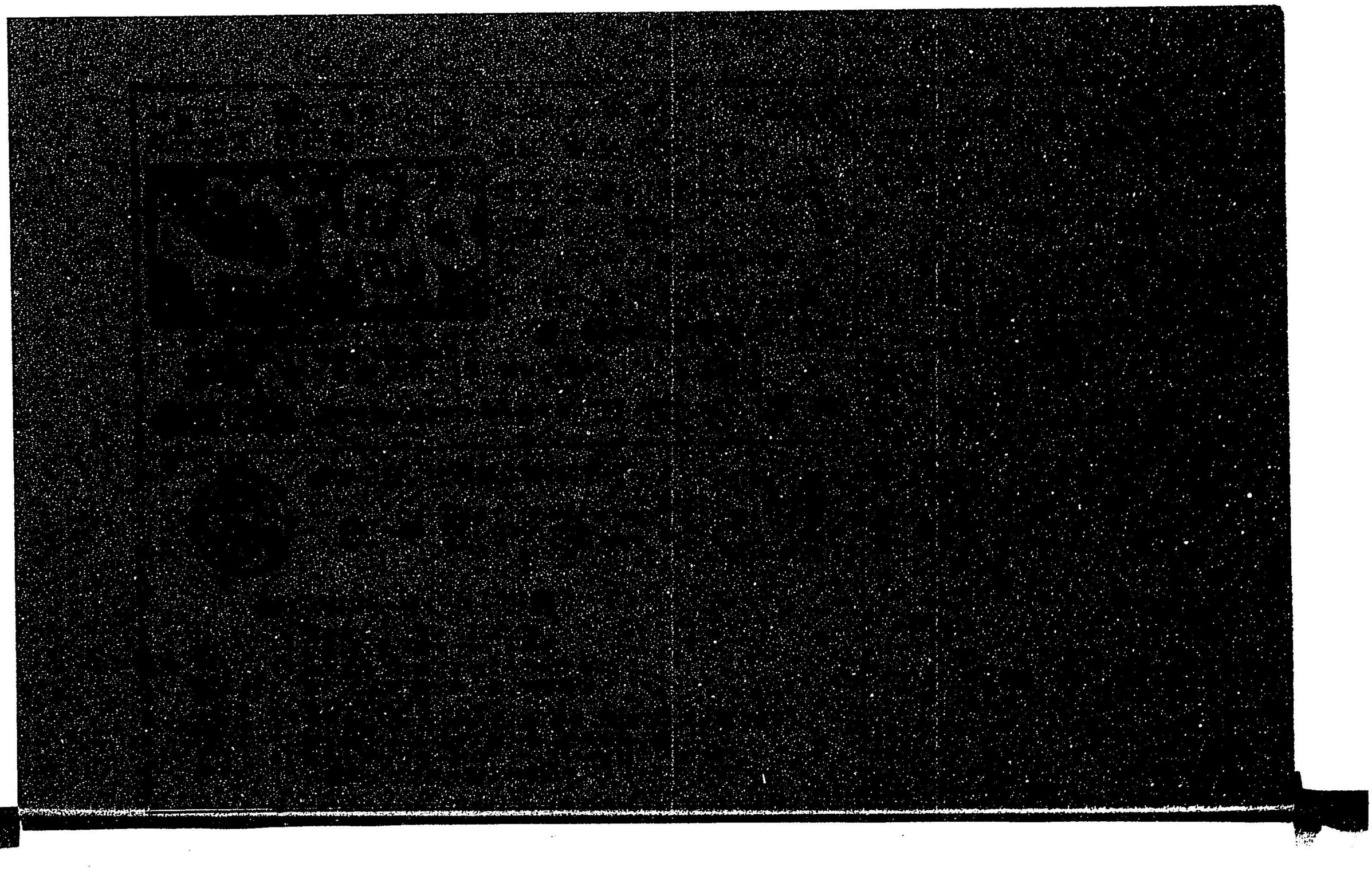
▲講話者二十一家は悉くこれ當代斯界に於ける靜々たる人その時事を談ずるや敢然にして熱誠溢々たる人その學說を說するや深遠にして精緻津々たる趣味讀去讀來の間に生じて卷を措く能はざらしむ

講話者芳名（イロハ順）

農學士　石渡繁胤君
法學博士　仁保龜松君
法學博士　戶田海市君
法學博士　千賀鶴太郎君
法學博士　岡村司君
工學士　金子彥二郎君
工學士　鹿子木孟郎君
工學博士　加藤谷陸太郎君
工學博士　吉川龜次郎君
法學博士　竹田貞次郎君
法學博士　田島錦治君
理學士　坪井仙太郎君
醫學士　南部虎次郎君
法學博士　井上密君
法學博士　桑原芳樹君
醫學博士　松岡道治君
醫學博士　鹽井彥太郎君
醫學博士　岡藤澤恒藏君
醫學博士　佐多愛彥君
文學士　島文次郎君
文學士　下河內十二藏君

▲講者は皆年新聞記者として最も有爲の政村冷靜能く講大家の警咳を窃して些の誤譯なし而して行文流麗筆上珠を轉ばすが如し讀よ高評を給へ

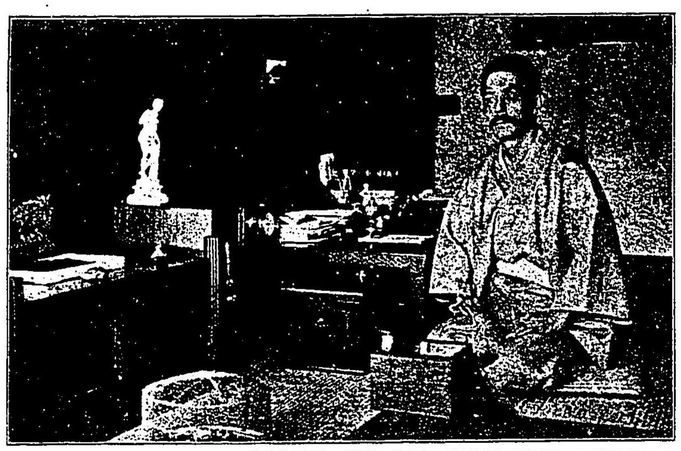
東京本町　博文館　發行



川上眉山

小谷巖波

石橋思案



廣津柳浪

江見水蔭

饗庭篁村

大町桂月

小栗風葉

德田秋聲

泉鏡花

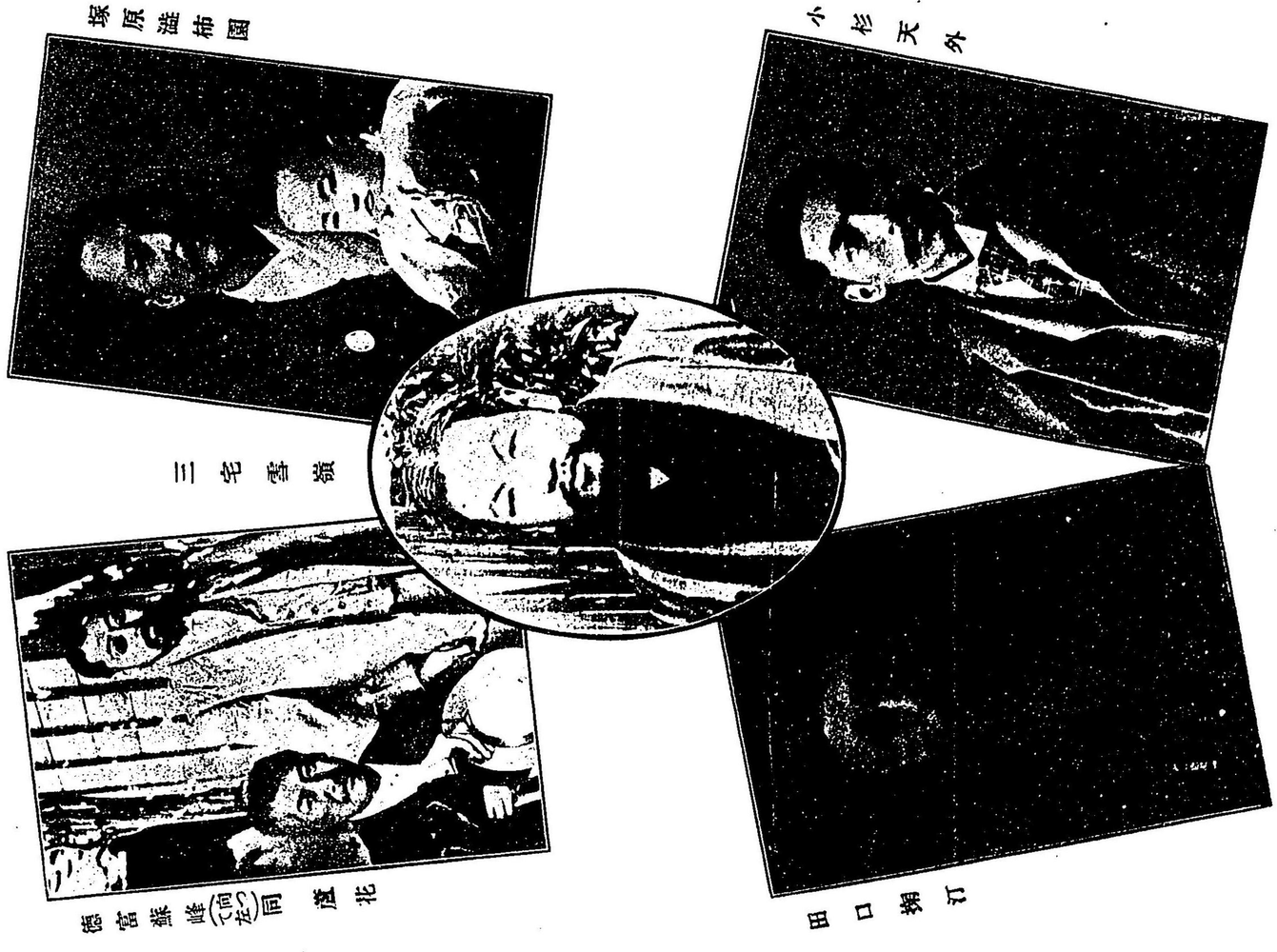
柳川春葉

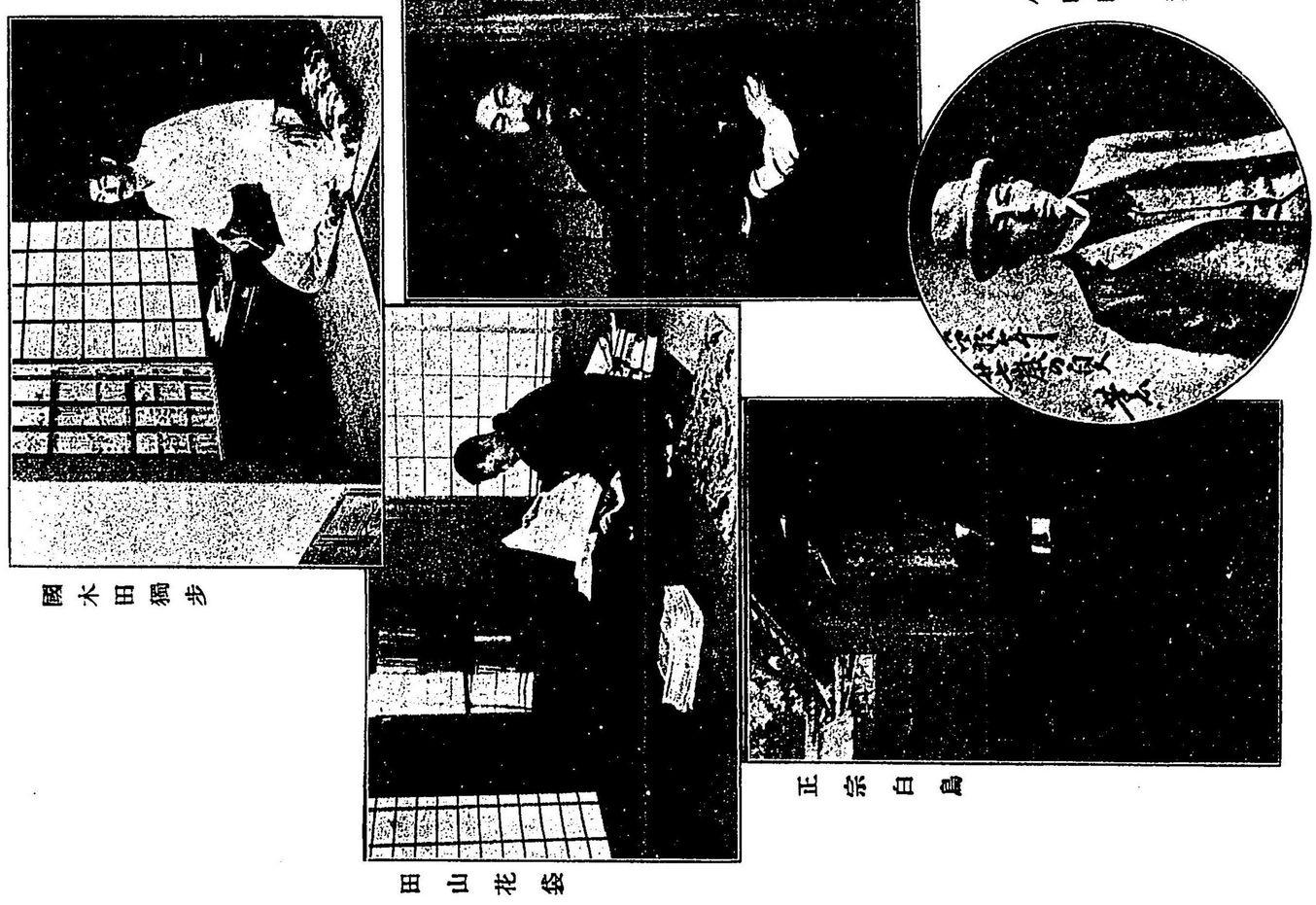
大西操山

島村抱月

外山脩造

金子筑水


塚原澁柿園
小杉天外
三宅雪嶺
德富蘇峰(向って左)同席
田口掬汀



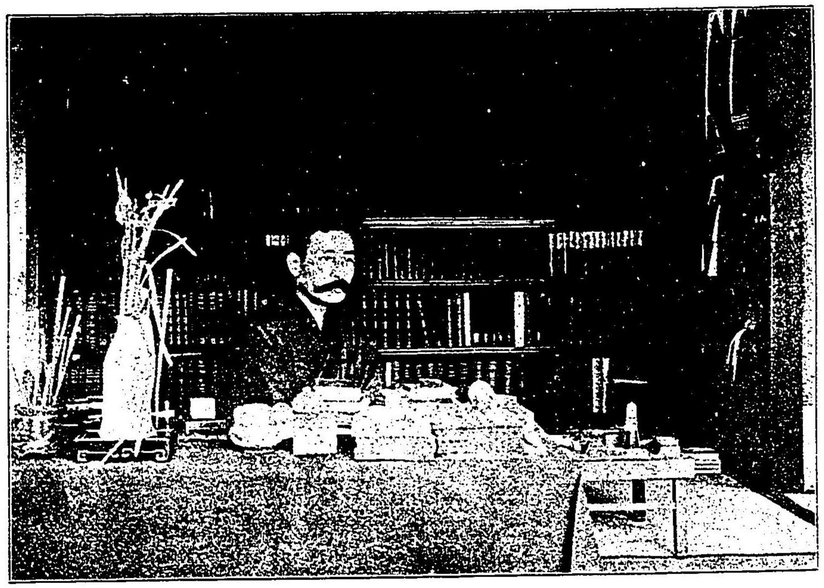
國木田獨歩

田山花袋

正宗白鳥

小山内薫

島崎藤村



夏目漱石

内藤鳴雪

高濱虚子

與謝野鐵幹

佐々木信綱

蒲原有明

與謝野晶子

薄田泣菫

岩野泡鳴

落合直文

北村透谷

森田思軒

樋口一葉

我樂多文庫の表紙及初編發刊の辭

二十一年「我樂多文庫」第十號所載の硯友社員の似顔スケッチ
（硯友社員法學士坂井松岡綠葉筆）

文學博士 三島毅先生序題
國學院大學講師 宮內鹿川先生著

韓非子講義

（高評嘖々）

▲全一冊上裝釘頗美本▲舶來上等紙印刷▲菊判一千百餘頁▲正價金貳圓▼小包料內地廿四錢

本書は斯學に造詣深き宮內鹿川先生が流暢明快なる健筆を以て平易に講義せられしものにしてこれを題意通釋概評の三項に大別し題意を以て本篇の主旨を知り通釋を以て全旨を審にし其割注によりて字義訓話を明にし欄外に要領を摘記し末段に一々概評を加へて全篇の大意を發明批評し加ふるに原文に精密をる訓點を施したれば何人も一讀の下容易に了解し易からしむ國漢文科受驗者は勿論政治法律文學哲學に從事せらるゝ諸氏其他獨修者諸君にも必讀せらるべき一大快著也

發行所 東京神田區南神保町拾七 振替口座東京三七二一番 文華堂書店

孔子言行錄

東京高等師範學校長 孔子祭典會委員長 學習院教授兼東京高等師範學校講師 嘉納治五郎君序 有馬祐政君編

全一冊 洋裝三六判總布美本紙數四百八十頁
口繪孔子尊像子思顏子曾子像 正價六拾五錢 小包料八錢

時運の推移、社會の趨向は、篤學謹厚なる有馬文學士をして本書を成さしむ、文辭簡潔にして意味深長、眞に大聖の音容に接するの想あり、附するに諸弟子及子思の言行錄を以てし、一々詳密なる註釋を施して立ろに領解せしむ、精神の修養に最上の資料たると共に、文字の習熟に最良の指針なり、此二方面に志ある人は必ず座右に供すべき無比の寶典なり、

孟子言行錄

前文部次官 澤柳政太郎君序
學習院教授兼東京高等師範學校講師 有馬祐政君編

全一冊 洋裝三六判總布美本紙數六百九十四頁
口繪聖堂に安置せる孟子尊像 正價九拾五錢 小包料八錢

曩きに孔子言行錄を著はし經書研究上に精神修養の上に偉大なる鴻廣を學生間に與へた有馬文學士は是れと同一なる主趣に依り孟子を直譯し且つ解註を加へ題して孟子言行錄として之を公にせり惟ふに孟子は文辭秀逸快利誠に千古の大文字なり近時の鮮沈せる士氣を作興し冗煩なる文詞を矯正せんには本書の甚だ必要なるを知らん

東京日本橋本町 博文館 振替東京二四〇番

（乙の一）

大和田建樹先生著

講談 日本外史

全部九冊

和裝美本紙數約二千頁
每卷紙數二百五十頁
一冊 正價參拾五錢 郵稅六錢
全部 金貳圓八拾錢 外要送料

◉全部完成◉

大和田先生の講曲通解出でゝより玆に十有五年、四方購讀諸君の增加する事、年一年よりも多きは、弊館の特に築とする處、更に今般先生に請ひて大訂正を加へ總說を增し、曲數を增し註釋を增し評語を加へ、其他大に體裁面目を一新して、講曲全部を一篇と名づく、評釋を通じて曲名を伊呂波順に並列し、終に語釋の索引を付して讀者諸君に至便ならしむる如きは、其最なるものなるべし、

第一輯（上）
第一卷 （慈說○能の起源○流儀の分れ○謠の作者○謠本○內外二百番○明和の改正○謠の文章
第二卷 ○岩船の大寺○淀橋○一角仙人○生田敦盛○生贄○龍太鼓○蒲紙王○鉢木○花車○花筐○班女○放下僧
（下）○袈裟○謠本の符號○題目の異同
第一輯 ○放生川○白樂天○羽衣○橋辨慶○半部○橋供養○芭蕉○雞龍田

第二輯
第三卷 ○錦戶○錦木○伽羅○辨內侍○碪○烏帽子○道明寺○東北○東岩士○藤榮○木賊○納長○知章○巴○竹生島○祇王○長兵衛尉○千引○龍虎○呂后○輪藏○鵺○大佛○蛾捨○女郎花○小督○和田酒盛○住生院

第三輯
第四卷 ○烏羽○鄽鄽○誠路宮○景清○高野物狂○葛城○葛城天狗○笠卒都婆○杜若○柏崎○加茂○鵺長明○加茂物狂○春日龍神○大會○谷行○高砂小町○高砂○忠度○忠信○龍田○立田物狂○湯谷○田村○丹後物狂○櫻風○玉葛○玉井○竹雪○卒都婆小町○國田○土車○土蜘蛛○鍛冠○羅生門○室君○六浦○鱗形○等知島○鵜飼○歌占○空蟬○采女○

第四輯
第五卷 ○老松○大原御幸○大社○大江山○落葉○番○隆敦院○黑塚○軍僧○皇帝○花月○吳服○鞍馬天狗○熊野○源太夫○元服曾我

第五輯
第六卷 ○坂○草薙○九世戶○國栖○養老○拾貳妃○恋綱○舞車○源太夫○元服曾我

第六輯
第七卷 ○現在七面○源氏供養○絲上○藤○薩○藤戶○二人靜○船橋○船辨慶○富士太鼓○富士山○伏木曾我○伏見○葵○木賊○鼓法○粉川寺○小鍛冶○小督○懸重荷○江島○江口○願○定家○天王寺物狂○天鼓○調伏曾我○淡路○蟻通○安宅○愛宕空也○熱海○敦盛

第七輯
第八卷 ○風山○鞍馬小町○藍染川○悪源太○錢渡○海士○熊野○櫻川○佐々木○盤○切能曾成○碪○祇王○清經○木曾願書○金札○

第八輯
第九卷 ○遊佛○貴船○三笑○草子洗小町○櫻○熊野○夕顏○盛○遊行柳○弓八幡○和布刈○通盛○三輪○三山

第九輯
第拾卷 ○水無月祓○水無瀨○三井寺○鼻延○御裳濯○代主○七騎落○志賀○鐘巻○自然居士○白髭○舍利○正尊○上宮太子○正儀世守○猩々○石橋○石橋○十番切○俊寬○春榮○俊成忠度○侍從重衡○鳥帽子折○綾鼓○
廢基○雲雀山○檜垣○常陸帶○水莖○飛雲○百萬○求塚○望月○盛久○紅葉○
紅葉狩○四天王○清閑寺○善界○鞍馬○殺生石○禪師曾我○千手○昭君○關原與市○赤鬼○調寺小町○蟬丸○須磨源氏○住吉詣○隅田河○盛染機●索引○附錄○曲舞集

販賣用電話 本局二千六百廿番
振替貯金口座 東京二四〇〇番
東京 博文館 本町

（乙の二）

最新最良癩病必治藥

保証丸

病毒ヲ根本ニ驅除スル最良專門藥ナリ患者試ミ見ヨ

定價 三日分卅五錢 七日分七十錢 三週分一圓八十錢 五週分二圓五十錢

●貴女の友

專門大家の證明する如く此の調合藥中には峻烈なる殺菌力を有するものなれば梅毒、痲病等其の他凡ての微菌を撲滅し絕對に傳染を豫防して些の危險なき新劑なり

㊟使用法其他重要疑生法等在中記効書ニ詳記セリ

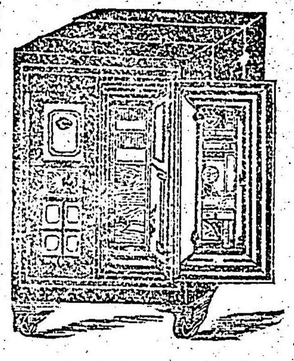
定價 壹個入 金拾錢 拾個入 金四拾錢 五個入 金廿五錢 卅個入 金壹圓

本舖 東京本町四丁目 森田藥房 振替口座七七七番

堅牢世界無比 變換符合文字合付

火災保險附特許發賣

專賣元



寸法定價表御報次第進呈

內閣諸官省御用金庫製造所

發賣元 東京日本橋通四丁目 電話（本局三八五番） 國末良吉

圖書目錄

御入用の方は往復ハガキにて御申込み次第即時送呈可仕候 東京本町 博文館

器械不要

定價 二十錢 壓入送料共 金參拾錢 郵券代用 一割增

發賣元 下谷區坂本町二の廿四番地 中村屋商店

名人揃

落語講談

本書目次

法華の太鼓 三遊亭圓生 ／ 藥屋舞 三遊亭圓生 ／ 一眼國 春風亭柳枝 ／ 權兵衛種蒔 三遊亭圓生 ／ 七草 柳家小さん ／ 九尾の狐 三遊亭圓生 ／ 松竹梅 三遊亭圓生 ／ 鰻の幇間 三遊亭圓生 ／ 鹿政談 三遊亭圓生 ／ 紀州 三遊亭圓生 ／ 淀五郎 三遊亭圓生 ／ 淺草觀音 三遊亭圓生 ／ 文七元結 三遊亭圓生 ／ 百川 三遊亭圓生 ／ 三人旅 三遊亭圓生 ／ 三枚起請 三遊亭圓生 ／ 三年目 三遊亭圓生 ／ 三方一兩損 三遊亭圓生 ／ 三十石 三遊亭圓生 ／ 三人片輪 三遊亭圓生 ／ 三人兄弟 三遊亭圓生 ／ 三人上戶 三遊亭圓生 ／ 三人息子 三遊亭圓生 ／ 三人無筆 三遊亭圓生 ／ 三人夫婦 三遊亭圓生 ／ 三人孝行 三遊亭圓生 ／ 三人酒 三遊亭圓生 ／ 三人吉兵衛

學藝叢書

毎月一回發行
洋裝美本二百數十頁
寫眞版五頁及挿畫數十個入

無編評

本書に筆を執るの士は皆當代一流の博士、說く所は深奥の學術を平易明快に且つ趣味實益兼備のものたらしむ、思ふに科學的思想の幼稚なるは邦人の通弊なり、而して之が普及を圖るに適する書籍の刊行乏しきもの實に其一因たらずや、本館玆に見る所あり、即ち各斯道專門の大家に乞ふて萬有科學の趣味を一般國民に鼓吹せんと欲す、是れ聖代の一缺陷を補ふものにあらずや、希くば下記の目次に徵して續々御注文あらんことを。

短編好評

正價 各一冊 四拾錢
郵稅 各一冊 六錢

理學博士 坪井正五郎先生著
人類學叢話
要目：▲非世界的に於ける國語の地位▲桓武帝の詔▲演劇現時の實況は人類學上如何なる利益ありや▲如何なる小說は研究に適せざるか▲小說に現はれたる武士道と大和魂▲戲曲に就て人類學を自修し得べきか▲ミイラの話▲玉の起原▲人種の別と云ふ事▲外に十數項

理學博士 三好學先生著
植物學叢話
要目：▲植物と氣候▲天然紀念物保存の必要並に其保存策に就て▲開墾と學理▲植物と人口▲風雨▲紅葉の話▲梅の生態▲植物と降雨の影響▲植物の生長▲外數項

理學博士 岡村金太郎先生著
水產叢話
要目：▲本邦各魚沿革▲海外各魚沿革▲水產學の範圍▲魚の性質と飼育▲水產と日比谷公園▲神馬藻と昆布▲奧天の採集▲魚類分布の原因▲海岸漁業▲漁業と日比谷公園▲神馬藻▲寒天の製法▲テングサの採集▲魚類分布の用途▲其他外數項

理學博士 石川千代松先生著
動物學叢話
要目：▲進化論▲繁殖の話▲生物の生活は自愛か他愛か▲動物卵の大小及び數▲動物の子守▲小說の夫婦▲遺傳は父か母から來るか▲蚤の變▲多く來るか▲蚤の話▲サルに就ての學問▲聽と鼠類と鼈類の話▲外數項

文學博士 箕作元八先生著
歷史叢話
要目：▲國民の發展▲海事との關係▲歷史上より見たる封建制度と武士道との關係▲日露戰爭の史的意義▲ナポレオン一夕話▲外數項

理學博士 松村任三先生著
植物雜話
要目：▲植物を學術的に說べ▲我國の園藝と公園▲樺太の植物▲水仙の話▲朧月夜の話▲百合の種類▲木葵科の種類▲紅葉▲梅の話▲外數項●附錄

理學博士 坪井正五郎先生著
人類學叢話
要目：▲非世界的に於ける國語の地位▲桓武帝の詔▲演劇現時の實況は人類學上如何なる利益ありや▲如何なる小說は研究に適せざるか▲小說に現はれたる武士道と大和魂▲戲曲に就て人類學を自修し得べきか▲ミイラの話▲玉の起原▲人種の別と云ふ事▲外に十數項

理學博士 三好學先生著
植物學叢話
要目：▲植物と氣候▲天然紀念物保存の必要並に其保存策に就て▲開墾と學理▲植物と人口▲風雨▲紅葉の話▲梅の生態▲植物と降雨の影響▲植物の生長▲外數項

理學博士 岡村金太郎先生著
水產叢話
要目：▲本邦各魚沿革▲海外各魚沿革▲水產學の範圍▲魚の性質と飼育▲水產と日比谷公園▲神馬藻と昆布▲奧天の採集▲魚類分布の用途▲其他外數項

理學博士 石川千代松先生著
動物學叢話
要目：▲進化論▲繁殖の話▲生物の生活は自愛か他愛か▲動物卵の大小及び數▲動物の子守▲小說の夫婦▲遺傳は父か母から來るか▲蚤の變▲多く來るか▲蚤の話▲サルに就ての學問▲聽と鼠類と鼈類の話▲外數項

文學博士 箕作元八先生著
歷史叢話
要目：▲國民の發展▲海事との關係▲歷史上より見たる封建制度と武士道との關係▲日露戰爭の史的意義▲ナポレオン一夕話▲外數項

理學博士 松村任三先生著
植物雜話
要目：▲植物を學術的に說べ▲我國の園藝と公園▲樺太の植物▲水仙の話▲朧月夜の話▲百合の種類▲木葵科の種類▲紅葉▲梅の話▲外數項●附錄

理學博士 上田萬年先生著
國語學叢話
要目：▲世界の創造▲原始創造說▲神話創造說▲外十六項▲海豹島▲發見▲地質▲外六項▲何故に土地に高下あるか▲科學雜話▲金華山沖の出火▲外二項

理學博士 橫山又次郎先生著
天文學叢話
要目：▲外國語速通術▲地理學者にアイヌ語の勸め▲ローマ字綴革論▲探檢旅行者の心得▲日淸間に於ける鐵道旅行の雜記▲支那屈指の石油地▲遼足▲信濃旅行の雜記▲ボルネオ島の話▲ボルネオ島變土の家▲ジャバ島の話

理學博士 神保小虎先生講述
地理學叢話
要目：▲外國語速通術▲地理學者にアイヌ語の勸め▲ローマ字綴革論▲探檢旅行者の心得▲日淸間に於ける鐵道旅行の雜記▲支那屈指の石油地▲遼足▲信濃旅行の雜記▲ボルネオ島の話▲ボルネオ島變土の家▲ジャバ島の話

理學博士 御田貢次先生講述
物理學叢話
要目：▲目分量の誤差▲山紫水明の理▲生ま卵と煮て卵▲水の最色▲扇子の構造▲雲の華▲理學研究發六▲遊び▲野球の飛揭▲實驗の理論▲發見以上の價と物質の結構▲自殺自得ヘルムホルツ

理學博士 今村明恒 神保小虎 兩博士著
地文鑛物叢話
要目：▲地文の部▲市街地に於ける地震の排害を輕減する簡法▲震災輕減問題の一二に就て▲地震學現今の進歩▲日本に於ける地震學の地位▲近年の研究に係る地震の原因▲地震學の研究▲地震の前知法▲地震に係る災害豫防法▲赤潮の話◎感究に係る災害豫防法▲鐵津定の物質實驗▲石油の話▲山崩れと地割れの原因▲カラフトの地質探檢

全五冊 菊判和裝美本 各紙數二五〇頁 全部一圓二十錢 郵稅八錢 外國送料
一冊 一正價三拾錢 郵稅五錢

東京 博文館 本町

新式 修獨語佛詩初

閥校君猪秀岡福、ドクトル、ブン、シアンス、ポリテツク、エ、アドミニストラチーヴ、東京外國語學校教授
前田越嶺君 前田雪子女史共著

頁五十七百數紙製スクロース表紙厚判六四裝洋冊一全
郵稅六錢 正價金四拾錢

當に至るの容易なるを知るの佛語を學ばんとする學生は本書に依て復習せば必ずや外に著者の苦辛に成れる新工夫を加へたるを以てなり世

して題して新式と云ふ所以は從來世に行はれたる方法と日常必需の會話とを撰擇し以て佛語獨修の資料とす而本書は佛語の綴方と讀方とを教へ佛語讀本とすべき短文

東京 博文館 本町

文學士 久保天隨君譯

唐詩選新釋

全部 一冊 一圓二十錢 郵稅八錢 外國送料
全五冊 菊判和裝美本 各紙數二五〇頁 一正價三拾錢 郵稅五錢

全部完成
（毎卷重版）

唐詩選の世に行はるゝ、すでに久しく、家絃戶誦今に至りて衰へず。從つてその註解、亦た多しと雖も、或は高遠に過ぎ、或は通俗に失し、取るべきもの殆んど之なし、本書は善く其衷を折し繁簡宜しきを得、周匝精密、著者の學力を傾注し、すべて、とを大成したる觀あり。なほ卷首には、作家小傳を載せ、唐詩の大略を論述し、支那の詩學史として、これのみを以てするも、價値あるを疑はず。世の文學に志あるもの、必ず一讀せざるべからず。

東京 博文館 本町

小山內薰君著

演劇新潮

俳優は讀め！興行主は讀め！好劇家は讀め！

この書は學問の書に非ず、議論の書に非ず、研究の書に非ず、俳優の技藝及び、俳優の技藝より脚本の解剖に及び演劇一切の實際的新思潮を平明なる文章もて敍せる趣味の書なり。

年若き著者が勃勃たる演劇革新の心願は十數葉の美しき挿畫と共にこの書の紙間に收められる。

全一冊 洋裝四六判總振假名附美本 紙數三百九十頁 正價五拾五錢 郵稅六錢

發兌元 博文館 東京日本橋本町三丁目

第一生命相互保険會社
專務取締役

ポケット論語

矢野恒太君解

洋裝袖珍頗美本　紙數三百十四頁

▲價金五拾錢（郵稅共）

著者平生論語を愛讀し出入必ず一部を袂にし尚も閑あれば隨所に之を讀む這般之を子弟朋友に勸めんが爲に袖珍朱註論語を印刷し特に童蒙の爲めに欄外に邦文訓話を加へ知人の間に頒たる本館其餘を請ふて世に公にし今や第五版を發行するに至れり修己安人に志ある諸君幸に一本を袂にせられんことを。

東京日本橋本町
發賣元　博文館

第五版

理學博士　鶴田賢次君抄錄

自助論の著者　スマイルス翁の自傳

東京本町　博文館發行

全一冊洋裝　紙數三六判上製三一六頁　正價四十五錢　郵稅六錢

著者は曾て其著書の中、最も重要なるものは、自助論なりと言へり。而して其著書の如きが、何故に斯く廣く讀まるるかを考ふるに、其文體の平易にして、且つ其内容の豐富なるが爲めなるべし。著者は曾て其著書の中、最も重要なるものは、自助論なりと言へり。而して其著書の如きが、何故に斯く廣く讀まるるかを考ふるに、其文體の平易にして、且つ其内容の豐富なるが爲めなるべし。

目次概要

▲自序……
▲第一條。功き時代……
▲第二條。學生……
▲第三條。學問……
▲第四條。……
▲第五條。「ジョージ」殿道會社の創設、……操縱と、或る公共事業……自助論と「スチフエンソン」の傳……
▲第六條。南東殿道會社の創設、……「スチフエンソン」傳と……自助論の出版……工作家列傳……1902年まで……
▲第七條。種々の著作……
▲第八條。「イタリヤ旅行」……

文學士　片山孤村君著

獨逸文學の研究

全一冊洋裝菊判厚表紙　紙數五百四十頁　正價金壹圓　小包料八錢

本書は著者が最近數年間に發表せし論文飜譯を纂輯せるものにして題して『獨逸文學の研究』と云ふは最近獨逸文學に關する者過半を占むるを以てなり。

内容

内
◎神經質の文學●模倣經質の文學同附論●郷土藝術論●郷土詩人クスタフ、フレンセン●郷土詩人の宗教觀●自然主義の理論及技巧●獨逸に於ける自然主義の起源●フリードリヒ、ニーチエ論●獨逸劇壇の近歩●新戯曲家フランクエーデキント●文學と人格●文學と肉情●女性と藝術●思考の情性●ゲーテが修業の一面●ゲーテとシルレルとの友誼●ロマンチック派の自然觀●バウルセン教授と自然主義●バウルゼン教授の人物●獨逸人の愛妾●詩人ホール、エルレース●最近獨逸小說史

東京　博文館　本町

家政寶典

實用家庭百科全書

豫約募集

●百科全書多しと雖も眞に一千萬家庭に必須なる家政顧問書たるは本書唯一也

多數百科全書の短所は拂索閲讀の繁雜不便なるに在り。本書編纂は課目章別と一極めて斬新なる理法をも收め平易簡明を主とし應急參考の便宛も整備せる戸棚に物を捜すが如けん。本堂多年の實際經驗により打算し出版界の革命を劃策し茲に理想的出版印刷業の機關悉く完備せる本堅牢は一特色として誇り之を永世傳承するも破損せざるを保證す。表紙意匠は武内桂舟畫伯の苦心に成る濃紺に櫻花紅楓を配し金背文字入頗る清楚にして雅致を極む。価格は出版時價の最低率にして他者企及すべからず。加之豫約法は最新式なり。

特長
○○編纂組織
○○印刷製本
○○體裁價格

●定價金參圓六拾錢　豫約金三拾錢　殘金現品引換　○申込代理人全國各地

△菊版總クロース金背文字入美裝函入
△紙數約一千二百餘精密插畫三百餘個
△口繪石版三色版寫眞版ニューム版等二十餘面
△製本出來……五月二十五日

發行所　東京小石川區久堅町一〇八　振替口座東京二八三八番　電話番町九三二番　電信略號セイミ

美堂

諸君の家庭を完全なる世帶たらしめんとせば須く本書を購入すべし　家政の秩序整然たらん

（乙の六）　（乙の七）

太陽增刊

明治史　第七編

文藝史

VOL. XV, No. 3

凡例

一、本編は明治初年より、最近に至る間の文藝界の變遷を略述す。但し美術界及び漢文學の方面は省略す。

一、明治文學を、文學史風に一括して評述するは、目下の場合極めて困難なるが故に、目次に掲げたるが如く、各方面を區分して、各の發達を記述せり。

一、元より各方面皆な密接なる關係を有するものなれば、特に此の事に注意して、前後斷片的ならざらむことを勉めたり、讀者之れを諒せよ。

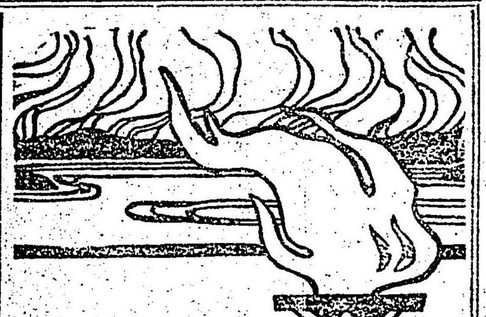
一、本編は二三諸氏の筆に成りたれば、文躰上に不統一の痕あれど、內容の統一に至りては、專任記者、責任を以つて調和統一を圖りたり。

一、本編中に掲げたる諸名士が姓名の下には、君、氏、子等の敬語を總て省略せり。

一、本書を編纂するに當りて、有益なる材料を寄せられたる諸家に對して玆に感謝の意を表す。

一、附錄『明治四十一年史』は例の如く過去一年間の各社會に於ける現象を網羅す。

明治四十二年二月



小室屈山君遺著

文範　自然と社會

▲卷頭＝著者肖像及筆蹟…寫眞版挿入
全一册洋裝四六判紙數四百六頁
正價金五十五錢　郵稅八錢

屈山小室重弘君詩に巧にして書を善くし文を能くし鐵筆に長し辯舌に洞觸に前後左右觸るゝ所敵なきが如し實に多藝多藝の士と謂つべし今や明治の文壇に斯の如き名士を喪ふ豈に慨嘆に堪へんや。本書は同者の遺稿「陌上塵語」を一見內容を知らしめんが爲め改題したる者にして著者が漢學の根柢により二十世紀今世の事柄に就き其文題を擇まず筆に任して感興を叙し或は其偶然の振觸を述べたるものなれば之に就て文を作るの實力を養ふを得ると同時に新智識を求むる好資料たるを疑はず乞ふ一本を備へよ。

東京　博文館　本町

陸軍中將　福島安正君題字

清國駐屯軍司令部編

▲卷頭＝●北京市街詳密圖　●北京城內外風景及風俗　寫眞版四拾七種挿入

北京誌

全一册

洋裝菊判總クロース
特製金文字入美本
紙數九百二十餘頁
正價金貳圓五拾錢
小包料拾貳錢

我が鞏邦大清國は政治外交貿易の關係上我が國民の研究を怠るべからざる所なり而して之れが首都たる北京の事情を知悉するは清國の大勢に通ずるの捷徑たらんか本書は清國駐屯軍司令部の編纂に係り紙數千頁尨然たる一大卷なるも內容は服部文學博士の幹理の下に清國精通の大家の分擔執筆せられたる者なるを以て秩序整然條理明晰而かも調査精密に叙說周到北京上下內外の情況は此一書に於て盡せりと云ふも不可なし本書以前に本書なく本書以後亦た本書なしと斷言するを憚らす苟も政治經濟家は勿論東洋諸邦の研究に志ある士の必ず一本を備ふべき要あり

東京日本橋本町
博文館
振替東京二百四十番

第五號　溫池世界　1

太陽增刊

明治史第七編

文藝史

VOL. XV, No. 3

凡例

一、本編は明治初年より、最近に至る間の文藝界の變遷を略述す。但し美術界及び漢文學の方面は省略す。

一、明治文學を、文學史風に一括して評述するは、目下の場合極めて困難なるが故に、目次に掲げたるが如く、各方面を區分して、各の發達を記述せり。

一、元より各方面皆な密接なる關係を有するものなれば、特に此の事に注意して、前後斷片的ならざらむとを勉めたり、讀者之れを諒せよ。

一、本編は二三諸氏の筆に成りたれば、文躰上に不統一の痕あれど、內容の統一に至りては、專任記者、責任を以つて調和統一を圖りたり。

一、本編中に掲げたる諸名士が姓名の下には、君、氏、子等の敬語を總て省略せり。

一、本書を編纂するに當りて、有益なる材料を寄せられたる諸家に對して玆に感謝の意を表す。

一、附錄『明治四十一年史』は例の如く過去一年間の各社會に於ける現象を網羅す。

明治四十二年二月

第一編　混沌世界

文字が發明されて以來、幾十年を經てゐるが、而も歴史上明治時代ほど、不可思議のものは、恐らく空前であらう。凄い歴史もあらう。慘澹たる歴史もあらう。光明に滿ちた時代もあらう。陰鬱な時勢もあらう。併しながら、明治といふ程、混沌として正體の知れ難い時代はあるまい。若しも後世の歴史家が、此の時代を記述しやうと試みるならば、餘程の苦勞を感ずるであらうと思ふ。

明治の社會を一言にすれば、複雜混沌である。如何に複雜混沌たる社會でも、此く迄に甚しきは、史上其の例を看ぬ所である。此の消息は風俗其の物から看ても、直ちに了解することが出來るであらうと思ふ。昔日の社會であるならば、家庭の建築、男女の風俗、其の他百般の上に、一定の型があつたのである。變化といふも、同じ型の內に於ける變化に外ならなかつたが、明治の時勢は如何であるか。惡しざまに言へば出鱈目だ。二三十哩位の小旅行を試みて、此の混沌雜然たる風俗習慣は、誰人の目にも留るではないか。一方には、純日本式の土藏造り、茶室作りが有るかと見れば、軒を列べて、ペンキ塗煉瓦造りの西洋式建築がある。羽織袴の紳士が往くかと見れば、シルクハットすら十人十色て、決して一致して居らぬ。吾等は此の混沌たる社會に養育せらたからこそ、それを去程の不思議とも思はぬ。否、むしろ當然てあるかの如くに思惟するが、秩序整然とした社會に育つた人の眼から見たならば、此れ位、可笑しい事は有るまい。

役所に出勤する時の知事は、西洋式の服裝してゐるが、神社に詣づる時は、舊式の衣冠裝束をしてゐる。平日登校する女學生は、所謂ハイカラ式てあるが、卒業式の時には、古風の高島田といふ風俗だ。日比谷の太神宮て結婚式を擧げて、其の夜は帝國ホテルて披露會を開く。實に混沌複雜たるもので、寧ろ喰飯に堪えぬ樣のとのみが多い。

坪內博士の近作に『初夢』と題する振事劇がある。それは最近に於いて、有樂座にて演じられた。これ程好く明治時代を代表したものは有るまい。其の作が上乘であるか否かは別問題とするも、明治時代其の物の混沌たる樣を傳へて居るとは、明白に看取される。其の音曲の方には、從來の常盤津、長唄などが有り、一方には西洋の樂が加味されてある。而して內容の方面から眺れば、勝頼、八重垣姫が出るかと見れば、藤娘と座頭が飛び出す。惠比須大黑が、茶番式の藝を演ずるかと見れば、雜劇一變して、純西洋式となり、茲にキユピッドが弓を引く、勝頼とジユリエット、ロメオと八重垣姫が手を取り合つてダンスを遣る。其の間に、座頭がまご〳〵して、さま〴〵の滑稽を演ずる。觀者は此の振事を看て笑ふ。また笑ふ樣に仕組んてある。併し此れを看て笑ふ者は、明治四十年間の歴史を顧みて、また笑はねばならぬ。何故なれば、四十年間の歴史其の物が、此の振事劇の如き不思議の動作を演じつゝあつたからだ。

勝頼とジユリエットは慥かに手を引き合つてゐた。八重垣姫とロメオとが、確かに乳繰り合つてゐた。此くの如きが實に明治四十年間の歴史てあらう、此れを記述するとの困難は尋常一樣てない。佛國大革命時代の歴史ても、恐らく明治時代の如くに複雜てない。また其の裏面が無い。

先輩等の誇りとする所の維新の改革其の物が、非常に複雜の性質を有してゐて、表面に浮び出ただけの事實では、中々に其眞相を覗ふとが出來ぬではないか。南方より起つた改革派の當初の目的は、果して今日の日本帝國を造るに在つたか否かは、今日すら解決するとの出來ぬ問題である。東北に於ける各藩の反抗的態度は、果して非難に價するものか否か、これも未決の疑問ではあるまいか。而し此の維新變動を經た社會は、三十年ならずして清國と戰ひ、越えて十年、世界の強國として知られたる露國と干戈を交へた。而して兩度ながら、見事なる勝利を占めて、今は世界の一等國と言ふ列に加はつたのてある。未開野蠻の國民として知られたるものが前後五十年にして、世界の第一等國々民の地位に進み、赫々たる名譽を擔ふに至つた歴史は決して單純てない。第二十世紀の今日、史家としてギヅボン、モンゼン、或はランケ、クルチウス等と、光彩を爭ふだけの名譽を博せむと欲したならば、遠いギリシヤ、ローマの歴史を研究するよりも、或は長年月の歴史を編まむとするよりも、前後五六十年間の日本帝國を研鑽するが近路てあらう。併し其の難事たるは、豫め覺悟せねばならぬ。

雜多紛々たる社會の出來たのは當然のとてある。渦したる者は水を擇ばず、饑えたる者は、食を擇ばぬと同じく、德川幕府時代の者は、物質的に、又精神的に、非常の饑渦を感じつゝあつたのてある。維新の改革は、其の動機の那邊に在るは別問題として、此の饑渦を癒すべき好機會てあつた。維新後の社會を一言に評すれば、開國進取で、之れを聲ふれば猛牢に捕はれてゐた者を、一時に園遊會場に放したやうのものてある。物の好惡、適不適を論ぜず、手當り次第に、頬張り込

んだ。珍無類の社會が出來たのは、敢えて怪むに足らぬ。獨り政治界のみならず、社會百般の方面が、此の混沌複雜なる社會を作つた。文藝界の如きも、其の例に漏れぬ方であるのみならず、或は其の代表と稱するも宜しい位であらう。

文藝界も亦た有ゆる社會と均しく、開放主義を執つたのであるから、其の狀態は千差萬別、迚も今日之れを系統的に明記するとは出出ぬ。故に吾人の編纂方法は、文藝界全體を打つて一團とするよりも、文藝の各部面を、別々に記述せむとするに在る。勿論其の間、連絡を取ることに注意するか、愈に系統を立て、連絡を逃ることは、却つて誤謬を生ずる恐あるから、成るべく方面の異なるに從つて、別々の記述を試むる。此の雜多紛々たる狀態は、取扱ふ上に於いてこそ、不便であるが、其の儘に觀察する場合には、却つて趣味の多いものである。吾人は、むしろ材料の儘を打ち擴げるのであるから、解釋は、讀者自身の試みむことを切望する。

去れど玆に吾人が特に一言せむと欲することがある。こは文藝對政府の問題である。更に狹義に言へば、政府對文學（主として創作）の問題である。明治維新以後の社會を見るに、政府が主となつて、社會各方面の發達を圖つてゐる。こは改革を行ふ時代に於いては當然のことである。鐵道事業を見ても、航海の方面を眺めて、或は理化學、醫學、天文、其の他如何なる方面を觀察しても、政府は直接に保護を與へ、或は其の發展のために、少からぬ資金を投じてゐる。然るに文學界に至りては如何であらうか。直接の保護といふものは、殆ど無いと言ふも決して過言ではあるまい。

社會の各方面に向つて、出來得るだけの力を盡した明治政府も文學界だけは、其眼中に無つたものと見えて、何等の保護奬勵の途を開かなかつた。美術の方面には、帝室技藝員といふ制度が設けられた。和歌の方面には御歌所なるものが組織された。併し、明治文學の精華とも稱すべき小說、新體詩、或は脚本の方面に於いては、何等の設備も無いではないか。否或る意味に於いては、虐遇したと言ふも、敢て不當であるまいと思ふ。

明治文學界を作つた人々は、皆な官邊に緣の無い人のみと言ふも不當でない。勿論、帝國大學なるものが有つて、其處で養成された人が、文壇に貢獻したと、蓋し多大であらうが其の事業には、政府の保護がない。加之、現文壇に立つて居る大部分の人は、私學に依りて其の思想を作つてゐる。帝國大學なるものは、醫學、理化學、或は法學、哲學、史學などの方面に於いて、貢獻する所あつたが、純文藝の方面に於いては、實に小量を寄附しただけで、今日の文藝界の財產は大部分、民間の手に由つて造られたものである。

勿論文學なるものは、閑事業のやうに思惟される。されば政府が國民と直接の利害關係ある方面に向つて全力を注ぎ、文藝の方面などを顧るの餘地がなかつたのは、諒とすべきである。復た世間一般が、敢て此方面に政府の保護なきを怪まなかつたのも咎むると出來ぬ。

文學と金錢とは、古より緣の遠いものと言はれてゐる。殊に明治文壇に立つた人の境遇を見るに、まさかに麵麭を乞ふて、石を與へられた程でもないが、物質上では渺なからぬ不便を感じてゐる。たとひ物質上の保護は無くとも、名譽の上に、何等かの方便位は、有つても宜しからうと思はるゝが、其の名譽すら、文士間よりは奪はれた。後世に誇るべき明治文壇を組織した人は、『博士』の稱號すら貰うとが出來ずに、而も文運の爲に盡してゐる。軍人や、政治家が職務のために斃るれば、相當の慰藉を受けるのであるが、明治文士だけは其の職に最も忠なるも、何等の賞讃をも政府部內から受け取らぬ。去りとて吾人は、今更、其の保護を請求する者ではない。また文士とても、今日となりて、之れを望むやうの、さもしい根性を有して居るまい。

去れど次の如く主張するだけの權利はあると思ふ。明治文壇は、全く民間、在野の文士が手に由りて發達したもの。政府は其の發達については、特に誇るべき程の事業を成してをらぬ、否、むしろ出版物の發賣禁止と言ふ大鐵槌を振つて、惱むべき文壇を苦めた。而して若しも政府が、物質上ではなくとも、何等かの保護奬勵の道を開いてゐたならば、文學の發展は、更に目覺しく有つたであらうと思ふ。

然るに昨今に至りては、外國のアカデミーにも似たる文藝院なるものを設立するの急務ありといふ議論が、一部の文士間に唱へられ、文部省の當局者中にも、其の必要を認めて居る人もあるやうだ。朝野の兩方面に、斯くの如き意見の出たのは、畢竟するに我が文壇が益す發達し、彌よ複雜と成つて來たのを證明するものだ。然らば此の大勢を作つた文藝界は如何なる經路を辿つたのであるか。これ吾人が以下記述せむと欲する主題である。但し細微の事は省略して、成るべく大勢を傳ふる方針である。

第二編　思想界の變遷

第一章　思想界の概觀

第一節　急激なる變遷

茲に思想界と稱するのは、強ち哲學的意義ではなくして、國民全般の思想を指したのである。哲學界の變遷は、更に特別の研究を要する。併し其の哲學的思想が、國民全般の思想に影響した點は、本編に於いて記述せねばならぬ。

明治思想界ほど、急激の變化を經たものは有るまい。幾かに四十年の短日月であるが、其の間には、西洋諸國が、數世紀の經驗を以つて作り上げたものを、悉くを看取することが出來る。こは獨り思想界のみでなく、明治社會の如何なる方面にも見る點であるが、特に思想界には顯著である。吾人が西洋の近世史を繙いた後、吾が國史を顧ると、明治時代は、彼の近世史の縮圖と稱するも、強ち不當でないと信ずる。

僅かに四十年間に、西洋思想も、日本固有の思想も、交々頭角を現はし、勢力を占有したのであるから、見方に依りては、數十種の思想が、雜然として存在してゐる。或る一の思想があつて、或る時代の間、國民を支配し、國民は其の果して克く現實的生活に契合するや否やを試驗した後に、其の缺點を悟り、更に他の思想を造ると言ふには、尠からぬ年月を要するのである。併し明治時代に於ける思想界は、斯くの如き悠長なる變遷をなしたのでは無い。手當り次第に西洋思想を輸入したので、甲者が未だ芽も出さず、其の根は果して播殖したか否かが不明である間に、既に乙の思想が移植されると言ふ風で、應接に遑なしとは、實に此のことだ。勿論甲乙の諸思想が、互に因となり、果となりて、關係連絡ある發達を成したのではあるが、一言にすれば、四十年間の思想界は、八百屋が何物をも買ひ入るゝ如く、適不適、正邪眞妄の辨別なく、泰西思想を輸入してゐる。故に表面上に於いては、急激なる變化ありしが如くに思惟せらるゝが、實際に在りては雜多なる思想が同居したものと見るが正當である。

第二節　大體の區劃

去れど大體の區別を立て得ぬでもない　たとひ短期とは言ひながら、一世紀の半數ほどの年限を經過したのであるから

之れを歷史的に觀察することが出來る。

明治思想界の第一期とも稱すべきは、明治二十年頃迄に至る間の歐化主義で、第二期は明治三十年頃に到る間の國粹保存主義、第三期は三十年以後に於ける日本主義、第四期は三十五六年以後今日に至る間の世紀末的思想である。

德川時代に至るまでの神、儒、佛の三思想の結合したものを日本思想と言ふならば、此の日本思想と、外來の新思想との衝突が、明治三十年頃までの思想界を成してゐる。去れば第一期の歐化主義全盛時代にも、傳來的思想の反抗あり、復た第二期の國粹保存主義の勢力を握つた時代にも、泰西思想の普及を圖つた人々も尠からぬ。此の動搖を經た後に、一大刺戟が國民の自覺心を動かした。こは日淸戰役で、此の刺戟に依りて、國民一般が、世界の一國たる日本の將來を如何にすべきかと言ふた問題に逢着した。而して之れを解決せむと企てたのが日本主義である。

第一期にありては、唯漫然と西洋を崇拜してゐる。其の歐化主義の極端に走つた弊を見て勃興したのが國粹保存主義であるが、こは日本固有の長所を發展せむとする志望に生じたよりも、寧ろ一の反動として見る方が適當である。而して日本主義の時期に入りては、眞に國家の長所を世界に發揚せむとする志望が、最大の動機となつてゐる。第一及び第二期と

もに、世界を見るの餘裕はなかつた。換言すれば、靜かに世界と日本とを對照するだけの餘裕がなかつたのである。日本は世界の一國であると言ふ觀念を本として、泰西を眺め、或は自國内を研究する風潮は、日淸戰役と言ふ刺戟を受けて始めて生起したのであつた。

狂熱的情態を去り、落着き拂つたのが、第三期で、茲に始めて泰西文物の眞面目なる研究が起つた。是に於いてか、文明の步調は、漸く歐米諸國と一致するとになり、從つて彼の地に起つた思想界の動搖、即ち世紀末的思想なるものも亦彼れと殆ど時を同うして我が國に起つて來た。ニイチエの個人主義、イブセン主義或はデカダン思想などの唱導されたのは、即ち此の期に屬する。

更に强大なる刺戟は、國民の自覺心を動かした。そは日露の大戰役である。有史以來、空前の大戰が、滿洲の野に開かれ、而も國民は、現代歐洲の最强國として知られた露西亞に勝つた。此に於いてか國民は、日淸戰役後に於けるよりも、更に明白に、國家國民の價値を知つた。自國の價値を知るの裏面は、國民の心力は、決して泰西に遲れて居られぬ、自國の文明は彼れ等諸國と步調を一にしてゐると言ふ自覺である。日淸戰役後、自國の文明力を覺つたが、未だ確實に世界的に之れを揚言することが出來なかつた。而して日露戰役なるもの

は、此の自覺を、正々堂々と世界に向つて公言し得るだけの保證を造つた。實に明治の民は、此くの如き光彩陸離たる證據を持つて、世界文明の流に棹さすに至つたのである。而して昨今の思想の形勢を一言にてすれば、我れより進んで世界的文明に貢献する所あらむと企圖するとである。僅々四十年以前には、泰西文明に眩惑され、腰を拔かさむ計りに驚いた國民が、今日此の位地に到達したのであるから、世界の注目を引くのは、決して偶然ではない。世界は、四十年以前には東洋の蠻民として取扱つた日本を、今は尊敬すべき強國文明國として交際せねばならぬのである。國民としての快事、何物か之れに若くべきであらうぞ。

第二章　歐化主義の全盛

第一節　新知識輸入

尊王攘夷といふ思想は、開國と共に一變して、西洋崇拜の思想を呼び起した。こは當然のとてある。從來、外國との交通を避け、自國の文物外には、何物をも看なかつた國民が、遽かに外國の文明に接したのであるから、万事萬物に就いて驚駭し、西洋式ならねば、善美と稱すると出來ぬと思ふたのは無理ないとてあつた。

福澤、中村、尺の諸氏が泰西の學を講じて、其の燦爛たる光彩を傳へる。岩倉大使の一行は、世界を一週して、其の文物の如何にも美しきを語り傳へる。また實際西洋の事物と、自國の物とを比較するに、吾れの劣等たるは、一見瞭然てある。殊に先づ人心の剌戟せらるゝは、物質の方面であるが、當時に於いても等しく、其の方面から剌戟された。西洋の物質的文明、これ實に内國には見るとの出來なかつた物てあつたから、一たび此れに接した物が、我が國の劣等なるを感じて、何事も西洋を模倣せむと欲したのは、決して無理てない實に明治の初年に於ける人心は、風俗習慣までも、西洋風に改造せむと欲した時代てある。これに就いて實に面白い話がある。ある當時の學者が、麺麭を喰むと欲したが、此れを販賣してゐる家が東京に無い。そこて此れに似た物て間に合はせやうと言ふので、饅頭の皮だけを蒸かさせて、喜んて食したとがあるさうだ。これは維新以前の話てあるが、取りも直さず、明治初年の西洋崇拜熱を代表してゐるものだ。或は明治六年創刊の『明六雜誌』上に、西周が、卒先して羅馬字採用論を唱へたことも、當時の風潮が、如何に西洋崇拜的てあつたかを證明するものてある。否、行政上に於ける組織其の物を始めとし、西洋文明の利器、例へば鐵道、電信、郵便の交通機關を移殖した點を見ても、如何に歐化主義が急激てあつたかを知るとが出來るてあらう。蓋し此れ等の事實は、一々例證を擧ぐる迄もなく、國民の記憶に、最も鮮かなるとてあらうと思ふ。

世界の進歩に後れてゐると言ふ自覺は、智識吸收の上に最も瞭かに現出してゐる。如何にしても知識を泰西諸國の如く進歩せしめなければならぬと言ふ發悟は、多少に拘らず、國民全般に行き渡つてゐた。此の知識吸收の一事は、當時の社會が、最大急務と見做した所で、また當然の形勢てあるが、此れが後年に至つては、知識教育を偏重する弊害を生じて居る。當時の國民は、從來の和漢學に不滿足を感じて、新來の科學的知識を積蓄せむと欲した。そは決して違つた方針てなかつた。當時の教育方針が、科學的知識を普及するに在つたとは、全く善く時勢の要求に應じたもので、其處に明治文明の堅固なる基礎が立てられたのてある。

福澤翁又は中村博士が、文教の方面に於いて、多大の盡力をなされたのは、後に記載するとして、明治十二三年頃に到る間、泰西の書物にして、邦語に譯されたもの、或は泰西新文明の狀況を編述したものゝ内て、重なる物を擧げて看ても當時如何に、新知識の吸收が急務てあつたかを推測するとが出來るてあらう。

文部省は先づチャムバーの百科全書を飜譯し始めた。此の百科的知識こそ當時が最も多く要求したものてある。明治五年八月の教育上諭なるものは、實に善く當代の人心を代表し且つ新時代の方針を定めたものてある。其の上諭に曰はく、

「……學問ハ士人以上ノ事トシ農工商及ビ婦女子ニモノテハ之ヲ度外ニオキ學問ノ何物タルヲ辨セズ又士人以上ノ稀ニ學ブモノモ動モスレバ國家ノ爲ニスト唱ヘ身ヲ立ツルノ基タルヲ知ズシテ或ハ詞章記誦ノ末ニ趨リ空理虚談ノ途ニ陷リ其論高尚ニ似タリト雖モ之ヲ身ニ行ヒ事ニ施スコト能ハザルモノ少カラズ是スナハチ沿襲ノ餘弊ニシテ文明普カラズ才藝ノ長ゼズシテ貧乏破産喪家ノ徒多キ所以ナリ是故ニ人タルモノ學バズンバアルベカラズ之ヲ學ブニ宜シク其旨ヲ誤ルベカラズ之ニ由テ今般文部省ニ於テ學制ヲ定メ近々敎則ヲモ改正シ布告ニ及ブベキニ付キ自今以後一般ノ人民(華士族農工商及婦女子)必ズ邑ニ不學ノ徒ナク家ニ不學ノ人ナカラン事ヲ期ス人ノ父兄タルモノ宜シク此ヲ意シ體認シ其愛育ノ情ヲ厚クシ其子弟ヲシテ必ズ學ニ從事セシメザルベカラザルモノナリ」

此の一篇の訓令には、個人の知識を進めて、國家一般の文明を進化せしめむとする方針が瞭然としてゐる。

國民たるものは、男女の別なく、新知識を蓄積すべしといふ方針は、當に文部省が定めたのみてなく、一部の有識者は夙に其の方面に貢献する所あつた。歷史の方面に於いて、『真

國新誌』『泰國通鑑』『西洋英傑傳』『西洋史記』『歐羅巴開化歷史』『英國史略』等が公にされ、風俗地理の方面にて『輿地誌略』『西洋新書』『西洋見聞錄』『西洋夜話』『五洲記事』等、此の他『智氏家訓』『勸善訓蒙』等の倫理書をはじめ、政治經濟の方面に於いても、幾多の書類が、或は反譯され、或は著作された。かく敎育の方面には、文部省が學制を布き、且つ高等敎育の基礎を立て、明治十年には加藤弘之が開成所の總理となつて大に新進青年を薰陶すると同時に、三田には福澤の慶應義塾益す廣く天下の書生を集め、中村正直の同人社亦英才を網羅し、京都には新島襄の同志社が、基督敎を中心とする文明敎育を施してゐた。而して社會敎育とも稱すべき新聞雜誌は、明治十年前後に於いて非常の發達をなし、大に民間知識の增進を謀つた。こは新聞雜誌の歷史を述ぶる編に於いて、詳述するから、茲には省略する。兎に角に西洋を模範として新帝國の基礎を作らむとするのが、西南戰爭前後の一大形勢であつたが、此の一戰役に由りて、其の風潮は更に全國となつたのである。

日本帝國は、維新の事業に依りて、統一せられたやうに思惟されるが、其は單に表面上だけのことで、內實は依然として德川封建時代の遺風が勢力を有してゐた。南方の改革派其の物の內部を見ても、舊幕時代に於けるが如き各藩の睥み合があり、朝政となつた北方の各藩も互に睽離反目してゐた。表面上、外交上、德川政府は倒れて、明治政府なるものが組織されたが、社會其のものは、依然として舊幕政府の立てた封建制度を標準として、暗鬪を試みつゝあつたのだ。其の暗鬪を排除して、各個人の心胸を、日本全國に擴張したものは西南戰役といふ刺戟であつた。其の時代までは、各個人は封建的、地方的感情に支配されてゐたが、此の一大事件と共に漸く國民的大思想、大感情を抱懷するに至つたのである。畢竟するに、維新の鴻業に依りて、各地方に設けられてあつた土壁は、悉く取り除かれたが、なほ其の礎に幾多の殘壘あつた、其の殘壘を更に取り壞つに、最も有效であつたのが、西南戰役である。實に此の戰役は、政治上、はた軍事上に意味あるのみならず、全國民の胸裡を擴張して、全日本帝國なるものを意識上に浮ばしめた點に於いて、更に深奧なる意味を有してゐる。大和民族の國民的活動は、此の時期を以つて肪ると言ふも敢て不當であるまいと信ずる。

第二節　當代學問界の分野

西南戰役が始まつた以前の國民は、只漠然と西洋熱に浮かされてゐたやうのものであつたが、此の戰役の前後から、既記の如く、新時代の一國民として、泰西の文物を研究するやうになつた。別言すれば、維新の改革熱が漸く鎭靜し、各個人は、眞面目なる研究を始めたのである。其の眞面目なるものも、今日より見れば、餘りに見當違ひが甚しくて、極めて不眞面目のやうに思はるゝが、當時に在つては、實に靜肅の勉强と稱すべきある。

偖て當時に在つて、思想界を動かした中樞は、那邊に在つたかと言ふに、數種を掲げねばならぬ。泰西の新文明を一時に輸入したのであるから、各種の學問所が併立したのは、洵に當然である。此れ等の學問界の中樞たりしものより、專門の學科を敎授したものを除きて、特に一般思想界に貢獻する所多大であつたものを列記すれば左の通りである。

一、官府の力を以つて開設せられた諸學校で、其の大中心は東京大學、即ち今の帝國大學の前身たるものである。

二、慶應義塾。こは今日大學組織となりて、幾百の學生を薰陶しつゝある學校で、其の起源は安政五年にあるが、其の名稱を戴いたのは、慶應末年である。設立者は言ふ迄もなく、『三田の先生』と尊敬された福澤諭吉で、其の學風は、明治社會に深大なる影響を及ぼした。

三、同志社。新島襄の設立した基督敎本位の學校で、創立は明治八年である。この學校は、精神界には、勘からぬ影響を及ぼしてゐる。

四、同人社。こは明治六年の設立で、中村正直の塾である。其の學風亦大に思想界を開拓してゐる。

以上の四中心、——吾人は之れを當時の四大學派と稱する——より生起した思想は、特に研究せねばならぬ。併し此の以外に、尙ほ幾多の學塾があつて、各文化の發展に貢獻する所があつた。吾人は此れ等を一々項を設けて記述する餘地を有たぬから、茲に一括して其の功績を傳へやう。

▲達理堂。こは村上英俊が明治元年に創立したもの、佛蘭西語を敎へた。此の塾は明治十年に閉鎖したが、本邦に於ける佛蘭西學の本源とも稱すべきもので、佛蘭西の自由平等の勃興には、與つて力ある。

▲共立學舍。尺振八の象塾で、明治三年に開き、同十六年に閉鎖してゐる。正則なる英語敎授を標榜したか、其は單に語學上のみてなく、思想界にも多大の貢獻をなした。田口卯吉、島田三郎、波多野傳三郎、小池靖一、首藤陸三などの名氏は皆な此の門から出た。

此の他、近藤眞琴の攻玉社（明治二年）津田仙の私立農學校（明治八年）杉享二の統計學校（明治十六年）板垣退助の立志社（明治七年）等は、思想界及び學術界に貢獻する所、決して僅小てはなかつた。かく私學が旺んであつたのを見れば、當時の政府當者が、當面の社會又は政治問題に忙殺されてゐた

と、を推知し得るであらう。明治の文明史を編輯する者は、明治初期に當つて、私學が如何に多くの貢献を爲したかを特筆大書せねばならぬ。然るに今日の政府は、私學に對しては實に冷酷極まる態度を取つてゐる。

偖て以上の諸中心から發達した思想を大別して見ると、第一に擧ぐべきは實利的、巧利的思想で、其の代表は三田慶應義塾一派である。此の物質的文明の改善に對して、精神界に基督敎的文明を移殖せむと試みたのが、同志社一派だ。而して此の對陣の外に、尙ほ一對陣をなすは、獨逸學を本位とせる國家主義の思想と、佛蘭西學を基礎とせる自由平等の思想とである。此の兩對陣が此の期に於ける最大現象で、其の側には、大學の代表せる進化論的思想、中村正直の代表せる儒敎化せる基督敎的思想、及び反歐化主義などか、侮るべからざる勢力を有つて流れつゝあつた。以下簡略に其れ等の經路を述べて見やう。

第三節　常識的功利主義

德川慶喜が京都より江戸に歸つたといふ其の時であつた、福澤諭吉は蕃書取調所の役人たる加藤弘之外數名と時勢に就いて問答した時に次の樣に言つてゐる。

『これが愈よ戰爭に極れば、僕は荷物を拵へて逃げなくはならぬ、戰爭にならぬと言へば落付いてゐる、其和戰如何は實に容易ならぬ大切な事であるから云々と』

彼れは戰爭を嫌つた。併しながら其の最も重要なる荷物、即ち其の責任は、決して片付けなかつた。上野の山内には、銃聲轟き、東京市内は、即刻に一大修羅場と變ぜむとする時に當つても、彼れは芝新錢座の家塾に在つて、平然として經濟學の講義を爲してゐた。此の敎師は、實に明治新時代に於ける思想界の牛耳を執つた人て、其の影響は今日尙ほ瞭然として存在してゐる。

彼れが一生の著述は實に多い。而して總ての書が、非常に多く賣れたのである。其の內容が、幾多の人に、新思想、新知識を與へた報酬として、彼れの懷中には、巨額の黃金が舞ひ込んだ。其の著作は『福澤全集』として大冊五卷を成してゐる。而して特に深く人心に影響を及ぼしたものは、『世界國盡』『學問のすゝめ』『西洋事情』『窮理圖解』『文明論之概略』等であるが、兎に角彼れの著は、福澤本と稱せられて、出版と共に社會の注意を惹いた物であつた。

時勢は、或る一方面の學術に精通した碩學よりも、何事をも知つてゐる雜學者を要求したのである。新開地に於ける商人は、或る物品を專賣するよりも、雜貨店を開く必要あるが如く、當時の學者は、政治、文學、財政、法律、地理、歷史

或は軍事、敎育等總ての方面に通じて、概略だけの知識を具備して居らねばならなかつた。而して福澤諭吉は實に斯くの如き學者の最大なる人であつた。彼れは從來の學者を嘲つて飯を喰ふ字引と稱して居るが、今日より見れば、彼れ自身が飯を食ふ一種調法なる節用字典であつたのである。

彼れは有ゆる方面に於いて、新知識を普及した。其の功績の尨大なる、永久に忘るべからざるものであるが、其の根柢に橫つて居た思想は何であるかと言へば、英吉利に發生した功利的倫理說を常識的に解釋したもの、即ち實利的功利說とも稱すべきもので、其の普及を計ると極めて急激であつた。『學問のすゝめ』中に左の如く言うてゐるのは、彼れの根本思想を表白したものである。

『學問とは唯むづかしき字を知り解し難き古文を讀み和歌を樂み詩を作るなど世上に實のなき文學を云ふにあらずこれらの文學も自ら人の心を悅ばしめ隨分調法なる者なれども古來世間の儒者和學者などの申すやうさまでありがめ貴むべき者にあらず古來漢學者に世帶持の上手なる者も少く和歌をよくして商賣に巧みなる町人も稀なりこれがため心ある町人百姓は其子の學問に出精するを見てやがて身代を持崩すならんとて親心に心配する者あり無理なら面ことなり畢竟學問の實に遠くして日用の間に合はぬ證據なりされば今斯る實なき學問は先づ次にして專ら勤むべきは人間普通日用に近き實學なり。

彼れは此の『實學』なる者を普及せむと計り、且つ成功したのである。其の所謂實學とは、人生を裕かならしむる者に外ならぬ。彼れの眼中には、精神上の幸福も映じたのであるが、其は物質上の幸福を基礎として生起するものと看てゐた。一個人或は一國家の上も同じく、生活上の餘裕を結果せぬやうの學問は、眞正の學問でない。兎に角に人生に有用の學問でなからねば、之れを修むるの必要が無い。『學校にて石盤を用ひて數學には明かなれども、店先の帳合には暗く、作文暗誦は上手なれども、手紙の文句は出來ず、窮理書は讀みたれども、竈の築き樣と流しの水はきには工風を用ふるを知らず化學の吟味は經たれども、甘酒の作り樣と豆腐の製法は未だ之を聞かず、或は十二三の娘子が西洋流の學校に入り又は西洋人の手につき、西洋音の唄を習ひ、西洋風のメリヤスを組み、却て糠袋の縫ひ樣も知らず、或は和漢洋の書を讀みて三十一文字も少しは出來れども、人身窮理は忘却して自分の體の骨も知らず、風を引きて容體を逃ぶるとも知ら』ざるやうては學問の甲斐がない。人類が生命を繼ぎ、幸福を增進する上に、何等の効力も無い學問は、之れを修むるに足らぬと同時に或る事柄を學べば、必ず之れを實際上の生活に應用しなけ

ればならぬ、と言ふのが、彼れの著書全部を貫いてゐる思想である。

彼れは其の常識的功利主義を各方面に應用でし、極めて急激な論法を使つた。歴史、倫理、日常生活、政治、文學、其の他如何なる方面に於いても、實益なきものは、無用の長物として排斥した。例へば天理人道を論じて曰はく、こは決して一定不變のものでない。『忠臣二君子に仕へ、甲州武士が徳川其他に仕へて働きたるも亦天理人道に戻りたるに非ず、年若き寡婦が、落髪して尼寺に入り、亡夫の菩提を弔ふも天理人道なり、再縁して子を生み、よく其子を教育するも天理人道なり今の世に兄弟同胞が夫婦たらば、天理人道に戻るならひと雖も、アダムとイブの子供等は誰れと縁組したるや、又日本書紀に仁徳天皇八田の皇女を皇后とすとあり、然るに皇女は天皇の妹なり、今より思へば不思議なれども、其時代には矢張り天理人道に基さし也』と。彼れに取りては、倫理法則なるものは、決して一定不變のものでなく、場合と時勢とに由りて變易するものだ。要するに實利を増大する行爲は即ち善で何事も其の結果から判斷せねばならぬと。去れば古今無比の忠臣と稱せらるゝ楠正成が、湊川で討死したとも、彼れの眼より見れば、死なずとも宜しい時に死んだのであるから、決して稱すべき價値のあるものでない。これ櫻兵衛が褌にて首をくゝつたと同じ事である。

彼れの論法は實に辛辣で猛烈であるが、而も當代に在りては其の必要が有つたのである。舊思想を打破する上には、生温い論法では、迚も志望を遂ぐるとは出來ぬ。其の鋭利な筆法は實に時勢一廻轉には、最も適當したものである。

此の功利主義は、傳來の道徳思想に束縛せられた人々を解放すると同時に、固陋の思想をも打破した。之れと同時に彼れの主唱した『獨立自存』の思想は、階級的社會觀を破つて、各個人に、自己の獨立を計るべき必要を感ぜしめた。彼れは歐化主義の潮流に乗じた大立物であるが、此の獨立自存の主義を以つて、人格といふ觀念に重を置き、從つて復た國家も獨立自存の實を挙うすべしと思惟したが故に、西洋崇拜熱の如き愚を演じなかつた。これ實に『三田の先生』といふ尊稱を受けた所以、また其の敬稱は最も好く適當してゐる。約言すれば、獨立自存の實を全うするには、實益的功利主義を奉ずべしと謂ふのが其の根本思想であつた。

三田派の主張は、主として實際的生活に關係してゐる。文藝の如きは、其の願みなかつた所で、これ其の主義より見ても容易に推測し得るであらう。故に其の影響は、實際的生活に最も緑深い社會、(例へば經濟界)に於いて、見事なる果を結び、また其の著譯書が、實際的人生に須要なる知識を普及

したとは、誰人も首肯する所であるが、文藝の方面に在つては、深い印象を貽して居らぬ。政治經濟或は實業などの方面に於いては、『三田の先生』が指導を受けた人が、皆な立派な位置を占領してゐるにも拘らず、文藝界に至つては、特に稱すべき程の活動者が居らぬ、否、此の社會には、三田派と名付くべき空氣が無いではないか。而も其の學校には、後年文學部なる一科が設立されたが、依然として活動せぬ。こは三田の主義其の物が、文學と相去る遠さが故である。此の主義が遵奉せらるゝ限り、恐らく文學界に於ける活動者は、容易に出現せぬであらう。

福澤主義は文藝界に貢獻する所、比較的僅少であつたが、單に文章上から見れば、沒すべからざる功績がある。彼れは傳來の漢文と和文とを斥けて、通俗平明なる一種の文體を創めた。これ實に時文の體を定めたものである。明治六年に於いて、彼れ既に漢字の節減を主張して次の如く言うてゐる。

『今より次第に漢字を廢するの用意專一なるべし、其用意とは文章を書くに、むづかしき漢字をば成るべく用ゐざるやう心掛くるとなり。むづかしき字をさへ用ひざれば、漢字の數は二千か三千にて澤山なるべし。』

彼れは其の實益主義を、文章の上にすら應用したのであつた。從來の漢文は、たゞ夫れ粗大、難解である、和文に至つては迂遠悠長で、兩者共に實用にならぬ。實用的文章とは、解り易い物であらねばならぬと。開く所に依れば、彼れの一文章を草するや、奴僕下婢に至るまで家族悉くを呼び集め、自ら朗讀して、各人に解し得るや否やを問ひ、若し不可解なりといふ者あれば、其の點を書き改めて、誰人も一讀して明白に會得するを見ずんば已まなかつたさうだ。洵に最も忠實なる文章家と稱すべきである。自己の思想感情を、秋毫の滯もなく、すら〳〵と明白に、はた精細に發表せむが爲には、難解の漢語や大和詞を排斥して、俗語をすら採用し、可及的文語と口語とを接近せしめた。彼れは文藝の内容には、多くの貢獻を爲さなかつたとは言ひ、形式上に一新機杼を出して其の名を青史に遺してゐる。

實益的功利主義は、人生に於ける物質的方面の改善擴張を謀る上に、多大の功績あつたのであるが、精神的方面、別言すれば心靈的方面の革進向上には、與る所尠かつた。勿論科學的、實用的知識を普及した點は、廣大のものであるが、其は物質上の幸福といふを最後の標準として居た。されど人生は此の境内にのみ蹰躇してゐるものでない。實益實利を最後の標準とするのも、一の人生であると同時に、其の利害關係以外に超越した人生もある。また斯くの如き人生を開拓せねばならぬのである。武士は食はねど高楊枝と言ふ諺に對して、

食はずして何處に武士たる人格、人たる品位を保ち得べきかと觀じて、先づ物質的生活の基礎を堅うせむとしたのは福澤一派の主義である。こは決して誤つた主義ではない、復た當時に在りては、極めて有用であつた。併し其は畢竟するに半面の眞理である。かの諺にも、慥かに動かすべからざる眞理が含蓄されて居る。吾人々類には、物質的束縛を離脫して、品位人格を高尚ならしめむとする精神が存在してゐる。此の精神の涵養は、福澤主義の閑却した點であつたが、幸にして他に此の方面の開拓に努力した學派があつて、天下滔々として實利實益に走らむとする間に、精神的、理想的食物を頒布した。そは即ち同志社及び同人社の事業である。

第四節　理想本位の思潮

維新後の社會を眺むれば、改革派なるものが、社會の勢力を占め、且つ成功してゐるが、彼れ等の人生觀其の物は、極めて幼稚のものであつた。彼れ等は酒色に耽り、現世の快樂さへ獲れば、充分なりと言ふ昱見であつたから、其の行爲は實に悖德無慙の極に達してゐた。成島柳北が『阿房山賦』或は『遊事の沿革』等を一讀すれば、其の狀態は彷彿として眼前に浮ぶ。

此く政治的方面に成功した者が、狹斜の巷に流連し、三田の常識的功利派は、盛に實益の獲得を研究しつゝあつた間に、最も忠實に、はた眞面目に、人生問題を研究した一流があつた。これ實に基督敎を中心とした一派で、吾人は之れを名付けて理想本位の思潮といふ。

基督敎は德幕時代に於いて、非常の迫害を受けたが、岩倉大使の歐米漫遊によりて、禁制の高札は撤回され、明治五年には橫濱に一小敎會が開設され、茲に其の發展の端緖が開かれたのである。然れども安井息軒の攻擊をはじめ、ジンゴイスチック感情のために、幾多の非難を蒙つた。福澤諭吉の如きも、『家庭叢談』と稱する雜誌に、惡辣なる嘲罵を試みた。彼れは耶蘇敎徒を指して、西洋人の厄介になる乞食書生なりと云ひ、極樂の桂庵、道德の口入屋と冷笑し、其の四海同胞の理想は一の空想に外ならぬと說いた位であつた。

併しながら精神界の不安に對する思想は、一部の青年間に隆々として起りつゝあつた。而して其の代表とも見るべきものは、熊本藩の學校であつた。彼の藩校では夙くより米國の大尉ジェーンスを聘して洋學を敎へたが、此の大尉が最も熱心誠實なる基督信者で、日本に於ける精神上の改革をなさむと欲し、懇切に青年を薰陶した。其感化を受けた者は山崎爲德、小崎弘道、橫井時雄、宮川經輝、金森通倫、海老名彈正、浮田和民等で、孰れも幾多の反對や攻擊を排して基督敎を奉じ

たのである。然るに藩校は明治九年を以つて閉鎖することになつた。此の時、ジェーンスの薰陶を受けた青年が、熊本郊外の花岡山に會して、日本に於ける精神界の革新を盟うた。花岡山の盟約は是れて、こゝに熊本バンドなる一團は成立したのである。實に其の熱烈なる信念は、殉敎者の如くであつた。而して此の一團が、京都の同志社に投じて、愈よ基督敎の勢力を大ならしめたのである。

同志社は既記の如く、基督敎界の巨人新島襄が明治八年に設立した學校である。彼れは岩倉大使の通辯として、歐洲を漫遊し、米國に歸りて後、更に深く思を沈めて、泰西文明の由來を研究した。彼れは早くより基督敎なるものが、歐米文化の基礎たるを信じてゐたが、漫遊と研究とは、愈よ其の信念を堅固ならしめた。殊にニューイングランドの淸淨敎徒の嚴肅高潔なる遺風は、最も深く彼れを動かしたのである。彼れは基督敎を以つて、新日本を作らむとする覺悟を持して明治七年歸朝し、其の理想の學校を開くべき地を、佛敎の根據地たる京都に選定したのである。

彼れが佛敎の空氣充滿してゐる京都に、幾多の西洋人を引き連れ、禪刹相國寺の門前に、同志社を開いたのは、其の信念決心の如何に鞏固なるかを語るものである。彼れは基督敎の敵たる佛敎の本城に突貫して、自己の信仰の、いかに强烈なるかを試驗せむと欲した。其の開校に就いては、佛敎徒の反對があり、本願寺の如きは、間接に手を廻して防害を試みたさうだ。去れど時の府會議長山本覺馬はじめ、府知事の後援を得て、同志社といふ看板が掲げられた。而して此の同志社に、前記した熊本バンドの一團が來り加はつた。新島其の人に、炎々たる信念があつた所に、血氣に滿ちた青年團隊が加盟したのであるから、京都中心の基督敎は、旭日の如き勢を以つて幾千の青年を感化したのである。

同志社以外に於ける基督敎の狀態を看るに、橫濱を中心として起つた一派には、押川方義、本多庸一、奥野昌綱、植村正久等が活動し、東北地方には希臘正敎が羽翼を伸ばした。また札幌農學校には、熊本のジェーンスに比すべき精神敎育家のクラークが、幾多の後進を誘導してゐた。志賀重昂、新渡戸稻造などは皆な其の感化を受けた人だ。

此れ等基督敎の感化を受けた青年は、早くも入方に派れて傳道に從事し、或は學校を開いて後進を導いた。靑山學院(明治十四年)立敎學校(明治七年)東京一致神學校(同十年)東京一致英和學校(同十三年)英和豫備校(同十九年)東北學院(同十九年)などは、皆な此の氣運に乘じて、創立せられた基督敎主義の學校であつた。

基督敎徒には敵が多かつた。從つて復た彼れ等の奮闘も目

覺しくあつた。明治十四年創刊の『六合雜誌』は、實に彼れ等有爲の青年が武器であつて、其の主として戰つた敵は、帝國大學を基礎とせる進化論的不可知說である。即ちスペンサーを祖述する外山正一外大學派の學者等が、基督敎徒の目指した敵て、其の他には三田派の實益本位の常識的功利主義も亦戰場に現れた。

當時の宗敎界を觀ずるに、基督敎に改宗する者は、實に多數であつた。其の一原因は、歐米崇拜熱である。何事も西洋の方が優等てあると言ふ先入思想あつた爲に、文明の宗敎にそ基督敎なれと結論し、其の果して奉ずべきものか、國是と合一するものか、理論上正確のものであるか否やを考慮する暇なく、之れを奉じた者が多數てあつたらう。

基督敎の成功は、當時の歐米崇拜熱に乘じたからであるが而も其は一面の觀察である。基督敎徒が後進の男女敎育に盡瘁し、精神の向上を勗めて倦まなかつたのは、更に重大なる原因であつた。加之、敎理其の物が、當時の青年を動かす所多つたのである。

新なる物を握らむとする改革時代の兒で、政治、軍事、或は財政の方面に立ち入つた者は、兎に角に其の欲する物を獲得したのである。されど精神界に走つた者に取りては、如何なる思想敎理あつたであらうか。彼れ等は世俗上の滿足を希ふ者でない。精神界の刷新を以つて、文明國を作らむとするのである、否、精神の慰安、その向上革新を望んてゐる。然るに當時の神道及び佛敎は、德川時代の夢を、引き續いて見てゐるだけて、毫も活動せぬ。從つて折角の敎理も、其の光彩を放つことが出來ぬ。加之、同じく改革的空氣を呼吸した青年は、傳來の敎義に接しても、感情上滿足すると出來ず、何等かの清新なる靈の食物を求めむと搜索した。此の時に當つて勃興し來つたのが基督敎である。其の敎理は簡單明白てある計りてなく、情熱的、詩的、想像的てある。されば感情の激してゐる改革時代の兒が、我れ先きにと此の敎理を奉じたのは、自然の勢て、而してその勢を助長したのは、歐米崇拜の熱であつた。

吾人は明治の宗敎史を編述しつゝあるので無いから、基督敎の發展した徑路を詳密に記述せぬが、其の功績、殊に文學の方面に關する功績に關しては一言せねばならぬ。先づ掲ぐべきは人心を理想の方面に向はしめたことである。其の掲げ來る理想が、果して高遠有意義のものであるか否かは別問題とするも、兎に角、現人生を超越した理想に人心を向はしむる傾向を作つたのは爭はれない。三田一派の思想は、單に結果の善惡に由りて、娑婆內の人生の行爲を判定せむと試みたのであるが、基督敎徒の事業は、或る一の高遠壯嚴なる

理想に服從するに非ずば、如何なる行爲も稱するに足らずとの思想を呼び起した。

實利主義は福澤諭吉が唱導し且つ實行してこそ、危險なきものてあるが、淺見者流が實際に應用しては、只之れ物質的利益を主とする社會を現出するとに成らざるを得ない。基督敎主義とても、淺薄に解釋し、輕卒に實行すれば、同じく危險は存してゐるが、而も當時の敎徒が事業は、實利實益以外に何物も知らざる社會人心を、理想的方面に向はしめ、以つて福澤主義の弊を矯めてゐる。此の兩者は相待つて、明治新文明を作つてゐると言ふべきてある。而して基督敎の事業は殊に文學の內容を豐富ならしむる上に功績あつたとは、三田派の及ばざる所てある。敎義其の物が文學的てあり、理想的てあるから、精神上の事業たる文學が、其れに據つて發はれたとは想像するに難くはない。勿論當初にありては、直接の影響を數ふるとは出來ぬが、日清戰役前後に到れば、瞭然として之れを看る。

第二の功績は外國語、殊に英語の普及を計つたとだ。初期の敎徒は『天道溯原』ぐらゐを讀んて居たのてあるが、直接に聖書を知らむには、是非とも外國語に通ぜねばならぬ。而して當時、我が國に來つて、文明の進步を謀つた人々は、多く英米人てあつた。此の故に、英語なるものは、先づ大に研究されたのである。當時英語を敎授した中心點は、到る處に在つた。其の大なる者は、本章第二節の諸處てある。されど耶蘇敎徒の盡力無つたならば、彼の語學が今日の如き大勢力を有すると出來なかつたてあらう。かく外國語を知るとは、外國文學を覗ふ端緒てあつて、而もバイブルなる者は、文學上の書物として不朽の光彩を放つてゐる。なほ其のバイブル以外に、當時の敎徒が愛讀した書物中には、英吉利文學史上に、異彩を放つてゐる物が多かつた。實にバイブル一卷と、宗敎書とは、宗敎心を涵養すると同時に、文學的思想を養成する上に沒すべからざる功績がある。

三田派の主張も急激て且つ極端てあつたが、基督敎徒の理想主義も亦頗る猛烈に喧傳された。彼れ等はキリスト歿後のペテロ、パウロなどの熱心なる使徒の心掛を持つて、日本全國民を基督敎化せずんば已まずと驀進した。而して此の間、獨り靜肅穩健に、精神界の開拓に盡したのは、同人社の設立者たる敬宇中村正直てあつた。

中村敬宇は和洋兼備の溫厚篤實なる學者として、最も懇切に後進を敎育した。福澤も新島も共に改革時代の兒てある。史上に殘つてゐる彼れ等の風采は、一個痛快なる急進黨てあるが、中村正直に至つては、敬尊すべき君子の面影を遺してゐる。而してスマイルスの『西國立志編』『西洋品行論』等の譯

文は、今日尚ほ幾千百の青年を薫陶しつゝある。

彼れの思想は、儒教と基督教とを調和したものだ。基督教の裡に孔子の教理を發見し、孔子の言に耶蘇の思想を發見した。即ち耶蘇教の所謂神といふ思想と、儒教の天とは、彼れに於いて渾然融和したのである。左れば當時の基督教徒は、皆な彼れを最大の同情者として尊敬したのは當然である。

獨り基督教界の人々のみならず、誰人も皆な彼れを尊敬し有爲の青年は、彼れを學界の典型と仰いだ。彼れは其の著述に由りて、品性の修養を圖る外に、『文學雜誌』を發刊して、詩文を奬勵し、且つ泰西の新知識を紹介した。其の文章は流暢平明であり、學殖は深遠であり、日常の行爲は聖賢の如くであつたから、人を動かす力は中々に強大であつた。其の勢力は、福澤諭吉の如く廣くはないが、深さに於いては、優つてゐる。殊に漢文に長じてゐたから、泰西の思想を、漢學者間に傳ふるに少からぬ功績があつた。

耶蘇教徒及び中村正直の思想は、理想的である。人の心より天とか神とかいふ一種の理想を一時たりとも忘却せしめざるものであつた。而して其の實際人生に於ける行爲の標準は博愛主義である。三田派が實利一方より行爲の善惡を品隲せむとするに對して、理想を本位とした主義を立てたのは、動搖せる時代に取りては、洵に幸福であつたと言はねばならぬ。殊に文藝の發達には、此の碩學と彼の教徒とが、相應じて心靈界の開拓に從事した勞が、與つて力あるとを認めねばならぬ。福澤主義が實際的知識の普及に多大の功あるは、言ふ迄も無いが、其の知識の外に、精神的食物を供給して、後年の文藝發展の基礎を造つた中村正直及び新教徒に對しては、吾れ等皆な感謝せねばならぬ。

第五節　自由思想

三田派と精神改革派とが、相對して新社會を開拓せむと試みつゝあつた間に、自由思想が一部の社會に現れた。『板垣死すとも自由は死せず』と言ふ語は、實に當時の一部の人士が、天來の神言の如くに感銘したものである。

此の自由思想は、佛國の學統によりて代表されたと言ふも敢て不當ではあるまい。中江篤介の『民約譯解』(ルーソー原著)これ實に其の思想を普及せしめた書物である。此の書は明治十五年の出版であつた、其の以前に於いて、既に此の思想は勃興してゐる。明治七年に於ける民選議院設立の建白書は、明白に其の事實を傳ふるものだ。板垣、副島、後藤、江藤、由利、小室(信夫)古澤滋、岡本健三等は其の主張者であつた。而して其れ等の名士の間には愛國公黨なるものが組織されて、其の宣言書中には、『吾輩の斯の政府を視ると、斯の

人民の爲めに設くる所の政府と看做すより外なかるべし。而して我黨の目的は、唯々斯の人民の通義を保全主張し、以て斯の人民をして自主自由獨立不羈の人民たるを得せしむるにあるのみ』との語がある。これ明白に民權の重んずべきを主張したものである。更に西南事件の當時には、其の思想は、板垣伯の率ゆる立志社となつてゐる。其の設立趣旨書には、人間に天賦の權利あるとを堂々と陳述してゐる。併し斯くの如き自由平等の思想に、更に多量の油を注いだものは、中江篤介の譯した『民約譯解』である。また箕作麟祥の反譯した佛國の民法の如きも、人權論を普及する上には、渺からぬ功あつたであらう。また明治十六年出版の馬場辰猪著『天賦人權論』の如きは、此の思想の代表的産物である。

此の思想の主張は極めて簡單である。佛蘭西の專制政治に苦んだルーソーが、四民に平等の權利あり、其の權利は天賦のもので、萬古不易、不消不滅である、これを壓迫せむとするのは天理に戻るものであると叫び、且つ政府なるものは、人民の約束に由りて成立するものに外ならぬと主張した其の說を、其の儘に採用し來つた物に外ならぬ。佛蘭西學を修めた人、或は米國に遊んだ人々が、ルーソーを本源とする自由平等の革命的思想に感化されたのは、敢て怪むに足らぬ。去れど今日より看れば、中々に滑稽であるが、また其の說が、さしたる慘毒をも流さなかつたのは、幸福と言はねばならぬであらう。自由平等の思想は、佛國の大革命といふ悲慘の現象を産んだ。それと同一の思想が、革命に類したる維新改革後、幾許もなく輸入されたにも拘らず、小悲劇を以つて終つたのは、實に天祐と謂ふべきである。

自由思想の鼓吹者は、其の思想と日本帝國の國是とが、一致するものであるや否やを顧なかつた。否、此の思想と忠君愛國の思想とを結合した積りで居たのである。元來氷炭相容れざる兩思想を、融和し得るが如くに考へた當時の人々は、洵に狐に魅されたやうの痴態を演じつゝあつたのだ。

此の思想は、主として政治上に出現した。而して幸に惡弊を生ぜずして。思想を自由ならしむる效果あつたのは、大に慶すべき事である。蓋し封建制度の餘毒なほ絕えざる時代にあつては、此くの如き劇藥も必要あつたのであらう。而して此のルーソー主義の自由平等思想、或は民選議院設立說に反對したものが、國家主義的主張であつた。

第六節　國家主義的思想

前節に記述した自由平等思想に反對したものは、國家主義の思想である。而して其の代表者と見做すべきは、獨逸學より進化論に入つた加藤弘之である。其の著『人權新說』は實

に自由平等思想に對する有力なる駁論であつた。其の根本の思想は、進化論中の優勝劣敗說である。乃ち人間は其の心身兩方面に於いて、決して平等のものでない、遺傳の如何に由りて高下優劣の別が生ずる。去れば優等なる人が、劣等者を支配するは當然のことだといふ點にある。彼れは曾つて『隣草』と題する一書を著はして、大に人權を主張したが、此の時には其の說を放棄して、自由平等主義を壓迫せむとした。故に一方からは、彼れ曲學阿世の徒なりと言ふ非難も起つたが、其は見當違ひの評である。彼れは此の時進化論を奉じて居て『隣草』時代とは全く異つた人生觀を懷いてゐたのだ。

彼れの外に、自由平等派に反對し、從つて民選議院論を排斥した人々は、森有禮、海江田信義、西周等であつた。其の主張は、國家の歷史的發達に在る。國民と人民との關係は、長年月の歷史を有するもので、決して遽かに改造すべきものでない、民選議院の如きは、尙ほ早しである、とは此の一派が主張した點である。而して此の主張には、保守思想が結合して居る。蓋し當然のことだ。

民選議院說に反對し、或は天賦人權說の謬妄を說く者も、其の基礎とする所は、外國思想であつた。後者は既記の如くダーキンの進化說を中心としてゐる、前者は獨逸のスタインとか、或はビスマルクの主張を本尊としてゐる。而して自由平等を尙ぶ佛蘭西思想の系統に屬する者が、漫然と天賦人權說を主張した如く、反對黨の國家本位の論者も、漫然と國家の歷史的存在を說くのみで、我が帝國の國是は何であるか、帝國の臣民と政府との關係は如何樣であるかなどの問題には說き及ぼして居らぬ。此の兩方面の主張を見ると共に、吾人の感ずる所は、吾が皇室の如何に尊嚴にして、臣民は何事を論ずるにも、皇室だけは、神聖犯すべからざるものと暗々裡に思惟して居る點である。彼れ等は如何に議論を交へ、互に極端の言を吐いても、論題は恒に臣民間に存在して居て、皇室だけは容喙すべからざるもの、神聖なるものといふ信念が無意識の間に存在してゐたのである。左もなくば自由派の如き極端なる言論は決して吐くことが出來ぬ筈だ。

* * * * *

回顧すれば、明治二十年頃に至る間の思想界は、英吉利派の功利主義、佛蘭西派の自由平等主義、及び獨逸流の國家主義かと並び行はれ、其れ等に對して、否むしろ其れ等を超越したる基督敎的、理想的思想が流行した。基督敎の如きは、博愛主義を主張するだけに、民權論者と見做されたが、其の實は別物であつたのだ。

此の期と雖も、保守派の運動は、決して休息して居らなかつた。其の一例として見るべきは明治六七年頃に於ける國學

皇道の研究が旺盛であつたことである。併し社會の大勢は、歐化主義であつた爲に、保守派の活動の如きは、殆ど表面の社會に表はるゝことが出來なかつた。而して其の歐化主義なるものは、白人崇拜の傾向を生じてゐる。何事も西洋が進んで居る、其の文物を作つた白晳人種は、東洋人よりも能力優等だと言ふ考は、暗々裡に人心を支配して、其の餘弊たる日露戰役の時代までも及んでゐる。歐化主義の餘毒にして最も强烈なるは、蓋し此の謬想であらう。

第三章　國粹保存主義

第一節　反動的現象

前章に於いて述べた歐化主義は、明治二十年頃に於いて、其の絕頂に達してゐる。其の間、固より反抗的現象の生起したことは認めねばならぬ。國學皇道の研究が起つたとや、或は弘道會の組織されたとや、敎佛徒が稍や動き出したと等は其の重なる現象と言ふべく、また國家主義の勃興も、たとひ其の基礎とする所が、泰西に在るにもせよ、歐化主義に反抗した最大の現象と見做さねばならぬ。

されど社會一般の形勢は、依然として歐化主義であつた。西洋風の假裝會、舞踏會が鹿鳴館に開かるゝ、大學生と女學生とは混同して英語の忠臣藏を演ずる、束髮洋裝は流行する、「かなの會」又は「羅馬字會」が組織される、其の他社會の各方面に於いて、西洋崇拜の現象は到る處に見るべく、苟しくも日本固有の物であれば、皆な劣等なるもの、野蠻なるものとして擯斥された。日本の古美術品が、二束三文の値を以て賣り飛ばされ、芳崖、雅邦などの巨匠が、空しく陋巷に不遇を嘆じてゐたのは、實に此の頃であつた。

去れど斯くの如き極端なる西洋崇拜は、何時までも繼續するものでない。國民の思想が冷靜になると共に、保守的思想にも、一面の眞理あることを氣付くに至るは、贅言を要せずして明白である。而して從來は、度外視されてゐた反抗的氣運も、此の時に至つて、漸く頭角を擡げ得たのである。實際西洋崇拜の熱は、幾多の弊毒を生じ、其の事實は、國民全體が瞭々として看取する所であつたから、反動的氣運の生起したのは、寧ろ遲かりしと言ふべきである。

德富蘇峰の著はした「將來の日本」及び「新日本の靑年」は、非常に評判高かつたものである。また其の表題より見れば、歐化主義に對する反動的氣運を起したものゝやうに思はるゝが、其の實矢張り歐化主義に屬するもの、否、むしろ其の全盛時代を代表する作と言つても宜しい位である。而して反動的氣運を、最も善く代表するは、明治二十一年を以つて組織

された政教社で、其處よりは『日本人』なる雜誌が發刊されて、『國民の友』(二十年創刊)と相對立した。此の政教社派を代表する者は、三宅雪嶺、志賀矧川等てある。次に條約改正事件に於ける井上案の失敗も亦此の現象の一と見るべきてあらうし、更に溯りて數ふれば、明治十八年に森有禮が文部大臣の椅子に就きて、國家の爲に忠良なる國民を養成せむとする國家主義の教育方針を立てたるも亦、反動的氣運の一例てある。また自由黨なるものが、設立當時の意氣を失ひ、且つ其の名士たりし馬場辰猪は死んて終うた。また大同團結員が全國を巡りて悲憤慷慨の演説を爲したるが如き、單に政治上の變動とのみ見るべきてなく、其の根柢には、反歐化主義的思想の漸く動きつゝあつたのてある。

第二節　教育勅語の發布

獨逸學を基礎とする國家主義と、保守主義との聯合したものが、國粹保存主義を構成してゐるが、さて其の國粹なるものは何てあるかと問へば、明確なる觀念は無つたのてある。歐化主義の人々が、西洋的でさてあれば、何事も優等なりと言ふに對して、漫然國粹の優秀なるを説いたのみて、其の根柢は決して堅固なるものては無つた。故に歐化主義なるものは容易に倒れず、明治二十一二年頃迄は、實に此の兩思想が互に無茶苦茶の戰を爲しつゝあつたのてある。併し國粹保存論者の説が、學理一偏ては無く、即ち曩に記したるが如く、西洋思想を借用して、國家本位を説くよりも、一歩を進めて、現實の日本に、長所のあるとを喝破したのは稱すべきだ。但し其の長所の何物たるかに關しては、明確なる説明のなかつた爲に、反對論者より、固陋なる頑迷黨と見做されたのは、氣の毒と謂はねばならぬ。

然るに此の亂雜なる思想界は、明治廿二年の憲法發布によりて鎭靜せられたと言ふも不可はない。此の憲法は例を外國に取つたものてあるから、歐化主義の所産と看るべきてあるが、そは誤つた觀察てなくとも、單に一面を眺めたばかりのものだ。此の憲法は、實に日本帝國を基礎にして居る。故に民選議院の主張者から見れば、定めて不滿足のものてあつたらうが、併し一たび制定されて見れば、先づ其れを研究して見ねばならぬ、研究すれば、此れが國家に相當したものてあるとは、是認しなければならぬ。國粹保存主義より見るも憲法の大基礎に、皇室國家のあるとを知れば、雙手を擧げて賛成せねばならぬ。兎に角、憲法の發布は、急進派、漸進派及び保守派に、國家なる觀念を與へたから、紛擾を極め、無統一てあつた思想界を、靜肅ならしめた。

明治二十三年は實に國民の忘るべからざる年てある。此の

年十月に下された『教育勅語』は、亂雜の思想界を統一したもので、茲に忠君愛國といふ國民的理想が、明確に掲げ出された。教育界其のものが、此の勅語に由りて、德育の大本を定め得たるのは、勿論のとてあるが、國民全體が、一國民として活動すべき確實なる基礎は、憲法發布と共に先づ大凡に定められ、次て此の大詔に由りて堅固となつたのてある。

第三節　教育と宗教との衝突

教育勅語の發布に由りて、國家主義の基礎は、堅牢なる地盤を占めた。つまり健全なる國家的思想が、國民の間に醇勃として起つたのてある。而して其の國家的思想の爲に、大打撃を受けたのは、基督教てあつた。

明治二十五年、井上哲次郎が『教育と宗教との衝突』と題する一書を公にしたのは、耶蘇教徒に取りて、空前の打撃てあつた。其の論旨は(一)該教は國家の差別を認ず、其の所謂道德は出世間的なるが故に、教育勅語の聖旨に反す(二)其の説く所は出世間的なるが故に未來世に重を置きて現世を輕視す、これ勅語に反す(三)該教は博愛主義にして、勅語の精神は差別的なれば兩者相容れず(四)其の教理には忠孝を説かず或は時に之れを無視するとがある、これ聖旨に戻るものてあると。此の所説は、要するに國家本位の議論て、耶蘇教徒の博愛的、世界的思想を打撃したものてある。されば國粹保存主義の最も好く醇化せられたる思想と見るべきだ。

此の論一たび出づると共に、耶蘇教徒は、死もの狂ひとなつて辯護した。横井時雄、丸山通一、植村正久、大西祝、石川喜三郎、本多庸一等皆な筆を揃へて出陣した。就中高橋五郎の『僞哲學者の大辨論』(國民之友所載)の如きは、最も多くの注意を引いた論文てあつた。

此の論戰は、思想界稀に見るほど盛てあつた。これ歐化主義、博愛主義、世界主義と、國粹保存主義、忠君愛國主義、國家主義の衝突てあつて、單に議論上より見れば、勝敗何れにあるやを輕忽に斷言すると出來ぬが、事實上より見れば、此の論爭以來、基督教の意氣は大に銷沈して、前時代の隆々たる形勢は、一場の夢と化した觀がある。

該教衰退の一原因は、國粹保存主義の勃興に在るは言ふ迄もない。殊に廿三年の内村鑑造の御眞影に對する不敬事件、廿五年の熊本英學校教員奥村禎次郎の『眼中國家なし』といふ演説事件等は、國民の胸中に、耶蘇教徒は不忠の民なり、非國民なりとの考を抱かしめたるが爲に、尚ほ更に教運は衰退した。かく外部の原因あるに加へて、内部には神學上の爭論起り、名士にして其の圈外に出づる者多かつた。加之、科學的知識は益す普及し、其の教理の價値を疑ふもの漸く多数

となつて來たから、宣教師の努力も、往年の如き好果を收むると出來なくなつた。それ等の事情は、互に結合して、耶蘇教衰退の原因となつてゐる。因に言ふ。教育と宗教との衝突問題に關して、佛教徒が井上派に左袒したのは、實に滑稽と言はざるを得ない。國家主義は、啻に基督教と相容れざるのみならず、佛教とも衝突するものである。佛教徒は此の點に心付かず、宗敵たる耶蘇坊主を攻擊する機到來せりと言はぬ計りに筆を振つたのである。己が鼻上の飯粒を知らず、他人を責むるとは此の事だ。

* * * * *

如上の事實を觀ずれば、當時如何に國粹保存的思想の勃興しつゝあつたかを推測することが出來る。また二十五年の『史海』に久米邦武が『祭天の古俗』と題する論文を掲げて、國學神道家より不法の迫害を受けたとも、此の風潮の一例であると同時に、なほ其の國粹保存主義派の腦中には、國家とか國粹とか言ふとに關して、明確なる觀念の存在して居なかつたことを證明して爲る。

併し吾人は此の期間に於いて、文學が長足の進歩を爲しつゝあつたことを忘却してはならぬ。社會の制度が略ぼ一統された後のことであるから、文藝が漸く社會一般から注意され、且つ發展の途に就いたのは當然の事であらう。此の消息に就いては、次編に叙述するであらう。

此く漠然ながらも國家なるものを意識し來つた時に當つて一大刺戟が來つて、一層其の觀念を明白且つ健全にした。これ乃ち日清戰役である。

第四章　日本主義の勃興

第一節　日清戰役

日清戰役は、明治國民にとりて、恰好の試金石であつた。其の軍事上及び政治上に於ける効果は、茲に記述するまでもなく、吾人の記憶に鮮かなる所、また其の必要もないが、特に一言すべきは、其が國民的觀念を明確ならしめた點である。吾が帝國臣民は、此の時に至つて、始めて國民としての活動を爲したのである。

此の戰役によりて、國民は、日本帝國が世界の一國たるを明白に自覺した。其の自覺の結果は何であるか。國家の將來は如何、其の國家の國民たるものは、國家政府に對して如何なる關係を有すべきであるか、其の國民は、國家のためには家庭と如何なる關係を保つべきか、此れ等の切實なる問題は犇々と迫り來つたのである。各個人は、もはや空理戲論に耽つて居ることが出來ぬ。深大なる問題が、雲の如くに湧いて來

た。現實は、まざ〳〵と其の眼に映じて來た。

從來の思想界は、所謂書齋論であつた。書生の空論であつた。其はジンゴイズムの弊に生じたものであらねば、書籍に由りて製造された物であつた。先時代には、世界に於ける一獨立國としての日本が、其の眼中に映じて居らぬ。只一國內に彷徨して、毫も他と吾れとを對照することが無つた。只漠然土地上より西洋と云ひ、國家と云ふのみで、自他の對照關係は、全く度外視されてあつた。譬へば相手なしに己が力量を想像して居たやうのものであつた。其れが世界的舞臺に於いて、堂々と相撲を取るやうになり、且つ立派なる勝利を占めたのであつた。是に於いてか、自己を知ると同時に、他者をも知ることになつた。即ち世界列國間に於ける一國民たりと言ふ思想は、明白に意識せらるゝ樣に成つたのである。言はゞ、從來お坊樣風に思索もし、動作もして居た者が、社交場裡に出でゝ、初めて自他の關係を明かにし、是れより社會の一員として如何に活動すべきかの問題に逢着したのである。

戰役の結果は、一部の間に、ジンゴイズムの思想を起さしめた弊もあるが、其は極めて一小部分で、全體から言へば、國家的觀念を具體的、現實的、活動的にならしめた。而して三國干涉の事件は、更に此の意識をして强大明確ならしめ、國威發揚の精神は、炎々として諸方に起つたのである。

第二節　日本主義の宣傳

國民的意識の最も明確に表現されたものは、明治三十年五月に、井上哲次郎、木村鷹太郎、高山樗牛等の發表した『日本主義』である。

其の主張は、從來漫然と唱へられつゝあつた歐化主義的思想と、國粹保存的思想とを、調和したものである。而して其の方針は、世界に於ける日本帝國の發展と云ふ點にある。ジンゴイズム流の日本觀でもなく、亦た西洋崇拜流のハイカラ思想でもなく、此の兩者の長所を、採集し、結合して、新日本の基礎を定め、新日本の道德を發揮せむとするに在る。去れば其の眼中には、日本の過去現在將來が存在すると共に、世界の大勢も亦存在して居る。要するに其の大方針は、日本の歷史を基礎として、世界の長所を攝取し、以つて世界的活動に出でむとするに在つた。

一たび此の思想が表はるゝと共に、歐化主義の系統に屬する耶蘇教、佛蘭西派の自由思想は勿論のこと、從來は國粹保存主義の一派と自信した佛教も排斥された。蓋し當然のことである。是に至つて外國の思想は、崇拜的でなく、寧ろ參考的に迎へらるゝに至つたのである。

日本主義は非常の勢を以つて宣傳された。山川草木を悉く

風靡せずんば已まずと言ふ覺悟を以つて傳へられた。また宣傳者は、此の以外に日本國民の人生觀なし、と言はぬ計りの勢を以つて、高言放論したのである。併し今日より見れば、其の思想なる者も、やはり空漠なるものであつた。單に日本の長所を伸張し、世界の長所を採用すといふだけで、兩者の長短、果して何處に存するやは、甚だしく不明であつた。世界的文明に貢獻する所あらんとする思想を普及したのは、其の功績であるが、思想其の物は、甚だ曖昧である。ただ日清戰役の勝利が之れに保證を與へた故に、其の勢力は一時燦爛たる光彩を放つたのである。

日本主義は、世界主義に對する名稱である。されど其の當時、各の主義を主張した人の根本思想を覗へば、決して一致せぬものではない。日本主義とても、世界的風潮を顧みずして國家萬能思想を普及せむとするのでもなく、世界主義者とても、日本帝國を眼中に置かなかつたのでも無い。共に日本が、世界の舞臺に於いて、充分の活動を試み得る實力を涵養せむとするを目的として居る。只其の說明の方法が、前者は日本を基として論じ、後者は世界を本とした相異があるのみであつた。當時の論客は、國家主義即ち世界主義といふ解釋には思ひ及ばなかつたのである。

世界的文明とは、決して一國民の占有してゐる物でない。世界主義とは、此の文明を進歩せしむるに在るは、最も明白なるとであるが、當時の日本主義者は、表面上此れを認識しながら、衷心には其れが或る國家の占有であるかの如くの感情を有してゐた。世界主義徒とても、此の根本思想を明白に意識して居たならば、強ち日本主義に反對する必要も無つたのであるが、反抗した所を見ると、やはり世界主義なるものは、或る一國家又は一民族の所有物で、日本主義と對抗するものゝ如くに思惟して居たのであらう。此くの如きは今日より見れば、實に幼稚の思想であるから解決は直に斷定し得る所であるが、當時に在りては、幾多の議論を生じ、且つ感情上の爭論すら有つたのである。

第三節　主情主義の思潮

上記の如く一方には、國粹保存的思潮が勃起した。併し其の他方には、國家主義以外の思想が、一部の青年間を支配したとを忘却してはならぬ。其の主要なる特色は、主情主義（センチメンタリズム）即ち之れである。而して其の好代表者は、明治學院にて養成せられた『文學界』一派である。

耶蘇教は、國粹保存的思想の勃興と、其の內部に於ける爭論との爲に、明治十七八年頃に於いて勢力を失うたのであるが、而も人生に對する忠實なる研究的精神を養成した。國家

とか、或は民族とか、或は人種とか言ふ區別以外に、人生を思索する精神は、宗教本來の目的であるが、明治時代に當つて特に此の傾向を養成したものは、耶蘇教である。佛教の如きは殆と睡眠的狀態に在つたから、其の本來の教義に斯かる思想あるにも拘らず、其の風潮を起すには、甚だ迂闊であつたが、耶蘇教徒は、非常の力を以つて活動したが故に、青年の思索を、此の方面に向はしむるに多くの功があつた。

西洋主義も國粹保存主義も、或は其の兩者を融和せんとする日本主義も、其の根柢は皆な現實の世界に在つた。然るに基督教徒の教育に至りては、現實以外の或る理想界を、青年の念頭に懸けしめたのである。既記の如く福澤諭吉の主義は現實の圓滿完了を目的としたものであつて、裏面より言へば物質的社會に於ける各個人の物質的滿足を教へたものに外ならぬ。世界主義者の論ずる所、日本主義者の主張する所、其は立派ではあるが、一步退きて觀ずれば、物質上の圓滿を追求するに外ならぬ。然るに耶蘇教徒は、物質界以外の理想的世界、文學的世界、詩的世界の存在を說いた。

其の思想は、歐化主義全盛時代には、さしたる勢力をも示さなかつたが、國粹保存主義の勃興した時代に至つて、一部殊に文學の社會に有力なる傾向となつたのである。思ふに人間が現實の世界に甘んぜず、精神的に自由を得むとする志望を有するや、其れが文學の方面に顯出するのは、當然の徑路であらうと思ふ。況や當時に於けるが如く、國粹保存主義の勃興するに當りては、文學的方面ならでは、其の超社會的感想を發表する機會は無つたであらうと思ふ。

世界主義と云ひながら、或は國家主義と稱しながら、個人の滿足といふとを標準にしたならば、孰れにも左袒すると出來ぬであらう。考へ樣に依りては、一國民としての人間よりも、他の意味の人性がある。己の境遇に束縛せらるゝ外に、其の束縛を離脫して、自由なる理想的、空想的天地に逍遙せむとする傾向がある。耶蘇教は正に此の方面の人生を指して、幾多の後進を導いたのであつた。要するに、功利的以外に人生を觀ずるの道を開いたものが耶蘇教であつて、其の思想に養成せられたものが、文學界に於ける一部の勢力となつたのである。

而して其の特色は主情的である。これ亦當然の結果ではあるまいか。社會一般が現實的利益を主とし、其れを以つて萬事を批判せむとするのであるから、理想世界にあこがるゝ者は、主情的とならざるを得ない。如何にしても此の社會は不完全である。舊來の習慣に支配されてゐる。情の滿足を求むると出來ぬ、理想的社會、理想的家庭を造ると出來ぬといふとならば、人心が感情的、激情的となるのは當然だ。

佛蘭西革命時代には、『世紀病』と稱せらるゝ一種の感情的病氣が流行した。こは現社會に對する不滿足感に起源して居る。其れと同樣なる性質の厭世病が、當時の我が文壇にも流行した。たゞ感情に走り、情熱の滿足を得むとして失敗した一種の苦痛感が即ち是れである。殊に世界的思潮を鼓吹する耶蘇教の衰退は、此の悲觀的思想を養成する上には、尠からぬ力であつた。既に社會事情其の物の上に於いて滿足を得ざる上に、教理其の物が迫害されたのであるから、詩人的性質あるものが、主情的傾向に捕はれたのは、敢て怪しむにたらぬ事であらうと思ふ。

* * * * *

兎に角當時の思想は、日本主義の主張するが如き東西兩洋の折衷主義を基礎とした一種の國家主義が、到る處に瀰漫したのは事實である。明治十五年に創立された專門學校が、此の頃に至りて、明かに學問の獨立を主張し、且つ廿二年には文學部を開設して、獨立に日本文學を盛大ならしめむと計畫したことを始めとし、其の他、百般の社會に、日本を本位とする事業の計畫されたことを見ても、如何に國民的自覺の明白であつたかを推知することが出來る。

此の時代に於いて特に吾人の注意すべきは、文學が非常の勢を以つて勃興したことである。『早稻田文學』は國民的文學のために痛論し、或は國學國文の改良を唱へ、外山正一、井上巽軒等は、再び新體詩の隆興を謀り、『帝國文學』『太陽』等は、戰勝の餘勢として發刊され、一方には『文學界』一派の主情主義が流行して居た。日本帝國が支那と言ふ大帝國に勝つて、赫々たる名譽を擔ふと共に、文學界も亦世界文壇に於ける獨立的地盤を占有せむと欲したのである。

第三章　世紀末的思想

第一節　個人主義的思想

日清戰役に至るまでの我が思想界を、一言に評したならば啓蒙時代とも稱することが出來るであらう。何は兎もあれ、後れた知識を進歩せしめねばならぬと言ふのが、國民全體の大方針であつた。其の間、元より國粹保存的思想の勃興もあつたが、其は要するに一の反動であつて、全體上より言へば、國民の智德をば開發せむとするのが、大方針であつたと言はねばならぬ。而して日清戰爭なる者は、一般國民に、國民的自覺心を起さしめた。是に至つて、國民は世界主義とか、或は國粹保存主義とか言ふ空漠なる觀念を棄て、世界の一國民たる日本人として思索し、行動するに至つたのである。

更に理論的に言へば、吾が國民は、日清戰役に依りて、現

實的生活に入つたのである。從來の思想とても、現實に接觸して居らなかつたのではないが、後世より見れば、矢張り空論であつた。福澤主義其の物すら、現實的たるに拘らず、なほ空想的、理想的であつた。それが戰爭といふ一大刺戟を受けて、現實に接するやうになつた。國家としては、國家の獨立を意識し、一個人としては、國家對個人の關係を思索するやうに成つた。而して國家を本位とする思想が、遂に勝利を占めて、日本主義なる名を標榜したのである。

併しながら、此の國民的自覺は、やがて個人的自覺ではあるまいか。實に三十三四年以後の思想は、此の個人性の自覺に外ならぬ。明治初年には、漠然と西洋を崇拜してゐたが、其の局面は一變して、國家對世界となり、更に一變して日本主義となつたが、其の風潮は三たび轉じて、國家對個人の思想となつて、個人主義なるものを呼び起した。

國民としては其の自我を沒却せなければならぬ。國家の爲には、個人の好む所を棄てねばならぬ。個人性は、國家社會といふ規約の下に服從せねばならぬ。これ果して正當なる說明と稱すべきであらうか。個人性を沒して迄も、國家や社會に盡すことが、果して國家と社會とを繁榮ならしむる所以であらうか。國家は左程までに個人性を壓迫しなければ、生存することの出來ぬものであらうか。所謂習慣的道德は、個人性の自由を束縛するものであるが、其の法則によらずんば、社會の秩序を保つことは出來ぬのであらうか。此れ等の疑問は、國民的自覺を得たる者か、一轉して思及した點である。而して其の結論は、個人の自由を尙ぶことで、代表的と見做すべきは、高山樗牛、登張竹風等の祖述したニイチエ哲學である。

ニイチエの個人哲學、即ち有ゆる習慣道德を顧ず、自己本然の性を發揮すべしと言ふ主張は、高山、登張以前に、既に吾が文壇に紹介されたのであるが、其の普及は、曾つて日本主義を唱へた高山樗牛の力に歸せねばならぬ。其の主張は、個人の意志に重を置くに在る。耶蘇教とか、或は從來の倫理道德家の定めた法則は、弱者保護の道德である、强者の自由なる活動を束縛せむとする道德である。弱者道德の遺傳あるが爲に、强者は其の能力を用ふるに所なく、遂に社會は虛飾僞善に充ちて腐敗するのである。個人の本能性をさへ發展せしむれば、玆に壯快なる社會を見ることが出來る。即ち『超人』が出現して、一切の道德を蹂躪せねばならぬ、と言ふのが、其の大體の所說である。高山等の主張は、此のニイチエ主義を踏襲したもので、實に個人的自覺の時代を代表するものである。要するに空漠たる世界主義、歐化主義が、稍や固つて國家主義となり、更に固つて個人主義と成つた見るべきであらう。而して是れ獨り日本に於ける思潮のみならず、歐米諸

國に於ける一大潮流てあつた。

此くの如き思想の生じたのは、決して偶然でない。而して其の最大原因は、社會に於ける證典の失せたとてある。更に其の證典の光明を消したものは、科學的知識てある。科學的知識の增進すると共に、從來不動の眞理として知られた物も悉く妄說として排斥された。宗敎上の理想の如きも、皆な一の空想、根據なき臆說として擯斥された。道德法に於けるも亦斯くの如く、遂には各人の憑據すべき場所がなくなつた。これ即ち一の苦悶てあつて、其の苦悶の聲は、當時の文學界に現れてゐる。去れど尙ほ最後の隱れ家はある。吾人は此の地盤に立つて、而して人生を渡るとが出來る。其は他に非ず、自我其の物てある。

自我は德川時代に於いて、非常の壓迫を蒙つてゐたが、維新の改革に因りて、其の一部は解かれた。併し未だ自由の天地に優遊すると出來なかつた。西洋崇拜といひ、或は國粹保存と云ひ、或は日本主義と言ひ、これ皆な一たび自由を得たる自我を、再び拘束せむとするに外ならぬものだ。自我は其の束縛に服從した。然れども時を經ると共に、其の不條理なるを悟ると共に、社會の進步其のものは、自我の自由活動に起因するとを悟つたのてある。こは日本新文明に於いて記憶すべき時期てある。

此の思潮を助けたものは、海外文藝の輸入てある。交通の便が開くると共に、海外の新思想は、陸續と紹介された。當時に於ける歐洲思想界は、既に文明に對して疑惑を挾んてゐたので、其の風潮は、書籍と共に輸入された。從來文明とさへ稱すれば、一點の間然すべき所無いやうに思想してゐたのてあるが、其の文明を批評し、解剖し、分析せむとする風潮は第十九世紀の末代に起つた。日本も、日淸戰役前後に至るまては、文明開化といふとに就いて、何等の疑惑をも懷かなかつたのてあるが、其の後に至り、泰西と步調を均うするに至つて、漸く文明批評の態度を取つたのてある。而して其の劈頭には、個人主義、自我發展主義、超人主義などいふニイチエ的の思想が勢力を占有した。

此のニイチエ主義の蓋慣、習俗的道德、舊思想の破壞は、政治上或は社會上に、大なる影響を及ぼして居らぬが、文藝上には絕大の影響を及ぼしたのてある。文藝は其の內容と外形と共に、舊法則に從ふの必要はない、全然個人の自由に一任して宜しい、また斯くあらねば、淸新なる文藝の生起する所以はないと言ふ思想は、實にニイチエの個人發展的哲學に本づいたので、今日の所謂自然主義は其の一產物てある。

第二節　日露戰役

國民思想が、漸く靜定して、自覺的となつて後、幾許もなく、個人主義的思想が發生した。或る方面から觀察すれば、之れ極めて危險なる思想の如く思惟せらるゝが、實は決して恐るべきものでない。こは國民的自覺心に伴うて、必ず生起せねばならぬものてある。復た其の個人的觀念の强烈なるのが、國家的思想を鞏固ならしむる本てある。吾人は前章に於いて世界主義は即ち國家主義てあるとを說いたが、其の理は茲に移して亦聊かの不都合を見ぬと思ふ。國民の繁榮を目的とするには、必ず個人天賦の才能を發展しなければならぬではないか。人間は機械の如きものでないから、一定の方針に從つて活動すると出來ぬ。若し國民全體が、或る一種の型に嵌つて行動するやうならば、迚も國家の隆運を視ると出來ぬのてある。個人が其の天賦の才能を發揮してこそ始めて國家が赫々たる光彩を放つので、これ個人及び國家の兩方にとりて利益あるとてある。若しも國民を一定の型に容れむとすれば、再び德川時代の如き不活潑の社會を看るであらう。

吾が國民には獨得の長所あり、と言ふ思想は、日淸戰役時代に於いて自覺されたのてあるが、如何にせむ其の活動は、なほ東洋の天地內てあつた。殊に三國の干涉のために、自國の主張を曲げねばならぬ樣の狀態に陷つた。されば國民一般は、縱令自國の能力を知りながらも、未だ歐米諸國に比して如何樣の位置を占め得べきやに就いては、明確なる解答を與ふると出來なかつた。然るに其の解答——而も世界の文明國に比して何等の遜色もなしといふ解答は、日露戰役に於ける陸海軍の大捷に由りて確實に立てられたのてある。

日露戰役は吾が帝國の軍事上に、世界第一等國の列に入るべき一大試金石てあつた訣りてなく、吾が國民の心力が、決して歐米の白晳人種に劣つて居らぬ、否、寧ろ特別の能力を有してゐるとを證明したものてある。是れより先き、歐化主義の全盛を極むるや、白晳人種崇拜の弊を生じたのてあるが、其は日淸戰役に由りて、幾分か撲滅された。併し尙ほ其の餘勢を保つて居たが、日露戰役に由りて、殆ど根柢より打破せらるゝに至つた。是に於いてか、人種競爭といふ觀念は、各人の意識に明白となつた。

從來世界主義者の眼中には、歐米本位の文明があつたばかりて、日本文明、東洋文明は、度外視された傾があつた。然るに日露戰役の勝利に由りて、自國が世界の一大强國てあると言ふ思想が確實になつたと同時に、世界なるものは、東西兩半球を綜合した名稱てある、世界文明とは、孰れの國民の所有てもなく、國家民族人種を超越した文明のとて、其の進步には、何れの國民も容喙するの權利がある、否二十世紀の舞臺には、日本民族が、進んて其の文明を一進せしめねばな

らぬと言ふ思想が湧いて來た。從來世界といふ文字の下に集る者は、アールヤ族のみの如く思惟し、東洋の黄色民族は、其處に參加するの權利なしと諦めてゐたのは事實である。かの各種の萬國會議に、日本臣民が堂々として參加するだけの資格がなかつたのは、此畏縮的、白人崇拜的思想を證明するものであらう。然るに日露戰役によりて、其の思想は根柢より壞れて消滅し、吾が日本帝國臣民は、アールヤ族以外の一大人種を代表して、世界を作るものであると言ふ思想が明確に掲げられたのみならず、事實に於いて證明が出來た。實に日露戰役なるものは、世界的文明に參與すべき大資格の有ることを證明した計りでなく、國民全般に大國民、第一等國民と言ふ觀念を、確實に抱懷せしめたのである。是に於いてか、世界的文明に對しては、從來受動的であつたのが、一轉して能動的態度と成つて來た。これ實に今日の狀態である。

戰役は此の自覺を鞏固ならしめたのみで無く、思想界の發達を、多様ならしめたのである。こは强ち戰役の効のみと言ふと出來ぬが、兎に角、歐米諸國との交通を頻繁ならしめたのは事實であると共に、外國の思想が、一時に輸入された形跡は、蔽ふべからざるものである。從來とても外國の書物が輸入せられなかつたのでは無いが、近代文明に關する書籍の如きは、一部の篤志家が、特に注文して取り寄せた位のものであつた。然るに戰役の結果、諸般の事業が勃興すると共に彼我の交通は日に月に頻繁となり、新刊物の輸入の如きは、驚くべきほど盛となつた。而して其れ等の新刊書は幾多の新思想を涵養した。

第十九世紀に於ける新思想は、從來輸入されては居たが、其の新思想を起した書籍なる者は、殆ど輸入されなかつたと言ふも宜しい位てある。要するに燒き直し、孫引き的に報道されたのみてあつたが、戰役前後の時代には、直接に彼の名著迹に接することが出來たのてある。イブセン、ニイチエ、トルストイ、ストリンドベルヒ、メーテルリンク、ゴルキー、チエホーフ、アンドレーフ等の作物は、外國批評家の說を待たず、直接に味ふことが出來るやうになり、從つて文運の進歩は益す泰西と步調を一にするに至つたのてある。實に日露戰役は世界に日本を紹介すると共に、世界最新の思想を內國に傳達する好機會てあつた。

第三節　最近の思想界

吾人は本章の表題を、世紀末的と稱した。實に世紀末てある。今日の思想界は、實に群雄割據と稱すべきもので、其の何れが大勢力てあるかは、遽かに判斷することが出來ぬ。世紀末なる文字は、佛國人が製造したものてあるさうだが、其は

第十九世紀末代の混沌紛亂せる思想界を蔽ふには、最も適當なる語てあらう。但し世紀末なる意義に關しては、幾種の解釋もあるが、茲には混亂時代の思想界を綜合した名稱とする。原語に就いて、或人は厭世的色調を加へ、或る論者は樂觀的意味を附加してゐるが、兎に角、證與を離れて、個々人が、自己の欲する方面に馳らむとする思想を指したるものと思へば大差あるまい。

偖て此の混亂時代に於ける重なる思潮を擧げて見れば、先づ第一に掲ぐべきは自然主義的思想てある。こはルーソー一派の唱導するものとは全く其の意を異にしてゐるものだ。其の濫觴は、個人主義に在つて、懷疑と無解決とを標榜する。如何なる理想に對しても、決して信賴する所なく、たゞ現實に重を置かむとする思想てある。一切の理想、宗教、道德則等を信ぜず、また抽象的理論を尙ばず、たゞ現實の重んずべきを主張する。從來の思想は、現實以外の或事物に屈服し、其の或る物に由りて現實を說明せむと試みたのてあるが、此の思潮に依れば、個々の現實以外、個々人の自我以外に何等の事物をも認むることが出來ぬ。そは小說の方面に於いて最も好く表れてゐるから、其の項に再記するてあらうが、これを實際生活の上に應用して見ると、世界主義もない、世界的文明もない、たゞ日本と言ふ現實を認むるのみ、たゞ我れと言ふ現實を認むるのみてある。我れ自身が世界てある、我が帝國其の物が世界てある。從來の論者が、國家といふ現實以外に、世界的文明を假定した如きは、此の思想の取らぬ所てある。其の眼中には、世界もない、國家もない、たゞ自己の棲住する土地其の物が天下てある、其れが不動の現實てあつて人生は其處に立脚すれば宜しいと言ふとに歸着する。故に宗教も、世界的文明論者も皆な其の排斥する所てある。去れど此の思想は、皇室國家を本位とするものと衝突せぬ。何故なれば皇室と國家とは、現實てあるからだ。或る一部の論者は此の思想を最も危險なる如く思想するが、現實を承認する思想ほど、安全なるものは他に有るまいと思ふ。歐化主義者、博愛主義徒、基督敎徒、佛敎徒などは、皆な現實を顧みぬ人々てある。日本主義徒に至りても、彼我の長短といふ以上は我が國家に對して、不滿足の感を有し、理想的狀態を豫想して居たのてある。然るに此の思想は、理想を排斥して、現實のまいを承認して、善惡の判定を下さぬ。現實ならば現實を認定せよといふだけてある。之れが何等危險の分子を含有して居らぬとは明白ては有るまいか。

* * * * *

今日の思想界に於いて、前記の者以外に一勢力を有するは

社會主義である。而して其の主張は文藝の上にも現れて、一部の讀者を有してゐる。

蓋し實業界の勃興すると共に、貧富の懸隔が甚しくなるのは自然の勢である。また階級制度の世の中に在りては、長者が貧者を保護するに、多くの困難はないが、自由競爭の世の中となりては、其の方法は極めて困難であるが故に、貧民の立場は愈よ薄くなる。從つて一部の間には佛國の自由平等的思想の系統に屬する社會主義を唱導する者が生ずる。

我が政府は甚しく此の主義の勃興を怖れてゐるが、實際根柢ある社會主義は今日之れを認むるとは出來ぬ。唯一時の感情に驅られた言論のみで、國家の災となるやうのものは、未だ曾つて認めない。思ふに我が帝國今日の狀態は、根柢ある實勢力ある程の社會主義を喚起するほど、背理、無法の事を爲しつゝあるのではあるまい。社會主義徒の如きは、公憤よりも、寧ろ私憤を漏らしつゝある者であらう。

第六章　哲學界の趨勢

吾人は此の編を終るに當つて、哲學界の大勢を略述して置かうと思ふ。

哲學的思想の中心は、帝國大學であつた。此の講堂に於ける學風の變遷を見れば、一般の形勢は推知される。先づ第一に學界を風靡したものは、英米の哲學、殊にダーキンの進化說を基礎としたスペンサー哲學であつた。明治九年に歸朝した外山正一は其の代表者て、外國教師には、モールス、フエノロサ等が之れを祖述した。當時の哲學界は、實にスペンサー、ハックスレーなどの全盛時代て、倫理の方面には、ベンサム、ミルなどの功利說が、無上の眞理として傳へられたのてあつた。併し此の時代に佛國派の學者が、佛國哲學思想を傳へたことを忘れてはならぬ。中江篤介譯の『理學沿革史』『維氏美學』等は、哲學的思索には貢獻する所多かつた。

獨逸風の學說は、明治十三年クーバーが帝國大學に來てから發芽してゐる。氏はカントの批判哲學を講じた。シュエグレルの哲學史、ボーエンの近世哲學などが教科書に用ひられたのは、此の頃以後てある。またフエノロサも、此の頃よりヘーゲル哲學に感化されて、大に之れを講述した。蓋し當時の米國其のものが獨逸哲學に傾いて居たから、米人たる彼れも之れに接近したのてあらう。

明治十九年ノックスが備はれ、次いてブッセイが來た。此の兩人は共に獨逸ロッツエの哲學を祖述した。次て明治二十三年頃に至つては、井上哲次郎が新歸朝者として、ヴント、クーノー・フキッシャーなどを傳へた。更に明治二十七年今のケーベルが講座に立つに至つて、ショーペンハウエル、ハルトマンの歷世的哲學が流行した。而も其の影響は、前代の諸家が說いた所よりも廣く影響したのてある。當時の思想界に流れてゐた主情派的傾向は、此の歷世的哲學と結び附いて多くの青年を感化した。其の後に至りては、新カント派と稱せらるゝ英のグリーン、獨のバウルゼン等が研究された。これは自我實現の哲學てあつて、今尙ほ勢力がある。

東京の帝國大學以外に、哲學を教授する學校ては、明治三十九年に創立された京都大學の文科をはじめ、早稻田大學、慶應義塾、東洋大學等がある。早稻田には、專門學校と稱した時代に、大西操山が、穩健なる哲學思想、殊に新カント派の思潮を傳へてゐた。東洋大學は、哲學館の變身て、明治二十年九月の創立。設立者は井上圓了てある。其の目的は、東洋哲學の研究に在る。これ國粹保存思想の勃興した氣運に乘じたもので、此の頃より東洋思想の研究は大に盛になつた。復た眞宗本派佛教大學、眞宗東派眞宗大學、宗教大學、曹洞宗大學等は皆な佛教哲學の外に一般哲學を教へ、基督教の諸學校も亦此の方面の教育を施してゐる。

心理學の方面ては、ヘヴンよりサレーに轉じ、次てヴントへフチング、ゼームス等が採用されてゐる。美學の方面てはフエノロサのヘーグル哲學より、ハルトマンに轉じ、傍らボサンクエー、サンタヤナ、マーシヤル等が行はれた。倫理學の方面は既記の如く、新カント派が今日勢力を占めてゐる、其の傍には丁酉倫理會が常に實際問題を研究しつゝあり、西村茂樹の弘道會（明治九年創立）は儒學を本位として東洋固有の倫理見を傳へてゐる。

更に社會に勢力あつたものを擧れば、日清戰役前後に於けるカーライル、エマーソン、日露戰役前後に於けるニイチエの哲學てある。殊に前二者に至りては、哲學專攻者以外の人に哲學的思想を涵養した功は多大てあつた。尙ほ最近には『プラグマチズム』が研究されつゝある。

* * * * * * *

以上簡略ながら、思想界の變遷を述べ終つたから、次編よりは、文藝の發展を記述しやう。固より文藝は國民の思想と密接の關係あるものてあるから、各方面を隔離して觀ずるとは出來ぬ。吾人は唯便宜上、各部面を區別したいけて、其れ等の相互の關係、殊に各が一般思想界と如何なる關係を保つかに就いては特に注意するてあらう。讀者も亦其の意を以つて通讀せられむとを切望する。さらば此の急轉せる思想界を土臺とせる小說の發展は如何てあつたか。

第三編　小說及び評論壇

はしがき

茲に小說及び評論と題した內、小說に關しては、特に說明を要せぬが、評論に就いては、一言して置かねばならぬ。評論とは題するものゝ、其の意義は小說以外の散文學、例へば文藝評論、史論、隨筆物等、すべて文藝に緣故のある文學一切を網羅した意である。要するに後編に於ける新體詩及び和歌俳句、即ち詩に對する散文學の變遷が、此の編の主題である。

偖て明治の散文學の變遷を概觀するに、思想界の變動と步調を一にして居る。されば其の大體を區別すれば、初年より明治十八九年頃までが第一期で、此の間は殆ど眞正の文學的活動、即ち明治的と稱すべき程の文藝が起らなかつた時代である。而して此の期の終に於いて、坪內逍遙が『小說神髓』を著はし、こゝに文學的時勢が一變して第二期を作るのである。

此の第二期が硯友社一派の盛に活動した時代で、日淸戰役時代に至つて、更に一變遷を來たし、こゝに第三期が生ずる。此の第三期は、寫實主義が種々の趣を呈した時代であつて、其れが日露戰役前後に至つて、また一變し、第四期即ち最近の自然派文學の勃興となつた。

獨り小說のみならず、其の他の散文學も、略ぼ同樣の變遷をなして居るから、吾人は大體此の區別を立てゝ記述しやう。併しこは唯便宜上の區別であるから、第一期の中に、第二期に入るべき事柄を記し、或は第三期に第二期に屬すべき事項を含むことが生ずる。事物の變遷は年月の如く整然たるものでないから、此の點は讀者も豫め承知せられむことを望む。

* * *

第一章　初期の文藝

第一節　先代の殘黨文學

維新前後の紛亂は、社會の人心を、實際的方面にのみ向けたから、文學などは殆ど度外視された。併し漸く形勢が治まると共に、文學も亦稍顧みらるゝに至り、是に於より種々の文

學が發芽した。其れ等が果して如何なる花を開き、如何なる果を結ぶべきかは、殆ど不明で、唯彼方此方に、種々の端緖が開かれたのである。而して其れ等の混雜せる文藝界より、先づ第一に系統を立てゝ見るべきは、先時代即ち德川文學の殘黨の手に成つた文藝である。

德川文學の殘黨と稱すべきは、假名垣魯文、鶴亭秀賀、柳水亭種淸、山々亭有人、笠亭仙果、梅亭金鷲などである。而して明治當初に於ける遺物的出版物には、白縫物語、八犬傳犬の草子、釋迦八相倭文庫、北雪美談加賀寶山、雜談雨夜賀文庫、室町源氏胡蝶卷、新編九尾傳、蟲類大議論、諸藝畑水棟、近世阿幾禮幕、俊傑神稻水滸傳等で、多くは德川時代からの續き物で、作者は三世種彥、萬亭應賀、二世春水等である。

偖て此れ等の殘黨中、一頭地を拔いてゐる者は、假名垣魯文である。彼れは脚本界に於ける古河默阿彌と相對して、舊時代の殿將と稱すべき作者である。彼れは決して非凡の才能を有する人でもない、また學殖ある作家でもないが、奇才に富んでゐて、德川時代に發達した小說の脈は、彼れに於いて綜合されてゐると謂ふも不可ない位である。裏面より言へば其の才氣に任せて、馬琴一流の眞似もやれば、三馬一九の模做もする、と言ふ風で、實に前時代の流れを一身に纏め、且つ其の作風を以つて、當時の社會を描寫し、且つ諷刺した。其の作で『政談靑砥石』『滑稽富士詣』等は、德川期に屬し、『西洋膝栗毛』『安愚樂鍋』『胡瓜圖解』の三篇は、明治に入りてからの作である。此の三篇は決して名作と稱すべき程のものでなく、其の滑稽も諷刺も皮相であり、淺薄であるが、而も尙ほ當時の形勢を傳へ、社會事情の混雜紛々たるさま、新舊思想或は、風俗やらの衝突矛盾を、描いてあるから、時代の產物として一顧に値するものだ。

『西洋膝栗毛』は言ふ迄もなく一九に倣うて、彌次郎兵衛北八の二人が、橫濱の豪商大腹屋に伴はれて、英國倫敦に赴くといふ筋にて、途中種々の滑稽を演ぜしむるもの。例へば兩人が異面目になりて、西洋はえらい、子供迄が英語をしやべる、などいふ如く、一九、三馬等の趣向を燒き直した滑稽本にて、其の主旨は、序文に見ゆるが如く、

『方今開化一時に進み、余輩僥倖に學ばざる子曰の迂遠を去り經驗窮理の洋風に傾き市街の兒童等に至るまで非子坊主の支那頭を殘斃の歐羅巴流に一變し孔子の遺書はベケにして英李佛の橫文エビシ四百餘州は何のその萬國世界五大洲天地の理を知る開端に至るはめてたき御世に新玉の春を保ち得たる心地になん而して廢藩置知事の公達子も無僕獨步に世間を見知り豐の扶持は飛鳥川水に

流して商法開業父母在せども遠く遊び艦砲一發三千里旦に道を聽くとも夕に死するを可なりとせず牛肉を食しビイルを飲み體を壯健にして壽を保ち利を得て國を富ますを以て今日の報恩とす。

此の如き諷刺にある。其の『胡瓜圖解』は福澤諭吉の『窮理圖解』をもぢりて、天理人道を茶かしたもの、『安愚樂鍋』は、當時の文明崇拜黨が牛肉屋の鍋を圍んで、滔々時勢を議論する樣を模寫したるもの。此れ等の諷刺諧謔は、概ね皮相淺薄であるが、そは當時の西洋崇拜、文明開化熱其の物が淺薄輕浮であつたのを證明すると同時に、當代の風俗を窺ふ上には好良なる參考書である。

德川時代の殘黨は、明治時代を材料として『新文鬼談』『日本女教師』『異作異物各覽會』等の作を出してゐるが、孰れも愚劣のもので、魯文に及ばざること遠い。その魯文とても、徒らに前時代の糟粕を嘗めてゐたが、唯才氣頓智のあつた爲に殿將として、舊文學最後の一幕を賑はしたのである。彼れ自身は、あつぱれ文明人と思惟したのであらうが、實は舊時代の系統を引いてゐたので、新文藝の勃興には、殆ど參與すべき資格を有して居らなかつた。

當時の出版界には、新聞紙が長足の發展をなした。而して其の新聞紙なるものが、戲作者の趣向を掲ぐる舞臺となつたので、所謂續き物と稱せらるゝ草双紙流の小說が流行した。魯文、三世種彥（高畠藍泉）二世春水（染崎延房）梅亭金鵞、山々亭有人（條野傳平）、古川魁蕾、伊東專藏、須藤南翠等は皆な當時の新聞小說家であつた。併し其れ等の作物には、何等淸新の趣なく、唯草双紙の代りに、活字で組んだものが出來上つたに外ならぬ。『東京日々』『橫濱每日』『郵便報知』『東京繪入』『曙』『讀賣』等は其の舞臺である。彼れ等の事業は、實に平凡のものであつたが、而も新聞と言ふ機關を利用したから、一般社會に文學的嗜好、――そは縱令幼稚なるものにせよ――を涵養した功は認定せねばならぬ。

第二節　硬派散文學

小說以外の散文學、即ち主として評論隨筆物は、前者に比して大に活動してゐる。福澤諭吉及び中村正直は、思想の開拓のために、前者は平明通俗の文を草し、後者は謹嚴なる文章を草し、兩々相對して異彩を放つてゐる。

福澤中村の兩大家は、むしろ教育家として活動してゐたから、文筆を專門として居らぬ。而して當時、文筆を以つて世に立ち、且つ非常の勢力を有して居た者は、福地源一郎、成島柳北、矢野文雄、藤田鳴鶴、田口鼎軒、島田沼南、肥塚龍尾崎學堂、犬養木堂、末松謙澄、朝比奈知泉等の硬派新聞記者である。

『東京日々新聞』の吾曹先生即ち福地櫻痴と『朝野新聞』の成島柳北とは實に好一對の才子である。福地は西洋本位の平民主義で、成島は日本本位の通人肌、共に奇智頓才に任せて縱橫に議論し諷刺し、嘲笑し、罵倒し、所謂新聞記者流の本色を發揮した。福地が、

『サア變つた、日本の時勢が變つた、最早日本の平民たる我輩が是迄の如く閉口低頭して居るのが日本人の勤めて御座らぬぞ、古語に天下は天下の天下にして一人の天下にあらずと昔より唐の學者は申されたり』

と書いたのは明治八年のことで、中々危險の思想を含んで居るが、其の面目は躍如たるものだ。彼れの文章は、此くの如く洒脫のものばかりでなく、後年の『幕府衰亡論』の如きは、極めて眞面目な書き方であるが、其の特色は、寧ろ圓轉洒脫、凝帶する所なく、滑稽諧謔續發する點に在る。

柳北の文に至つては、漢文より脫化したもので、櫻痴の如く、自由自在でなく、また輕妙の趣にも乏しいが、鹿爪らしき內に俗語諷刺滑稽を混和した點が異彩を放つて居る。福地の文章は多才の書生が、花柳社會に洒落てゐるやうで、柳北のは五つ紋の羽織を著た通人が、料理屋で時世を嗤つてゐるやうの趣がある。柳北の『花月新誌』（十年創刊）は實に彼れの長所を最も好く發揮したもので、當時之れに倣ふ者は、到る所に多かつた。彼れの作は文藝倶樂部第三卷第九編として『柳北全集』の名の下に發刊されてあるが、其一例として、漁夫辭をもじつた『藝妓辭』を掲げやう。こは彼れが獨特の長所を發揮して居らぬが、而も其の機智に富みたると、當時の社會の事情とを覗ふことが出來る。

先生既に騙されて柳橋に遊ぶ、船宿に流連し、顏色憔悴形容枯槁せり、藝妓見て之に問て曰く、子は等外の役人に非ずや、何が故に玆に至る、先生曰く世擧て皆遊べり我れ獨り堅し、衆人皆奢れり我れ獨り吝なり、是を以て嫌るる、藝妓曰く、通人は物に凝り固まらず、能く世と推し移る、官長遊はゞ何ぞ其の髭を撫でゝ其尻を掀げざる同役皆な奢らば何ぞ其酒を掠めて其肴を荒らさざる、何の故に遠慮會釋して自ら嫌はるゝに至るや、先生曰く我れ之を聞く、新たに賣り出す者は必ず客を禪く、新たに弘めを爲す者は必ず男を振ると、安んぞ能く妓の侃々するを以て我れの腎張りを樂むることあらん乎、寧ろ島原に赴いて地獄の掌上に弄せらるゝも、安んぞ能く少々の祿を以て太層の請托を蒙らん乎、藝妓莞爾として笑ひ、絃を鼓して騷ぐ、乃ち歌て曰はく、月給の高少なければ以て我が面を拜む可し、月給の高多ければ以て我が

尻を賣る可し、茲に去て復た言はず。

櫻痴は世と共に推し移つる才物で、柳北は寧ろ時勢以外に立つて冷笑の筆を揮ふ人である。彼れ成島の思想は、保守的であるが、而も當時には有用の材であつた。櫻痴は時代の寵兒として文筆を揮ひ、柳北は保守的思想を代表した諷刺家として社會を警醒する所あつたのである。

此の他の論客に至つては、皆な生眞面目な、餘裕のない、書生肌の人であつた。尺振八門下の田口卯吉、島田沼南の二論客、改進黨の名士たる尾崎學堂、犬養木堂等皆な當時の評論壇を賑はした人である。田口鼎軒が其の經濟論を論ずるに當つて、文學的趣味に富んだ材料を利用する、島田沼南が論理明白、秩序整然たる論文を草する、學堂の熱情に富める、木堂の豪傑的氣象に富める、實に當時の異彩であつたが、其の多くは文學と緣遠い政治方面を主題としてゐるから、紙數尠き本誌には其の例を掲げて詳述する餘地がない。

また此の時代に在つて、佛蘭西學統に屬する中江兆民は、儁潔銳利なる筆鋒を以て、時事を縱橫に論評してゐる。其の著『三醉人』『經綸問答』等は、當時の政海を動かしたもので、殊にルーソーの民約論の反譯は、自由平等思想を普及するに非常の功績があつた。また佛人フイエー原著『理學沿革史』『維氏美學』の二譯書は、直接に文壇を裨益すると多かつた。後者は、ウエロンの著を譯したもので、明治十六年の出版である。西周が曾て美妙學なる名の下に、美の研究を紹介したとあるが、美學らしい書は、恐らく兆民の譯を以つて最初と見做すべきであらう。また其の譯字の適當なる。今日なほ使用すべきものがある。兆民の一生は變化多端であるが、其の最後の作「一年有半」が非常に歡迎せられたのを見ても推知し得る如く、矢張り文筆の人、批評の人、議論の人で、實際社會に立つて實務に當る材では無つた。彼れにして其の實際社會に於ける野心を斷ち、專ら文筆を以つて、文明を批評したならば、散文學史上に一時代を劃したであらうと思はる。左の文の如きは、彼れの熱情と筆致とを覗ふに足る。

更に一歩を進めて政治家たる者の眞の目的を論ずれば、此の如きとにては足らず必ず議員たる義務を盡すの心得無くては叶ふまじ。議員の價値は議員其人々が各々其價値を發するにあれば、候補者たらむ者は唯首尾能く選出されたる丈にて、安堵する譯に行かずして、必ず議員たるの義務を盡さゞる可らず、然るに此れ等の義務に就て、一定の見込なく、何の覺悟なく、未だ筆墨を點ぜざる白紙の如き腦髓を所持して、得々然と議會に乘込む者あるに於いては是れ其人は名譽の盜賊なり。萬一にも此の如き人物が議會中に多數を見るに至らば、國會は是れ半文

錢の價値なき者と謂ふべし、若し此の如き人物にして、自ら其無識を蔽ひ、其無經驗を匿くし、拙を藏め、愚を守りて敢て唇舌を弄せざればまだしも殊勝なるべきも、若し反之强て意味なき辯論を試みて自ら皮肉ある嘲吧を任じて徒らに議會の空氣を波動するが如きとあらば國會はこれ名譽の競爭場より一變して恥辱の陳列場とならむのみ。

更に西南戰役以後より明治二十年頃までに至る間の論客には、前記の外に小野梓、馬場辰猪、小松原英太郎、原敬、末廣鐵腸、關新吾、古澤滋、箕浦勝人の諸氏がゐる。

當時は政治上、社會上の問題が多數であつた。實際的問題が、犇々と身邊に迫つてゐた時代であるから、論客も文藝の方面までは眼を轉ずるよ出來ず、專ら目前の時事問題を論評してゐた。故に其の事業は、直接に文藝を裨益したと謂いのであるが、而も達意の文の例を開き、從來の和文漢文調を一掃したのは、其の功に歸せねばならぬ。外國風の自由暢達なる文章は、此れ等の諸氏が、或は雜誌に、或は新聞に、撓まず倦まず掲載した爲に、大に進歩した。之れと同時に、演說文學の發達も、此れ等諸氏、就中馬場辰猪、小野梓、高梨哲四郎、島田三郎、益田克德等が努力の功に歸せねばならぬ。

演說文學とは奇妙の名稱であるが、矢張り一種の文學であつて、社會の動搖する時代には、副產物として發達するものだ。佛國大革命時代に於ける佛蘭西、英吉利の如きは其の好例であつて、我が維新後も自由思想の勃興すると共に、此の種の文學が長足の進歩をした。實に演說文學たるものは、明治の特產物で、舊幕時代には其の例を覓むることが出來ぬ。

硬派の散文學を記するに當つて、吾人の忘るべからざるは史的研究の起つたとてある。當時は外國思想が盛に輸入された時代で、史學の方面では、ギゾーの文明史論が先づ第一に紹介され、次て十年頃からは、バックルが讀まれた。其の影響として日本文明の研究を試むる者漸く多く、代表的史論としては、藤田鳴鶴の『文明東漸史』(十七年)及び島田沼南の『開國始末』(二十一年)の二書がある。前者は渡邊華山、高野長英等の傳記を中心として、泰西文明の輸入された史蹟を論評したもの(四十年本誌增刊『明治名著集』參照)後者は、井伊直弼を中心として、西洋文明の迎入れられた顚末を論述したものてある。

『……開國の氣運に達せし所以なり、其未だ此氣運に達せざるの途にあるや、二三先見の士、其兆を察して開國の說を立つるあれば、天下擧りて之を非責し、此に一場の紛爭を開くに至れり、此時機に處し、政論相異るの故を以つて名士の禍に罹れるは固より時運の不幸にして個

人の尤むべきにあらざるなり。然りと雖も此間國に忠する心を懐きて身を殺し世を益したる者に至りては、其心事を明にし、其情實を詳にして之れを後代に告げざるべからず、豈當時爭議の間に發したるの偏情によりて其功を沒し、其冤を不雪に終らしむるに忍びんや。』

これ彼れが此の文明史論を編述した動機である。而して兩書共に材料に不足がある。こは當時に在りては已むを得ぬとてあるが、而も其の僅小たる材料を基礎として、見當違ひなき判斷を下したのは多とすべきであらう。殊に歷史と言へば、大日本史か、皇朝史略、さもなくば讀史餘論などの外に、何物をも知らなかつた社會に、文明史的讀物を與へて、讀史的眼力を養成したのは此の二書と謂ふべきである。

更に附加すべきは、此の時代に、魯文一派の作風に對して寶錄物を作つた作家のあることだ。松村春輔は維新當時の社會を材料として盛に英雄的物語を草し、明治八九年頃には、井伊大老暗殺事件、彰義隊戰爭、會津籠城等を材料とした歷史物が著はされた。固より揭出すべき程の特色はないが、兎に角人間らしき人物を描いてゐる。こは馬琴一流の傳奇小說作家が、極端なる性格を表はしたよりも一步を進めたものと見做さねばならぬ。

諷刺文學に在りては、柳北の外に、服部誠一の『東京新誌』『東京新繁昌記』(孰れも七年乃至九年頃發行)野村文太の『開々珍聞』等があつて、輕妙なる諷刺を逞べてゐる。併し其の意義は、魯文などゝ均しく極めて淺薄て、只當時の滑稽なる西洋崇拜熱を歷史的に研究する場合の參考になるのみてある。蓋し斯くの如き一時性的、際物的諷刺文學は、演說文學と等しく改革とか革命とかの起つた時代に必ず生起して、一部の間に勢力を有するに至るのであらう。從た社會風敎の爲にも其の必要があるのであらう。

第三節　飜譯及び政治小說

明治文學、殊に小說の方面に於ける濫觴は、反譯小說と政治小說とに在るとは、誰人も首肯する點てある。

此の兩種文學の生起したのは、根柢を一にしてゐる。當時の人心を支配したものは、政治熱てあつた。親兄弟の脛を嚙り、下宿屋の二階から、親讓りの羽織を屑屋に賣つたりするやうの靑書生の分際でありながら、常に天下を掌握して、其の經營に當るやうの氣位てゐた。『西鄕隆盛はもと書生』といふ量見て、今にも國務大臣として活動するやうの想像を逞うしてゐた。況や既に政界に身を投じたものに於いては、政治を談ずるの外に、何等の嗜好を有して居られぬ。若し之れありとすれば、狹斜の巷に快樂を貪る位のものであつた。併し其

の志氣は中々に旺盛であつた。加之、一方からは泰西の文明が滔々として流れ來る、佛國の自由平等思想は輸入される、英國の政界事情は傳へらるゝと言ふ風であつたから、中々安閑として居ることが出來ぬ。去りとて西南戰役前後には、既に社會の大勢が定つて居るから、改革時代に於けるが如く一躍して名譽の地位に上ることは出來ぬ。たとひ出來得たとした所が容易の事てない。板垣、山縣、大隈、伊藤などの急速なる立身出世は改革時代に於いてこそ望み得るが、既に秩序の恢復された時代には、容易の事てない。一方には政治熱の度が四十度以上に及んでゐる、他方には活動すべき場所は充分に無いと言ふのであるから、多數の後進、靑年輩は、單に政治的想像を逞うして居るのみであつた。

此の政治的相像を悅ばしたものは、外國、殊に英吉利の政治小說、或はロマンチック小說てあつた。當時社會に出てゝ活動しつゝあり、或はまた活動せむとする者は、概ね英語を勉強しつゝあつたから、先づ英國小說に接し、而も其の政治的思想と傳奇的嗜好から、リットン、デスレリー式はスコット等の作物を愛讀し、且つ之れを反譯するに至つた。小說と言へば、德川時代の戲作物のみと思うてゐた者が、一たび此れ等の作に接するや、其の規模の巧妙、結構の複雜、思想の豐富なるに驚いたのは無理ならぬとてある。

飜譯文學としては、明治六年に公にされた『通俗伊蘇普物語』(渡邊溫)が組てあらうが、そは文學上の目的よりは、寧ろ啓蒙敎訓の意を以つて譯されたものだ。而して外國小說として反譯されたものは、織田純一郎の『花柳春話』(リットン原著アーネスト、マルトラバース)を嚆矢とする。こは明治十二年の出版て、文章は當時の新聞に流行した漢文直譯體てあるから、今日より看れば、甚だ拙てあるが、兎に角外國小說の如何なる物たるかを傳ふるには非常の功があつた。殊に西洋崇拜思想にかぶれた社會は、清新なる小說を望んて居たから、本書は大歡迎を受けたのてある。

『花柳春話』一たび清新の趣を傳へて後、續々外國小說の飜譯が出版された。リットンの作ては『繫思談』(藤田鳴鶴)『慨世志士傳』(坪內雄藏)デスレリーの作ては『春鶯囀』(關直彥)などが盛に愛讀され、其の他、牛山鶴堂の『梅蕾餘薰』、尾崎學堂の『經世偉勳』、スコットの『春窓綺話』など、或は『二十世紀』(服部誠一)『海底旅行』『月世界旅行』『狐の裁判』(以上井上勤)などの科學的小說までが譯された。更に詩歌の方面にてはスコットの『春江奇緣』(レデー、オブ、ゼ、レークにて坪內雄藏、高田早苗、天野爲之三人の合譯なれど表向は服部誠一の名となつてゐる)坪內雄藏の『自由の太刀俠波切昧』(別名シーザル奇談にして沙翁の原作)などある。政治熱は矢

張り脚本撰擇の上にも見えてゐる。更に少しく降つては外山、矢田部、井上三人の英國詩歌の譯がある。こは第四編に述べてあるから、茲には記述せぬ。

改革の餘波たる政治的想像、傳奇的嗜好に投じたものは、實に英國文壇のスコット、リットン、ヂスレリーなどの作家て、彼れ等を紹介した者は、多く政界に縁故あり、野心ある人々であつたが、而も新文學を刺戟する力は強かつた。されば此れ等反譯の試みられた後、幾許もなく、同樣の政治的、傳奇的小說を作らむとする人が現れた。

此れ等政治的、傳奇的小說中で、最も廣く讀まれ、且つ影響の多かつたのは、柴東海散史の『佳人の奇遇』(十九年)矢野龍溪の『經國美談』て、此れ等に次いて著されたものは、末廣鐵腸の『雪中梅』『花間鶯』(以上二十年)、須藤南翠の『綠簑談』『新粧の佳人』等てある。此れ等の小說が流行したのを見ると、當時の政治熱は、西南戰役以後一變化して、飽氣を帶びたものと謂ふべきてある。此の大刺戟以前には、たゞ殺風景なる、率直なる政治熱が流行したのみてあるが、此の時代に入りては、同じく政海に狂奔するにしても、女性美的艶氣を附帶して、華美に活動せむとする氣風が生じて居るやうてある。譬へば十六七才の少年が、漸く色氣付いて、同じく男性的氣焰を吐く內にも、何となく紅粉の臭を附帶するやうになつたのである。一口に言へば、從來の少年的客氣が一轉して聲變りしたのてあらう。

此れ等政治的小說の代表と見るべく、且つ其の影響の最も廣かつたのは『佳人の奇遇』てある。この作は亡國の怨恨と將來の豫望とを述べたもので其の主人公は亡國の士て舞臺は世界てある。實際著者其の人は會津の藩士て、狹少なる範圍とは言ふものゝ同じ亡國の辛酸を嘗めた人だ。即ち自己を主人公として、世界の亡國の跡を弔らひ、悲憤慷慨するさまを描き、且つ彼れ主人公に配するに愛蘭の一貴女幽蘭女史を以つてしたものだ。今日から見れば、餘程幼稚な甘いものてあるが、而も當時の悲歌の士、或は青年間には、其のセンシュワルの點が、大いに受けられたのてある。略言すれば薩摩琵琶的の小說てある。此の一部は兎に角、當時の青年を風靡し、其の影響として、大橋乙羽の『累卵の東洋』など言ふ模倣が試みられた位てあるのみならず、今日なほ此樣の文章を草する人が居る位てあるから、歷史的意義を以つて、其の中の一節を紹介して置かう。

> 春風駘蕩、朝霞烟の如し、散士獨り輕舟に棹し、高歌放吟、蹄水の支流を溯つて、漸く籠谿の岸に近づく、一清流あり、籠谿の幽谷より出づ、兩岸の碧巖數種の櫻桃と相掩映し、水色澄潭、鮮魚の游泳するを數ふべし、散士

> 棹を枉濟に弱め、笑つて曰はく、これ眞に今世の桃源なり、恨むらくは秦を避くるの人、前朝の逸事を話する者なきを、乃ち吟じて曰く、扁舟來訪武陵春と、未だ聯を成さず、時に微風遙かに琴聲を送る、怪て耳を欹て之を聞く、其聲漸く近し、一小艇あり、上流より來る、一妃棹を繰り、一妃風琴を彈ず、繽紛たる風姿、之を望めば恰も神仙の如し、相去る數武、二妃、散士を凝視し、耳語して驚駭の色あるに似たり、散士其の何の故なるを知らず、目送すると久し、妃亦顧ること二回、舟岸を廻りて終に其之く所を知らず、徒に河水の渺漠微波の揚泪たるを觀るのみ、散士常に米人の風流雅致に乏く共に花月の韵事を談ずるの友なきを歎ず、今殘春花間に琴を撫して吟咏するの仙妃に邂逅し、頻に其高趣風韵を慕ひ、微波に托して情を寄せ、一片氷心の彼岸に達せむとを願ふのみ、因て思ふ、昔者王昭君胡地萬里の沙漠に飄零して、漢帝恢を傷ましめ、楊太眞馬嵬の露と消えて、明皇長生殿裡の舊情を夢みしも、亦以あるなりと、獨り惆悵して流に溯り、舟を動かす、百花翩々風に隨ひ飛び、黃鸝嚶々樹を繞つて囀る、水に枕して一家あり。廣壯ならずと雖も、古雅清致、塵俗を脫し、庭前の松柳其自由に任せ門に長者の車轍を見ずと雖も、人をして偉人の居たるを察せしむ、散士舟を門前の岸柳に繫ぎ、丘を越え、水を涉り、漸く籠谿に到れば、枉日春草織るが如く、菜花微風に搖動し、牧羊の綠陰に倦睡するを見るのみ、頭を廻らして遙に瞻望すれば、汽車黑烟を殘して平野を馳せ、帆檣雲の如く蹄水を往來す。

僅に一小部分の拔萃てあるが、其の如何に衒學的て、想像の貧しきかを知ることが出來るてあらう。併し今日なほ此樣の文章ならては、文章の達人に非ずと思惟する連中が、有識者と稱する間にすら彷徨するのを見れば、當時に於ける此の書が如何に多大の勢力あつたかを推察し得るてあらう。

矢野龍溪の『經國美談』は、前者に比すれば、垢ぬけた作てある。文章も、漢文直譯體てなく、大にしなやかて、前者の衒學的、修辭的に對して、通俗的、文學的てある。其の中心は希臘のエパミノンダス、ペロピダス等て、矢張り政治熱に浮かされてゐるものだ。『雪中梅』と『花間鶯』とは、同じく傳奇的政治熱の產物てあるが、寫實的てある點は、前二者に優つてゐる。

* * * *

第一期の文學界は、既記の所にて知らるゝ如く、德川時代の殘黨と、政治的野心に滿ちた人々に依りて、支配されてあつたのだ。殘黨が、微力ながらも其の筆を擇びつゝあつたの

は、大に感謝すべきとて、政治家が亦た小說方面に關係したのも忘却すべからざる恩義である。

彼れ等政治家の反譯したものは、スコット、或はリットンのロマンチック文藝であつたが、而も我が國在來の文學に比較すれば、大に寫實的であると同時に、其の結構、其の目的は、復た深奧なる傳奇主義であつた。馬琴一流の勸善懲惡主義に飽き、或は鎖國主義に飽きた人心が、此れ等の世界的傳奇小說を歡迎したのは、敢て怪しむに足らぬ。況や一方には西洋崇拜熱もあり、政治熱もあつたのみならず、彼の中世紀に於ける騎士道と、吾が國の武士道とが相一致する所あつたから、尙更に其の傳奇小說を喜び迎へたのである。

此れ等の事實を見れば、明治小說界は、政界の士によりて先づ開拓せられたと稱すべきである。譯者の大多數は、皆な政治上に野心を有し、機あらば天下を料理せむとする人々ののみである。吾人は諸氏の功を認むるに吝かならぬものであるが、而も明治文學界が、政治家の手に由りて開拓せられたと言ふを否認せむと欲する。何故なれば、彼れ等著譯者は、嚴正の意味に於ける政治家ではなく、實は史家又は小說家評論家であつたのである。

今日に於いてこそ文學は、一種の職業になつてゐる。分業の世の中であるから、こは當然のことであらう。併し往昔に在つては、特に文學といふべき職業はない、文筆に由りて生活を立つべき道はない。若し有りとすれば、其れは泰平の世の中のことだ。今日では泰平であらうが、或は不泰平であらうが、文學者として立ち、文筆を以つて、衣食の料を造るのである。こゝが社會狀態の異つてゐる所である。

往昔に在つては、世が泰平無事であれば、專門の文學者も居ると同時に、專門家以外に之れを試むる人が出て來る。思ふに左樣の人々は、却つて天性の文士であつたのであらう。去れど時勢が動亂すれば、中々文藝などに關係してゐると出來ぬ。況や、舊來の社會制度が破壞されて、一身一家の謀を廻らすべき時代に當つては、文藝などに思を及ぼす餘裕などは無い。これ實に明治初期の有樣であつた。

人心は悉く實際問題に向つてゐる。政事、軍事、經濟等の切實なる問題が、目前に迫つてゐるから、閑事業とも言ふべき文藝などを棄てゝ顧ぬは當然のことであらう。併し其の改革的變動が、一たび鎭靜した場合は如何であらうか。或る一部は實際的、物質的、政治的利地を占領するが、或る一部の人は同樣の便益を獲ることが出來ぬ。復た實際に出來なかつたのである。而もなほ其の胸中には、炎々たる政治的野心が燃えてゐる。其の野心を如何に處分すべきであらうか。是れ實に彼れ等不遇の徒に取りては、一大問題である。此の時に當つ

て、文學的才能あるものは、初めて文藝の方面に、其の活路を發見する。恐らく其の外に、適當の道はあるまい。

吾人は前記した著譯者は、不遇の人と言はぬ。されど廣い意味から見れば、矢張り政治界に、滿足の地位を占むることの出來なかつた人々であるまいか。柴東海散士の如きは、現に會津落城と言ふ苦痛を嘗めた人である。其の他の人々と雖も筆舌の上には、一世の英雄を氣取つてゐるが、社會に於ける實際の位置は、改革派即ち時勢の寵兒たる薩長藩士に比すれば劣つてゐると言はねばならぬ。去れば其の胸臆には、幾多の不平が滿ち充ちて居たに相違ない。是に於いてか、文學的才能ある人は、其の心裡を此の方面に吐露するに至つたのだ。故に吾人をして言はしむれば、政治家が小說を藉りて其の思想感情を述べたのでなくして、本來文學者たるべき人々が、偶ま政治の方面に走り、其處に滿足の境を發見せず、歸つて文學の上に所見を發表したのである。乃ち當時の政治的小說は、政治家の餘暇に成つたものでなく、寧ろ文士としての政見が綴られた者と見るが至當であらう。

更に吾人は當代に於ける基督敎徒に就いて一言せねばならぬ。前編に於いて說いた如く、此の敎理は、人心を理想的方面に向はしめたのであるが、其の結果は、直ちに顯著となつて居らぬ。固より精神上のことであるから、氣付け藥のやうな効果を見ることは出來ぬ。なほ當時は、該敎の勢力を、蒔き直してゐる時代であるから、文學上などに効果の現はるゝ筈は無い。併し、人生に對する眞面目なる研究の態度を進めつゝあつた。人心が世俗的利慾に向ひつゝある間に、超世間的思索の方面を開拓しつゝあつたことを忘却してはならぬ。

當時の耶蘇敎徒は、主として『天道溯原』を敎科書としてゐた。此の書は中村正直が訓點を施してゐる。同時にバイブルの和譯が、着々歩々を進めつゝあつた。松山高吉、高橋五郎、奧野昌綱等は與つて力ある學者で、新約全書の全部完成されたのが、明治十二年である。此のバイブル譯が一種の文體を具へてゐるもので、其れが後年の文壇に一影響を與へてゐる。單に宗敎的、思索的傾向上のみならず、譯文調の上に尠からぬ効果あるは、疑ふと出來ぬ。

第二章 純文學的活動の勃興

第一節 反省的態度

回顧すれば、第一期の文藝なるものは、德川時代の殘黨が苦しまぎれの活動を試みたのと、政治界に野心ある人々が、其の不平を鳴らし、其の政見を發表せむがために、文學の形

式を借りたに外ならぬ。

去れど他面より考案すれば、其の反譯小說、或は政治的小說なるものは、聽て文藝界の新時代を作るべき準備であつたと言ふとも出來るであらう。維新後、西洋熱が盛んで、苟しくも舊時世に處する樣式は、一概に陳腐として排斥された時代に在つては、舊文學も亦同樣の悲運に接したのは、當然であるが、去りとて其の新思想に應ずべき文藝は、何如したならば宜しいであらうか。こは當時の人々が、意識的に思索せねにしても、慥かに其の腦中の一部に蟠つてゐた問題に相違あるまい。即ち彼れ等の或る者は、新時代に適合すべき新文藝の模範を搜索しつゝあつたのである。此の時に當つて、先づ第一に軌範とせられたものは、如上の如く、英吉利の文學であつた。當時の政客の文學的事業は、強ち其の思想を發表する便宜のためとのみ謂ふと出來ぬ。即ち新時代に適應すべき好例を示さむと欲したものとも見ねばならぬ。

斯くの如く一方には、新文藝の好例が示された。此れと同時に、國民の思想も一變しつゝあつた。乃ち從來の西洋崇拜の反動として、國粹保存的思想が隆起しつゝあつた。新來の文明に浮かれてゐた社會は、漸く自己を顧るやうになつた。譬へば、若い美しい嫁を貰うて、其の當座は、やれ新婚旅行の、やれ日比谷公園の、やれ緑日見物のと、有頂天になつて遊び廻つた者が、時の經過すると共に、漸く自己の家庭や、家風を意識に浮ぶると同時に、嫁樣の容貌態度を冷靜に觀察するやうになつたのである。

西洋文明なるものは、去程に珍重すべきものか。吾が二千餘年の文明は、一顧の値だになき物か。日本民族は果して歐化され得べきものか。歐化するのが、果して健全なる進歩であるか。此れ等は當時の人々が、日に月に意識に浮べた大問題であつた。是に至つて吾れを省る風潮生じ、從つて吾が文明を研究すると、漸く隆盛となつた。而も一方からは、外國人にして、日本文化を賞讃する者が現れて來た。帝國大學のお傭教師たるフエノロサが、盛んに日本美術の長所を說き、朝野兩方面に向つて、固有美術を開却しつゝあるを誡め、自ら兆殿司の墓を尋ね、或は芳艇、雅邦等を訪うて、益す日本美術の深遠なる意義を含蓄するを說けるが如きは、其の好例であると共に、其の事業が吾が國民の反省的思索を刺戟したとは、決して些少ては無つた。

國粹保存的思想の勃興に關しては、既に前編に記述する所あつたから、茲に贅言を用ひぬ。また其の國文學に於ける現象は、第五編に一端を錄してある。而して其の政治的、或は古典的國文學に於ける反抗的思想は、同じく小說壇にも看取し得る。

かく國粹保存的思想に驅られて、吾が在來の小說を研究するも、到底滿足するとの出來ぬは、當然のとだ。既に泰西の文物に接して、智見も、想像も、感情も、舊時代と同一てない者は、いかに固有の文學なりとも、德川時代の勸善懲惡主義の小說や、或は淺薄皮相の滑稽物、或は柔弱なる人情本などに滿足すると出來なかつたのてある。況や、一方には泰西名家の小說が紹介されてある。

泰西名家の著作を、直接に通讀した者が、我が在來の小說に滿足出來ぬは當然のと。また其の飜譯は、いかに漢文くづしの拙いものてあるにしても、吾が舊小說に比すれば、別途の味を有してゐるから、讀者社會も、何等か清新のもの、新日本的の作物に接せむと欲したのてある。乃ち純外國的でもなく、去りとて舊日本的でもない小說——新日本の小說を渴仰する氣運が生じた。德富蘇峰は『新日本の青年』とか、或は『將來の日本』とか言ふ語を使用したが、其の新日本、將來の日本といふとが、當時の人心を支配したもので、其の根柢には、國民としての活動的精神が存在してゐる。

西洋熱は勿論のと、國粹保存的思想と雖も、其の皮相なるものに至つては、國家國民なるものが、眼中に無いのだ。只一時の感情に支配されて、兩極端に走せるだけだ。併し『新日本的』と言ふ思想の根柢には、世界に於ける一國民として活動せむとする精神が宿つてゐるのてある。蘇峰の著其の物は、寧ろ西洋崇拜熱に犯かされた點が、大部分を占めてゐる。而し尙ほ其の一面には、反省的態度を有してゐる。此の反省的思想——これ國粹保存思想中、最も健全なるものだ——を本として、文藝上に一新紀元を開いたものは、坪內逍遙の『小說神髓』てある。

第二節　新文藝の急先鋒

『小說神髓』は明治十九年を以つて出版され、其の理論の實例とも稱すべき『當世書生氣質』は其の前年に出版されてあるが、實は矢張り前者が考案されて後、後者が作られたのてある。逍遙は、必ず先づ其の理論を發表して後に、作例を示すを常としてゐる。『小說神髓』は、實に明治十七年に起草されたものてあつて、其の序言は、當時の文學界と、彼れの抱負とを見るに足るべきものてあるから、左に其の要點を摘記して置かう。

『……しかるに革新の變あるに際して戲作者しばらく跡を斷ちて小說したがつて衰へしが、けふこのごろにいたるに及びて、また〳〵大に復興して、物語のいづべき時とやなりけん、こゝかしこにて、さま〴〵なる稗史物語を出版して新奇を競ふとはなりけり、甚しきにいたり

ては新聞雜誌のたぐひにすら、いと陳腐しき小說をば飜案しつゝ載るもあり、勞かくの如くなるから、今我國に行はるゝ小說稗史は、其類其數幾千萬とも限をしらず汗牛充棟なんどと言はんは、なか〳〵におろかなるばかりになん、想ふに我國にて小說の行はるゝ、此明治の聖代をもつて古今未曾有といふべきなり(中略)今日は……小說といひ稗史とだにいへば、いかなる拙劣き物語にても、いかなる鄙俚げなる情史にても、飜案にても、飜譯にても飜刻にても新著にても、玉石を問はず、優劣を選ばず、みなおなじさまにもてはやされ、世に行はるゝは妙ならずや……されば戲作者といはるゝ輩も極めて小少ならざれども、おほかたは皆飜案家にして作者をもつて見るべきものは、いまだ一人だもあらざるなり、故に近來刊行せる小說稗史は、これもかれも馬琴種彥の糟粕ならずば、一九春水の贋物多かり、蓋しこのあひだの戲作者流はひたすら李笠の語を師として、意を勸善懲惡に發するをば、小說稗史の主腦とこゝろえ、道德といふ模型をつくりて力めて脚色を其內にて工風なさまく欲するからに强ち古人の糟粕をば嘗むとするにはあらざめれど素と其範圍の廣からねば、覺えず同轍同趣向の稗史をものすることなるべし、是あに遺憾ならざらむや、さはあれ斯やうになりもて來るも、其罪偏に拙劣まる作者の上にありといはむ歟、いな活眼なき四方の讀者もまたあづかりて力あるなり、其故いかにとなれば古來我國のならはしとして、小說をもて敎育の一方便のやうに思ひて、しきりに奬誡勸懲をば其主眼なりと唱へながら、なほ實際の場合に於ては、ひたすら殺伐慘酷なる、若くは頗る猥褻なる物語をのみめてよろこび、他のかたくるしき筋のとは目を注めてだに見る人稀なり、しかして作者の見識なき、總じて、輿論の奴隷にして、流行の犬ならざるなければ、競ふて時好に媚むとして、彼の殘忍なる稗史をあみ、彼の陋猥なる情史を綴り、世の流行にしたがふものから、勸懲といふおもてむきの名義も、さすがに拋棄がたさに、しひて勸懲の主旨を加へて、人情をまげ世態をたはめて、無理なる脚色をなすことなりけり、此に於てか拙劣なる趣向はます〳〵拙くして大人學者の眼をもつては、ほと〳〵讀むにたへがたかり、是併ながら作者も讀者も、たゞいたづらに稗史を弄して眞の稗史の主眼をさとらず、彼の謬妄なる舊慣をばむなしく墨守なすに因るのみ、豈笑ふべきの極ならずや、否をしむべきの限ならずや、おのれ幼稚より稗史を嗜みて、いとまある每に稗史を閱して貴き光陰を浪費すと已に十餘年に及びにたれば流石に

古今の稗史に關して得たる所もすくなからず、且また稗史の眞成の主眼は、果して何等の邊にあるやも稍會得しぬと信ずるから、いと嗚呼がましき所爲とは思へど敢て持論を世に示して、まづ看官の惑をとき、兼ねては作者の蒙を啓きて我小說の改良進步を今より次第に企圖てつゝ、竟には歐土の那ベル(小說)を凌駕し繪畫音樂詩歌と共に美術の壇頭に煥然たる我物語を見まくほりす云々。』

此の序文を見ると、當時の小說が、いかに幼稚であつたか而して逍遙の目的が那邊にあつたかを想像し得る。而して彼れが、此の一論文を草するに當つて、如何なる參考書が有つたかと顧るに、殆ど絕無と言ふも不可ない位であつた。固より舊來の文學と、新來の西洋小說とは、其の參考であつたが美學的論說の方面にては、大學に於けるフエノロサの美學の講義と、當時菊池大麓の譯した『修辭及華文』位のものであつたらうと思ふ、彼れは殆ど何等の師匠もなく、手本もなく專ら泰西及び本邦の小說を比較研究して、此れだけの論文を草したのであるから、其の勞苦の多大と、其の眼識の精細また高尙であつたとは、誰人も承認せねばならぬ。

彼れは先づ美術の何たるかより說き起し、小說亦た一種の藝術たるを說明し、更に小說の變遷、小說の主眼、其の種類其の裨益、其の法則、脚色、主人公の設置、叙事法などを論じてゐる。これ一種の文學論と修辭學との混成體で、啻に小說壇を裨益したのみならず、文學全體に、尠からぬ敎訓を與へたのである。

其の主張が何處にあると見るに、先づ第一に小說とローマンス(傳奇小說)とを嚴正に區別した點は、當時に於ける卓見と言はねばならぬ。當時の社會は、箇樣の區別を知らず、小說と言へば、たゞ一概に假作物語と解してゐた。その蒙を啓いて、ノーベルの本體を明白にし、且つ其の小說は、寫實主義に成つたものであらねばならぬと喝破した。

彼れは馬琴一流の勸懲主義、或は草雙紙張りの傳奇主義に反對して、模寫小說を主張し、こゝに小說の本體を定めた。所謂模寫小說なるものは、寫實主義の意で、作家の主觀を以つて人物を構造するとなく、實際に有り得べき人生や社會を描寫せよと言ふに在る。

『それ稗官者流は心理學者の如し。宜しく心理學の道理に基づきて其人物を假作すべきなり。苟くもおのれが意匠を以て强て人情に悖戾せる、否、心理學の理に戾れる人物なんどを假り出さば其人物は已に既に人間世界の者にあらで作者が想像の人物たるから、其脚色は巧なりとも其譚は奇なりといふとも之を小說と謂ふべからず。』

かくて非小說の例として、馬琴を攻擊してゐる。彼れは文

章上に、馬琴に負ふ所甚だ多いのであるが、其の思想は、全然其の範圍を脫して、寫實主義を奉じてゐる。其の寫實主義と言ふも、今日より見れば勿論皮相なものだ。奇怪なる社會を作らずして、現世に見得べきやうの人物を作れ、作者の道德說を擅さ出さず、たゞ現れたるまゝの人情を描寫せよと言ふに過ぎぬ。併し此の主義は、當時の小說が、徒らに淫猥、徒らに傳奇的、小細工的であつた弊を矯むるに有力であつたのは爭ふと出來ぬ。

『小說神髓』に由りて、吾が小說なるものは、戲作の範圍を離脫して、眞に文學的と稱すべき位置に据ゑられ、模寫とか、主人公とか言ふ名稱は、始めて文壇に紹介された。從來の舊派小說、或は當時流行しつゝあつた飜譯小說に對して、實際社會を描寫せよと叫んだのは、死に瀕しつゝあつた明治小說を救治し、作家の思想を擴大して、文明的藝術觀を築かしめたのである。單に此の一論文を以つてするも、著者の功績は、獨逸のレッシング同樣に傳へられねばなるまい。

小說の新生命、本質、正體を說明した逍遙は、更らに其の實例を示した。『當世書生氣質』が即ち其れである。こは當時に在りてが極めて大膽なる作である。當時の學生の狀態を忌憚なく描寫したもので、傳奇小說又は續き物を讀んで居た社會には、最も新鮮なる讀物であつた。そが『小說神髓』と共に、文學史上小說壇を一廻轉せしめた重要の位置に在るとは勿論であるが、なほ當時の書生の狀態——其の風俗思想等を範疇て——を觀察する上に於いても必讀の材料である。

『小說神髓』の理論を實際に應用したのであるから、勉めて作者の意匠を避け、想像を排してゐる。併しなほ脚色に囚はれた跡が殘つてゐる。其の文體も、努めて斬新ならむとを企てゝあるが、尙ほ舊派の臭味を脫して居らぬ。發端の書き出しの如きは其の例である。

『さま〴〵に移れば變る浮世かな。幕府さかえし時勢には、武士のみ時に大江戶の。都もいつか東京と。名も新玉の年毎に、開け行く世の餘澤なれや、貴賤上下の差別もなく才あるものは用ゐられ。名を擧げ身さへたちまちに。黑塗車馬の乘り賣の。息子も髯を貯ふれば。何の小路といかめしき。名前ながらに大通路を。走る公家衆の車あり。榮枯盛衰いろ〳〵に……』

こは其の短所とも謂ふべき點であるが、大體を通じて言へば新空氣を出さむと試み、中々に文明を氣取つた言語、或は英語などを使用してある。殊に對話に至りては、純寫實て、今日通讀するも、當時の書生の狀態を知ると出來る。なほ此の作には、其れ〴〵モデルがあるとを見ても、著者が如何に寫實主義に忠實であつかを推測し得るであらう。兎に角、奇を衒はず、人物の性格を現はさむと勉め、三馬一九流の野鄙なる滑稽を避け、人情を寫しても春水一派の卑猥に流れざむとを主眼としたのは、當時他に例の無い特色である。

第三節　二潮流の勃興

坪內逍遙が一たび小說の革新を唱へ、其の作例を示すも共に、文學界は遽かに活氣を帶びて來た。嚴密に言ふ明治文學は、實に此の時代を初期とするのである。而して其の活動の防ると共に、早くも文學的に對する二潮流が派れた。從來、國民の文學的活動は、なほ山間の湖水の如くに停滯し、毫も流動すると無つたが、逍遙の力によりて、岩石碎かれ、樹木截られ、こゝに其の活動は、瀧の如き勢を以つて始まつたが、同時に二樣の流れを作つた、二樣の流れとは、一は藝術を藝術として取扱ふ派、即ち美至上主義を奉ずる一派で、他は、藝術を藉りて其の人生觀、社會觀を述べむとするもの、即ち有意義小說を作らむとする者である。

文學者として、人生を觀察し、且つ之れを描寫せむとする場合には、必ず二樣の別を生じて來る。第一者は藝術の爲に人生を描寫するもので、其の目的は恒に美てある。美の發揮は其の最後の目的であつて、作者は藝に遊ぶ。第二者は飽く迄も眞面目に人生と接觸して、其の眞相を發揮せむとする。前者の美に對して、これは眞を目的とする。吾人は前者を藝術的傾向と稱し、後者を窮理的傾向と言ふ。元より兩者各の裡にも變體があるから、明瞭に區別すると出來ぬが、兎に角に此の二傾向は、文藝の活動には必ず生起し來るもので、此の時代より現今に至るまで、其の跡を辿ると出來る。而して當時にありて藝術的傾向を代表するものは、硯友社一派て、窮理的傾向は、長谷川二葉亭四迷が代表してゐる。

當時の文學界に於ける梁山伯とも稱すべき硯友社は、明治十八年春を以つて組織された。否、組織されたと言ふよりも同好の者が酒落半分に會合したのであらう。當初の社員は、尾崎紅葉、石橋思案、山田美妙齋、丸岡九華等て、同年五月には『我樂多文庫』と稱する雜誌を出してゐる。此の雜誌は第八編に至るまて、編輯擔當者が、社員の投稿を一々淨寫し一冊に綴ぢて、讀廻したものだ、而して十九年十一月の第九號からは印刷に附し、公然と發賣したのが、二十一年五月からてある。

其の初編の發刊の辭とも稱すべき『我樂多文庫披露』は、極めて幼稚のものてあるが、尙ほ社員一同が、如何に文學を解しつゝあつたかを覗ふに足るものだ。起草者は半可通人即ち尾崎紅葉てある。

徹して曰はくチト大業。文して參るはヤ、艷めく。則ち

書をもて才子諸彦に告まつる。夫れ。人各樂あり。隣の壁から燈をぬすみて書讀むも樂なり。銅臭さを喜ぶ守錢奴。一簞の冷飯に事足とする清貧家も。亦樂しむ所なからずやは。傾城の涙に家蔽の雨漏りをかへりみず。あるは二合半の寢酒に布袍を打殺して。飛だ罪障つくるも亦樂の一部ぞかし。されど隣の壁ぬかば。尻を喰ふのおそれなきにあらず。銅臭きはおゝむさし。さりとて冷飯は腹剛ばりて病や起らん。家を持ねば傾城の涙の雨の漏り所。無一錢では寢酒も飮めず。アヽなんとしやう。どうしやふと。こゝて思案のいらばこそ。筆の林に閑居して。不善はなさぬ君子等の。快樂と一派。和歌詩文の上品より。小說狂文狂詩歌句。四面に堅き角を去り。端歌都々逸の心意氣。一切無差別。かきあつめ。我樂多文庫の名にし負ふ。諸彦も我も樂の多き冊子を月々に。編して而して讀書餘閒の憂晴し。嘻是天下無上の快樂。倶にせんとの有志の君達。珠玉を空しく秘め給はず。値をまたず。沽んかな〳〵とのたまへば。我もいはなん。買はんかな〳〵。

實に呑氣な量見を以つて、始まつたのであるが、而も藝術至上主義を奉ずべき傾向は見えて居る。

偖て此の硯友社を組織したのは、前記せる諸氏で、孰れも當時の高等教育を受けつゝあつた。而して漸次に社員增加し、明治二十二年の末までには、川上眉山、巖谷迯、江見水蔭、岡田虛心亭、廣津柳浪、渡邊乙羽等、いづれも新時代の空氣に育てられた人々が加はつてゐる。此の中には、大學に在學してゐる者もあれば、獨逸協會學校に居る人もあり、或は一旦書家たらむと欲した人もある。なほ法律政治などを專攻科目としてゐる書生さんも加盟してゐるが。兎に角に種々の分子が集合したのであつて、而も其の嗜好は、皆な一致して居た。乃ち幼稚なる藝術主義がそれであつた。

其の機關雜誌の初の編を看るに二十一二年頃に至るまでは極めて幼稚なものだ。小說も評論も、和歌俳句新體詩都々一など種々の文學を揭げてゐるが、多くは當時流行の漢文直譯體の文章か、或は戲作者流の下品なる滑稽て、たゞ面白おかしく書き做したのみて、何等の思想も意義も無い。ひとり新體詩の方面には、多少清新の氣を覗ふと出來るが、其の他に至つては、道樂半分、酒落澤山て、人生に對する哲學的、心理的、或は倫理的思索などは秋毫も認むると出來ぬ。要するに其の文章も思想も、未だ戲作者の範圍を脫して居らぬが、而も藝術的美を重んずる傾向は瞭然としてゐる。

此の藝術的傾向に對峙してゐるのが、二葉亭四迷の「浮雲」（二十年）である。逍遙の「小說神髓」は、文學論壇上の新紀元を開いた作であるが、其の「書世氣質」は果して其の主張を充分に發揮したものであらうか。其の後の著「妹と背鏡」或は「細君」等も、論文に比肩すべきだけの價値あるであらうか。元より清新の趣に富んでゐる。併しなほ多くの戲作者的元素を含んでゐるとは、直ちに指摘し居る。而して創作の方面に於いて「小說神髓」と同樣の名譽ある位地を占むるのみならず、明治四十年間の文學史上、獨得の異彩を放つ物は「浮雲」と謂はねばならぬ。逍遙の論旨が斬新また確的であるとは、彼れ自身の作よりも、二葉亭四迷の著に由りて證明され、更に文壇の發展を催進したのである。

「浮雲」は極めて眞面目なる人生研究である。硯友社一派は動もすれば、遊戲的衝動に生じた人生を觀察するに偏してゐる、面白い浮世を見てゐる、縱令悲慘の人生社會に接しても、たゞ其れを巧妙に描寫せむとを工夫するのみだ。然るに二葉亭四迷に至りては、更に深く人生を穿鑿する、內部的生命を捕へむと試みる、人生問題と藝術とを結合せしめむと企てる、藝術上に眞の人生を現さむと欲する。硯友社派は、皮相外面の人生を眺め、二葉亭四迷は隱れたる生を捕捉せむと企てゝゐる。彼れは人の一言一行、悉く何等かの內面的意氣を有してゐる、廣い深い人生問題と關聯する所ありと觀察してゐる。此の點が、吾人の所謂窮理的傾向を代表してゐるのだ。

彼れの作に於いて、始めて主人公と稱すべきものが現はれ、人物の性格描寫が試みられ、當時の一般家庭に見るべかりし新舊思想の衝突は、更に奧深く、意義多く解剖され、其の輕薄虛浮の新舊思想衝突の間に犧牲となつた眞面目な人物が點出されてある。通讀の後、文三、お政、お勢などの性格は、鮮かなる印象を遺す、否、數年の後と雖も尙ほ其の印象を記憶に浮ぶることが出來る。其の文章も亦全然新體て所謂言文一致を用ゐてゐる。從來作者の說明は、多く傳式の文章を用ひたが、彼れは全部に通じて、即ち人物の對話は勿論、地の文にも言文一致を巧に應用してゐる。其の例。

感受の力の勝つ者は誰しも同じ事ながら、お勢は眼前に移り行く事や物やのうち少しでも新奇な物があれば、眼早くそれを覩て取つて、直ちに心に思ひ染める。けれども惜しい哉、殆ど見た儘で、別に烹練を加ふるといふことをせずに、無造作に其物其事の見解を作つて仕舞ふから、自ら眞相を看破めるといふには至らずして、動もすれば淺膚の見に陷いる。それゆゑ、その者に感染れて、眼色を變へて、狂ひ騷ぐ時を見れば、如何にも熱心さうに見えるものゝ、固より一時の豫想ゆゑ、まだ興味を味はぬうちに早くも、熱が冷めて、厭氣になつて惜し氣もなく打棄てゝ仕舞ふ。感染れる事の早い代りに、飽きる

事も早く、得る事に熱心な代りに、得た物を失ふことにも無頓着。書物を買ふにしても、さうて、買ひたいとなると矢も、楯も無く買いたがるが、買つて仕舞へば、餘り讀みもしない。」

當時の文壇と『浮雲』とを比較すれば、恰も鳶が鷹を生んだやうに思はれる。只皮相だけを見れば、如何にして此くの如き大作が、此の幼稚なる文壇に生れたが、實に解釋するに困難である位だ。勿論天才には異常の能力があるから、如何なる場合にも、非凡の作が出るかも知れぬ。併し如何に天才たりとても、其を發展せしむる他力が無くては、容易に其の能力を示すと出來ぬ。二葉亭四迷は、確かに『小說神髓』に由りて啓發せらるゝ所があつたに相違ないが、其れのみは未だ以つて此の作の出てた由來を說盡して居らぬ。吾人は此の他に露西亞文學の影響を認めねばならぬ。

當時、外國語の研究と言へば、殆ど英吉利語に限られてゐた位であつた。其の間獨逸、佛蘭西などの語學も多少は修學されたが、大勢は英語學習であつた。然るに二葉亭四迷は、露西亞語の研究に入つたのである。彼れが如何なる動機に由りて、此の語學を修めむと欲したかは、茲に研究する必要はないとてあるが、其の露語研究より、露文學に接し其の影響を受けたとは、史家の看過すべからざる點である。當代の文學志望者は、多く戯作者流の系統に屬し、其の頽眼なる者は英又は佛の文學に接して、新文學の素養を養つたが、二葉亭四迷は、かの系統を離れ、露國文學に攝りて其の文學觀を築いた。而して其の同行者には、矢崎嵯峨の舍が居る。此の兩家は實に露國文學系統を代表して、我が文運に、特殊の材料と意義とを貢獻した作家てある。

露國文學の特色は何てあるか。二葉亭四迷や、嵯峨の舍の接觸した外國文學は、ツルゲネフ、ドストエウスキー、トルストイ等を產んだ北歐の嚴肅なる人生觀を基礎としてゐる。彼の文學は、人生と密接なる關係あるもの、人生問題に對する苦悶、苦鬪、切實なる解釋を本位とした藝術である。其の目的は、人生の美化に非ずして、如實の人生を解剖し、描寫するに在る、即ち眞が最後の目的てある。

露文學に接した者は、此れと同樣の文學觀を造つた。茲に吾人の所謂窮理的傾向が生じ、硯友社一派の代表する藝術的傾向と相對して、新興文學を開拓したので、吾人は其の兩潮流の銷長變遷に特別の注意を拂はねばならぬ。

第四節　外國文學の紹介

吾人は此の期間の文學發展に就いて、外國文學の紹介に就いて數言を費さねばならぬ。前期に在りては、重もに英吉利

の政治小說が紹介されたが、此の期に入りては、世界諸國の優れた文學が陸續紹介さるゝに至つた。一般の思想界は、國粹保存的であつたが、文學の方面には、盛に新しい文學を輸入しつゝあつた。思ふに、如何に國粹保存的と言ひながら、文學上にては、是非とも清新の讀物、斬新なる模範を要求しつゝあつたのであらう。

偖て此の外國文學の紹介に就いて、先づ揭ぐべきは、露西亞文學てある。二葉亭四迷は二十一年にツルゲネフの『あひびき』『めぐりあひ』等を反譯し、尋いては內田魯庵のドストエウスキー原作『罪と罰』、田山花袋のトルストイ原作『コザック兵』等あり、嵯峨の舍亦かの國の名篇を紹介してゐる。前節に述べた如く、此の國の嚴肅なる文學の紹介は、文藝と人生問題とを密接に結び付くる風潮を起したのてある。

當時の反譯文學界に、一頭地を拔いてゐるは森鷗外だ。彼れには『舞姬』『うたかたの記』等の創作もあるが、主として文學界に貢獻したのは、其の飜譯と評論とてある。彼れは獨逸文學に精通し、獨逸文學の名篇のみならず、獨逸語より露西亞、佛蘭西、米國等の名作を重譯してゐる。就中『埋木』（シュピン原作）は長篇て、且つ吾が文壇に、一種の主情主義を輸入したもので、其の影響は些少でない。ゲーテ、シルレル等の時代に起つた『世紀病』或は『ウエルテリズム』は此の作と共に輸入された。所謂世紀病とは、天才ある者が、剛毅なる意志を缺きて空しく陋巷に彷徨し、など世をも人をも恨めしく、現世のすべてに滿足するとなく、常に悲痛の感に撲たれてゐる傾向てある。また鷗外の創作に、既に其の主情的傾向を見るとが出來る。（彼れの創作及び譯文は、二十五年出版の『水沫集』中に納められてある。）

鷗外と相對し、英語を本として、各國の文學を紹介したのは、森田思軒てある。當時文學の機關雜誌として、非常の勢力あつた『國民の友』は、彼れが多くの反譯を揭載する場所てあつた。佛國のジュール、ベルヌ。ユーゴー、獨逸のチエック、英吉利のエデヲルス。デッケンス。米國のアラン、ポー。ホーソルン等、皆な彼れの筆に依りて紹介された。就中ユーゴーの『探偵ユーベル』と『普使者』とは、當時持て囃されたもので、ユーゴーの名は、前期に於けるリットンの聲名を押し倒した位てある。彼れは勿論英吉利譯より紹介したのてあるが、社會は皆な英文學の紹介者と謂はず、ユーゴー先生の紹介者と見做してゐた。

二葉亭四迷、魯庵、嵯峨の舍、花袋諸氏の譯文は、皆な原文に忠なると同時に、原作の趣を傳へむと苦心してゐる。これは前期に於ける反譯よりも數段の進歩てある。殊に鷗外の譯文に至つては、實に克く原作の趣を傳ふると共に、日本文と

して、巧妙に綴られてある。此れ等の譯文は皆な日本の文章に洋文脈を加味する上に、少からぬ功績あるものだ。吾人は左に二葉亭と鷗外との譯文例を掲げる。

秋九月中旬といふころ、一日自分がさる樺の林の中に座して居たことが有つた。今朝から小雨が降りそゝぎ、其の晴れ間にはをり〳〵生ま暖かな日かげも射してまことに氣まぐれな空合。あわ〳〵しい白雲が空一面に棚引くかと思ふと、フトまたあちこち瞬く間雲切れがして無理に押し分けたやうな雲間から澄みて怜悧し氣に見える人の眼の如くに朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は坐して四顧してそして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で幽かに戰いだが、その音を聞いたばかりても季節は知られた（あひゞき中の一節）

前代の漢文直譯流の文章から見れば、遙かに精巧を極めたものだ。次に左の一節は『埋木』中から取つたものだ。

北國の夏の常なる蒸す如き暑はこの市を掩へり。空氣の人を壓し、人の息を塞がむとするは、花卉をそだつる室の裡に入りたる如く、また餘りに爐火を熾にしたる部屋に居る如し、地上の物はつゆばかりも動かずして、唯木街の並樹の巓にすこしの戰を見る。きのふの雨の餘波なる路上の水潦は蒸氣を立たせたり。大空にはまたの雨催に雲やうやく聚れり。いづくに向ひても地平線のあたりに微なる雷の音を聞く。重く又哀に鬱悒氣の裡にみちみちたるは、けふの祭の紀念なる護摩の烟、蠟燭のゆゑん、凋るゝ花のにほひなり。家々の壁には猶供物卓を倚せかけたるあり。卓のめぐりの木葉は萎び、花は枯れたり。ゆたかなる薔薇、やさしき向日草、おとなしき木犀草の花、皆敷石の上に落ちて、人に踏まれ、泥にまみれたり。

粗雑て且つ形式的の漢文、又は和文に馴れた人々は、描寫の緻密なるに驚いたとてあらう。

獨り思軒の譯文に至つては、漢文くづしの直譯體で、文學的價値は輕少だ。併し當時に在つては、矢張り一部の模倣者を有した位てあるから、左に一例を擧げて置かう。

此に集合せる諸亡士の中に一個の老人あり齢は半生蓄策運籌のために頽づをれ日陰にある諸亡士の間に於ける是等の事の手續に習れ熟せり凡そ是等私の審理の會は陰秘なると共に亦嚴正なり渠は嘗て屢々斯る會に列して幾多の恐るべき宣言をなし之を懲罰し之を戒戮せり（探偵ユーベル中の一節）

彼れは原文の調子を表はすなどには苦心して居らぬ。今日より見れば、前期の飜譯家の系統を引いた殿將てある。而し

て其の模倣者には原抱一庵がある。

此の他なほ當時に譯されたものには、若松賤子の『小公子』（バーネット）松居松葉の『鉢機翁』をはじめとし、アヂソン、ヲルゾヲルス、ドーデー、デューマなどの小品が諸氏の手に依つて紹介された。亦た英語研究の學生間には、スコットの『湖上の佳人』ゴールドスミスの『寒村行』テニズンの『エノク、アーデン』、カーライルの『英雄崇拜論』、エマーソンの論文、マコーレーの『ミルトン論』『クライブ傳』『ヘスチング傳』デクインシーの『懺悔』、アーヴイングの『スケッチ、ブック』等が讀まれた、從て亦其れ等の譯註書も多く發刊された。當時の英學生は、大部分皆な文學書に依つて修業した。こは來るべき時代の文運には尠からぬ影響あるとてあらう。

第五節　皮相寫實派の全盛

逍遙が一たび模寫小說を唱へてからは、寫實を標榜する小說が全盛を極むるに至つた。而して其の牛耳を取つたのは、尾崎紅葉を中心とする硯友社一派てあつた。實に二十一二年頃より二十五六年頃までの文壇は、硯友社一派の天下てあつたと謂ふも不可ない位てある。

此の寫實主義の勃興に關しては、『小說神髓』が、有力なる原因となつて居るが、尚ほ他に一原因が存して居る。こは西鶴の復活てある。當時の國粹保存的思想の影響として、古文學が研究され、小說の方面にては、元祿の產物、殊に井原西鶴が著りに研究され、且つ崇拜された。『小說神髓』は、德川末期の小說に對する非難てあるが、元祿の昔に溯つて見ると、逍遙が主張した模寫小說に類してゐる西鶴物があつたから、多數の作家は、其處に模範を取つたのは、決して無理ならぬとだ。殊に西鶴の文章は簡潔にして而も一種魅する力を有してゐるから、さながらに藝術的傾向を帶びた人々は皆な彼れを無二の粉本としたのであつた。紅葉、露伴共に西鶴に心醉し、後者は二十三年の『國民の友』誌上に、西鶴論を掲載して居る。

寫實的傾向は、山田美妙齋、尾崎紅葉、巖谷漣、石橋思案川上眉山、廣津柳浪、江見水蔭等が代表してゐる。併し吾人は諸家の作を指して、寫實的と稱するのは、甚だ不穩當てあると信ずる。何故なれば、諸氏は嚴密の意味に於ける寫實派ではなく、單に皮相の模寫を以つて能事終れりとなし、或は自己の嗜好を發表せむが爲に、寫實的形式を借りて居るのみてある。別言すれば、自己の小主觀を以つて社會人情を解して居るのみて、廣い人生とか、深い觀察とかは、其の作物中に見ることが出來ぬ。

美妙齋の『夏木立』は言文一致の新體を開いたものであるが矢張り藝術至上主義の作で、其の内容は、現代人生と接觸する所がない。其の價値は單に形式上にあるのみだ。歐文脈の文章、新しい比喩、或は擬人法、聯想の廣濶等、即ち修辭上の新樣式が其の特色である。『夏木立』以後、彼れは『花車』『胡蝶』『ぬれぎぬ』『此の子』『いちこ姫』などの作を出してゐる。其の得意の言文一致は大に歡迎され、殊に『胡蝶』の如きは、戀と義理との衝突が巧に書かれたと稱贊された位であつた。併し今日より看れば、作者の抽象的觀念を以つて古代の事を書いたに過ぎぬ。

『胡蝶』の公にされた二十二年には、尾崎紅葉が『二人比丘尼色懺悔』を出して喝采を博した。彼れは此の一篇に由つて一躍文壇の大家となつたのである。こは前者と同じく材料を昔日に取つて、義理、戀愛、忠孝などの衝突を描いたもので、内容には何等清新の思想もなく、現代的生命も無く、人物は類型のみであるが、其の文章の美が、一世を驚嘆せしめたのである。其の濃艶の修飾と哀れげな物語の筋とか、當時の幼稚なる讀者を動かしたので、今日より看れば、讀まずとも宜しい作だ。

紅葉の文才は、西鶴を研究した後に發展した。『拈華微笑』『此のぬし』『夏痩』『新色懺悔』（以上廿三年）『二人女房』『伽羅枕』『ゐぼろ舟』『むさ玉子』（以上廿四年）『三人妻』（廿五年）『心の闇』（廿七年）等は此の期に於ける彼れの產物だ、その跡にも西鶴の影響を認める。而して多くは其の材料を現代生活に取つたものだ。

彼れは現代を表現せひと試みたが、皮相の寫實を試みたのである。『二人女房』『三人妻』『伽羅枕』等は、當時廣く愛讀されたものだが、要するに作家自身の女性を書いたものに外ならぬ。彼れは外面に現はれた現象を描寫するには巧妙であつたが、心理の解剖、內面的描寫に至つては、極めて狹小なる範圍に跼蹐して居た。花柳氣質とか、江戸子肌の女とか、伊達肌とか、勝氣とか、負嫌ひとか、いよやうの女性を研究してゐるのみだ。彼れの此の期に於ける活動は、女性研究を專門としてゐるが、其の女性なるものは、彼れの嗜好から割り出したものか、去もなければ極めて抽象的なる類型に外ならぬ。吾人は此れ等の女に接しても、活人生に於ける女性を看るの感は起らぬ。たゞ元祿式の女が、明治の言語を用ゐてるか、或は婦人に通有なる情緒が表現されてあるばかりだ。彼れは其の文章に苦心したとは非常のもので、また功績も多いが、內容意義の方面は、割合に貧弱であつた。

紅葉を中心とした作家は皆な同樣の傾向を帶びてゐる。元より各自に特色あるが、其の文學觀は皆な一樣だ。速山人は

『妹背貝』『片絲』『有禪染』などを出した。其の特色は年少男女の可憐なる情緒を寫す點に在る。坊樣嬢樣の飯事式の戀愛が彼れの材料で復た異彩を放つて居る。思案は主として諷刺文、隨筆物の方面に活動したが、なほ創作には『乙女心』『京鹿の子』等讀ひべきものがある。柳浪に至つては『殘菊』『いとし子』『絲の亂れ』『五枚羽袴』などを書いてゐる。而して其れ等の作には、夙くも深刻なる觀察が現れてゐる。眉山に至りては紅葉と相對する文章家で『黃菊』『白菊』『雪折竹』『墨染櫻』などの作もあるが、未だ充分に其の能を表はして居らぬ。水蔭、丸華、渡邊乙羽、中村花痩など、皆な硯友社員として、『文庫』（廿二年我樂多文庫の改題せるもの）『都の花』『新著百種』などに其の作を掲げたが、其の技倆の發揮されたのは寧ろ日清戰役後の時代である。

硯友社の寫實主義なるものは、極めて淺薄なるものであつた。そは社會人生の表面觀察、文章上の技巧などの上に特色あつたのみで、矢張り一種の戲作的傾向、江戸式通人肌、洒落氣を離脫せぬ浮調子のものだ。西鶴の研究に至りても、單に其の文章、その元祿的氣風、花柳氣質位に止つて、西鶴其の人の深奥なる人生觀に思ひ及んで居らぬ。其の諷刺も皮肉も只皮相上の模倣に停つてゐる。併し文章上に、言文一致以外、洋文脈以外、和漢文脈以外に一派を開いたとは、沒すべからざる功績である。殊に國粹保存的思想の隆起した時代であつたから、其の意氣肌は、一般社會の觀迎する所となつて、文壇は即ち硯友社の天地であるかの如き觀を呈した。吾人は彼れ等一派の事業を回顧して、其の如何に國民的、否むしろ江戸子的氣風に投合する所あつたかを思ふと共に、其の勢力の大なりし割合に新空氣の尠かつたとを憎む。

第六節　幼稚なる理想主義

紅葉と同じく西鶴を研究して、而も別方面に走つた者は、幸田露伴である。而して紅葉一派が淺薄なる寫實主義を奉じた如く、露伴また幼稚、單純なる理想主義を立てた者は彼れである。紅葉が天馬なる文章を綴つたに對して、澁い儼しい豪壯らしい文體を作つたのが彼れである。紅葉は猶ほ藝妓の如く、露伴は奥女中式だ。

當時に於ける彼れの作には、『露團々』『一刹那』『風流佛』『奇男兒』『對髑髏』『眞美人』『一口劍』『新葉末集』『五重塔』などがある。其の內、『風流佛』『五重塔』の二篇は、紅葉の『二人女房』『伽羅枕』などに對峙する作と稱すべきだ。

紅葉が女性の研究を主としたに對して、彼れは男性の特色を主題にしてゐる。而も前者が、女性の或る特殊の性質、又は通有性を表現した如く、後者も亦男性の或る特殊性、又は

通有性を描いて居る。此の兩者は、共に特殊性を材料としながら、而も普遍的、類型的を描いて、個人性を發揮せぬ。彼れ等は共に書齋の人、空想の人、世間知らずの作家だ。現實的人生の何物たるかには思ひ到らなかつた人である。

露伴は、男性の上に、意地張り、俠氣、奇癖などの性質を現はした。而して其の最も優れた例は『五重塔』の主人公であらう。其の十兵衛は、藝術家肌の男だ。藝術の爲には義理も恩愛も忘却する、たゞ其の技能の發揮を勉むる男だ。露伴は、男性の熱烈なる意志を表現せむと試みてゐるが、而も其の解釋は舊思想的だ。元祿式だ、超現代的だ。

彼れには一の理想がある。意地を通す。而して世の中を悟つて終う。これが其の理想だ。而して其れを空想の上に表はしてゐる。彼れは佛教經典や、或は元祿文學中に現れた架空的思想に心醉して、世の中は正に斯くあらねばならぬ、男の意氣を貫徹する所に、深奥なる意義ありと觀じて居たのであるが、實は空想上で考へて居たのだ、現實の生活に觸れずして、只徒らに獨りよがりして居たのだ。

* * * *

露伴も紅葉も共に、此の時代に在つては現實的生活を研究して居らぬ。否、現實生活より、或る性質、或る感情、或る思想を象抽し來つて、其れを眺めて怡んで居たのだ。元祿文學か、佛教文學か、或は江戸文學などに現はれた人生を其の儘に承繼して、それを再現せむと試みて居たのだ。勿論其の表現法は寫實的である、傳奇小說、又は元祿文學よりも巧みである。而して紅葉は勉めて客觀的ならむと企て、露伴は自己の理想――極めて平凡陳腐なるものだか――を本位として居る。露伴は此くの如き理想、むしろ空想が現實的生活の上に實現せらるべきものか否かを考察せぬ。紅葉は其の描くが如き性情は、現人生に見らるべきものか否かを觀察して居らぬ。要するに共に、明治の時勢を離れて、自分勝手の世界を夢見つゝあつたのだ。遁に紅葉は客觀的ならむとを勉めたが故に表面上なりとも、當時の明治時勢を書き現はした點もある。併しそれとても、根柢は類型で、たゞ明治の人情風俗に當て箝めたと言ふだけで、『浮雲』に見ゆるが如き深刻なる社會觀察もない、復た『書生氣質』に於けるが如き大膽なる描寫もない。然るに尙ほ當時の讀者界は、彼れ等の作を歡迎し、文壇の名將は、紅葉を中心とせる硯友社一派と露伴とであると思惟したのは何故か。これ實に文章の力に外ならぬ。

第七節　舊派の變體と傳奇派

紅葉と露伴とは實に當時の文學界に於ける兩大關とも稱すべきものであつたが、其の以外に、舊派の變體があつたとを

忘却してはならぬ。而して其の代表者は饗庭篁村と齋藤綠雨とである。

篁村は江島屋風の脈を引いた作家で、二十二年には其の文集『むら竹』を出した外に、『當世商人氣質』『堀出し物』『良夜』『勝鬨』などを公にした。就中『當世商人氣質』は讀書家の注意を引いた作である。彼れの特色は其の舊思想に甘んじ元祿文學を巧妙に模倣し、輕妙なる諷刺諧謔の筆を用ふる點に在る。時世以外に超然として、洒落のめす所が其の特色で敢て時勢に反對するでも無く、憤怨するでもなく、悠々として隱居樣然と構ふる態度は、別世界の人の觀がある。なほ其の劇評に至つては、獨得の長所を有してゐる。恐らく劇の歷史に通じ、且つ役優等の眞狀態に通じた批評家は、當時篁村を以つて泰斗と見做さねばなるまい。

篁村の悠々たる態度に對して、恒にやきもきして居た者は齋藤綠雨である。彼れ亦舊派に屬する一人で、『かくれむぼ』『門三味線』『油地獄』等の作を遺してゐる。其の長所は、簡潔犀利の文章を以つて、當てこすり、皮肉、諷刺、冷笑を述ぶる點に在る。然れども思想は、毫も舊派を脫して居らぬ。否、江戸式花柳社會の感想や觀察以外に、特に稱すべき程の嘲罵も無い、諷刺も無い。當時に在つては、其の銳利な筆法は、肺肝を衝くと稱せられた。また實際左樣であつたが、今日より看れば、所謂通人肌の諧謔で、深さも廣さも共に小なるものだ。只其の取るべきは、時勢に對する恨怨と、穴探しとに在る。恐らく抑北以後に於ける通人文學の好代表は彼れが作篇であらう。篁村はのんびりとした舊派の好代表者で、綠雨は、ひねくれた舊思想の人である。

傳奇小說は、如何なる世でも歡迎される文學だ。如何に新奇な文學が隆興するにしても、傳奇小說は容易に衰へぬ。所謂有識者には、愛玩されぬとも、社會一般には、何時の世にても相當の勢力を有するのが此の種の小說だ。蓋し人は、自己の平凡なる生活に倦んでゐながら、何か奇拔な、架空的な事柄に其の想像を走らせむとする傾向を有して居る。而して其の傾向、むしろ低い嗜好に適せむとするのが、傳奇的小說である。是れが其の命脈の絕えぬ所以であらう。

偖て當期に在つて、傳奇的小說を代表する者には、二つの流派がある。一は德川時代の舊文學から脫化したもの、他は前期に生起した反譯傳奇小說の流れを汲んだもので、矢野龍溪の『浮城物語』、未廣鐵腸の『南洋の大波瀾』など其の例である。

第一者即ち舊派を代表する者は、須藤南翠、依田學海、宮崎三昧等で南翠は『朧月夜』、『照日葵』『鸚黃雛』『こぼれ松葉』などを著はし、學海は本來漢文學者であるが、轉じて小說戲

曲の評論を物し、或は『楠木』『十津川』等の歴史小説を書いた。前者は多く傳奇を主とし、所謂續き物の特色たる局面の變化曲折に重を置いてゐるのみであるが、學海の作は、史實に忠ならむとを苦心してゐる。三昧の作には、『桂姫』『塙團右衛門』等あるが、共に傳奇的と言ふ外に長所は無い。

更に此の傳奇主義の一變化したものは、村上浪六の所謂撥鬢小説である。彼れは二十四年に『三日月』を出し俠客次郎吉なる者を描いた。尋いて『非筒女之助』『奴の小萬』などを書き、更に『鬼奴』『破太皷』『夜嵐』『深見笠』『鐸の自休』などを日清戰役當時に至るまでに公にしてゐる。其の作は、撥鬢小説と稱せられた如く、江戸時代の産物たる俠客的氣質を極端に誇張したものだ。當時の『早稲田文學』誌上に、『小説學校撥鬢科の教則』と題して、浪六が小説の缺點を嘲つたものは、實に穿ち得て妙である。曰はく、

一、本科の作家たらむものは、筆先にて人を殺すこと棘馬大根を切るが如く心得べきこと、總じて死、自殺、血、美女、意氣地、磊落、不羈などいふ想像を絶えず念頭に蓄ふべきこと。

一、總じて寛活なること、すごいこと、すばらしいこと、強いことに心を注ぎ、兼てやさしいこと、あはれなることに留心すべきこと、所詮剛柔の二面を常住の心得と致すべき事。

一、『鬼の目に涙』『一寸の蟲にも五分の魂』『武士は喰はねど高楊枝』『柔能く剛を制す』などいふ諺を、毎朝斤遇づゝ唱へてよく〳〵服膺すべきこと。

一、言葉使ひはモサ言葉を男子の理想とすれども今更に死語を復活すべきものにあらねば、只精神を彼れにとりて今樣の言葉を用ふる事。

一、總て奴といふ尾語を添へ用ゐて、恰々しげに物すべきこと。『うぬ美人め』『うぬ天人め』『うぬ幸福め』『うぬ風流め』『うぬ文學め』の類なり。總じて喧嘩口調をよしとすること。

此の冷笑的批評を見れば精しく說明せずとも、撥鬢小説の價値は明白てあらう。併し當樣の小説が、何故に一般社會に歡迎されたかと言ふに、一は硯友社一派の寫實小説が漸く千遍一律になりかけ讀者が嫌氣を催し出した故てもあらうが、其は單に一面の觀察、否、極めて少なる原因て、實は日本人の腦底に涵養された武士道的性質と其の變體たる俠客的思想とに一致する點あつたからだ。彼れの措辭は亂雜生硬てあるにも拘らず、殆ど寫實派小説を壓倒せむ許りの勢力を得たのは、全く此の特殊性に契合する點あつた故てある。

傳奇的小説の更に一變化したものは、黑岩淚香の探偵小説てある。二十六年頃からは『鐵面皮』『大金塊』『死美人』『人耶鬼耶』などの卑俗なる探偵小説が彼れの筆に成つた。其の原材料は外國種て、これを巧に日本化したのが其れだ。

二十六七年頃は、實に小説壇の本系は、不振の狀にあつて撥鬢小説、探偵小説などが幅をきかせた。其の傍には遲塚麗水、塚原渋柿園、村井弦齋などが歴史小説を作つて、一部の讀者を集めて居たが、其の勢力は到底異端小説には及ばなかつた。蓋し寫實派は、既に材料に窮して居たから、迚も物與時代の光彩を放つと出來ず、窃かに一變化の工夫を凝しつゝ有つたのてあらう。

第八節　主情的傾向

吾人は此の時代に於ける主情的傾向に注意せねばならぬ。鷗外の著譯共に此の傾向を有し、嵯峨の舍は、二十一年に『海命のすゞ子』を出した後に、『初戀』『流轉』『涙の谷』『腐玉子』『婿選み』などを著はした、此れ等は概ね青春の感情を發露したもので、悲哀に滿ちてゐるものだ。次に宮崎胡處子の『歸省』も其の例だ。

眞面目なる人生の研究は、二葉亭四迷の作に始まり、次いで鷗外、嵯峨の舍の著譯迹によりて皷吹されたが、紅葉、露伴の名聲踈りに廣く傳へられた爲、其の思潮は壓倒された氣味てあつた。去れど確かに一部の青年は、藝術本位を離れ、人生の何物たるかを、宗教的、哲學的、倫理的に思索しつゝあつた。而して其の思索瞑想と結合したものが、獨逸文學より輸入された主情的、悲觀的思想てある。青年として人生を觀ずる場合には、必ず不可解、不滿足のとのみ多い、而も其の胸中には燃ゆるが如き情熱がある。從つて其の表現は、自然の勢として、主情的、エルテル的となる。

此の主情的傾向は、日清戰役前に至つて、漸く文壇の一方に勢力を占有した。高山樗牛の『瀧口入道』の如きも、表面こそ歴史物てあるが、內容は主情的てある。而して最も好く此の傾向を代表するは『文學界』一派てある。

『文學界』は二十六年の創刊て、其の下に集つた青年文士は北村透谷、島崎藤村、戸川秋骨、平田禿木、星野天知などて、田山花袋、岩野泡鳴、馬場孤蝶、戸川殘花等も加はつてゐる。彼れ等には各自の特色があり、其の思想も一樣てないが、主情的てある點は等しい。從來の人生觀に滿足せず、傳習的道德に服從せず、何等かの理想を追ひ、或は戀愛を以つて生命とし、或は藝術美に活きむと試み、恒に煩悶し、苦慮して居る。その神經質なる、ロマンチックたる、センチメンタルなる、要するに人生を眞面目に解釋せむとした結果て、硯友社又は露伴等とは根柢を異にして居る。

新しい人生、藝術的、詩的人生を望むとは、たとひ空想的

なるにしても、人生に對する考は眞面目のものだ、殊に文學界一派の多數は、耶蘇教の感化を受けてゐるから、『人生とは何ぞや』といふ問題に對しては、餘程切實に思索してゐる。併し其の青春時の主情的、空想的人生觀は、とても現實界に實施されべきものでないとは明白だ。そこに煩悶が生ずる、不平が生ずる、苦痛を覺ゆる。而して透谷は其の犧牲となつて、自殺した。此の一派は一人の自殺者を出した程、嚴肅に人生と藝術とを考へてゐた。無論自殺は病的であらうが、而も病的となる根柢には、人生に對する痛切の悲哀が存する。尙ほ彼れ等の主張は、小說に於けるよりも、詩歌の方面に最も好く現れてゐる。

吾人は、此の觀理的傾向が、日清戰役以前に頭角を擡げて藝術的傾向に對峙したとを、最も深い意義を有するものと信ずる。紅、露共に抽象的に人生を觀し、文學界一派も亦、現實を見るの眼孔は無つたが、而も前二者は人生と離れ、後者は、其の欲する人生を實現せむと欲してゐる。而して此の兩傾向が、更に次期の文壇に於いて發展してゐる。

第九節　評論壇の大勢

評論壇は實に賑かであつた。先づ機關とすべき雜誌では、『國民の友』(二十年)『日本人』『文』(廿一年)『柵草紙』(廿二年)『早稻田文學』(二十四年)『文學界』などが發行され、各誌に當代名士の評論文が掲載された。

德富蘇峯は政治方面に其の得意の洋文脈の文章を草し、文學の方面にも亦縱橫に議論し、其の旗下には竹越三叉、山路愛山、塚越停春、平田久、角田浩々歌客等の秀才が集つて、皆な健筆を揮つた。之れと相對して國粹保存的思想を鼓吹したのは三宅雪嶺で、其の壯重なる文章は、蘇峯の文と相對して異彩を放ち、且つ社中には志賀矧川が漢文脈の文章を以つて、日本山水の美を論述してゐた。陸羯南亦同系中の大立物として雄勁なる議論を發表し、朝比奈知泉は『東京日々』に峻嚴なる筆を揮ひ、川崎紫山は盛に龍虎鬼神鐵火などの傑しい漢字を振り廻はし、其の他鈴木天眼、石川幹明、池邊吉太郎等皆な新聞論壇の花形として活動した。

文學に最も縁故深い方面では、森鷗外、坪內逍遙、大西操山、內田魯庵等が、盛に意見を發表した。殊に沒理想に關する鷗外、逍遙の論戰は、空前の大議論で、其れが爲に、文學者の啓發されたとは一方ならぬ。逍遙の沒理想主義と、國外のハルトマン美學本位の論とは、實に幼稚なる文學者に、新知識を授くること多く、其の爲に文壇は長足の進歩をなした。大西操山は哲學者の立脚地より『悲哀の快感』外數篇の美學說を公にし、且つ坪內逍遙と共に、專門學校文學科の秀才を數

育しつゝあつた。金子筑水、島村抱月、後藤宙外、水谷不倒など皆な此處で養成されたのである。內田魯庵の皮肉諷刺に富んだ論評亦當時の一勢力である。

史的研究も亦大に盛で、田口卯吉は『史海』を發行する、民友社からは『十二文豪傳』が出版される、三上高津合著の日本文學史、竹越三叉の新日本史、櫻痴の幕府衰亡論など皆な此の時期に出版された。

* * * * *

文學的活動の初期は此くの如く短期の間に長足の進歩をなし、更に日清戰役の一大刺戟を受けて、新なる活動を試むるに至つた。

第三章　三十年代の文學

第一節　日清戰役と文學

こゝに吾人は、三十年代の文學と題したが、其は便宜上の語で、實は、日清戰役當時より、明治三十五六年頃に至る間を指したのである。

硯友社をはじめ、露伴の勢力は、擬愛小說又は探偵小說のために壓倒された氣味であつた。素より有識者間に在つては依然として、愛讀され、注意されてゐたのであるが、世間普通の讀者は、動もすれば、非文學的の小說に走つて、本體を忘却せむとした。復た事實上、紅葉、露伴等の作は、其の始陣頭に立つた時と、左したる差別もなく、筆千遍一律になりかけてゐた。別言すれば、種子が切れたやうな跡も見ゆる。否だれ氣味と成つたのである。

此のだれ氣味を喰ひ止めたものは、實に日清の戰役であつた。戰爭は、社會の有ゆる方面を刺戟した。從來、現社會とは、深い關係を有して居らなかつた文學界も、亦た其の影響を受けて、盛に活動しそめたのである。

戰役ほど人心を鼓舞するものは他に類がない。勝利の號外出づる毎に、人は歡極つて不知不識に舞り出さむとする。各人の耳目は皆な鋭敏になる。皆な活動的精神に滿ちてゐる。就れも國民的自覺心を起した。國家の發展を希望する。其のためには、先づ自己の關係ある社會方面にて、出來得るだけの活動を試みむとする。而して此の奮闘的、活動的精神は、文學界にも現れたのである。

殊に日清戰役時代に於いては、印刷術が進歩して、雜誌が非常に多く創刊された。『文藝倶樂部』『太陽』『新小說』などの大冊雜誌が發刊されたのは、皆な戰役の餘勢とも言ふべく其の他文學を專門とする大小の雜誌は、月毎に創刊さるゝといふ有樣であつた。乃ち文學者にとりては、活動の舞臺が、大

に擴張せられたのである。新作發表の場所が多くなつたとは、當時の隆盛なる文運を起した唯一の原因でないとは明白であるが、而も有力なる一原因であつたとは疑ふ迄もない。吾人は此の點から看ても、雜誌經營者に、多謝する所あらねばならぬ。なほ雜誌と共に發展したのは新聞事業で、これ亦文運の進歩に貢獻する所は多大であつた。

既に外部には、新聞雜誌の進歩があるに加へて、內部にも有力なる原因があつた。そは明治二十年頃以來の文學的研究其の物である。前期の間に、文壇の人、或は文學志望者が、文學的知識を蓄積しつゝあつたのが、漸く此の時代に至つて立派なる財産となつた。從來の文壇には、假小舍、長屋建のやうの家屋のみであつたが、多年の蓄財に由つて、今は堅固なる土藏が建てられ、玄關構のお屋敷造りが出來たのだ。否知識の肥料は、漸く效を現はして、美麗なる華が咲いたのである。硯友社一派の古文學研究、露伴の佛典研究、或は海外文學の輸入等は、皆な有力なる財源であつた、更に此の好例を覓むれば、帝國大學の文科である。彼の學淵よりは、坪內逍遙、高田半峰、三宅雪嶺などの名士を出した後は、其の後繼者と稱すべき文士を造り出して居らぬが、而も其の長年月の文學的教育は、漸く功を奏し、此の頃に至つて、赤門派と稱せらるゝ一勢力が興つた。高山樗牛、姉崎嘲風、大町桂月、上田柳村、鹽井雨江、武島羽衣、土井晩翠、佐々醒雪等、殆ど時を同うして文界に出で、帝國文學會なるものを組織し、機關として『帝國文學』を發行するに至つた。次に坪內逍遙、大西操山等が薫陶しつゝあつた數多の青年も、此の頃に至つて漸く業成り、文壇に出てゝ活動を始めた。金子筑水、水谷不倒、土肥春曙、島村抱月、後藤宙外、綱島梁川、五十嵐巴川等、濟々たる多士、皆な此の頃の卒業生で、早稻田派と稱せられてゐる。

當時の文壇は、種々の傾向が、互に角逐した時代である。其の大なる傾向を辿つて見るに、硯友社、露伴などの代表する藝術至上主義が第一、早稻田及び赤門二派の代表する眇理的傾向派が第二、文學界一派或は二葉亭四迷の代表する眇理的傾向が第三、齋藤緑雨、饗庭篁村、塚原蓼洲などの代表する俗派等であらう。去れど更に大別して看ると、藝術至上主義派と、眇理派との二つで、其の傍には新聞小說派（家庭小說を含む）が一の勢力を有して居る。なほ更らに適切に言へば、戲作者系統と眇理派とが相對峙したので、其の兩方面の折衷とも見るべきものが、新聞小說派である。

戰役は文壇名士の活動力を刺戟したが、なほ其の直接の結果として見るべきは、所謂戰爭文學である。水陸、天外、鏡花、松葉、弦齋、南翠など、いづれも材を戰爭に取つてゐるのみならず、外山、山、井上巽軒などが、再び奮起して新體詩の革新を企つてゐる。一時文壇を遠除いた老大家すら、若氣を出した位であるから、如何に戰役が、人心を刺戟するとの强烈であつたかを推知し得るであらう。

戰爭は一の興奮劑となつて、文壇を賑かならしめたのであるが、其の盛況は長く續かず、三十五六年頃に至つては、頓に衰弱した。蓋し當然の成行であつて、其の頃より、最近文學に轉ずる徴候が現れてゐる。即ち此の頃に至り、藝術至上派も行き詰り、眇理派も亦た行き詰つて、更に一廻轉しなければ、新生面を開くと出來ない際目になつたのだ。而して廻轉したものが、今の自然主義である。

第二節　寫實派の進歩

前期に於ける寫實的小說は、概ね淺薄、皮相のものであつた。否、寫實の筆を借りて、自己の嗜好を表現したものに外ならず、毫も人生の內部に立ち入つて觀察する所が無かつた。これ其の不振を來した一原因で、今や其の短所を補はむとして現れたものが、所謂觀念小說である。寫實派といふ名目の下に、觀念小說を說くのは、大に矛盾してゐるやうだが、實は其れ等の作家が、描寫上に寫實の筆を使用してゐるから、暫く其の名稱を借用するのである。

觀念小說とは、其の名稱の示すが如く、或る一種の人生觀を現はさむとするものだ。前期に於ける露伴の作の如きも、正に此の類に入るべき物と見ゆるが、而も當時の所謂觀念小說とは趣を異にしてゐる。彼れの作は、理想的、抽象的はた空想的であつたが、觀念小說派の作は、餘程具體的、個性的である。露伴は、或る道義、信念などから割り出して書いてゐるが、此れは或る事件、或る人生の裡に潛んでゐる觀念を表現せむとする。別方面から言へば、皮相的寫實が、一步を進めたものである。

偖て此の觀念小說を代表したものは、川上眉山及び紅葉門下の泉鏡花である。

眉山が二十八年の『太陽』に『書記官』を出したのは、從來の抒情的文學を離れて、觀念小說に轉じた始めて、次て『うらおもて』に其の特色を發揮してゐる。兩者の根柢には、社會の罪といふ觀察が橫つてゐる。私利私慾、名利名聞を逐ふ社會は、處女の操を破り、善人を邪道に導く。善者、美者の意外にも惡と轉じ、醜と變ずるのは、我慾に滿ちた社會の然らしむる所であるとは彼れが當時の觀念である。

鏡花は『夜行巡査』『外科室』（廿八年）の二篇を以つて大名を博した。其の根柢に橫つてゐる思想は、決して珍しいものでない。義務感と戀愛との葛藤が、種々の悲慘なる人生を生ず

るといふほどであるが、其の悽澹たる光景、凄味のある場面、怪異の想などを、巧妙なる筆致を以つて現はした點は、自ら人を魅する力を有してゐる。彼れは其の後『鏡盤夜半錄』『琵琶傳』『化銀杏』などを書いたが、漸次に奇怪、異趣に傾いて自然界を離れ、普通の人間界を遠ざかるロマンチック傾向を生じてゐる。

眉山、鋭花の作は、或る觀念を本として、心理の研究に向つたものであるが、特に左樣の根本思想を設けず、寧ろ客觀的に、はた直接に心理の解剖を出來得るだけ深く進めむと企てたのが、廣津柳浪である。彼れは二十八年に『黒蜥蜴』を著はして其の名聲を高めた。次て『變目傳』『白百合』『亀さん』『今戸心中』『河内屋』『書生腹』『青大將』等外數篇の作を公にして、深刻小説家の名を擅にした。何故に深刻か。彼れは人の性格、體質、境遇等の關係から、幾多の物凄い、はた悲痛の人生が現ずるとを心理的に解剖した。現象の表面を刺さて、隠微の心狀、或は秘奥或は暗黒面、これを精細に暴露せむとするのが、其の目的で、こゝに個性ある人物、特殊の人生が描かれた。眉山鋭花の作は、特殊的觀念を表現してゐるが、人物も社會も概ね類型的である。柳浪の作に至つては、特殊性を發揮せむとを工夫してゐる。而して其の作物には、科學的風潮の影響を認め得る。左に『河内屋』の一節を掲げやう。

清二郎は返事を爲ないで、矢張呢と考へて居る。

自分が亡き者になつて後に河内屋一家の有樣は、何から何迄總てが見えて來る。救はれ得べしと思つたお染は矢張奥の一室に引籠つて、あるか無きかの有樣で、自分が居なくなつた悲痛に窶れて、自分が今想像して居るのよりも尚ほ窶れて、儘かにお花を相手に涙にくれて自分が亡き者になつたのを怨んで居るのが、今現在其聲を聞くが如く見えて來る。一方には兄とお弓とが納戸に小鍋立て爲し痴話狂をして、お染を有るか無きかの者にして、自分を讃り、お染迄も死んで了へがしに扱つて居るのが、あり〳〵と現在今其處に見える樣である。一方を見れば、可哀想で口惜くつて、身も戰慄はれ。又一方を顧みると、憎くつて、怨恨しくて、口惜しくつて身も戰慄れる……

眉山の『松風』（廿九年）以下『富士』『弦聲』などには、狂的分子が加味されてゐる。天才と狂人とは相類して居ると言ふやうの思想を表現し、鋭花は、益す奇異分子を加味して『龍潭譚』『照葉狂言』『醉題目』『化鳥』『鳥物語』等を著はしたが、文章の幽趣を伴ふて愈よ美なるに引き換へ、内容は愈よ變怪異となり、面も神秘と稱すべき域に達せぬ。

硯友社員で、當時詩趣に富み、且つ空想的傾向を有して頭角を現はしたのは江見水蔭である。二十八年の『女房殺し』は

當時の一傑作で、其の他『炭焼の烟り』『兜の星影』『斷橋』『温泉』『狂詩人』など皆な評判高かつた作である。彼れの筆は詩的である。決して抒情詩人的ではないが、空想に富んでゐる而して其の根柢には、社會の冷酷を憤り、弱者に對する滿腔の同情が潜んでゐる。彼れが、社會の下層に沈淪してゐる男女に、詩美のあるを觀取し、同情を以つて之れを現はす點は、該社中の一異彩をなしてゐる。同時に芝居がゝつた叙景が多く、『女房殺し』には其の長短兩面が現はれてゐる。

當時の漣山人には『昭君怨』『焼火箸』『菫日記』等あるが、孰れも前期に於ける皮相寫實を去つて、心理描寫を試みてゐる。併し此の時代の彼れは、小説の方面を去つて、少年文學に一新生面を開かむと苦心しつゝある。漣山人としての活動は、既に此の時を以つて中止とし、改めて少年文學を本城とする大江小波として活動しかけたのである。

更に紅葉の門下としては、小栗風葉が『寝白粉』『亀甲鶴』を出して名聲を高うしてゐる。此の他柳川春葉、徳田秋聲等にも數篇の作品あるが、風葉と共に其の活動は、來るべき時代にあつて、當時には餘り重きをなして居らぬ。

此の時代に於ける紅葉は、最も大なる作を貽した。彼れは戰役前に至るまでは、主として翻案物に苦心してゐた。思ふにこれ其の用意周到なる所である。皮相の寫實に對する非難は、痛く彼れの心を衝いたものであらう。彼れが主として外國文學の翻案を企てたのは、其の思想、其の技巧を修發すべき一方便であつたのであらう。而も其の翻案は、上乘の出來である。『龍船』『夏小袖』『隣の女』『不言不語』『冷熱』の如きを讀めば、彼れが文章家として、はた藝術家として非凡の才能あるとを推測し得る。之れに反して創作上には特に稱すべき程のものが無つた。故に一部の批評家は、早くも彼れを攻撃して、其の想涸れたりと言つたが、實は彼れ窃かに計畫する所があつたのだ。而して其の計畫は二十九年の『讀賣』紙上、『多情多恨』となつて現はれ、更に三十年、長篇『金色夜叉』となつて公にされた。彼れが一代の作には、明治文學史を飾る物數篇あるが、特に此の兩篇は、長さに於いても、深さに於いても、獨得の異彩を放つてゐる。

『多情多恨』は極めて小數の人物と、極めて平凡なる事件と、僅かに百五十日間位の時間を、四十六回、五百餘頁に描寫したものだ。實に大膽なる試みて、其の巧妙なる言文一致と、自然なる心理描寫とは、讀者を倦ましめぬ。世人は柳浪の深刻小説、鋭花の怪異小説、水蔭の詩的短篇などを愛讀して居たが、纏て此の大手腕に成つた寫實小説を見せられたから皆な其の方に引き付けられた。而も次いで『金色夜叉』なる大規模の作が公にされた。彼れが名聲は、既に前期に於いて確定

されたが、茲に至つて愈よ不動のものとなつた。然るに不幸、彼れは未完のまゝにて易簀した(卅六年)實に明治文壇のために痛嘆せざるを得ない。

吾人は茲に『金色夜叉』を細評する餘地を有たぬ。若し簡單に其の長所を言へば、當時の文壇に於ける種々の方面を具備してゐるとだ。戀愛と富貴との葛藤、脚色の戯曲的、心理描寫の深奥に達したる、文章の雅俗折衷體なる、詩的光景に富みたる、而も其の藝術至上主義に據りて極端に走らざる等、實に當代の代表的作物である。去れど當代の代表と謂ふだけだ。前期の皮相寫實が、一歩を進めて心理描寫に轉じた一般的傾向を代表する恰好の作である。而して『多情多恨』に至りては、新時期を啓くべき種子を有してゐる。即ち藝術化を離れて現實に接せむとする傾向が其れだ。左に前者の一節を掲げよう。

宮は其唇に釘打たれたるやうに再び言は出でざりき。貫一は、怯く詰責せる間に彼の必ず過を悔ゐ、罪を詫びて、其身は未か命までも己の欲する儘ならんことを誓ふべしと信じたりしなり。設し信ぜざりけんも、心陰に望みたりしならん。如何にぞや。彼は詫ばかりも然せる景色は無くて、引けども朝顔の垣を離るまじき一圖の心變を、貫一はなか〳〵信しからず覺ゆるまでに呆れたり。宮は我を棄てたるよ。我は我妻を人に奪はれたるよ。我命にも換へて最愛みし人は芥の如く我を惡めるよ。恨は彼の骨に徹し、憤は彼の胸を劈きて、幾ど身も世も忘れたる貫一は、あはれ奸婦の肉を啖ひて、此熱腸を冷さんとも思へり。忽ち彼は頭腦の裂けんとするを覺えて、苦痛に得堪へずして尻居に僵れたり。

宮は見るより慄く遑もあらず、諸共に砂に塗れて掻抱けば、閉ぢたる眼より零落つる涙に浸れる灰色の頬を、月の光は悲しげに彷徨ひて、迫れる息は凄しく波打つ胸の響を傳ふ。宮は彼れの背後より取縋り、抱緊め、撼動して、戰く聲を勵せば、勵す聲は更におとろえぬ。

『如何して、貫一さん、如何したのよう！』

貫一力無げに宮の手を執れり。宮は涙に汚れたる男の顔をいと懇に拭ひたり。

此の期に於いて、特に注意すべきは、女流作家の活動したことである。若松賤子、小金井喜美子、北田薄氷、田澤稻舟、大塚楠緒子、三宅花圃などの閨秀作家は、或は創作、或は譯迹を以つて、女性的感情を表現してゐる。特に異彩ありと稱すべき程のものはなく、只文詞に達者な婦人が、女性の感想——其れも異性の想像し得るやうな平板なものを表現したに外ならぬ。一言すれば熟れもお嬢様の藝だ。而して獨り頭角

を提げて、男作家をして顔色なからしめたのは、樋口一葉である。彼の女は二十五年始めて筆を執り、二十九年に病歿したから活動期は甚だ僅かであるが、而も其の短期に『にごり江』『たけくらべ』『ゆく雲』『埋木』『十三夜』『われから』『わかれ道』等二十餘篇を作した。

一葉は西鶴を學んだが、其の臭味を脱してゐる。其の傑作と稱せらるゝ『にごり江』『たけくらべ』等をはじめとし、多くは女性を描寫してゐる。而も其の女性が皆な血肉ある活きた婦である。從來女性を研究した作は決して尠くないが、多くは其の通有性とか、或は其の特殊性を誇張したもので、現實に見るとの出來ぬ空想的産物であるが、一葉の人物は、孰れも現實に活きてゐる者だ。これ實に彼の女が、藝術的傾向を離れて、如實の人生を研究したからである。勿論其の觀察の範圍は狹少であるが、狹隘の裡に活人物を描寫した。高山樗牛が『露伴の哲學めいたるところ無く、紅葉の通人めいたるところ無けれども、觀察靈あり、文字神あり、天才高く一世に超絶せり』と評したのは、少しく賞め過ぎてゐるやうだが、なほ好く彼の女の長所を傳へて居る。

左に掲ぐるのは『たけくらべ』中の一節である。

此處は大黒屋のと思ふ時より信如は物の恐ろしく、左右を見ずして直あゆみに爲しなれども、生憎の雨、あやにくの風、鼻緒をさへに踏切りて、詮なき門下に紙穀を穀る心地、爰き事さま〴〵に何うも堪へられぬ思ひの有しに、飛石の足音は背より冷水をかけられるが如く。願みねども其人と思ふに、わな〳〵と慄へて顔の色も變るべく、後向に成りて猶も鼻緒に心を盡すと見せながら、半ば夢中に此下駄いつまで懸りても履ける樣には成らんともせざりき。

庭なる美登利はさしのぞいて、ゑゝ不器用な彼んな手つきして何うなる物ぞ、紙穀は婆々穀、藪しべなんぞ前壺に抱かせたとて長もちのする事では無い、夫れ〳〵羽織の裾が土についで泥に成るは御存じ無いか、あれ傘が轉がる、あれを蹴んて立てかけて置けばよいにと、一々鈍かしう歯がゆくは思へども、此處に裂れが御座んす、此裂ておすげなされと呼かくる事もせず、これも立盡して降雨袖に詫しさを、厭ひもあへず小隱れて覗ひしが、さりとも知らぬ母親のはるかに聲を懸けて、火のしの火が熾りましたぞえ、此美登利さんは何を遊んで居る、雨の降るに表へ出ての惡戯は成りませぬ。又此間のやうに風引かうぞと呼立てられるに、はい今行きますと大きく云ひて、其聲信如に聞こえしを恥かしく、胸はわく〳〵と上氣して、……（下略）

心理小說の壇上には、早稻田派の活動が始つてゐる。後藤宙外は、當時に於ける代表者で、『ありのすさび』『闇のうつゝ』『思ひざめ』『亂れ心』『白露』などの作を出した。其の長所は微細なる心理描寫に在る。敢て深刻ならず、また狂的神經質的ならず、感情思想の變移するさまを綿密周到に表現せむと試みた。島村抱月亦『女夫浪』『月最日最』等の作を出したが、美學に囚はれてゐる。理論を本とした小說て、何處に瑕ありと言ふとは出來ぬが、去りとて特色もない。水谷不倒に至りては、新敎育を受けた舊派の人てあつた、其の作には新空氣が少い。兎に角當時の早稻田派は、創作壇よりも、評論の方面に活動してゐた。

* * * *

吾人は此の期に於ける別系統の作家を顧ねばならぬ。而して先づ掲ぐべきは、露伴てある。

彼れは二十六年『風流微塵藏』の大作に着手した。さらに『新浦島』『魔男』などの有名な作が公にされた。此れ等の作に通じた特色は、滔々たる寫實主義の小說に對して、詩的哲學的思想を發揮した點にある。前記に於ける小說は、なほ幼稚て、抒情的、空想的てあつたが、今は數段の進境を示して立派なる理想小說となつてゐる。以前には現實を顧なかつたが、今は現實を味つて、それより或る高遠なる思想を抽象してゐる。固より其の手本には佛敎文學あるが、現實を知ると同時に、其れ等の知識が、巧妙壯麗になされて來た。これ實に當時に於ける一異彩てある。彼れの當時に於ける作は『露伴叢書』（卅五年）に集めてある。

當時の美妙は、惑星の如き位置に立つて、寫實小說を作つてゐる。『お千代』『毀旦那』『若白髮』など、評家の間に問題となつたが、其の文章——一流の言文一致が圓熟した外には長所なく、殊に描寫された人物には輕薄のもの多く、讀者の同情を惹く力が足りぬ。一言にすれば、厭味の多い人間が表現されて居る。綠雨に至つては、益す其の毒筆を揮ひ、『甲面』『雨蛙』などを出して、銳利辛辣の嘲罵冷笑を、文學者、書生、細君などに向けて居る。實に此の二篇は、諷刺小說として、最も好く彼れの長所を發揮したものだ。而して其の門には小杉天外を出した。彼れ其の師に倣つて諷刺小說を物して居るが、綠雨に及ばざると遠い。否、此の時代の彼れは、自己の長所を知らずに餘計の骨を折つて居たのだ。

露伴を中心とした作家には、客將として松原二十三階堂、運塚麗水、門下生として米光關月、中谷無涯、田村松魚、藤本夕鷗など各其の作を公にして居る。殊に鷗水は紀行文家として聲名を博し、小說としては『半月城』『さんざ時雨』『照日松』等を著はした。されど文章の美が長所て內容は幼稚だ。

浪六は『たぞや行燈』『五人男』等の傳奇小說を作し、弦齋も俗受專門にて『衣笠城』『日出島』『小猫』『深山の美人』などを作り、涙香は漸く探偵小說を去つた。此の他三宅青軒、藤本藤陰、南新二、南翠等、舊思想を本として、作し澁柿園は、歷史小說に進境を示し、松葉は滑稽を專門としてゐる。

* * * *

當時に於ける文學界の一派は、小說壇に如何なる位地を占めて居たかと顧るに、寫實派全盛のために、壓倒されて居た獨り田山花袋は小說上に詩的空想、失戀、煩悶などを表現してゐる。而して藤村は詩の方面に立て籠つてゐる。人生と藝術とを契合せしめむとする所に、大主旨を置く一派は、考だけ眞面目てあつて、現實に接近すると爲さなかつた。併し其の一生懸命に、人生問題を考へてゐる點は、寫實派とか、或は理想派とかゞ、通がつて見たり、或は諦めて見たりする態度よりも、遙かに深い意義を有してゐる。

吾人の所謂理的傾向を代表して、而も現實的人生に接觸してゐる二葉亭四迷は、主して露國文學の紹介を勉めてゐる『浮草』『片戀』『肖像畫』『親心』『腐れ緣』などのツルゲネフ物を、獨得の緻密な文章て飜譯した。また鷗外は『即興詩人』の反譯を『目ざまし草』に掲載した。なほ文學界一派の天知、孤蝶、秋骨等は南歐文學の優婉なるを紹介し、柳村は『帝國文學』に英佛の最近文學、殊に新ロマンチック傾向を紹介してゐる。

第三節　時代精神論

寫實小說の變遷なる觀念小說も、心理小說も、一時は花を咲かせたのてあるが、遂てまた型に狎つて終うた。元來前期の末に於いて、既に淺薄なる寫實小說を非難する論が生じ、其れに對するものとして、前記の小說が勃興したのてあるが尙ほ未だ人心を滿足せしむるよが出來なかつた。そは何故かといふに、現實的人生を離れて居るからてある。

三十二年の末に、露伴が『國民新聞』記者に語つた所は、實によく寫實派の缺點を指摘してゐる。

『今の小說の讀者は、お嬢樣にあらざれば、書生、書生に非れば親の脛かぢりのみ。作家の目當とする所の讀者豈是の如くにして已むべけむや。尙も作家として世に立ちしもの、少くとも三十歲五十歲以上の所謂世間の人に感興を與ふるの作なくして可ならむや云々。』

實に當時の小說なるものは、總てを通じて嬢樣や書生の如き現實的生活に觸れぬ人々を讀者としてゐたのだ。表面から言へば、如實の人生が描寫されてないのだ。當時某大家が、星亨を泣かせる樣の作を出さねばならぬと言はれたが、其の頃

の小說は、星享どころか、極めて平凡なる中年者をすら滿足せしむる程のとも出來得なかつた。只一部の青年少女、或は花柳社會の者が喜ぶだけで、他は評論家が、義理に讀む位のものであつた。(固より其の間には出色の作もある。)

現代小說が現實に遠いと言ふ非難は二十九年の末、或は三十年の初め頃、既に一部の評家の間に起つてゐる。『早稻田文學』の如きは其の代表と見るべきだ。其の主張に依れば、現代小說家は、更に密接に、實世間を研究せねばならぬと。その論は具體的でないが、兎に角、取材の範圍を擴張せよ、政治、教育、宗教、實業等、有ゆる方面に其の材料を探れ、と言ふ位の漠然たる意味であつた。

其の警戒は漠然たるものであつたが、反響は起つた。所謂社會小說なるものが其れである。是こに於いて人生と藝術とが漸く接近する端を開いた。而して其の先導者として現はれたのは內田魯庵で、三十一年の暮『新著月刊』に掲載された『暮の二十八日』は其の最初の試みであつた。爾來彼れは、『霜くづれ』『片うづら』『落紅』『電影』等の作を公にした。魯庵は、單に創作上のみならず、議論の上にても、社會の實相を描寫すべしと主張し、創作上には新舊思想の衝突を描き來つた。『浮雲』の脉は、是に至つて復活したのである。

更に此の社會小說の風潮に乘じた物には、宙外の『腐肉團』風葉の『政駑』、秋聲の『惰けもの』などがある。また硯友社本系の作にも柳浪の『非國民』、思案の『五濁惡世』、小波の『從五位』などは、綠雨、天外以外に社會を諷刺せむと企つたもので、矢張り一面は實社會と小說とを接近せしめむとする現象と見るべきであらう。

外形の描寫は兎も角も、內容を重んぜよ、想を養へ、材料を多方面にせよといふ呼び聲は、三十年頃高山樗牛、金子筑水等の主張した所で、一部の作家は其の方面に走つたが、大名ある人々は、餘り多く意に介さなかつたやうである。而して其の實世間との接觸を主張する考は、三十二年に至つて、高山樗牛の時代精神論となつた。曰はく、

『古今東西の文藝史上動かすべからざる一個の事實は、大なる文學は大なる人物と等しく、最も好く時代の精神を代表せる者なり、といふと是也。所謂時代の精神を代表する事を翻じて、直に世俗の好尙を迎合するの意に解せば、恐くは語弊あらむ。唯能く當代國民の感情及び歎求に最も明瞭なる發聲を與へ、其の惝怳する所の前途に最も具象の體形を附し『見よ爾等の理想玆に在り』と告ぐるものあらば如何云々。

其の意味は、當代の作家が、政治、宗教、學術の社會には無頓着であつて、其の描寫する所は、三面雜報を引き延したものに過ぎぬとの事である。併し彼れの所謂時代精神とは、如何なるものであるか。其は實に曖昧であつた。彼れは前年に、日本主義なるものを立て、これ國民の理想とする所たらざる可からずと主張して居るが、時代精神とは其の日本主義のことであるか、或は別に何等かの精神を指したのか、其の點は、充分に說明して無い。故に一方からは其の反對意見が出て、議論に花を吹かせた。駁論の主意は、要するに次の樣である。いかに時代精神を描けと言ふとも、日本の如く思想の激變する所では何を捕へて時代精神となすべきかゞ不明である。且つ理想と言ひ、精神と云ひ、要するに抽象的であるから、これを藝術上に表現するは、個人化せねばなるまい。さらば今日の作家の試みつゝある所、また決して其の要求に背くもので無いと。念ふに時代精神を描けと言ふ意味は、或る理想とか、精神とかを含蓄せよと言ふよりも、寧ろ現實的人生に切實なれと言ふ意味を、別方面から述べたものに外ならぬ。

兎に角に、時代精神論は、文學と現實の人生とを一致契合せしめむとする傾向を起して居る。『浮雲』を先鋒とする窮理的傾向は、是に至つて大に活動すべき機會に接したと言ふべきである。而して其の傾向の一變體たる文學界系統は、此の時、漸く現實を顧るに至つた。從來其の眼に映じなかつた現實が、そろ〳〵寫つたのであるから、眞面目になつて其の研究に取り掛つた。表面上に、實世間と接近を代表した者が魯庵、宙外、風葉等とすれば、藤村、花袋等は、窃かに現實研究に着手しだしたのである。

* * * * *

所謂社會小說なるものは、新生面を開いたに相違ないが、なほ社會に於ける勢力は、從來の藝術派に及ばなかつた。否寫實派系統は、盛に種々の佳作を公にして居る。

紅葉は『金色夜叉』のために苦心してゐる。其の門下にして、師の俤を傳へた風葉は『戀慕ながし』『かつら下地』等に、戀愛に支配せらるゝ青年主人公の末路を描いてゐる。抽象的であるが、寫實の筆は、好く事件を活動せしめた。柳浪に至つては實に多作だ。『縺れ糸』『骨ぬすみ』『紫被布』『亂菊物語』『二人やもめ』など評判の高い作である。併し何れも前代を追うた作で、特に新しい點はない。勿論其の描寫の進步したのは言ふ迄もないことだ。

泉花に至つては、愈よロマンチック傾向を發揮してゐる。『錦帶記』『湯島詣』『高野聖』『通夜物語』『黑百合』『三枚續』等皆な例の奇異分子を表現したもので、其の他面には、意氣肌、傳法肌を加味してゐる。此の後の彼れが作皆な同一の調子で文章の魅する力は、例に由つて優れてゐる。否、言文一致を以つて、詩的興味を惹起せしむる力は、其の師紅葉に優ると

も劣ることが無い。但し其の神秘なるものは、宗教的、哲理的たらずして、寧ろ迷信的、妄想的であつて、若し文章の力が無つたならば、お伽噺に變ずるものだ。

宙外は『緣不緣』『新機軸』等に次いで『遺る光』『乳母が家』等の作を出した。これらには社會的觀察もあり、また田園生活の美趣を表現してゐる。其れ等の作及び最近に至るまでの十數編は、近刊の文集『裾野』中に收めてある。

第四節　文壇の變徵

當時の文壇は中々に賑かである。創作の方面には、既記の諸家が健筆を振つてゐる。また論壇にあつては、高山樗牛、姉崎嘲風、金子筑水、島村抱月、綱島梁川等が諸種の問題に就いて討論してゐる。重なる論題には、日本主義、歷史的繪畫、月光美、社會小說、時代精神などが有る。

されど何となく、一面には淋しい感を起さしむる現象が見えて居る。多年文壇を啓發し來つた『早稻田文學』を始とし『國民の友』『新著月刊』『世界の日本』などいふ有名の雜誌が相續いて廢刊された。而して多年文藝界に幾多の教訓を與へられた坪內逍遙は、

『今や社會の事日に非にして、頽波滔々たり、文運の開拓を以て任ずる者の覺悟またおのづから異ならざるを得んや。切に言へば、社會の根柢に一道の生命を點ぜざる限りは、之れが表現たる文學や美術や、また言ふに足らざらむとす。吾人は此に見る所ありて須らく文壇を退き社會、教育の方面に全精力を移さむとす。』

と言ふ情ない辭を形見として、教育界に去つて終うた。文壇は、明治文壇の開祖逍遙から見棄てられたのだ。鷗外は東都を去つて九州に赴いた、紅葉は病氣の人となり、『煙霞療養』でお茶を濁してゐる、露伴は坐禪を組んだ如くに默した。帝國文學會の秀才は、大多數まで帝都を辭して、地方各種學校の先生となつた。更に論壇には、文士の生活問題といふ心細い題目が浮び出た。宙外は田園に引退――或る意味に於いては都落ち――すべしと論じ、且つ自ら實行した。

これでは實に舞臺が淋しく見ゆるでは無いか。大立物は引き込む、花役者は都落ちする、愚痴をこぼす。當時樗牛が、『文壇日に非なり』と慷慨したのは無理ないことだ。併し其の原因は那邊に在るであらうか。

一原因は、戰後に於ける經濟界の衰頽である。例の財界恐慌は、やがて文壇にも響いて、雜誌界の不振を來したとは、蔽ふべからざる事實であるが、其は單に一理由で、他に有力なる原因がある。これ文壇其の物が、行き詰つて終うたことだ。別言すれば、充分の素養なく、堅固なる道念なく、只才

氣一點張にて活動すとも言ふべき狀態に在つたからだ。そは逍遙が、文壇を辭する詞にも明白に現れたゐる。當時教育社會からは、文學に現れた道德的水平線の低いことを譏つたものがあり、或は女學生に小說閱讀を禁ずべしなどいふ議論すら出て居る。元より其の一面は偏狹なる教育者氣質から推論されたものであるが、而もなほ一面の眞理を含んでゐる。實に當時の小說には、傳習的或は抽象的倫理觀か、去もなくば根柢を花柳社會の人情に置く樣のものが有つた。これ實に文壇其の物の爲に寒心すべきことである。其の低い思想を向上せしむるには、必ずや積年の修養を要する。然るに其れが無い。

更に他の方面から眺めると、當時の文士は、此の頃に至つて漸く現實的生活、如實の人生に觸れて來たのだ。從來も大に人生を知つてゐる積りであつたが、其は多く空想的人生か然らずんば小主觀を本とした人生であつだ。然るに其れが動かすべからざる現實に遭うて、壞れてしまふた。日清戰役以後の社會は、大に動搖し、その動搖の浪に飜弄されたのが、文學者で、彼れ等は漸く現實世界なるものを見初めたのである。是に至つてか、藝術至上的傾向も、或は空理空想に走らむとする窮理的傾向も、大に狼狽するに至つた。實世界に觸れよと言ふ論旨は、要するに此の現實を見たからのこと、而も當時其の方面に突進して、飽くまでも所信を貫かむとする程の覺悟ある人は無つた。また實力もなかつたのである。實に此れ等の原因は相結んで文壇の變徵を造つたのである。

兎に角、時代は戰後の結果、自覺心を起すと同時に、嚴肅なる道德問題を考慮するに至つた。而して文學上にも、道德的意義（敢て狹義に言ふのではない）の深遠なるものを求めたが、滿足すべきものを得なかつた。また作者の方面からも之れを提供することが出來なかつたのである。

かく文學內に道德を讀み込まむとする傾向の生ずるに當つて、頭角を擡げたものが、家庭小說である。而して其の代表的作家は德富蘆花、菊池幽芳、中村春雨、田口掬汀等である。諸氏の作は、皆な道德的觀念を基礎として、婦女子の同情を惹くべき樣な葛藤を寫したもので、吾人は新聞小說の最も發達した形式と見做す。第一者の『不如歸』『黑潮』、第二者の『己が罪』『若き妻』『乳姉妹』、第三者の『無果花』第四者の『片男波』『伯爵夫人』『人の罪』などは、孰れも上中層の社會を描寫し、淸き戀愛、悔悟、友情など、所謂家庭道德の美を發揮せむとするものだ。『不如歸』の如きは、賣れ行き最も多く、幾多の姫樣令孃、女學生を泣かせたものだ。元より泣かせるやうに仕組んだものであるが、著者の胸底に於けるトルトストイ流の思想は、慥かに其の作の命脈を保つてゐる。其の他の作物に至りては、事件を主とし、美しい女學生を窮狀に嵌め

込んで見る、或る場合には、家庭小説の名の下に、若い男女の血を動かさむとするやうな書き振りもある。德川時代の小說は、照天姬などいふ主人公を様々の苦境に陷れて、讀者の同情に訴へむとするものあるが、其の脉の最も好く發達したのが此れ等の小說であらう。草村北星の『濱子』亦此の一例である。

此の道德的、家庭的、理想的小說に反抗して起つたのが、小杉天外の寫實主義的小說である。彼れは『蛇いちご』、『ひだり繩』に次て三十三年に『初婆』を出だし、次いで『女夫星』『戀と戀』『はやり唄』『新學士』を公にし、更らに三十六年以後には有名なる『魔風戀風』、『新夫人』、『にせ紫』、『コブシ』などを書いた。其の主張は、『はやり唄』の序に、

自然は自然である、善ても無い、惡ても無い、美ても無い、醜ても無い、たゞ或時代の或國の、或人が自然の一角を捉へて、勝手に善惡美醜の名を名けるのだ。小說また想界の自然である、善惡美醜の孰れに對しても、敘す可し、或は敘す可からずと羈絆せらるゝ理屈は無い、たゞ讀者をして、讀者の官能が自然界の現象に、感觸するが如く、作中の現象を、明瞭に空想し得せしむれば、それて澤山なのだ、讀者の感動すると否とは詩入の關する所て無い云々

とあるを以つて明白だ。其の主張は、今日の自然主義に類してゐる、まだゾラに從つて、心身上の遺傳なども書いてある併しなほ虛構の跡が非常に多い。殊に『魔風戀風』に至つては、家庭小說流の趣を呈して、何等の痛快なる描寫もない。吾人は天外の主張を諒とすると共に、其の作は虛構に富み、殊に最近に至るに從つて、新聞小說張となるを遺憾に思ふ。さはれ蘆花に對して、星菫的時代（第五編參照）の氣風に投合し、大膽に戀愛中心の小說を作つたのは異彩てある。

第四章　自然主義の勃興

寫實派も、理想派も共に不振の間に、佛蘭西に於ける寫實主義を新たに唱へた人は、小杉天外て、彼れに由りて寫實といふ意味が一步進められたのは、承認せねばならぬ。而して此れと相並んて、一般讀者界を支配したものは、家庭小說て蘆花、掬汀など之れを代表する。

されど三十五年前後の文壇を眺めると、實に心細いやうの感がする。先づ第一に眼に映ずるは、逝ける文士の多いとてある。大橋乙羽は三十四年に、正岡子規、高山樗牛は三十五年に、尾崎紅葉、落合直文は三十六年に身退つた。いづれも一方の驍將たりし名士が凋落したのは、文壇寂寞の一原因てあつたに相違ない。

而して前時代より名聲の高い諸作家は、如何なるものを作してゐるかと言ふに、露伴は『天打つ浪』に着手し、健筆の柳浪は依然として『松原饅頭』外數篇を作し、眉山人亦『石卷庄左衛門』『凡人界』などを草し、鏡花は『白羽箭』以下數篇を作し、宙外は『會津ぶし』を出し、春葉漸く其の長所を發揮して『忘れ水』外數篇に穩和なる家庭物を作し、秋聲亦其の技倆を發揮し『桎梏』等、現實的人生に接近せる作數篇を出した。小波は今や全く少年文學專門の人となり、たゞ其の餘暇に戲曲を試みる位のもので、其の門下には葵山、湖山、尾上新兵衛、渚山等を出してゐる。水蔭亦其の健筆を縱橫に揮つてゐるが、其の筆端愈よ圓熟し、短篇に奇拔なる光景を表はす外には、內容上の進步を見ると出來ぬ。作の數から言へば、決して少數でない。されど文學的冒險小說を創めむと工夫して居る。而して同樣の文學には押川春葉が數篇を出して居る。

此の時に當つて、自然主義なるものが、漸く其の頭角を露はしたのてある。天外一派のものとは、多少意義を異にした自然主義は、田山花袋の『重右衛門の最後』、島崎藤村の『老嬢』『舊主人』『水彩畫家』などに見え、また國木田獨步の短篇に瞭然として現はれてゐる。加之花袋の如きは、『露骨なる描寫』（三十七年二月）といふ題の下に、大膽に排技巧說を逃べてゐる。一方には文壇の大家にして永眠するものがある。健在なる作家も、以前の如き勢を以つて作せぬ。而して他方には、從來作家としては、低い位地にあり、且つ世間から餘り多く稱贊せられなかつた一群が、何となく不穩の反抗的擧動に出て居る。これを見るに、何となく文壇は、一轉化するてあらうと豫知されたが、果して急激なる一大廻轉をなした。

日露戰役は、ひとり日本史を廻轉せしめたのみならず、世界の文明を一轉せしめたが、同時に日本小說壇をも一變せしめたのてある。

日露戰役後に於ける文壇の變轉は、極めて急激て、自然主義的思想の作家は、檻を出てた野獸の如き勢を以つて活動しそめたのてある。逍遙が模寫主義を唱へ、紅葉、露伴が轡を並べて陣頭に現れた時代と雖も、變轉の調子は、自然主義勃興の如くに急激ては無つたてあらう。

斯くの如き急激なる變化は、決して偶然の出來事てなく、相當の原因を有してゐるのてある。而して其の一原因と見做すべきは、海外文藝の輸入てある。

第一節　海外文藝の紹介

日清戰役後、東西交通の便、愈よ頻繁となるに從つて、海

外の新著が陸續として輸入せられた。前時代に於ける紹介は主もに古い時代の文學であつたが、三十五六年以後には、彼の地に於ける當代の新文學が、隆に輸入され、今迄は歐米の文學雜誌を通じて覗つてゐたことを、直接に研究して得る道が開けたのである。

海外文學紹介に與つて力あつたは、『帝國文學』『新小說』『早稻田學報』『太平洋』『學燈』及び本誌等の雜誌で、筆者には姉崎嘲風、上田柳村、登張竹風、田山花袋、內田魯庵、長田秋濤等あり、また本誌記者も大に努むる所があつた。

先づ如何なる外國文學が、三十五六年頃より日露戰役を經て今日に至るまでに紹介されたかを列記して見やう。

露西亞文學にては、プーシユキン。ツルゲネーフ。トルストイ。ドストエウスキー。ゴーリギー。アンドレーフ。チエホーフ。メレヂユコースキー。クロポトキン。ガルシン等で、就中戰役前後に於いては、ゴーリキーを愛讀する者非常に多く、其の短篇は、數人の手によりて飜譯された。固より多數は、英譯を本としてゐるが、二葉亭四迷、瀨沼夏葉、昇曙夢、山田枯柳、佐藤北萍等は皆な直接露文より反譯してゐる。

佛蘭西文學にては、ゾラやゝ棄てられ、モーパッサンが全盛である。其の他には、ヂユーマ。ブールゼイ。ドーデー。フローベル。バルザック。ホイズマン。アナトール、フランス。ユーゴーなどが各所に紹介され、また愛讀された。而して佛蘭文學系統に屬すべきメーテルリンクの戲曲並に感想文共に、種々の雜誌に反譯され、殊に其の劇『モンナ、ヴアンナ』は、川上一派か演じた位である。

獨逸文學では、ニイチエ。ワグネル。ハウプトマン。ズーデルマン、古くはゲーテなどが誰れの口の端にも上るほど流行した。

伊太利文學にては、濃艶なるダヌンヂヨーをはじめ、フオガザローなどが紹介された。殊に前者の『死の勝利』『犧牲』の如きは廣く讀まれたものだ。

波瀾文學にてはシエンキヰツチ。女作家オルツェスコー。など大に持て囃された。前者の『クオ、ヴアヂス』は、今なほ多くの愛讀者を有し、其の反譯も出た位だ。

北歐文學に至りては、イブセン。ビヨルンソン。キヤケゴールド。ストリンドベルヒ。ブランデスなどの、艶氣少なく、峻烈なる戲曲小說史論が、青年文士の間に歡迎された。

英米の文學では、シモンス。ゴツス。ベルナード、ショウ。ヒネロ。メレヂス。キツプリング。ホイツトマン。マーク、ツエーン。アラン、ポーなどが紹介され、古代では沙翁も屢ば繰り返へされた。

實に現代世界文壇上の名作は、殆ど一時に悉く輸入された

と言ふも不當でない位である。就中文壇一般に、尠からぬ影響を及ぼしたのは、ツルゲネフ。ゴーリキー。イブセン。ハウプトマン。ダヌンヂヨなどである。またメーテルリンクに至つては、詩壇に新刺戟を與へてゐる。

斯くの如く海外の小說戲曲の讀まるゝに對して、一部の間には、讀書子の輕薄を嗤ふ者あつた。たしかに當時、外國語の出來る者は、樗牛の謂つた如くであつた。

『近頃の小說見るに足るべきもの絕えてなし、好いの惡いのといふ丈が野暮也……是に於いてか文字無き俗衆か講談物に走るが如く、少しく敎育ありて、外國文學などの趣味を解せる人は、自國の文學を手にするを恥とするの傾向あるに至れり。彼れ等動もすれば曰く、我れ等若し小說に渴へば、ゾラ、ズーデルマン、シエンキーヰツチ、凡て思ひのまゝ也、何を苦んで今の紛々たる作家の子供らしき製作を要せむやと。』

こは少しく樗牛一派の誇張の筆であるが、而も傾向は確かに箇樣であつたのだ。併し其は單に新奇を味はむとする輕薄なる好奇心、流行好みから出たものではない。實に當時の我が小說壇は、同じ樣の心理分析、同じ樣の人生のみを繰り返へして居たのだ。いづれの小說にある人物を見ても、或は事件を眺めても、復たかと思はるゝ程、單調で、無變化で、鑄物的であつたから、少しにても嗜好の發達したものは、外來の清新なる文學を歡迎したのである。

外來の文學にして、第十八世紀か、或は第十九世紀中葉頃に至る間の產物であつたならば、誰れも喜ばなかつたらう。ロマンチツク文藝の如きは、既に飽きる程、詰め込んでゐるのみならず、日本にも其の種の文學はある。然るに新來の文學は多く第十九世紀末代の思想動搖を本としてゐる產物である。宗敎、道德の權威失墜し、主心哲學も、科學も、社會主義も、皆な人心を滿足するの力なく、各個人は、各個人の好む所に隨つて進んだのが、此の世紀末で、種々雜多の思想が醱酵して居た。或は神祕主義、或は個人主義、或は表象主義、デカダン、本能主義、それは〳〵實に種々のイズムが樹てられて、各々我を捨てぬ。而して此れ等を統一すべき一大思想なるものは無い。若し有りとすれば、廣義に於ける個人主義であらう。

斯くの如き雜多の思想は、堤を破つた洪水の如き勢を以つて我が文藝界に流れ込んだ。されど其の水は濁つて居らなかつた。泉源の如き清冷なる流れで、而も澁した水道の水のやうに無味淡泊の物でもない。皆な其れ〳〵に何等かの鑛物性を含有してゐるものだ。されば或は其の內には、有毒の流れもあるかも知れぬが、兎に角新鮮で、烏これに浴したやうの

濁つた水てはない。而して其の中、最も影響が大きく、且つ自然主義の勃興に與つて力ある者はニイチエ哲學てあつた。

第二節　ニイチエ思想

フリードリヒ、ニイチエの哲學が、我が國に紹介されたのは明治三十年頃てある。併し當時には何等の反響をも起さなかつた、否、當時の人心は未だニイチエを解するだけの力がなかつたのみならず、其の哲學が痛切に響なかつたのてあつた。然るに三十三年の八月に至り、其の計音傳へらるゝと共に、其の思想は再び研究され、卅四年には、高山樗牛が論文『文明批評家としての文學者』となつて現はれ、更に美的生活論となり、本能滿足主義となり、轉じて彼れは清盛、日蓮の生涯に、意志發展の實例を述べた。

彼れのニイチエ主義一たび世に出づると共に、諸方に反響が起つた。其の有力なる者には『馬骨人言』(坪内逍遙)がある。登張竹風はニイチエ主義て、盛に放言したが、そは寧ろ滑稽の觀を呈してゐる。殊に可笑しいのは、當時ニイチエの評傳と『ザラフストラ』の飜譯とを始めたと言ひながら、如何なる事情あつてか、未だに出版されたことを聞かぬ。思ふに樗牛は、眞率に彼れが哲理の本能發展、個人性發展を味つた人々の代表て、竹風は、青年の客氣を礎として彼れを無上に難有く崇拜して、太鼓打つた一派の好代表てあらう。併し此れ等論爭の事情は別問題として、直に其の歡迎せられた所以と、文壇に及ぼした影響とに就いて數言を述べやう。

樗牛は曾つて日本主義を唱導した。日清戰役の後、幾許もなく日本主義、即ち國家主義を奬勵してゐた。國家主義とは個性を沒却して、國家のために盡すべき主義てある。然るに彼れは其の主義を唱へてから、幾年をも經ざるに、個人性の發展を主張してゐる。實に急激なる變化ではあるまいか。皮相の觀を以つてすれば、彼れは實に、衒奇の心に滿ちてゐたために、ニイチエを擔ぎ上げたやうに見ゆるてあらう。去れどとは樗牛一人てはなくして、或る一部の傾向を代表してゐるものだ。彼れは勿論のと、其の他、一部の有識者は、理想的、世界的、空想的思索をなして、人生觀を作つて居たのてあるが、漸次に現實に接觸すると共に、從來の空想的人生觀を、或る具體的性質のものに變造せねばならぬとになつた。こは當然の結果てあるまいか。吾人にして、現實を知る限りは、理想的、超自然的、空想的人生觀を抱くとは出來ぬ。何等かの形體を構成せぬ以上は、滿足すると出來ぬてはないか。偶ま日清戰役あつて、それより以前に勃興した國粹保存思想と結托し、こゝに從前に比すれば、稍具體的に人生觀を抱くに至つたのてある。要するに自我は、國粹保存主義の起ると

共に從來出世間的性質を帶びてゐたものが、國家的となつたのてある。即ち國家的、國民的自覺たるものは、自我の落着き場所を明確にしたのてある。

されど自我は、國家主義を以つて滿足するものか。一たび自我を覺つたものは、國家といふ大範圍に滿足すると出來ないてはないか。如何にしても、尤も明確なる自己一身内に歸らねば、迚も其の滿足を得ると出來ぬてあらう。我といふ觀念が、國家といふ範圍内に擴つてゐる間は、まだ〳〵充分に自己を覺つたものてない。併し早晩自身に歸らねばならぬ傾向を有してゐるとは明々地たるものだ。樗牛をはじめ、多數の自覺者は、ニイチエ哲學の輸入せらるゝ頃に於いて、既に自己に歸らむとする傾向を有してゐたのだ。

樗牛は頻りに時代精神なる語を用ゐた。併し彼れ自身は、其の時代精神の何物たるかを說明し得なかつたが、今日より見れば、個人性を發揮せむとする傾向のとだ。而して偶まニイチエの哲學に接した爲に彼れは、其の時代精神に、明白なる名稱を附するとが出來たのてあらう。要するに、日清戰役に依りて自覺した我は、空漠たる觀念より轉じて、國家と云ふ範圍内に凝結し、更に收縮して、一個人内にこり固まつたと謂ふべきてある。

偖て此の個人性發揮は、如何なる影響を文壇に及ぼすてあらうか。多言するまでもなく、個人性の反抗的態度は、其の影響に外ならぬ。從來證典、模型として敬尊された事物、すべてに對して、個人の感想を立つる、決して或る命令に服從せぬ、證典に據りて自己の思想感情を曲げぬ。自我は飽くまても自我を立てねばならぬ。そこに文明の進歩、藝術の進歩が生ずる。恰も第十九世紀初期のロマンチシズム一派が、擬古派に對して其の自我を全うし、獨立獨行せむと企てた如く、自己保全、自我發展の哲理、而も詩的に敘述された此の教理に接した者は、皆な其の實行を計つたのてある。

加之、前記せる外國文學中には、習慣的、宗教的、或は傳說的宗教又は倫理法に反對して、個人性を全うせむとする思想を述べたものが多い。イプセン主義とは、强力なる個人性を發揮する所に、文明の療法ありと主唱するに在る。ハウプトマン、ズーデルマン、共にニイチエの影響を受けた人て、後者は『故郷』に、前者は『沈鐘』に、同型の思想を含ました。ゴーリキーに至つては、尚更らに傳習的道德法に反抗して、所謂學者、哲人の迂惡なるを嘲つてゐる。尚ほ評論家ブランデスの著述の如きも、キャケゴールド、又はニイチエの思想に類した個人性發展の思想を含有してゐる。

自我發展說は、時代の證典に屈服せぬ、先例を守らぬ、己れの好む所に從つて進むといふ風潮を起した。而して其は、

文學の形式上のみならず、內容上にも、大なる影響を及ぼしてゐる。從來は美なる文章といはれた物も、或は藝術的內容と稱せられた者も、皆な威嚴なきものと成つた。個人性に適合せぬ限りは、如何なる物にも美を發見せぬ。個人の善美とする所、それが唯一の美、最上の善であるといふ思想は、暗々裡に養成せられたのである。

自我の獨立、また發展を思惟すると共に、各個人が、社會人生を見る態度は全く一變して了うた。コペルニカスは天動說に對して地動說を說いたが、自我中心說は、其の反對に、自己を中心として何物をも觀察する風潮を起した。從來は或る證典とか、學理とか、或は習慣的倫理法、宗教的眞理を中心として、其の周圍を廻轉しつつあつた。然るに自我の尊きを知ると同時に、今度は反對に、我れを中心として、萬物諸件を看取するに至つたのである。恰も天動說を逆にして、地動說を奉じたやうのものだ。日月星辰は、すべて皆な此の自我といふ地球を心棒として廻轉しつゝありと言ふが如き、即ち此の思想である。

第三節 大破壞

一たび自我を發見した思想は、從來の思想に向つて、大破壞を實行せねばならぬことに成る。こは當然の勢だ。

吾人は前節中に、文壇に於ける二傾向、即ち藝術的と窮理的との二傾向を說いた。此の二傾向に對して、自我は如何なる態度を取るべきであるか。否、三十七八年以後の自覺せる自我は、如何なる態度を取つたのであるか。

吾人は此の點を考慮する前に、先づ自我と現實との關係を檢して看ねばならぬ。

維新後の大勢に就いて言へば、明治廿八年頃に至るまで、自我は殆ど空想世界に遊んで居たのだ。勿論或る一部の人々は、現實の捕虜となつて、徒らに利慾を追うてゐたのであるが、多數人の自我は、空想的、詩的世界に優遊してゐた、政治的方面に於けるも、或は文學界に於けるも、皆な現實を知らずして、只其の空想の實行を試みむと企てゝ居たのだ。其の好例は民選議院の建白書だ。民選といふことは、必要に迫られて起つたもので、眞似では三文の價すら無いものだ。而して當時の我が國には、民選議院を設置すべきほどの必要は、毫も無つたのでは無いか。然るに彼れ等主張者の自我は、西洋崇拜の熱に犯されて其の事を主張してゐる。現實的人生を知らざるも甚しと謂ふべきだ。而して文學者に至りては、尙ほ更らに現實を誤認してゐた。彼れ等は、詩とか、ミューズの神とか、藝術神聖とか、理想とか、戀愛神聖とか唱へて、毫も現實的人生に接觸して居らぬ、否、むしろ現實を輕侮して、超世間的方面に向ふか、去もなくば藝術の形式美にあこがれて居た。

彼れ等は現實を研究せざるのみならず、偶ま現實に接するも、之れを理想的、空想的、傳習的、沿襲的に解釋して、滿足して居た。たゞ現實の表面を看たばかりで、既に其の全部を會得せりと信じて居た。實に幼稚のものではないか。日清戰役以前の文藝が、如何にも意義淺薄で、想と云ふべき程のものを揭げ出すことの出來ぬは、好い例證である。

然るに日清戰役は、自我と現實とを接觸せしめた。戰爭といふ大刺戟は、睡遊的狀態に在つた自我を覺醒した。而して一たび醒めた自我は、現實世界の甚しく複雜なるに驚いた。蓋し當然のことだ。其の醒めたる自我の最も好く表れたのが、國家主義に外ならぬ。そは別として、自我は漸く現實的人生の種々相を見るに至つた。かくて新なる事實を知ると同時に益す現實の複雜なるを知り、同時に、現實に遠かつた文藝を非難し、文學は更に深く實世間と交涉する所あらねばならぬと言ふ注文を出すに至つたのである。

併し自我は尙ほ未だ充分に理想とか、空想とかを離るゝこと出來なかつた。其の日本主義といふも、畢竟するに空想に走り、理論に偏して居るものだ。また時代精神といふも、極めて空漠曖昧のもので、捕へ所のないものでは無いか。

然るに此の自覺の道に進んだ自我を導いたものが、ニイチエの個人性發揮論で、茲に始めて自我は、現實を精細に觀察するやうになつた。從來、宗教、道德或は習慣等に束縛せられて居た自我は、桎梏を破つて、如實の人生、有りの儘なる現實を研究するに至つた。從來とても、現實は何等の蔽物なく、赤裸々のまゝに存在しゐてたのであるが、此れに對する自我の眼が、種々の眼鏡を懸けて居た爲に、其の眞の色合を見ること出來なかつたが、今や其の色眼鏡を除いて、天賦の視力を以つて見るやうになつた。

尙ほ此の現實を、有りの儘に觀察する傾向は、日露戰役に於いて、更に一步を進めた。實に戰爭なる者は、人性の全面を暴露するものである。固より其の刺戟に由りて、美なる、道德的なる方面も發揮せらるゝであらうが、其れと同じ比例を以つて、從來隱蔽されてゐた方面も亦現出するものだ。實に自我が現實に接近し、其の眞相を觀取し得るに至つたのは、前後兩回の戰役の賜と謂はねばならぬ。

更に自我と現實とを接近せしめた一原因は、新聞紙——倫理學者が、動もすれば惡德新聞の名稱を與へむとする——である。新聞が如何なる目的を以つて、上流社會の名士、或は婦人等の秘密を發くかは、今研究する必要ないことだが、其の素ば拔き、其の烈しき攻擊、其の暗黑面描寫は、社會人心に、

現實の何物たるを敎ふるものである。他人の秘事を書き立つるが、道德に背馳するものか否かは、問題とならぬ。既に秘密あり、內所事あれば、其の現實を發表されても、新聞を咎むると出來ぬではないか。新聞は現實を紹介した、殊に際立ちたる暗黑面描寫ならずとも、各紙の日々の紙上に於ける三面記事なるものは、如何ばかり人心を現實的方面に向はしめたるか、實に有力であつたのである。

かく自我と現實とが接近するに至つた時代に育てられた文學者は、如何なる態度を取るであらうか。言ふ迄もなく、從來の證典破壞即ち其れである。

理想が說明するやうの現實もない。藝術的傾向に成つたやうの現實も無い。藝術上、哲學上、或は宗敎上に立てられた理論では迚も現實を說明すると出來ぬ。理想派も寫實派も、皆な嘘の人生を描いて、これが眞實なりと主張して居る。左樣のものは、先づ悉く破壞せねばならぬ。而して更めて現實を直接に研究せねばならぬ。これ實に現實に觸れた人々の方針である。

斯くの如き主義が立てられつゝあつた所に、海外の文藝、而も末紀世の懷疑的、無解決的、個性發展的思想が輸入されて相結托した。なほ他方には科學、殊に生物學の知識が、普及されて、人間の値打が、ます〳〵下落した。即ち、有ゆる理想とか、或は宗敎とかを離れて、單に一個の生物として人類を觀ずる風潮が、至大の影響を及ぼして居る。

此の思潮の起ると同時に、硯友社を中心として發達した寫實派も、露伴を中心とした理想派も、共に排斥さるゝに至つた。而して復活し來つたものは、『浮雲』に始つて爲る窮理的傾向、即ち現實の人生に就いて研究の步武を進めむとする傾向である。二葉亭四迷が復活したのは、決して彼れ一個人の都合のみでなく、氣運は正に彼れを迎へて『其面影』『平凡』の二傑作を起草せしめたのである。而して同じ窮理的傾向に屬しながら、空想を現實と信じてゐた一派即ち文學界系統に屬する者は、忽ち其の空想を破壞して、如實の人生研究に步を轉じた。若し彼れ等一派の思想中に、眞面目なる人生研究の態度が無つたならば、斯く急激に此の方面に轉ずるとは出來ぬとであらう。

第四節　所謂自然派

前節に記述した所によりて、所謂自然派の主張する點は略ぼ明白になつたであらうと思ふ。尙ほ念のために、田山花袋か『美文作法』中に述べた所を借用する。

『理想主義乃至感情主義を奉ずる作家の側では天才といふことを信じてゝ頻りにこれを賴る傾向があるし、寫實

主義乃至自然主義を奉ずる作者は、天才といふものを餘り信賴せずして、微力ながら自分の見聞し研究した側もを書かうとする傾向がある。弊衣の上に錦繡を飾りて、兎に角美しいもの立派なもの、すぐれたものと人の眼を惑はして居つた理想主義も、科學の影響を受けて勃興した自然主義にしたゝかの打擊を受けて、今では其の夢のやうな蜃氣樓も、大抵破壞されて了つたやうな形勢である云々。』

此の說明は、寧ろ茫漠たるものであるが、なほ自然派の覺悟を覗ふとが出來る。其の言に見ゆる如く、自然派は自己の研究した現實を表はさむと勉むる。而して其の之れを表現せむとするや、何等の論理的、或は理想的判斷を下すとが無い。こゝが其の懷疑的、無解決的態度の生ずる點である。また藝術至上主義に由りて、現實を改造するとも無い。たゞ如實の人生事物を表現せむと企つるのである。

自然主義の主張が、評論壇に現はるゝと共に、一方から其の主義に成つた作物が公にされた。是に於いてか、自然派是非の論は、論壇の一大問題となつた。其を主張する論客には島村抱月、岩野泡鳴をはじめ本誌記者で、折衷派は樋口龍峽で正反對の位置に立つたのは、後藤宙外、登張竹風、田中喜一等である。なほ此の主張に對しては、敎育界、哲學界からも反對論者が現はれ、政府の當局者は、二三の作品に對して、自然派的小說の名の下に、發賣禁止を命じた位である。葵山の『都會』を載せた『文藝倶樂部』及び風葉の『戀ざめ』は其の例だ。兎に角政府當局者は、社會の實情を描いた物を忌み嫌ふやうである。曩には魯庵の『破垣』や藤村の『舊主人』なども其の鋒先に懸けられた。

併し自然派的傾向は、かゝる攻擊には屈せず、益す猛進した。天外の作は既に裏面描寫の傾向を明白に示し、次いで風葉の『涼風』『瀨戶がよひ』德田秋聲の『春光』、永井荷風の『地獄の花』等は、皆な此の傾向を有し、生田葵山の作亦同樣の色調を帶びてゐる。殊に最も目覺しく此の新傾向を代表して突進したものは國木田獨步、小栗風葉、島崎藤村、田山花袋、正宗白鳥、眞山青果、小山內薰等である。獨步は不幸にして四十一年に長逝したが、其の作は『獨步集』外數卷となつて發兌され、大に文壇を動かした。藤村は『破戒』に次いで『春』と題する長篇の外短篇十數を出し、花袋は『蒲團』に次いで幾多の短篇を草する間に『生』といふ長篇を作し、更に『妻』を起草しつゝある。白鳥また『何處へ』外十數篇の價値ある作を公にし、青果には『青果集』がある。

此れ等の諸氏には各の特色がある。また諸氏以外に、自然派と目せらるゝ諸氏、例へば水野葉舟、相馬御風、前田木城

外數氏ある。併し此の現象は、すべて最近のとて、讀者諸者の記憶に鮮かなる所であるから詳記せぬ。

若し其の大勢に就いて言へば、現實描寫は著るく深刻となつた。而も柳浪一派の如く、深刻を目的とした深刻でない。平凡なる現象の裏面を深く研究して人生を開展してゐる。而して前時代の理想的、藝術的描寫に對して、今は社會人生の暗黑面、倫理家又は教育家の指していふ罪惡が描寫されてある。作風は脚色を排斥して、たゞ自然の移り變り、或は一小時間内の現象を忠實に模寫してゐる。而して其の模寫の内には、何等の道義的思想を含めてない、寧ろ無關係なる傍觀者の位地に立つて描寫して居る。文章はすべて修飾を離れて、各人の個性を發揮してゐる。最後に、不思議の人物、奇物、狂人、精神錯亂者などが描寫されてある。往年の作中にも、此の如き人物は表現されてあるが、寧ろ主人公に對する客、或は端役として使用されてある。然るに昨今の小説には、其れが全篇の重要なる主人公と成つてゐる。

◎新作家の現出したことから見ても、最近文壇は、如何に一大變動をなしつゝあるかゞ明瞭である。三十四五年頃の諸雜誌を飾つた諸作家の位地を奪ふたものは、實に前記せる新進作家で、而も其の浮び出て方が急である。彼れ等の描く人生其の物が斬新てあると同時に、文壇の中心點其の所にも、新しい作家が蝟集したのである。更に自然主義的傾向の變遷を見るに、三十九年乃至四十年は、舊思想、舊樣式の打破に盡瘁してゐたが、四十一年には、新天地の建設に向つてゐる。或る論者は、此の變化を見て、早計にも、自然派衰頽せりと論じて居るが、其れは餘りに淺見だ。現に昨年の如きは、其の前年に比して、頗る優等なる産物を出して居るではあるまいか。態度の靜肅になつたのを見て、直に衰退を論ずるが如きは、中學生だにも爲ぬとてある。

兎に角將來當分の間は、自然派が、文壇を支配すると、恰も硯友社全盛時代の如くてあらうと豫想される。否、其の發展は、寧ろ將來に在つて、昨今は漸く芽を吹き出した位の處てある。此の故に吾人は、今日之れを詳論し、或は各作家に就いて、一々批評するとを避ける。最近の現象てあれば、讀者自身が、之れを試むる方、却て趣味あるてあらう。なほ其の論戰の形勢を覗ふには、本誌記者著『自然主義』、岩野泡鳴著『新自然主義』及び後藤宙外著『非自然主義』等を參照すれば宜しいてあらう。

第五節　非自然派文學

文壇とて甚だ廣いものだ。いかに自然派が隆なればと言つて、全部分が彼れ等一派に支配されてゐるのては無く、其の

他に幾多の系統あつて、各々一方に勢力を有してゐる。吾人は其の重なるものに就いて數言を費さねばならぬ。

*　*　*　*　*

自然派と相對して最も勢力あるは、所謂餘裕派小説てある。夏目漱石、高濱虚子などを中心とするホトヽギス一派がこれて、前者の作には『吾が輩は猫てある』『漾虚集』『鶉籠』『虞美人草』『草合』『三四郎』など、後者には『鶏頭』『俳諧師』などがある。元來此の一派は正岡子規の唱へた寫生文を本とし小説を作らむとするのだ。而して其の寫生文なるものは、純客觀的模寫の意だ。主觀の説明を加へず、眼前の事物其の儘を傳へむとするものだ。左に子規自身の説明を掲げる。

或は景色又は人事を見て面白しと思ひし時に、そを文章に直して讀者をして己と同樣に面白く感ぜしめむとするには言葉を飾るべからず、誇張を加ふべからず、只ありのまゝに其事物を模寫するを可とす云々。

作者を土臺に立て作者の見たとだけを見たとして記さんには、事柄によりて興味の淺深こそあれ、とにかく讀者をして作者と同一の地位に立たしむるの効力はあるべしと云々。

實際の有のまゝを寫すを……寫實……又寫生といふ……又は虚敘といふに對して實敘とも云ふべきか……實敘は具象的敘述といひて可ならむ。要するに虚敘（抽象的）は人の理性にふ訴る事多く、實敘は殆ど全く人の感情に訴ふる者なり云々。

これにて寫生文の意は略ば明白ならむ。要するに自己の感じたる儘を、餘計の説明を用ひず、客觀の事象其の物を描寫して、同樣の感を讀者に與へむとするものだ。これ果して實行し得べきものか什麼か。彼れ等一派は、客觀的に描寫すと主張するが、其の客觀の撰擇は、自己等の俳諧趣味を標準としゐるのてあらう。つまり客觀的と言ふものゝ、自己の主觀を他人に押し賣りせむとするやうなものてあるまいか。

其の批評は別問題として、兎に角其の寫生文を基礎としてゐるのが所謂餘裕派小説てある。而して其の説明は、漱石が『鶏頭』の序として書いたものに依れば左の通りだ。

小説には二種ある。は一餘裕派、他は非餘裕派だ。餘裕のある小説とは「逼らない小説」「非常といふ字を避けた小説」「觸れない小説」雍容の味あるもので、餘裕のない小説とは「セッパ詰つた小説」「息の詰るやうな小説」「呑氣な分子、氣樂な要素になき小説」「一生の浮沈に關するやうな大問題を主とするもの」等の詞を以つて説明するとが出來る。即ち生活の大事件、其の他重大な問題を材料とせぬものが餘裕のある小説て、生死問題とか、

運命問題とか、すべて人生の大問題と稱すべきものを材料としたのが餘裕なき小說である。而して非餘裕派の作と共に、餘裕派の作も亦存在の權利がある。人生には幾多の餘裕あるものだ。茶を品し、花に漉く、冗談を云ふ釣、謠などをやる、芝居見物する、旅行する、皆なこれ餘裕ある人生て、其の餘裕から生ずるもの亦文藝の材料てある。而して此の種文學には、低徊趣味、依々趣味、纏々趣味がある（大意摘記）

余程曖昧の說明てあるが、大體の意味は會得される。乃ち人生に於ける、のんびりとした現象を描寫せむとするのが其の大主眼てある。吾人は其の例として有名なる『吾が輩は猫てある』の一節を揭げやう。

主人は椽側へ白毛布を敷いて、腹這になつて麗かな春日に甲羅を干して居る。太陽の光線は存外公平なもので屋根にペン〳〵草の目標のある陋屋でも、金田君の客間の如く陽氣に暖かさうてあるが、氣の毒な事には毛布丈が春らしくない。製造元では白の積りて織り出して、唐物屋でも白の氣て賣り捌いたのみならず、主人も白といふ注文て買つて來たのてあるが——何しろ十二三年以前の事だから白の時代はとほに通り越して只今は濃灰色なる變色の時期に遭遇しつゝある。此時期を經過して他の暗黑色に化ける迄毛布の命が續くかどうかは、疑問てある。今ても既に萬遍なく擦り切れて、竪横の筋は明かに讀まれる位だから、毛布と稱するのはもはや僅上の沙汰てあつて、毛の字は省いて單にットとても申すのが適當てある。然し主人の考へては一年持ち十年持つた以上は生涯持たねばならぬと思つて居るらしい。隨分呑氣な事てある。偖其因緣のある毛布へ前へ申す通り腹這になつて何をして居るかと思ふと兩手て出張つた顋を支へて、右手の指の股に卷煙草を挾んて居る。只夫丈てある。尤も彼がフケだらけの頭の裏には宇宙の大眞理が火の車の如く廻轉しつゝあるかも知れないが外部から拜見した所ては、そんな事とは夢にも思へない。

烟草の火は漸々吸口の方へ迫つて、一寸許り燃え盡した灰の棒がぱたりと毛布の上に落つるのも構はず主人は一生懸命に煙草から立上る烟の行末を見詰めて居る、其烟りは春風に浮きつ沈みつ流れる輪を幾重にも描いて、紫深き細君の洗髮の根元へ吹き寄せつゝある——おや、細君の事を話して貰く筈だつた。

實に一種獨得の妙味ある文章てある。

此の一派は、自然派と相對して、昨今の文壇に覇をなし、更に一大飛躍を試みむとしつゝある。

當今文壇に活動する作家甚だ多い。吾人は諸家を一々紹介するだけの餘白を有して居らぬから、重なる事柄に就いて、近況を記載して置かう。而して四十一年度に關する記事は、本誌附錄明治四十一年史中に讓るとにした。

風葉は『青春』を、秋聲は『凋落』を作し、鏡花は依然としてロマンチック系を代表して變化なく、歷史小說の方面を見るに、塚原澁柿園の獨舞臺といふも宜しい位だ。

日露戰役の餘波として、日清戰役當時に於けるが如く、幾多の文學雜誌發刊されたが、孰れも數月ならずして廢刊するに至つた。中に『趣味』のみは繼續され、殊に自然派文學のために盡して居る。戰役の產物としては、鷗外の『うた日記』花袋の『從征日記』、西村酔夢の『血汗』などが出版された。此の他に記述すべきとは數多いが、餘白がないから總て省略する。終に臨んて鷗外、逍遙の兩大家が、昨今大に文壇の爲に盡力せらるゝのは、最も喜ばしいとを附記する。

第五章　結尾

吾人は甚だ簡略ながら、明治初年より、四十年頃に至る間の小說及び評論壇の變遷を述べ終つた。最初の方には引用文多く、時代を降るに從つて、之れを省いたのは、別に意味あるのては無い。たゞ往年の出版物は、目下四方に散つて、容易に手にすると出來ぬから、讀者の便を計つて、一二を引用したまてのと。最近文學に至つては、何處の書店にても販賣して居るから、讀者自身が原作を研究して貰ひたい。

小說、評論以外に紀行文とか、少年文學とか、或は時事論評とか、又は史的研究とかの發展に關しては、記述するだけの材料を備へたが、紙面の狹隘なるため、遺憾ながら其の大部分を省略した。此等は他日更めて、歷史的に記述するとあるてあらう。

偖て終に臨んて、四十年間を回顧して見やうと思ふ。

明治文學の濫觴は、多言する迄もなく『小說神髓』て、其の出版以前は、豫備時代と言はむよりは、寧ろ德川期の附錄と見る方が適當てあるかも知れぬ。實に逍遙は、明治文學を起した恩人てあると謂はねばならぬ。

彼れの刺戟によりて、既記の如く、二つの流れが生じたのてある。而して藝術派は硯友社一派の手によりて發展され、寫實主義となり、觀念小說となり、心理小說となり、或は深刻小說等となつてゐるが、要するに藝術を本位として、人生を觀察し且つ描寫せむと試みたのてある。柳浪に至つては、一人趣を異にしてゐるが、而も其の空氣を吸うて居る。而して露伴は、理想主義を立てゝ現れた。されど其の根本の思想

は矢張藝術至上主義に附屬してゐる。

此の傾向に屬する文學は、慥かに一時、勝利を博したのである。二葉亭四迷を以つて初まる窮理的、或は現實研究的傾向は、前者の爲に壓倒された。

硯友社一派の藝術派は、藝術と人生とを區別してゐる。之れに對峙するものが、基督敎に養はれた文學界一派で、其は人生と藝術とを一致せしめむと欲して居る。獨逸ロマンチック派の如く、人生を藝術化せずんば已まずと云ふ意氣を示してゐる。硯友社一派は、人生中より、藝術主義に愜ふものを抽象し、それらを藝術的に總合して樂んでゐた。

此の故に吾人は、文學界一派は、矢張り窮理派に屬すべきものであると信ずる。現實の研究を主とする傾向と、理想、空想に憧憬する一派とを同一視するのは、甚しく不穩當に思はるゝが、其の態度から見れば、强ち無理とは斷言すると出來ぬ。否、一の流に棹さして居るものだ。其の差異は、一方が現實を眺むるに反して、他方は空想、理想を眞實と信じてゐるだけで、眞面目に人生を研究せむとする精神に於いては異る點が無いのである。

然るに彼れ等は、藝術派に押されて居た。元より其の間には、樋口一葉といふ異彩あつたが、大勢より言へば、少なる勢力を有してゐたのである。然るに日露戰役前に至つて、藝術派も其の一變體たる理想派も、共に行き詰つた。而して一方からは、現實を研究すべしといふ主張が起り、泰西の現實的文學は輸入され、玆に文運は一轉して、今日の狀況となつてゐる。

然るに尙ほ往昔の二傾向は瞭然として存在してゐるでは無いか。自然派なるものは、窮理派（漱石の語を用ふれば非餘裕派）切實派の一變體で、所謂餘裕派なるものは、曩の藝術至上主義的傾向の一變體に外ならぬ。是に於いてか吾人は、明治二十年頃『浮雲』の著者と硯友社員とが相對峙して居ると同じ樣の對陣を見るのである。併し往昔の文壇にては、互に理窟を揑ね廻さなかつたが今日は兩派共に創作すると同時に盛に議論を戰はしてゐる。此の兩傾向の發展如何こそ、今後の文壇に於ける一問題である。

最後に附記すべきは、社會人生に關する或る觀念を表現せむとする一の流れである。前記した觀念小說とは異つて、或る人生觀を含蓄するもの、即ち有目的小說である。木下尙江上司小劍、宮崎湖處子など皆な此の流に屬する作家で、蘆花また此の傾向を有して居る。吾人は斯くの如く小說を方便に使用することに關しては、別に意見あるが其は他日に讓る。

第四編 新體詩界

第一章 第一期（明治十五年より同十九年に至る）

新體詩の始めは、誰れも知つてる通り、明治十五年に出た外山〻山、井上巽軒、矢田部尙今三博士の著譯集『新體詩抄』である。この抄は續々出すつもりであつたらしかつたが、第一集十九篇だけで沙汰止みになつた。乃ち、ブルームフヰールドの兵士歸鄕、キヤムベルの英國海軍、テニスンの輕騎隊進擊並に船將の詩、ロングフエローの人生並に兒童の詩、チヤールスキングスレイの悲歌、シヤールドレアンの春の歌、シエキスピヤのヘンリ第四世中の一段、ハムレット中の二段、グレイの墳上感懷の詩、高僧ウルゼー（以上飜譯）、拔刀隊、勸學の歌、鎌倉の大佛に詣てて感あり、社會學の原理に題す、春夏秋冬の詩（以上創作）だ。次きにまた同十五年から十九年にかけて、別に『新體詩歌』といふのが第四集まで出て、以上の十九篇もその各集中に悉く散見してゐる上、別に『自由の歌』、『外交の歌』、『小楠公』、『正成』、『刺客』等の創作を初め、故人の長歌體の作がいくつも載つてゐる。之は竹內節といふ人の編纂で、小室屈山等の序文や跋がついてゐた。

漢詩や和歌の樣に古典的な、專門的な吟風を避け、明白平易に時代の精神を歌ふのが目的で、當時の新體詩なる物が出來たのである。それに、西洋崇拜熱が盛んになりかけた時であつたから、何でもわが國の舊慣を打破して、精神界並に物質界の革新を起さうとする學者並に政治家が多かつたので、渠等はその舊慣打破の精神を先づ詩歌の上に實現しやうとした。これが小說稗史界に革新を起した『小說神髓』並に『書生氣質』が出たよりも三四年早かつたのだ。然し新體詩創始者等は、詩的趣味と素養とに乏しい、學者や政治家であつたので、徒らに事理の平易と明白とを主として、その結果が蕪雜に落ちたのを知らなかつた。渠等が詩人でなかつたからである。然しただ單調無爲のわが詩界に、他日長足の進步をした一新體詩を殘したのは、世人の忘るべからざる功績だ。

渠等の創始した詩體は全く七五調が標準であつた。この調は、古くは、古今集時代に確定し、その後短歌、謠ひ物、巡禮歌、和讃（佛敎の讃美歌）、淨瑠璃等に使用されて傳はつて來た。曲亭馬琴の『八犬傳』は、あの長篇が全く、殆ど七五くづしに行つてゐるし、明治二年に出た福澤諭吉の『世界國

證し』も「世界は廣し、萬國は」といふ樣な七五調で書いてある。それに、『太平記』の『俊基朝臣東下り』を見ると、

落花の　雪に　踏み迷ふ
片野の　春の　さくら狩り
楓の　錦を　着て　歸る
嵐の山の　秋の　暮。

かういふ句調があらまし百四十行もつづいてゐる。また、吾妻琴の譜にある『西行の歌』は、「われも昔はますら雄の」を以つて初まり、十七八行ある。また、薩摩琵琶に合せる樣に出來た物で、平野國臣の作『信月昭入水』は

花の　都も　秋は　なほ
ゆふべ　寂しき　風情　なり。

て初まり、六十行ある。勝海舟の『城山の露』は、「それ達人は大觀す」から五十四行。同じ目的で阪正臣が譯した白樂天作『琵琶行』は左の句で初まつてゐる。

もみぢ　うつろひ　葦(あし)が　散る
潯陽江の　ゆふまぐれ。

『俊基朝臣東下り』以下は、最後の二篇を除けば、いづれも『新體詩歌』の方に載つてゐる。

節(ふし)、乃ち、スタンザを分けることも強ち外國詩の眞似ばかりではなかつた。支那では『詩經』(雅よりも風)に、わが國では琴曲の組み唄に先例があるとだ。創始者等は殊に今樣（四行一篇）を標準にしたらしい。慈鎭和尚の「春の彌生のあけぼのに」を以つて初まる花、郭公、月、雪の四季吟は、今樣を一節としてそれを四節含めた作例を供したのだ。文部省の唱歌編纂者等は、之をそつくり一篇と見爲して、その『小學唱歌集』(明治十四年出版)に採用したくらゐだ。今こゝに今樣の一例として、『源平盛衰記』に載つてゐる後德大寺實定の作を擧げて置く。

ふるき　都を　來て見れば、
淺茅(あさぢ)が　原　とぞ　なりにける。
月の　光は　もくまなくて、
秋風　のみぞ　身には　泌(し)む。

新體詩の一前身とも見るべき長歌の作者は、明治になつてからも、渡邊重春、大熊弁玉、本居豐穎、日下部足穗等がゐたが、すべて舊思想舊趣味の古典派で、ただ七五調または五七調の句を短歌、旋頭歌より長くつづけることを示めした外、新時代の詩作者に何の與ふるところもなかつた。して、新體詩創始者たる三博士並にその他の模倣者等も、すべて詩才のなかつたのみか、獨創の思想もなく、獨立の意志もなく、ただ外國の文物を模倣してゐたに過ぎなかつたので、その作つた詩も、創作よりは飜譯の方に多少の取り柄があつた。創作の方は皆、舊來の敘事的古典的傾向を脫しないで、花鳥風月にあらざれば、あり振れた通世觀て、渠等の意氣込んでゐた思想上の革新は愈か、蕪雜な長詩以外に何等の新趣味も、何等の新句調も與へなかつたのである。

かの有名なる沙翁劇ハムレットの獨白 "To be or not to be"の段の初め——

ながらうべきか、但し　また
ながらう　べきに　あらざるか。
ここが　思案の　しどころぞ。
運命　いかに　拙きも、
これに　堪へるが　ますら雄か。

かういふ樣に、どの譯詩も原文の意と密接になるだけの締りがなかつたうちに、尚今の『グレイ墳上感懷』が割合ひに出來がよかつた方だ。その抜萃——

山々　かすみ　入り相の
鐘は　鳴りつつ、野の　牛は
しづかに　歩み　歸り行く。
耕へす　人も　うちつれて、
漸く　去りて、われ　獨り
たそがれ時　に　殘りけり。

よもを　望めば、ゆふぐれの
景色(けしき)は　いとど　物寂し。
ただ　この時に　聞ゆるは
飛び來る　蟲の　羽根の　音、
遠き　牧場の　ねやに　つく
羊の　鈴の　鳴る　ひびき。

なほ　そのほかに　つた・繁き
塔に　やどれる　ふくろふの、
近よる　人を　すかし見て、
わが　巢に　あだを　なす　ものと
訴へん　とや、月に　鳴く
いと　哀れにも　聲すなり。

* * * *

實(み)に　この　墓に　埋もれて、
業(わざ)は　劣るも　ハムデンに、
詩は　拙くも　ミルトンに、
國に　いくさに　あぐるとも
クロムエル　に　比ぶべき、
人の　かばね　や　あるならん。

* * * * *

仁惠　深き　人　なれば、
天も　あらはみ　報いけり。
憂き人　見れば　涙ぐみ
(ほかに　詮すべ　なき　ゆゑに)、
獨りの　友の　ありしとよ
(ほかに　望みは　なかるらん。)

また押韻したのが數箇ある。尚今が「この詩は句尾の二字を以つて二句づつ韻を踏みたるものなり」(所謂二重聯韻)とことわつた『春夏秋冬の詩』の初節——

春は　物ごと　よろこばし、
吹く風　とても　暖かし。
庭の　櫻や　桃の　花、
世に　美くしく　見ゆる　かな。
野邊の　雲雀は　いと高く、
雲井　はるかに　舞ひて　鳴く。

『新體詩歌』の方にのつてゐる坪井正五郎の『西詩和譯』は、一篇悉く二重詩オチまたはアチ(イチとウチの例外はあるが)の押韻で、而も各行の終りはすべてチの同韻である。

息の　出入り　と　からだの　血、
しかのみならず　よき　こころ、
清き　たましひ　くれいのち、
時計の　めぐり　早く　たち、
にはかに　緩はる　針の　位置、
歳は　過ぐとも、業と　さち
なきは　乃ち　無能　無智、
多く　考へ　氣を　たもち、
よき　働きを　爲せる　のち、
長しと　言はん　この　いのち。

巽軒は之に「押韻自在」など註してあるが、要するに、いづれも詩才のないものがこと更らに押韻をして見たといふ樂屋落ちに過ぎなかつた。

創作の部に至つては、殊に滑稽なもので、〻山の『拔刀隊』は、同じ語のくり返しなどが這入つて鳥渡面白く讀ましたが、その初句——

われは　官軍、わが　敵は
天地　容れざる　朝敵ぞ。
敵の　大將　たる　ものは
古今　無双の　英雄て、
これに　從ふ　つはものは
ともに　慓悍　決死の　士。

その云ひまはしが抽象的である上、用語が蕪雜だ。また、同居士の『社會の原理に題す』の初句は、

宇宙の　ことは　かれこれの
別を　論ぜず、もろともに
規律の　なきは　あらぬ　かし。
天に　かかれる　日月や、
微かに　見ゆる　星　とても、
動くは　ともに　引力と
云へる　力の　ある　ゆゑぞ。

から長く引つ張つて來て、ただ引力といふ物理的法則を出したのは、その内容(音律などは當時殆ど重大な問題でなかつた)として貧弱も甚しいではないか。尚今には、「昔唐土の朱文公」て初まる『勸學の歌』、また、

今を　去ること、數ふれば
六百年　の　その昔

て初まる『鎌倉大佛』等があるが、この引用句を見ても、直ぐその内容の貧弱が分らうと思ふ。

かういふ學者等の作よりも、政治家流の作の方が、どうせ蕪雜は當り前と見れば、寧ろ時勢に適切なことを歌つてゐた。『新體詩歌』の方に收めてあるもので、小室屈山の『自由の歌』などは、當時の國民の意志を代表してゐたのだ。その初句——

天には　自由の　鬼と　なり、
地には　自由の　人　たらん。
自由よ、自由、やよ　自由、
なんぢと　われと　その仲は
天地　自然の　約束ぞ。
千代も　八千代も　末かけて
この世の　あらん　限り　まで、
ふたりが　仲の　約束を
いかにぞ　仇に　破るべき。

抽象的な行き方ではあるが、自由を擬人してくれたにも由らう、之を讀んて、當時の政治界を思ひ浮べると、知つてる人なら、必らず涙も出る心地がしやう。この句につづいて段々西洋諸國の自由回復史を述べてあつて、そこはさして面白くもないが、今引用した初句と最後の數句(左に引用する)とは、詩界を論ずるものの忘るべからざる遺物だ。

嗚呼、かれと　云ひ、これと　云ひ、
自由の　爲めに　昔より
あまたの　人の　生き別れ、
また　死に別れ　する　ものを。
わが　東洋の　人　ぢやとて、
土地に　かはりは　ある　なれど、
などか　心に　變はるべき。

人の　自由と　いふ　ものは
天地　自然の　道　なるぞ。

同居士にまた『外交の歌』がある。その一節——

おもてに　結ぶ　條約も
心の　底は　測られず。
萬國公法　あり　とても、
いざ、事　あらば、腕力の
強弱　肉を　爭ふは
愚悟の　前の　こと　なるぞ。

理窟ではあるが、外國の文明に醉ひ、自國の歷史と本色とを忘れてゐた當初の文弱派には、却つて野暮と云はれるのを恐れて、多くの人々の斷言出來ない情感であつたのだ。

また同集中には、

建武の　昔し　正成は
て初まる『櫻井驛遺訓』並に
嗚呼　正成よ　正成よ、
公の　逝去の　このかたは、
くろ雲　よもに　ふさがりて
月日も　爲めに　光なく、

の『小楠公』があつて、『自由の歌』と同樣、當初の子供までが暗誦して歩いたものだ。この兩作は作者が分らない。その他、屈山の『花月の歌』、鈴木券太郎の押韻詩『湘南秋信』、八門奇者が「大學の博士達の物せられたる新體詩抄の體に倣ふ」と前置きして作つた『刺客を詠ず』、久坂國武の『舞曲に擬して作る』等が載つてゐる。兎に角、以上の新體詩作者等は、前項で云つた通り、あたまの堅い學者輩でなければ、浸薄な政治家達であつて、ただその辭憤と表面的進步思想とをわが國語に最も自然な七五調を以つて發表したのだ。

第一期創始時代の新體詩は總じてこんな物であつて、それに西洋崇拜熱の度が加はつて、祖國の言語の歷史を度外視し、外國の詩語聲調を模倣しようとして、爲し得なかつた點も多い。然し、兎に角、この時代に於て、こんな詩が一般に廣まつたのは、後時代の爲めに新體詩人を呼び起す最初の種子であつたのだ。

第二章　第一期（明治二十年より同二十四年に至る）

第一期から第二期に移る間に、詩界はただ湯淺半月の『十二の石塚』、ユダヤの國エリコの城の故事を歌つた長篇敘事詩、四百五六十行のものを出したばかりだ。それが明治十八年だ。同年から翌年にかけて『小說神髓』と『書生氣質』とが出て、後れてゐた小說界は却つて詩界よりも早く革新の緒に就いた。然し二十年に山田美妙、尾崎紅葉、丸岡九華の『新體詩選』が出て、二十一年に落合直文の長篇物語歌『孝女白

菊の歌』が、東洋學藝雜誌に出た。これは井上巽軒の漢詩を七五調に譯した物であつて、當時の嗜好に適してゐたと見え、數種の雜誌に轉載せられたし、また青年間に非常に持て囃された。その一節——

橋の　たもとに　身を　隱し、
わが　こしかたを　ながむれば、
遠里小野の　ともし火　の
影　より　ほかに　影も　なし。
下を　流るる　川水の
底の　心は　知らねども、
あはれ、悲しき　その折は
乙女の　死をや　さそふらん。

二十二年、森鷗外等SSS（新聲社）の譯詩集『於母影』が國民之友に出た。獨詩、英詩、漢詩の和譯並に漢譯と、平家物語『鬼界島』の漢譯詩とが、都合長短十七篇だ。鷗外も亦、巽軒等と同じく、また漢詩にも野心があつて——詩人は國語を以つて歌はざるべからず——文字玩弄衒學者流の一人らしかつたので、詩人と云はれないのは勿論、詩作者として正當の自覺を示してゐなかつた。然しグーテ、ハイネ、レナウ、シエキスピヤ、バイロンなどを譯し、各篇すべて厭世と憂愁と悲哀との精神を傳へたのは、大いに注意すべき點だ。この方面の思潮は、これまで邦人の胸中に潛伏してゐた東洋思想、並に當時志賀矧川等が鼓吹したバイロン熱と相待つて、この期末に出た詩人等を養成したのだ。然しただ單純な性情派的勢力を廣めたに過ぎなかつた。

シエフエルを譯した『笛の音』は、集中の最長篇だ。その一節——

高ね　過ぎ行く　雲　のみか、
木々　にも　さわぐ　風の聲、
けさの　別れの　心　をば
そらにも　しらむ　村しぐれ。
いづこに　この身は　別るるも、
いかで　忘れむ　君　ひとり。
わが世　樂しく　なりなむを、
思へば、はかなき　世　なりけり。

七五調の如きなだらかな調子に、一行置きに而も單韻を踏んであるなどは、何の實効をも奏しないのである。レナウを譯した『あしの曲』は八七調の始めだが、後期に於けるほど發達したものではなかつた。ただ上の句を八音に、下の句を七音にしたに過ぎない。その一節——

日は　傾きけり　あなたの　峯に、
ひねもす　勞れし　蟲も　ねむりぬ。

この 池の おもに 綠の 色の
深くも うつれる 青柳の 糸。

バイロンを譯した『マンフレドの一節』は、拾々句（乃ち二拾音）一行のものだ。たとへば、

ともし火に 油をば 今 一たび 添へてむ、
されど われ いぬる まで たもたむとも 思はず。

これでは殆ど格調をなさないのだ。

二十三年に、山田美妙齋の諷刺詩『醉沈香』が國民之友に出た。これには、「SSSの社中の人が珍らしく韻文に一歩足をふみ入れられましたが、終に世人は冷淡に看過しました」云々といふ書き添へがあつた。渠は二十年に雜誌『いらつめ』を發刊し、SSS一流に先立つて、既に種々の調を試みた。

『薔薇の使』は左の如く八六調だ。

心を さとりて 受けて ゑがほ、
枯れ行く までもと 胸に かざす。
形は しぼめて、やはか 心！
心は 末まで もとの ままに。

『世はその儘』は五五調だ。

月 冴えて、星 暗し。
耳 盲ひて、さとく 聞く。
永き 日に 飽く 人ぞ、
短しと 世を 思ふ。

また、二十一年、渠が巖本善治に贈つたのは百行を越えた詩篇で、俳句一つを一行にした物だ。その一節——

靜けさを ただ なつかしき 母として、
かぎろひを ただ いつくしき 妻と せん。
ああ、夢か、自由の 主よ、奇しぢから、
揮ふ まま とどむる ものも あらじかし。

この五七五句連續の詩體、即ち、俳句調とも云ふべきは、後に藤村が劇詩に使用したが、句調が餘り行きつまつて、面白くないのだ。また、二十三年の國民之友に、美妙は『つぼすみれ』といふ口語體の短篇叙情詩を出した。女が思ふ男の「澹ぎ出し船は歸り來ず、」その「盡きぬ恨み」を歌つた物で、材料が意氣であつただけに、七五調の口語がよく釣り合つてゐた

その拔萃——

磯で つみたる つぼすみれ、
これ 見よがしの 衣紋どめ。
色が 黑むを、潮かぜに
ただなら 誰れが 吹かれうぞ。

＊ ＊ ＊ ＊

ゑくぼ 出せとて 頬を つく
そさまの 指の いたづらな。

出すも 耻かし、出さぬも いやな、
さても 辛氣の 世の中 や。

渠は、二十二年の國民之友新年附錄に小說『胡蝶』を書いたが、それに挿んだ裸體美人畫の爲めに、同誌は發賣禁止となつた。『醉沈香』は之に對する不平を漏らしたので、かた〳〵當時の社會の僞善や、道德や、流行やを罵倒しようとしたのだ。調は五七で、技巧もなか〳〵引き締つたところがあつて漢語も甘く使つたが、內容から云ふと、出來そこないの諷刺詩だ。その例——

めしうどを よし 隱すとも、
賄賂 だに そしらば 君子。
玉張に 名を つらねても、
廢娟を 言へば 道德。
こころ より かたちを 見るを
すぐれたる 人 なりと いふ。
うはべ だに つくり飾らば、
その ほまれ 國に とどろく。
みな 人は 能役者 なり、
醜 美、ただ その 假面に よる。

＊ ＊ ＊ ＊

雁 過ぎて、殘燈 青く、
ねやの 戸に 蟲 歌を 寄す。
うらめしや、情けは あだ なり、
友がきは そしりを 隔てず。
鳳凰の 春も 夢 なり、
白き 月 ゑがほも にがし。

二十三年、以上の詩が出た年、宮崎湖處子の『歸省』といふ冊子が出た。その中には、新體詩が數篇挿んである。卷末のを一篇引いて見よう。七五調はなか〳〵こなれて來たが、まだ內容に乏しい。

暮れ行く 月日 また 明けず、
けふも 昔と なるめれど、
たのしき 時は ふる鄕の
追懷 にぞ 殘りける。

別れては また 逢ふ ことの
ありや、いつぞと 知らねども、
戀しき 人は ふる鄕の
追懷 にぞ 殘りける。

雲の 通ひ路、波の音 の
及ばぬ 旅に われ 行けど、

愛てたき　景色は　ふる郷の
追懐（おもひいで）　にぞ　殘りける。

『おもひいで』など讀むのが既にをかしな物だが、兎に角、この人は國民之友並に國民新聲を根據にして、田園趣味を鼓吹した。陶淵明とヲルヅヲルスとを愛し、隨分そんな方面を歌つたが、ここに引用した詩で代表されてゐる。この詩の程度より退歩はあつても進歩はなかつた。

二十四年、中西梅花の『新體梅花詩集』が出版された。個人の新體詩集はこれが最初だ。梅花は飄逸、奇氣を帶びた人物だが、その云ひ廻はしが露骨で、幼稚な思想はただ常識を一歩だけ踏み越えたなまぐさ坊主ぐらゐに過ぎなかつた。然し七五調を根本として前後に亂調を使ふのが上手であつた。詩集卷頭の長篇『九十九嘱』は、大江家の零落に後れた貴婦人老妻の獨白である。また、その『靈魂』並に『出放題』は老子や莊子を敷衍して、多少アナクレオンの肉感詩的に、世の宗教家や哲學者を、淺海なやり方ながら、罵倒した諷刺詩だ。修辭は隨分まづく、くどい對句などがある。その一例——

ふりかへれば　わが年は、
かぞふれば　わが年は、
四五千年　にや　なりぬらん。
進み來たりぬ　わが　智慧は、
殖えて　來たりぬ、わが　智慧は、
進み　來たれば　こそ、
殖えて　來たれば　こそ、
名も　なきに　名を　つけて、
理學、哲學、猫、杓子、
アハハ、アッ、ハッハ。
わが　智慧は　凄まじ、
わが　智慧は　えらし。

その『靜御前』は「舞へとあらば舞ふても見せん、さりながら、思へば〳〵鎌倉どの」を以つて初まる物語歌で、一時は讀まれた物だ。句調のいいのは、七七、七五の交互調（即ち、都々一調）の『浦のとまや』だ。その初六行——

浦の　とまやの　あけぼの　ゆかし、
白く　鷗を　染め拔いて。
浦の　とまやの　あけぼの　ゆかし、
そなれ松風　さつ〳〵と。
浦の　とまやの　あけぼの　ゆかし、
ほそく　幽かに　鐘の聲。

この時代に最も詩人らしかつたのは梅花道人だが、小說をも作つて段々讃められるに至つて氣が變になり、その後七八年間狂人となつてゐたあげく、死んでしまつた。美妙は詩の

技巧を最もよく開拓しかけた人だが、石橋忍月の國民之友に於ける詩論に次いで、かの有名な『日本韻文論』を發表した後半俗謠の人事詩や軍歌などを作つたが、やがて詩界に關係がなくなつた。まだ獨り矢崎北邨（嵯峨の屋）がゐて、露國的陰鬱なところを口語を以つて歌ひ行きさうであつたが、それも對したことはなく、次期に移つてしまつた。美妙のは『青年唱歌集』の名で二三冊出版されたし、北邨のは『文の庫』に收まつてゐる。

第三章　第二期（明治二十四年より同二十七年に至る）

第二期の初めは、種々な議論で掻きまぜられた。美妙の韻文論に次いで、棚草紙並に早稻田文學に於ける朗讀法の紹介または議論あり、三十二年の末から翌年五月にかけて、森鷗外と坪內逍遙との間に、沒理想に關する大爭論があつた。二十五年に英國詩人エドキンアーノルドが來遊したので、その著『亞細亞の光』の一部を譯した者もある。同年、旗野櫻坪の『俗歌韻話』並に『無韻非歌論』が新聞や雜誌に出て。大西操山の『詩歌論』の演說があつた。德富蘇峯は「汝の詩題を……人間世界に移轉せよ」と叫び、高田半峯はヲルタースコットを紹介した。して、女學雜誌と日本評論とが詩界の重鎭となつた戸川殘花、磯貝雲峯、北村透谷等があたゝを擡げて來た。

雲峯はバイロンの飜譯などもやつたが、その後米國に渡つて不歸の客となつた。渠が女學雜誌に出した長篇の歷史物語歌『知盛』は、スコト流の敘事詩創作の嚆矢だ。渠が律も不定韻もなければ、詩といふことは出來ないと評した透谷の劇詩『蓬萊曲』は二十四年に出た。同曲は多少奔放熱烈なところがあつても、バイロンの『マンフレド』やゲーテの『ファウスト』模倣したものだ。その開卷、琵琶彈き素雄の獨白數行はかうてある。

雲の　絕えまも　あれよ　かし、
わが　ともし火　なるべき　星も　現はれよ。
この身　さながら　浮き草の
西に　東に　漂ふ　ひまの　あけくれに、
なぐさめ　なりし　この　御やま、
いかなれば　こよひ　しも、殘に　つきて、
見えぬ、悲しき　かな、悲しき　かな。
戀しき　御姿の　見えぬは　いかに、
わが心　千々に　碎くる　この　夕ぐれ。

操山が新體詩作者として知られ、半月が再び現はれたのは三十五年の秋以後だが、前者は形式的性情に滿足し、後者は淺薄的な滑稽を得意とした。二十六年の國民之友新年附錄に半月の『天地初發』（希伯來原詩『創世記』の譯）が出て、同時に

女學雜誌に、湯谷紫苑の譯詩『キリアムテル』が出た。同年一月文學界が生れ、島崎藤村は、その初號から、美妙が工風して而も失敗に終つた五七五の俳句調を以つて、『蓬萊曲』に血統を引いた『琵琶法師』並にゲーテの『エルテル』がお手本になつた『朱門のうれひ』といふ劇詩風の二作を續載したが、新體詩をしッかりやり出したのはもッと跡からのことだ。當時、女學雜誌並に日本評論に據り、艶麗流暢な詩を以つて詩界を一身に引きつけてゐたのは、牧師詩人戸川殘花であつた。渠の文學界派に於ける勢力は、後の明星派に於ける與謝野鐵幹のに比べられよう。思想はいふに足らなつたが用語の豐富なのは及ぶものがなかつた。殘花はスコトの趣味を以つて『朝の歌』、『夕の歌』等を作つた。七五調の土臺を据ゑたのは落合直文の『白菊の歌』であつたらう、その後湖處子や美妙の使用はあつたが、最も巧みにこの調を使ひ出したのは殘花であらう。その『朝の歌』の初節——

朝　てふ　君は　紫の
裙濃(すそご)の　よろひ　きくだして、
まだ　消え殘る　白星の
五枚かぶと　の　緒をば　しめ、
見るも　まばゆき　前立は
黄がねの　色の　朝づく日、
くれなゐ　にほふ　天つそら
春の　霞の　幌　かけて、
疾(と)き　大刀風(たちかぜ)に　海原の
八重立つ　雲を　切り拂ひ、
むら〳〵　ぱつと　小がらすの
ねぐら　離れし　鬨の聲、
勇みに　勇む　白月毛、
ひま行く　駒は　いそぶりに
白泡　かみて　いななけり。

殘花がそこに亡き心中者の影を見、聲を聽いた『弔歌桂川』が文學界に出ると、透谷は之を稱讃して、「巧麗婉艶の筆」と云つた。

透谷はその私淑してゐた詩人哲學者エマソンと同樣、論文の方に充分な詩趣を帶びてゐたが、詩には餘り目立つのがなかつた。片々たる『行きだをれ』、『ほたる』、『蝶の行くゑ』等、十篇には足るまい。して、『行きだをれ』の如きは、思も調も、梅花の『九十九嫗』の跡を追ふた作だ。ここには透谷の思想をも見られる『ほたる』一篇を擧げて置く。

ゆふべの　光　をさまりて、
まづ　暮れかゝる　草かげに、
わづかに　影を　影(しる)せども、

なほ　身を　耻づる　けしき　あり。
羽蟲を　逐ふて、細川の
淺瀨を　はしる、若鮎が
靜まる　頃や、ほたる火は
低く　水邊を　渡り行く。
腐草(ふさう)に　生(せい)を　受くる　身の、
悲しや、月に　照らされて、
もとの　草にも　歸られず、
たちまち　空に　消えにけり。

渠は螢火の如く、月夜に樹がけの枝にかかりて縊死してしまつた。時は二十七年五月だ。

之に先立つこと一年、乃ち、二十六年に、岩野泡鳴の『十字架の影』(百五十行)が雜誌世界に出た。當時は一般に厭世と懷疑の思想が弘まつてゐたから、それを脱しようとした作だ。つゞいて、また、渠の『樹だま集』の長詩二十餘篇が評論と女學雜誌とに出た。また、渠の『石切り』は當時の獨創なき哲學者、宗教家、並に紳士淑女を罵倒したものだ。その一節——

宇宙の　森羅萬象　天籟地籟、
萬竅(ばんけつ)に　怒號す、風は　しも
あまつ大神(おほみ)の　ひりかける
おなら　なるかも　とこしへに
かげなく、香なく、耻ぢなく、
はばかりなし　と　自由自在。

作者は之が爲めに耶蘇教徒から不敬神といふ、教育家連から野蠻、冷酷、無禮だといふ反對を受けた。渠は琴唄から工風して、三三四を標準の十音詩體を創始した。それには、二行つゞき又は一行置きに脚韻を踏んだ。句調が簡結で、七五調の如く流暢でないだけ、その邦語詩の脚韻に初めて多少の効果を與へた物だ。二十七年、女學雜誌に連載して、同年の末に單行本となつた渠の悲劇、『魂迷月中刄』も、初めは同じ十音調の、而も口詩の詩體で試みたから、散文に書き直してからも、その跡がたどられるところがあつた。但し無韻だ。左は主人公獨白の一節——

はじめ　無くば、わが身も
また　をはりが　無いのに、
思想　以つて　うまれ來たり、
思想　以つて　この　わづらひ。
人は　限り　脱せぬか、
限り　脱し　能はぬか?
智識　得れば　得る　ほど、
智識の　苦み　あり!
からだ　あれば　ある　ほど、

からだの　苦しみ　あり。
絶ち切れぬ　この　煩惱！
治しがたき　は　この　苦痛！

渠は美妙並に北邙に次いで口語の詩に失敗のにがみを嘗めた一人であつた。

その頃、女學雜誌にまた緒方流水、淺田空花、深田白衣等がゐたが、直ぐ他の仕事に轉じてしまつた。與謝野鐵幹が日本並に二六新聞に現はれたのは二十六年だ。馬場孤蝶の文學界に出した處女作『酒匂川』並に直文の『騎馬旅行』は二十六年に、鹽井雨江のスコト作『湖上の美人』並に『透谷集』は二十七年に出た。蒲原有明が始めて落ちぼ草紙に顔を出したのは、同年の末だ。同年、また、太田玉茗、河井醉茗等が少年文庫に見えた。また廿七年十一月作、拙者と號して、齋藤綠雨の『新體詩見本』が讀賣新聞に出た。之は外山、福羽、佐々木、鐵幹等の句調をもぢつて、渠等を冷罵したものであつた。

この期は透谷の死と日清戰爭開始とを以つて區劃がつけられよう。

第四章　第四期（明治二十八年より同三十二年に至る）

第四期は諸詩派混亂の時代である。岩野泡鳴は二十八年に這入つても『樹だま集』の續篇をつゞけてゐたし、文學界では馬場孤蝶並に島崎藤村が出て、文庫では河井醉茗が注意された。早稻田文學には、三木天遊並に繁野天來が出た。帝國文學が發刊せられて、鹽井雨江は『深山の美人』を以つて、武島羽衣は『墨染櫻』並に『小夜砧』を以つて知られる樣になつた。最後の篇（百六十餘行）は幽婉幻怪の趣ある物語歌であつた。

同年、新體詩創始者の一人外山、山が再び現はれ、帝國文學に『可兒大尉』、『輸卒』、『我は喇叭手なり』等の散文詩を出した。『可兒大尉』冒頭の二行——

開闢以來　未だ　曾て　今日の如く　我邦人の　名譽の
高大なるはなし。
良運なり、幸福なり、此時期に　遭遇せるの　日本人は

、山は、同年、上田萬年、中村秋香、坂正臣等と共に、『新體詩歌集』を出した。その翌二十九年、同じ創始者の一人、井上巽軒が長篇の史詩『比沼山』を太陽並に帝國文學に連載し出したが、完結に至らなかつた。同年五月、泡鳴の神話的長詩『寐釋迦の渡し』（三百二三十行）が早稻田文學に載つた。之はベクリンの畫風の樣に、凄慘なうちに多少の滑稽趣味があつた作だ。

藤村が活動し出したのは、同年の中頃からで、中野逍遙を弔した『哀歌』、種々な戀を歌つた『戀ぐさ』、六人の女性を詠み分けた『薄ごほり』を出し、就中、同年十一月に出た『雞』（百

二十餘行）は、雌雄の鳥類にかこつけて現代生存競爭のむごい姿を見せた物で、世人の注意を引いた。その言葉にも新らしく若々しい熱を帶びてゐたのが、他日の勝利を得る源因であつた。その一節——

妻鳥は　花を　馳け出でて、
あらそひ　分くる　ひまもなみ、
互ひに　蹴合ふ　蹴爪　には、
ほのほも　散ると　疑はる。

＊　＊　＊　＊　＊

紅に　染みたる　草　見れば、
鳥の　いのちの　もろき　かな。
火よりも　燃ゆる　戀　見れば、
敵の　こゝろの　うれしやな。

＊　＊　＊　＊　＊

あな、いたましの、ながめ　かな、
さきの　樂しき　花　散りて、
空色　暗く　一彩毛の
雲に　悲しき　野の　景色。

同年の末、土井晩翠の『紅葉青山水流急』（百餘行）並に『枯柳』が帝國文學に出た。後者は僅か七行の短篇だが、作者の冥想思索的詩風を代表してゐる。

沈む　ゆふ日を　見送りて
佇む　岸の　枯やなぎ、
消えぬ　姿は　つらくとも、
しばしは　忍べ、程もなく
暗の　ころもに　包ませむ。
下行く　流れ　水　痩せて、
咽ぶも　悲し　秋の聲。

同年、鐵幹が身づから「そのこの歌」を讀むと稱する『東西南北』と、美文をも合はせた『花紅葉』とが出た。鐵幹のは勇壯なるは姿の上にのみありと云はれたが、また佛者の感想見た樣なものもあつた、但しあり振れた性質の物だ。たとへば

上人　老いぬ　われ　老みぬ、
世を　かたらふも　ものうしや。
ただ　相逢ふて　笑ふ　のみ、
興　去れば　また　別れ去る。

『花紅葉』は雨江、羽衣、並に大町桂月の合著だ。いづれも一たび帝國文學に出たものを收めたのだ。雨江は王朝的形式に拘泥し、修辭と技巧とに急しく、羽衣は多少主觀的溫雅の趣はあつたが、活氣のないのは前者と違ふところはなかつた。桂月獨りその間に氣を以つて勝つた作がある。然しいづれもその用語敎材から見て、擬古派の一團と見做された。

二十九年に出た雜誌大和琴が、三十年に這入つてから、美妙の新作『底界天女』を連載した。同年の春、藤村の『天馬』(殆ど二百五十行)が文學界に出た。その格調は手ぬるい七五調ながら、想像の奔放、用語の清新、情緒の高潔な作だ。續いて渠の比較的沈靜幽遠な『深林の逍遙』(殆ど二百行)、三十年、また『驚の歌』並に長篇『四つの袖』が出た。前者は七五兩句を重ねて一行に讀ます初めだ。後者は新著月刊に出て、純感情的に熱烈な戀愛詩で、隨分さはどいところまで肉的な方面をば歌つた物だが、後の詩集には載せなかつた。同年、泡鳴は國民之友に於て初めて八七調を試みたが、まだ熟してゐなかつたのはかの『於母影』中の同調と撰ぶところがなかつた。渠は、藤村のいよ〳〵情熱的になると反對に、ますその情熱を納めて行く形跡が見えてゐた。その前年から、日本人に據つて、一種の俳味的新體詩を發表してゐた俳人、正岡子規は、竹の里人と稱して、三十年になつて、押韻の作例を多く示めしたが、泡鳴が前年時事新報で論じた短句二重韻法に由らなつたから、その効力がない物であつた。

同年、新著月刊の第一號に天來の『雨聲鳥語錄』が出た。北廓に於ける感想を歌つた短篇集だ。同誌第二號に、薄田泣菫の戀愛詩篇集『花密藏難見』が出た。そのうちの『夕』『紅絹袖』等は、十四行を以つて一篇を成す西詩のソネト、乃ち、短曲であつた。渠は之をやるに美妙の初めて用ゐた八六調を以つてした。然し一行〳〵讀み切りになつてゐるのはまだ工風が足らなかつた。その『夕』——

かなたに けむれる 森の あたり、
乳ぶさに よりそふ 稚兒の 如く、
靜かに 眠れる 空の 色も、
淺紫に しみゆく この 夕ぐれ。

顧ふは 艷なる 君と ふたり、
野ずゑの 逍遙 こゝろ 足りて、
情けに 燃ゆめる 胸の 中に
秘めたる 小琴や 彈いて 見んか。

さらずは 千くさの 花を ともに、
さしさふ 水枝に そよき渡る、
涼しき 夕風 髮に うけて、
霞に 眠れる 野べの 如く、
優なる 姿に 倒れ伏して、

ねざめぬ 夢こそ 切に 願へ。

同三十年は初めて詩集の多く出た年で、藤村の『若菜集』、天來天遊合集の『松蟲鈴蟲』、民友新派の『抒情詩』、鐵幹の『天地玄黃』等だ。天來は矯促、天遊は優婉、いづれも五七調が得意であつた。後者は『紫姫』『月の國』等を以つて知らる。『抒情詩』は湖處子、嵯峨の屋、國木田獨歩、松岡國男、田山花袋、太田玉茗の五名合集だ。湖處子並に嵯峨の屋は從來對して進歩もなかつた。獨歩は意氣を以つて勝つてゐたが、想に於ては花袋や國男より多少古かつた。して、國男の穩健溫藉は五家中の白眉であつた。渠の句、「わが戀ならずばわれ死なん」の如く、藤村と等しく純感情的なところが清新であつたが、かういよ詩人等の常として、高い憧憬と深い苦悶とを缺いてゐた。『天地玄黃』は鐵幹の一進境を示めし、漢語並に漢語法も可なり甘く使はれ、擬古派並に純感情派の手をつけてゐない詩境に這入つてゐたが、豪壯と客氣とを衒つて淺俗だといよ誹りを免れなかつた。

三十一年 晩年の『萬有と詩人』(帝國文學)百五十行並に『馬前の夢』(反省雜誌)二百行が出た。後者は渠が敘事詩人としての技倆を發揮したものだ。然しその七五調に於て、「十萬の鐵騎アルベラの」とか「オーステリッの朝風に」とか云ふのが、如何に作者の說明が附いても、何等の詩情をも催さないほど、ほんの句調をつづけてゐるに過ぎなかつた。同年、また渠の有名な『星落秋風五丈原』(三百五十行)並に『暮鐘』が帝國文學に載つた。渠の措辭は一段の進歩を見せたが、光もなく、熱もないといよ評判であつた。

同三十一年、獨立雜誌が發刊せられて、それから、兒玉花外、平木白星、吉野臥城等が現はれた。そのうち、花外は最も頭角を現はしたが、その社會的感情の熱はまだ湖處子以來の稚氣を脫してゐなかつた。蒲原有明は四行一節を三節づつの短什、拾數篇を集めた『野飼笛』を讀賣新聞に連載した。泡鳴は雜誌天地人に於て隨分書いた。そのうち『秋の蜻蛉』の構想はシエレーの、『雲雀』に似るところもあるが、後者は高い憧憬を歌はうとしたに反して、前者は深い疑惑を反映しようとした。これは泡鳴當時の冥想的特色を發揮してゐるだらう。同年、藤村の『一葉舟』並に『夏草』が出た。前者はおもに散文集だが、『驚の歌』、『白磁花瓶の賦』等も載つてゐた。して特に藝術至上主義に傾いてゐた。後者はその思想と聲調に於て『若菜集』よりも劣つて來たと評されたが、そのうちの『晩春の別離』は集中の白眉で、渠の特色、乃ち、自然を上へも下へも拔けることが出來ない、表面的な感想に生氣を持たすところがよく現はれてゐた。渠の新たに出來た理想、而も淺薄なものは『曉の誕生』に見えてゐた。卽ち、かうだ。

よし 琴 彈かず、歌 よまず、
書を かく わざにも すぐれずも、
せめて 藝術を 戀ひ慕ふ
深き こゝろを 持たしめよ。

なほ注意すべきは、集中八十餘頁の敘歌的敘事詩『農失』て、人間の努力といふことに云ひ及んだ物だが、作者の散文的に流れ易い惡癖が最も明かに見えて來たので、七五調は長篇に適するか、どうかといふ疑問が一時世の批評家を煩はした。

同年、他に出版された詩集は、池皐雨郎の『淚痕集』石橋哲次郎編輯の『山高水長』桂月の美文韻文集『黃菊白菊』等だ。皐雨郎のは宗教的傳習て固まつてゐたので、少しも名稱の通りの淚痕がないと評された。翌三十二年、山本露葉、兒玉花外、山田枯柳の合集『風月萬象』が出た。又同年四月、晚翠の第一詩集『天地有情』十一月、泣菫の第一詩集『暮笛集』が出た。いづれもそれまての作を集めた物だ。泣菫のには「若人の髮美しき姿見て、浮世ゆかしと戀ひそめき」『尼が紅』(四百二十行)があり、景情共に並び活くるところが少くないが、藤村の戀愛歌『四つの袖』の模倣てあつた。渠は晚翠と正反對て、やがて藤村と入れ代るべき血あり、情あり、淚ある詩人と思はれたが、藤村の如く熱情もなく、ただ可憐なる情操ばかりがあつた爲めに、左ほど大きくなることを得なかつた。

同三十二年、有明の『かげ君の歌』並に『もろ葉草』が帝國文學に載つたが、高山樗牛は晚翠の眞似をしてゐると攻擊した。同年、泡鳴の宮古島物語詩『嘉播の親』(九百行)が雜誌學窓餘談に連載された。平垣な敘事の間に、熱帶風景と老盲人の愛情並に忿怒とを歌つた物だ。晚翠はまた帝國文學に、「本篇は一行を一息に讀むべし」と註し、七五句の二句を一行とした『萬里長城の歌』『富嶽の歌』並に『秋興八首』を出した。藤村は新小說に『新荷葉』並に『勞働雜詠』を出した。

この第四期五年間には、なほ文學界に馬場孤蝶、天地人に谷活東、桑田春風等、帝國文學に吉田狹州、中內蝶二、野上松彦(松岡國男)等、活文壇に小山內薰等がゐた。また、野口米二郎は、早稻田文學並に帝國文學に於て、二三の英詩を發表した。この期には、外山、山等の散文詩派、羽衣雨江等の擬古的綺爛派、天來鐵幹等の矯激派、獨步湖處子等の平面的自然派、子規等の俳詩派、醉茗、伊良湖清白、橫瀨夜雨等の文庫派、晚翠泡鳴等の敘事的冥想派、藤村泣菫等の純情的情熱派などがあつたが、つひに最後の純情派の勝利に歸して、藤村が詩界を獨占する傾きがあつた。泡鳴は三十二年天地人に『亡兒の寫眞』を出してから、散文的に世のにがい經驗を語る樣になり、晚翠は藤村の感情的、女性的、和歌的作風に對する反動の潮流に掉して、その理想的、男性的、漢詩的方面が一部の人心に根據をすゑた。泣菫は藤村の道を追ふて渠までには進め得なかつたし、有明はまだ太した名を出してゐなかつた。要するに、この期は戀愛時代とも云ふべく、わが

明治詩界のロマンチク主義、情熱派の初期に屬し、純感情のみを以つて詩の內容と認め、情熱をして智的並に意的世界にも及ぼす勇氣と眞摯とがなかつた時代だ。

第五章　第五期(明治三十三年より同三十五年に至る)

詩界の第四期より第五期に這入る前後の外部狀態を觀察するに、思想界は純理哲學が輕んじられて、精神科學の研究が着實になり、その影響が日本神話の研究に及んて、姉崎、高山、高木等の議論が盛んて、また一方には、森鷗外が『審美綱領』に次いで、『審美新說』を紹介し、高山樗牛は抽象美論や『月光美』の問題を提出した。小說界ては、寫實的傾向が一層內部的觀察を主とする樣になつてから、從來超自然派を以つて目されてゐた露伴、鏡花の二家までが、この方面に向つて來て、前者は談話に於て發表し後者はかの邪路から離れた『湯島詣』を出した時代だ。して、また、詩人に對する世の冷遇を叫ぶものもあつた。

この期の初めに於ける詩界の狀態を案ずるに、藤村は殆ど詩を拋擲して信州に退き、泡鳴は肺を病みて琵琶湖畔に隱れ、晚翠はその缺點たる露骨的談理の風を最も多く顯はした『黑龍江上の悲劇』を出してから、間もなく外遊の途に就いた。跡には、鐵幹、東都に新詩社を設けて、新進作家等を糾合し、泣菫、『大阪に小天地を發刊して、前者と相應じ、その間に有明の名が段々出て來た。

三十三年三月、新詩社の明星が出て。同年十月、泣菫等の小天地が出た。同年、泣菫は新小說に『虹の歌』(四百行以上)を載せた。また同人の『鐵幹君に酬ゆ』のうちに、

　要らず　嫁かず　天童の
　潔さぞ　法と　思ふもの。

とあつたのが、當時の青年詩人等には藝術的理想を傳へたかも知れないが、耶蘇敎的天國思想の傳習てあつて、これが他日渠のクラシク趣味に安んずる前兆てあつた。同年、また、渠が才人時に遇ひたる昧ゆさを思はしむと云はれた『遣懷』並に『ああ、杜國』等が天地人に載つた。また、渠の『夕の歌』が出た。これは渠の七四、六五、八六句混用の八行調の初めだ。蒲原有明はさきに晚翠の模倣者と攻擊され、今また泣菫調になつたと冷笑されながらも、『彩雲』を新聲に出してから、世人の注意を引いた。渠はまた、第二の新聲社一派にまじつて、ロゼチの譯文を發表し、この英國書家詩人の詩風を解することが認められた。渠がロセチに生命を得たのは、泣菫のキイッに於けると同樣てあつた。

鐵幹は、同年、明星に據つて『小生の詩』と稱して、あもに每節不定の短句を交錯した小詩形を試み、前期のとは違つ

て、用語も甘く、句も亦氣のきいた作を澤山出し、さきの美妙齋を思ひ出させた。そのうち、『長醉』の一節——

戀は　それ
願みるに　榮え、
名は　それ
仰ぐに　燃ゆ。
おもひて　なくば、
戀　今　にがし。
のぞみ　なくば、
名は　きのふに　朽ちぬ。

晩翠は、同年、帝國文學に『弔吉國樟堂』(百餘行)並に『黑龍江上の悲劇』(百二十餘行)を出した。後詩は、當時傳はつたかの露兵の黑龍江に於ける暴虐を罵つた物で、この作と泣菫の『遣憤』とに勵まされて、人道の爲めに義憤を發する樣な詩風が一時に廣まりかけた。『悲劇』は、作者固有の緩漫な調だが、實に痛快な作であつた。その一節——

恩愛の　父子　手を　取りて　奔流の　波に　さらはれつ、
新婚の　夫婦　抱き合ひて　虎狼の　兵に　屠られつ、
泡の　大水に　消ゆるごと、糀の　嵐に　散るがごと、
鷄の　猛火に　燒くるごと、蠟の　焰に　熔くるごと、
正義よ、悼め、罪なくて、あはれ、亡びぬ　民　五千。

然し渠は、藤村と同じく、やゝ詩界の舞臺を遠ざかりかけてゐた。明星に於て、平木白星は『亞細亞』、『烏帽子折』等、前田林外は『黃色雜』を出したが、いづれもまだ調想共に不熟な上に、晩翠泣菫等が手をつけた發憤的方面に向はうとしてゐたに過ぎなかつた。

同年出版の詩集は、池邊雨郎の『かぶら矢』、龍澤秋曉の『有明月』、醉茗の編纂にかゝる文庫派の『詩美幽韻』高安月郊の『夜濤集』等だ。『幽韻』中には、長篇て、伊良子清白が南洋風物を詩材にした二百行以上の『巖間の白百合』があつた。月郊は冥想的て、晩翠から談理的矯激の方面を取り去つた樣な風だが、何となくそれがくすんて見えるのは、寧ろ泡鳴當時の樣子に似てゐた。

翌三十四年は、登張竹風がニイチエを紹介し、高山樗牛が文明の批評家としての文學者を論じた年だ。有明は『壯嚴の殿』、『高潮』等に次ぎて、『獨絃哀歌』を明星に連載し出した。同篇は渠をして詩界に確立する名を爲さしめた作て、その哀歌調、渠獨創の調子は、邦人の音感に不注意であつたところから、一行中に腰が折れる個處があつて、どうしても朦朧を脫し切れない性質の物だが、ロセチの詩想を盛つて來た點が一部の人々に歡迎された。すべてソネト、即ち、短曲式だ。その『あだならむし』の一節——

星かげ　夜天の　宿に　かがやけども
時劫の　おほ浪　刻む　柱　見えず、
ましてや　廢へ　起き伏す　靈の　野のべ
泌み入る　さびしさ　いかて　人　傳へむ。

前田林外は、明星に、『アメリカ彥造の墓』を出した。全くの散文詩だ。世間の七五句に對する單調呼ばはりは、詩人等をして種々な詩形を案出せしめたが、散文詩の傾向は、泣菫の八行調、鐵幹の短句詩形、有明の哀歌調を經て、林外のこの詩に至つて全く散文詩的になつたのだ。その一節——

目を　擧げて　山河を　見るも、
足　祖國の　土を　踏むべからず。
父あり、母あり、
かうべに　白き　死の花　咲きて、
墓に　入るべき　よはひぞ。
ああ、この日を　絃に　よりて、君、
袖を　掩うて　泣きしや、あらずや。

白星は明星に『男神女神』、帝國文學に『園南の詩』を出した。後詩は淺薄なキプリンクと帝國主義とにかぶれた作だ。その不整頓な七七調は、渠が後になつても得意に使つた物だ。その一節——

大光明の　稜威の　かげに、
君　住む　ところ　いづれの　濱か、
そら見つ　日本　ならざらむや。

鐵幹に『日本を去る歌』(殆ど百四十行)並に『爲老亭』があつた。いづれも散文調だ。

同三十四年の出版にかゝる詩集は、藤村の『落梅集』、泣菫の『行く春』、晩翠の『曉鐘』、泡鳴の『露じも』、醉茗の『無弦弓』敬天牧童の『短笛長鞭』、吉野臥城の『小百合集』、鐵幹の『鐵幹子』及び『紫』、並に尾上柴舟の譯詩集『ハイネの詩』である。藤村のには有名な『常盤樹』が載つてゐるが、「ああ、ををしきかな」と云つていいところに、「あらををしきかな」など使つたのを見ても、藝術と人生とを區別して、死んだ技巧に傾いてゐたのが知れよう。泣菫のは、淺いながらも、多少人生の實際的痛苦を歌へる趣みを持たしめたが、惜しいことには、才人だけに、文字上の素養と思想の根底との深いものがない詩界の虛に乘じて、技巧の方面ばかりに馳せる傾向が、既にその集に見えてゐた。鐵幹のも、技巧に於ては、かのすみれの花は小さけれど、香は高きが如しとの評を受けた。以上二三詩集の爲めに、他は殆ど顏色がなかつた。泡鳴のには沈靜な『秋の蜻蛉』、輕妙な口語的七七調『船頭唄』などもあつたが、十音詩のうちに、「水は涸れてぼちや〳〵」といふ句があつたので、一般に用語が拙いと評判された。

三十五年一月、有明の『新鶯曲』(六十行)が新聲に、『佐太大神』(四十行)が明星に載つた。同年、雜誌海に出た山本露葉の『海のあなたへ』は、散文的で、特に朗讀の目的に合ふ樣な調べがついてゐた。その末節——

白き日、めぐり、わが血　湧かば、
夜の精　再び　ここに　下だり、
甘き　休息(やすみ)の　口づけや　せむ。
さらば、さらば、森よ、林よ。
光　生みたる　夜や　したはしき、
いのちを　植ゑん——海の　あなたへ。

泣菫は藤村の向ふを張つて、小天地に、『公孫樹下に立ちて』(百餘行)を出した。また、渠の『暮秋野徑の石にもたれて』(殆ど九十行)は七四調であつた。その一例——

石よ、天なる　御(み)あかし、
夕づつ　白き　燃(た)りの
とのゐ姿　や　まもりて、
夢見ごこち　の　聞きほれ。

鐵幹にも古く『山中の石』があり、岩野泡鳴、またこの年の明星に『圓き石』を出した。同詩は同年同じ雜誌に載つた渠の『有木の別所』(九十行)と共に、例の行間句切りなしの十音詩で、前者は二重聯韻後者は一行置きの二重韻だ。その一節——

ネビユラ　冷え凍りて、見よ、
照らす　小星の　月夜(つきよ)、
圓きに　就く　靈(たま)あり、
自然の　まま　その態(さま)。

押韻のことは、大抵の人は之に反對したが、泡鳴はその音詩ばかりには、最も邦語に近い以太利詩の二重韻法を採用して、その後までもつづけたのだ。渠はこれらの詩並に『雨中に立ちて』『散り行く紅葉』等の冥想詩を以て、法界の舞臺に復活しかけた。

同年、鐵幹には、『黄がね日ぐるま』『兎』、『枕上花瓶賦』等があつた。最後の詩は、泡鳴の『秋吟』と等しく、五五調だ。兒玉花外は明星に『不滅の火』(殆ど百五十行)、新小說に『孤愴吟』等、帝國文學に『暗中田鼠に告ぐる歌』を出した。後詩はロバトバーンスの『ツーアマウス』から來てゐた。林外は明星に『みどりの床』、『素盞嗚尊を讃する歌』、並に『極樂鳥の賦』を出した。最後の賦(六十餘行)に至つて、渠の方針は定まり、詩界に奢侈與世の積極主義を立てようとした。白星は片袖第三集に長篇の敘事詩『心中おさよ新七』(約五百七十行)を出した。生硬輕浮な缺點はあつたが、兎に角、篇を出した勇氣は認められた。渠はその他に『日本國歌』、『望北

の歌』、『アギナルド』等を出した。晩翠は、外國から、帝國文學に『西遊微吟』、『亞細亞大陸回顧の歌』等を送つて來た。その他、帝國文學に藤岡東圃の散文詩『阿彌陀が峯』、岩城孤秋の『牧笛餘韻』、大町桂月の俗謠詩『野趣村笛』、明星に高安月郊の『曾我篇』、馬場孤蝶の『友を悼む』、小山内薫の短曲數篇が出た。薫の作には、可憐なうちに皮肉な特色を、既にこの時から見せてゐた。森鷗外の韻文劇『玉匣兩浦島』も同年に出た。薫の『黒き影』の一節——

その　莖の　雄々しき　綠、
その　蕊の　黄がねの　かをり、
その　花の　清き　姿も、
たふとしや、照る日　の　光、
日の　前に　ひざまづきては、
地に　落つる　黒き　影　のみ。

同年出た詩集は、有明の『草わかば』、鐵幹の『埋れ木』、臥城の『野茨集』、半月の『半月集』、敬天牧童の『青春の詩』、高島泉郎の『せせらぎ』、みづほのやの『ゆくさ』、白水郎の譯詩『西詩餘韻』等だ。有明のには、その清新の調と內部的傾向とが多少見えてゐたが、まだ泣菫だけにも實際的痛苦に觸れてゐなかつた。鐵幹『紫』以後この『うもれ木』時代が最も振つてゐたのだ。然し世と共に移るが巧みて、模倣の妙却つて自家の特色を失ふと云はれた。

詩界は、この第五期に於て、嘲風、櫟牛、竹風等の新ロマンチク主義の皷吹を見、坪內逍遙の中學倫理的ながらもニイチエ熱に反對した『馬骨人言』(讀賣新聞)に遭遇した。また、小山鼎浦は帝國文學に於て『現今の新體詩家』を論題として、藤村と晩翠とを細評し、櫟牛は太陽に、潮音は帝國文學に、新體詩の不進歩または衰運を嘆々した。然しその狀態は詩人等に取つて好個の試金石だといふものもあつた。當時詩界の先驅後進を煩はしたのは格調問題であつた。機敏な藤村は逸早くも散文界に逃げたが、他に數名の詩人があつて、この問題の解釋に努めてゐた。泡鳴の十詩調、泣菫の入行調、有明の哀歌調などは、すべてその結果だ。然し泡鳴のを除いては、他の人々はすべて正當な音律的自覺が鈍かつたとは、泡鳴自身の論證したところだ。當時はハイカラ戀愛を歌ふ所謂星菫派の時代で、鐵幹一流の勢力はなか〳〵及ぶものがなかつた。然し元來が根據の薄弱な技巧派であつたから、かの多少人生の痛苦に觸れた泣菫の技巧派に負けてしまつた。然し泣菫自身も、その名の示す通り、星菫派の代表者で、自分は詩人で御坐いと澄ます惡風を廣めた仲間だ。

三十五年十月、神田の青年會館に於て、第一回韻文朗讀會があり、會としては太した効もなかつたが、露葉、白星、鐵

幹等の朗讀はそれ〳〵特色があつた。その席上に於ける泡鳴の演說『詩句格調管見』は、直ぐ翌月の明星に載つて、詩人が格調に關する疑惑と錯沈を一掃し、次期の初頭からして長篇敘事法が出る一動機となつた。

第六章　第六期（明治三十六年より同三十八年に至る）

第六期の詩界は、種々長篇の敘事詩に始じまり、情熱派を以つて目された薄田泣菫が段々持ち前のクラシク趣味に冷えて行くと同時に、蒲原有明は從前のクラシク態度から轉じて、いよ〳〵シムボリカル傾向に進み、岩野泡鳴は敘事的冥想派から走つて、知らず識らず全くのロマンチク主義に落ち入つた時代だ。それに、林外、泡鳴、並に御風が協同經營のもとに發刊された雜誌『白百合』は、その當時、わが國詩壇の實際的新情熱派を代表した物だ。

三十六年一月から、鐵幹、林外、白星合作の敘事詩『源九郎義經』が明星に三回まで出たが、事情があつて中止となつた。鐵幹はまた別に日本武尊の伊吹越山えを骨子とした『哀歌』を作つた。鐵幹は雅語並に古語の驅使に巧みなこと、林外は情熱的文字に富むこと、白星は漢語や佛語を羅列したことなどの間に、いづれも長短はあつたが、要するに、まだ長篇の敘事詩を作る資格がなかつたことや、中には詩的素養の不足を暴露したことが分つた。鷗外や泡鳴が古く用ゐた八七調を初めて使つたのは林外がこの敘事詩に於てだが、白星の七七調と等しく不整頓な物であつた。同年、泣菫は明星に『雷神の夢』（約三百六十行）、新小說に『金剛山の歌』（百七十行）を出した。その前詩は、雷鳴を觀じて、之を神話的に發展し、後詩は高山の雄姿を人格視して、之が曙の景氣を歌ひ、兩詩ともにかの『公孫樹』の敘事脈を受けた作だ。また渠の新小說に出した『翡翠の賦』は、渠の八行調の最もこなれた物の一てあつた。

有明は、同年伊邪那岐、伊邪那美を歌つた『國土創成賦』を太陽に、『夏祭』を明星に出した外、神話的な『遺曲』並に『夢の娘』、『夏がは』、『露草』等を出した。『夢の娘』は六六調で、重みもなく輕みもなく、平坦な、面白くない調であつたが、措辭の巧妙、着想の奇警を以つて勝り、渠はこの頃から幽婉卓拔の空想詩人たるべき傾向を現はした。その一節——

十とせば　虹、千とせは　また
月日の　溜にめぐる　ほのほ、
夢の娘、古りにし　世の、
嗚呼、何ゆゑ、舞ひ　かがやく。

泡鳴は同三十六年から大いに復活して來たので、明星に於て、同年長短拾數篇を續載した。『湖畔の靜思』（二百行）、『旭

日吟』（二百行）等は流暢な七五調であつたが、『海邊雜吟』七篇に於ては、種々な調を試みた。かの注意を引いた『女護海島』（百七十行）に至つては、初めて詩界に整頓した八七調を供したのである。渠はこの詩からして冥想的思念が情熱的に燃えて來たのだ。この詩は古來の傳說をもとにして、多少テニスンの『ロータスイーター』に得たところがあるらしく、熱帶の一孤島に「生々の理孤獨となりて……單調子の安逸、安臥、無理想、無何有に勞れも果て」た女性ばかりの島民の運命を描寫した物だ。その末節……

寂しき　その身を　いだけば、胸に
燃え立つ　ほのほの　暑さに　堪えず、
南の　岸べに　冷氣を　呼べば、
天地は　かほりて　戚ある　乙女。
ああ、また　同性、同性を　產む。

同年、日露戰爭が起りさうなのに激して、泡鳴は泡讀賣新聞に於て、最も日本人的生命を呼吸した『豐太閤』（三百六十行）といふ史詩を發表した。その卷頭の『戰捷の祈』は、少くとも、詩脈のむく〳〵動いてゐるところがあつた。

同年十一月、泡鳴は林外並に御風と共に雜誌白百石を發刊した。此誌上に於て渠は評論の筆を揮ふと共に、わが詩界の第三期に出來た長篇の畚作、夢幻史詩『鳴門姬』を掲げ初め、翌年に渡つて、その第二篇第二章、凡そ三千行まで出して中止した。わが敘事詩の最長篇であつたが、惜しいことには、スコト的趣味があつて、時勢に向かなかつたのだ。林外は、夏の花一つに一人の少女を結びつけた『夏花少女』と稱する短曲數篇を、明星から續けて、白百合に出した。詞藻の豐麗風姿の妖艶はあつたが、頭腦の空虛を示めしたのが缺點であつた。その一曲『孔雀石』の一節——

そも　いつ　逐はれし、神の座　近う
きらめく　彩羽の　聖なる　鳥の、
いつ　また　墮ちしや　若葉　賓樹
下にぞ　つどひて　天使の　もるに、
夜ぞらを　蠱惑の　星と　逃げしや。

同年、皃玉花外は新小說に於て多くの作を發表したが、『馬上哀吟』並に『戀しの雲』は最も渠を代表して居た。後詩の一節——

髮こそ　見えね、顏　見えね、
雲の　少女の　戀しさよ。
かひなき　人の　手を　のべて、
鳴呼、幾たびか　雲の裾
捉へん　とては　仰ぎけむ。

同年、小山內薰に『人形』、『月下』、『悲嘆』の佳作あり、高

安月郊に『惜春詞』、『裾野』等の清品あり。晩翠の『司馬子長名山藏書賦』(二百四十行)、山崎紫紅の劇詩體を摸した『地獄の巻』、その他山本露葉、大塚甲山、河井酔茗、伊良子清白、横瀬夜雨、吉野臥城の作があつた。この年、雑誌少年が出てから、六年後の今日に至るまで、泡鳴はそれに毎號少年詩を二篇づゝ載することになつた。して、北村季晴の作曲が付いた。

同年、出版された詩集は、有明の『獨絃哀歌』、月効の『春雲集』、白星の『日本國歌』、紫紅の『日遊上人』、羽衣の『覓裳微吟』、敬天牧童の『船來堇』、並に『牧童集』、曉烏敏の『迷の跡』、野口米二郎の英詩『東海より』等だ。有明の第二集は、第一集時代よりも人生に觸れて來た傾きは見えたと同時に、直ちに空靈雄渾の巻ありとか、敦厚の君子詩人とか云はれたが、元來がロセチの感化を受けただけに、兎角、架空な宗教的形式に據らうとしたし、また巣はこの集に於ては藤村時代の單純うぶな戀愛神聖論者たるを免れなかつた。月郊のは餘り進歩が見えないが、泣てあざ笑へる詩人たることが認められた。白星のは覇氣の横溢が知られ、曉烏敏のは別に迷の跡がないと冷評された。その他、鷗外の薩摩琵琶に合はすとて作つた『長曾我部信親』、近藤等の主唱した歌劇會の飜譯臺張『オルフォイス』などが出た。花外の『社會主義詩集』は大阪に出たが、發賣禁止を喰つた。今一つ云つて置くべきは、この年の初摺りに、大阪朝日、萬朝、讀賣の三新聞が、懸賞當選の新體詩を發表したことだ、朝日のは『大阪市歌』、萬朝のは『處世の歌』、讀賣のは『大日本膨脹の歌』であつた。同年、また、帝國文學に於て、『現代思想に對する詩人の覺悟』、『尚古癖を破す』、『デカダン論』等が出た。

三十七年になつてから、泡鳴は白百合に於て『ああ世の歌樂』といよ短曲を出した。渠が世紀末的、デカダン傾向を最も早く示めした作だ、その一節——

ああ、とこ靜かの 春 その うつつ。
うつろの まぼろし あしたに 破れ、
大地は 音なき ほろびの かげを
一ひら 胡蝶の 羽がひに まかす。

渠は、『鳴門姫』を中止してから、第二の『海邊雜吟』十篇並に『世外の獨白』三篇を出した。渠は淺薄な文藝中心主義の流行を脫して、孤獨無戀化の永劫を歎く『嫦娥の恨』に、八八、八七の交互調を用ゐた。一海妖『磯姫』に於ては、微妙な新調七六調を詩界に供し、エルレイン的心理詩に適切なことを知らしめた。その一節——

胸も どよめく 海の音の
凝りし いはほの 上に すわり、

沈む ゆふ日の 光 見れば、
ひとり わが身の かげぞ 薄き。

その『無性斗神』に至つては、殆ど病的産物だと云はれたが、また幻怪奇異の想、未だ諸詩人が夢にだも入らざりしところと云はれた。泡鳴は之によつて美學從來の規範を脫し、獨得の神秘境を拓いて、醜の醜なる物をも歌ふ勇氣を示めしたのだ。

林外は、同年、『夏花少女』をつゞけると共に、『男裝女兵』、『オルフォイス』、『壁畫孔雀の賦』、『金翅鳥王の歌』等を出だし、最後の二作の如きは、さきの『極樂鳥』と同樣、一味摸型的妙趣ありと云はれたが、動もすれば統一を失ひ、單に文字の綺麗を誇る缺點があつた。然しその『金翅鳥王の歌』の如きは、空想の最も華美な物であつた。その一例——

夢の 花束 夢の ごと
『美』とぞ 呼びつゝ 擲てば
これも『眞』とぞ いらへつゝ、
うつゝや 花わ うち返し、
こゝに 戯咲と こゝに 懸、
光明も とはの 天の國。

有明は、同年、白百合に『姫が鳩』、『東の間なりき』等を出した。後詩の調を示めす爲め、その一節を擧げよう。

貴なる 姫よ、しばしは、
その手の 燭を、
しばしは 掩へ——あゝ、世に
わが身 ぞ いのち すべなき
ちりひぢ 水泡。

渠はまた『沈丁花』、『夢の花』、『わが思』等があつた。後詩は表象的傾向をよく現はしてゐた。また渠の新小説に出した『姫が曲』(凡二百二十行)は、材を南太平洋諸島の神話に取つた物だが、長い割合に與へるものが少く、そのロセチの『シスタヘレン』から思ひ付いた操り返しも餘り、度が重なると、無意味になつてゐた。

泣菫は、同年十一月、前年から特に發揮して來た自家の叙事詩派を受けて、新小説に『天馳使の歌』(七百四十餘行)を出した。渠はこゝに全く叙事詩の大家となつて、而も雄風颯々、スコト流の物語てなく、その材料からしてミルトンやホメーロスの史詩に近づいてゐた。之と同時に、渠の詩情は下り坂になり、叙情詩にまでも叙事的空技巧が過半を占める樣になつた。渠はまた白百合に『霜月の一日』、明星に『如月の一夜』等を出し、渠の八行調の技巧がます〳〵熟したのを示めした。鐵幹には『大沼姫』と『鷄を悼みて』(凡そ二百行)とがあつたが、後詩は綱島梁川の『苦痛と解脫』そッくりだ。

詩を架空な宗教的抽象觀念に持つて行くのは、有明と同じ缺點だが、それが摸倣となればなほ更ら面白くない。單に『足魂』『生魂』、『靈訶不思議』、『紫磨黃金』などいよ言葉をあやどり得たに過ぎない傾きがあつた。白星の帝國文學に出した『魔出顯』（二百五十行）は思想格調共に蕪雜粗大であつたが、新潮に出た『丸に井桁』は對した預期もなかつた代り、渠に最も適した寬潤肌の敘事詩であつた。花外の白百合に出した『故園』は渠の傑作であつたし、小山內薰の同誌に出した『回想』並に『水葬』もよかつた。

同年、晩翠の『南歐銷魂吟』、月郊の『赫夜姬』、臥城の『白金小櫛』、清白の『海の聲山の聲』、露葉の『戰鬪の詩』等があつたが、別に進境を示してゐなかつた。同年、少年詩人として現はれた石川啄木は思想はまとまらなかつたが、用語の豐富なので注意を引いた、渠は當時摸倣者の多かつた有明の哀歌調をもぢつて左の如き體を拵へた。

ひと度　醒めし　心の　初日影
　この世の　極み　眠らむ　時はなし。

その他、白百合に相馬御風が『まぼろし』、『花守』等の可憐優哀の作あり、明星に平野萬里、大井蒼梧等の作が出た。半月の長篇『七海の歌』は對した物でなかつた。

同年二月から日露戰爭が始まつたので、軍歌樣のものが先づ帝國文學に出た。坪井九馬三の『征露進軍歌』、芳賀矢一の『祝捷行軍歌』、晩翠の『征夷歌三章』、夏目漱石の『從軍歌』等だ。つゞいて九馬三の『玄海灘』、晩翠の『ザアレキチ及トキザン』、紫紅の『征露の歌』、泡鳴の『嗚呼吉野艦』、『提督マカロフ』、『架橋』、『わが國民』等が出た。最後のは後『眠りは醒めたり』と改題して泡鳴の第三詩集に載つたが、國歌の上乘なる物であらう。

同年出版の詩集は花外の『花外詩集』、鐵幹の『毒草』、泡鳴の『夕潮』、その他尾上柴舟の短歌譯詩集『銀鈴』、白星撰拔の『七つ星』、秋元蘆風の譯詩集『紛紅集』、無名子の譯詩『白氏の詩』等だ。それに、同年、讀賣新聞に續出して、翌年早々單行せられた幸田露伴の『心の跡』と、十二月に出た坪內逍遙の『新曲浦島』とは、またこの三十七年の考慮中に入れてよからう。花外のは用語亂雜、句法緩慢だが、慘澹たる意氣を以つて勝ると云はれた。鐵幹のは、また一段の進歩を示すこと芭蕉葉のものづから文ひろぐるが如しと稱せられた。泡鳴のはこの期に於ける初めの活動を促した物て、白熱的沈酔の底に思想その物までがロマンチクに動いてゐた。措辭に於ては大膽過ぎると云はれたが、豪健朴訥の間に、わが詩界空前の無解決無解脫の苦悶を歌つて、世の哲學宗教等の傳習思想に當つたのだ。

『藤村詩集』も亦この年に出たが、もう當時の時勢に密接てない過去の四集を合本にしたものに過ぎない。して、却つて詩界の外から、詩の形に塡つた作を發表して、小說界の二大家が一時世人を驚かしたのは、一は心の跡の『出廬』と『浦島』とだ。氣の早いものは新體詩人之が爲めに顏色なしなど云つたが、前者は散文よりも冗慢、後者は華麗綺語の寄せ集めてあつて、あの長いものが共に殆ど無內容の誹りがあつた。

同年、詩に關係ある議論ては、芳賀矢一の『詠史の歌』（帝國文學）、坪內逍遙並に田中正平の『文藝談』（白百合）等があつたが、泡鳴は白百合に於て以上に對する駁論『三博士の詩論』を草した。また、帝國文學に於て、櫻井天壇の『詩人蒲原有明』、『現代ロマンテケルの社會的觀察』等があつた。

三十八年は詩論の隨分盛んな年であつた。先づ帝國文學の野の人を初め、諸雜誌記者の『浦島』に對する、また泡鳴有明等の詩集に對する評論があつた。有明は一月の太陽に長篇の傳說的敘事詩『鎖斧』（凡そ二百三十行）を出した。若し全くのロマンチクて行けば、讀み手も或程度まて承知が出來たらうが、さうてない爲め、却つて空想と實際とがしツくり合はないて、無理な筋が出來た。然しその對話を戲曲的によく挿み得たのは、渠の成功てあつた。渠の明星に出した『朝なり』は、表象的て、また趣きの變はつた着想が認められた。

渠の勇健な『銀杏樹』はまた短いが、藤村の常盤樹並に泣菫の『公孫樹』の向ふを張つた物だ。その一節……

　劫初の　浪に、いと
　けだかき　わだつみの
　枝より、貝の葉の
　碎けし　それか、なが　落ち葉の　ゆくへ。

その他に渠は最も曖昧な『五月雨』、砲兵工廠を歌つた『誰かは心伏せざる』、銀行の引け時に運命を觀じた『魂の花』等があつて、渠は佛蘭西の表象詩風を帶びて來た。

泡鳴は、また、同年の初めに、白百合に於て、『高地の靈語』を出し、二百〇三高地を靈化して世の文明を呪はした。その冒頭『ああ、造(三)化の一(三)角なる(四)、二百(三)〇三(三)高地よ(四)、』の行間句切りなしの十音詩的運律は注意すべきものてあつた。渠はまた白百合に『濁のゆらぎ』並に『闇の橫木』を出し、之に『ときはの泉』を加へて、その第三詩集の卷頭に『三界獨白』（二百八十行）の深刻な戀愛詩を完うした。永貞なるべき天主教の比丘尼が、神父と禁ぜられた戀を爲し、その結果たる『分身を神にも見せずて、闇に遣り』、苦悶懊惱の末、現世から地獄に迷ひ、また天上界に登るのが骨子となつてゐる。餘りロマンチクな行き方てはあるが、太い悲痛の動脈が貫徹してゐて、渠は之を以つて詩界に獨歩の檜

利を認められたのだ。調も八七、八六の交互體を用ゐ、さきの『嫦娥の恨』の調よりも充分な落ちつきがあつた。其一例

ああ、日は　毛布の　黒みを　帶びて、
月　また　血のごと　しぼみ來たり、
あめなる　星々　その軸　もろく、
たとへば　無花果、地にぞ　落つる。

渠はそれまで、理趣はあつても、情熱に乏しいと云はれてゐたが、之が爲めに激したのか、この長篇並に諸雜誌に出した多くの短曲を以つて、全くロマンチク派、乃ち、情熱派の俘となつてしまつた。之に渠には意外なことで、渠は天上の戀を歌つても、て「なほ且寂しみ涌きぞ來たる」人慾の根底を忘れなかつた程で、痛苦暗澹たる神祕を擔ふ「現實即理想」の妙諦に入り、その短曲『鍵を與へよ』の一節——

いづれ　死ぬべき　ものの　身もて、
われば　あめなる　門を　戀ひず

と歌つたのを見ても、泣菫のさきに引用した天童的聖愛句とは、その立脚地が殆ど正反對であつた。泡鳴にはまた、バラド、叙事歌曲、乃ち、俗話的叙情詩『血ぬれる鐘』並に『田戸の海ぬし』があつた。また太陽に出た『男浪の小刹那』は、五八調で、沈重以つて渠の冥想詩をやるに適してゐた。その一節——

この　地球
つちより　亡ばば、
なれ、海に
増すらん　秘密ぞ。

また同誌に出た『人肉狂賣』は、調は六六、七六の交互、地の文がない劇詩的對話篇で、戰爭に關する痛切な諷刺詩だ。同年は日露媾和談判が軟弱な爲め國民が憤慨してゐた時代で、渠もその一人として『慨世諷刺吟』といふ短詩六篇を讀賣新聞に出した。その一篇『人の誹り』——

あすは　祝ひの　男爵、子爵、
五尺をとこの　威張り振り——
『御前、お酌』の　袂に　隱れ、
人の　そしりを　避けしやんせ。

泡鳴は同年六月を以て白百合の編輯發刊の權利を—協同者の一人と合はない爲め—放棄した。同誌がわが文界の一角に一種の新運動の根據となつてゐたのはその時までであつた。

泣菫の同三十八年の作中、最も重な物は明星に出た『わが行く海』(二十行)、中學世界に出た『大和にしあらましかば』(四十行)、明星に出た『鶯と小原女』等であらう。甲詩は向上精進の一境を歌つてゐると云はれたが、その實、彼の考へた人生の船の方向を示めしただけで、抽象的觀念の『努力』

を突然持つて來たのは、小學生徒に勉强しろと敎へる敎師の口吻に過ぎなかつた。乙詩はまた大和を歌ふには、渠は寧ろ大和通の醉茗や鐵幹よりも一層適任者だと云はれた程、クラシクな物であつた。してそれがブラウニングの「英國にあらましかば、今彌生月」と歌つたのと同じ行き方であつた。丙詩は新小說に出た『冬木のささやき』(八十行)と同樣、古風な言文一致體の擬人詩で、クラシク派の見た自然そのものに親しみの深いのが見えてゐた。然し自然主義派の見た自然の樣な深刻熱烈な物ではなかつた上、その古風俗語が直截流露の妙を缺いてゐたから、世人がこの種に對する要求を滿たし得なかつた。その一例——

『すりやな　孵ろが　繼鳥の
飼乞ひの　鳴きも　知らぬ　身で、
春の　日ながさ　何を　餌に、
やんら　飼をか』と、鶯。
さつさ、いよこの、
餌がひ　に。

その他、渠は昨年から初めた何『月の一日』とか、『一夕』とかいふ題の八行調をこの年にもつづけ、『神無月の一夜』(白百合)、『皐月の一夜』(明星)、『霜月の一夜』(同上)等があつた。また、動植物に感興を寄せた『野菊の歌へる』等の如き擬物擬人詩があつた。之を自然主義の傾向を代表した物と早合點した論者もあつたが、泣菫のは外國官能派の初期に屬する詩風であつて、たまには『澤潟の歌』の樣な表象的なのがあつたとしても、まだ自然主義に必要な心理的自覺は勿論、一段下つた宗敎の形式に這入りたがる表象詩——たとへば、有明がこの期に於ける作——の範圍にも這入つてゐなかつたのだ。然し『野菊』の詩形は彼には一種創新の物であつた。その一例——

かしこ、いま　花は　ひからび、
香は　朽ちて、老いがれ　鳴るや、
河原よもぎ。

林外は、同年の初めに、『夢のほのほ』並に『白鵠』を出した。後詩は美至上主義の佳篇であつた。その一節——

白鵠よ　すがた　神聖う
かけて　來ね、貝多羅の　樹に。
樹は　浴びぬ　ゆふ日の　金流、
あめ地ぞ　ただ　美のみ　なる。

彼は、同年二月に第一詩集を出したから、ただ花やかな文字を羅列しただけで、殆ど氣が拔けた樣な作をつづけた。乃ち、『清十郎塚』、『白象の歌』、『青雀』、『わが死相』、『魔樹と破鏡鳥』等がそれだ。然し『死相』は、佛蘭西表象派の色覺

の幻想を取り入れたところに、多少の取り柄があつた。月郊は、同年『羅浮仙女』を白百合に出して、少し用語に花やかな點があつたが、『飛雲辭』、『山田長政』等は題を見ても直ぐ彼の同一詩風が想像された。然し白百合に出た『花賣』(七十行)は、口語體で、輕妙な物だ。啄木は『夢のうたげ』、『夢のほか』、『めしひの少女』、『さみだれ』、『いばらの冠』等を諸雜誌に出した。晩翠は『東海遊子吟』、『歐羅巴回顧の歌』、等があつた。鐵幹は『北のはて』、『朽尼』、『舞姫』等を別として、『倒れし白樺の歌』(約三百二十行)は、赤城山の暴風雨の爲めにその湖畔に倒れた老木を歌つた物で、泣菫の公孫樹そつくりの着想だが、この度に限つて、渠の小才的な亂調入りの七五調でなく、眞面目な七五調を追ふてゐた。

花外は『雲髮』、『白鵠』等を、小山内薫は『晩鐘』、『月見草』等を、醉茗は『歌の故郷』、『胸なる巣』等を、露葉は『低唱』等を、臥城は『天緒琴』、『落日惆悵賦』等を、清白は『夕蘭集』等を出した。その他、諸雜誌に大塚甲山、清水橘村。相馬御風、平野萬里、澤村胡夷、小林愛雄、吹田盧風、茅野肅々、吉井勇、松山白洋等が出てゐた。馬場孤蝶が再び詩を作り出し、『ものの音』、『夜半のちまた』等を明星に載せて、新進作家に劣らず、清新な方面に筆を染めた。また、上田敏は明星に於て、六月から九月に渡つて、おもに佛蘭西並に英吉利の新らしい詩派の作物を飜譯した。有明は渠と前後してこの方面の詩風を追ふところがあつたが、泣菫はこの詩譯に由つてその感想を新らたにした點があるらしかつた。

同三十八年に出た詩集は、醉茗の『劒影』並に『塔影』、林外の『夏花少女』、啄木のあこがれ』、泣菫の『二十五絃』並に『白玉姫』、泡鳴の『悲戀悲歌』、柴舟の『金帆』、有明の『春鳥集』、薫の『小野の別れ』、敏の『海潮音』、夜雨の『花守』、阜雨郎の『かぶら矢』等だ。その他、橘村汪洋の合集『夏廂』、文庫派の『青海波』、譯詩に『ゲーテの詩』、『テニスンの詩』、『ヲルヅヲルスの詩』、『キイツの詩』、『野葡萄』等があつた。また米野口の英詩集『劒と戀との日本』並に『夏雲』があつた。また、白星は『耶蘇の戀』、泡鳴は冥想詩劇『海堡技師』、坪内逍遙は新曲『かくや姫』を出した。然し最後の三書は、泡鳴のが口語的有形律であつたといふほかに、對して詩界の風潮に關係がなかつた。

『塔影』、『花守』等、文庫派の作は、十年前に比して左程の進歩もなく、詩形の工風にも努力せず、詩想の清新をも期せず、神經の鋭敏をも缺いてゐた。然し醉茗は平板溫雅、夜雨は平明可憐、清白は淡々の詩風であつた。薫と啄木とのは、兩者が之によつてその價値が瞥見されたのだ。『あこがれ』は稚氣と衒氣とに滿ちてゐると云はれたが、用語の豐富、

想像面積の廣大なので末有望であつた。『小野の別れ』は哀婉にして、而も皮肉なところが特色であつた。そのうちの『狂人の歌へる秋の歌』は傑作だ。その一節——

花野　狂ふは　花野の　あるじ、
狂ひ　誇れる　手を　取りて、
となりの　妻よ　何と　泣く。
あは、は、は、あは、は、は、
おかしの　秋や。

同年最も多くの印象を止めたのは、『夏花少女』、『二十五絃』『悲戀悲歌』、『春鳥集』、並に『海潮音』だ。林外のは例の華麗艶美を以つて勝り、情想の實質に乏しく、若し有明の空想は理想的だとすれば、林外のは全く形式的だと云はれた。泣菫のは、『行く春』以來の缺陷を滿たすべきものであつたのに詩形の整頓、用語の精練を除いては、別に見るべき人生觀の發達も認められなかつた。叙情詩にも叙事脈が勝ち過ぎ、ただ古語復活を得意としたらしかつたが、それも空技巧に走る一例に過ぎなかつた。泡鳴のは豐富な想像と思想とになやまされて、却つて自意識を失ひ、詩語直截、單縱陳的なる缺點ありと云はれたが、詩界に於て理想の詩人として最も深刻活躍の才を示めした。且、其長篇並に多くの短曲に於て、無言、罪惡、殺人、姦通、難産、墮胎、地獄、苦悶等、すべて世の顧なかつた暗黑方面に筆を染めて、純粹の苦悶詩なるものを初めたのは、渠の記憶するべき効績だ。また、その附錄の叙事小曲『脱營兵』は劇的であつて、叙事詩の新形式と云はれた。渠は當時流行の形式的表象主義を離れて、刹那的苦悶と生命とを抱いて、つひに之が爲めに「自然主義的表象詩」を唱道するに至つたのだ。有明のは、表象主義の命脈が通つてゐるので、注意を引いたものだが、その主義はたゞ詩の形式上の問題であつた。思想上では、あり振れた物我二元主義か然らざれは平凡な唯靈主義の立ち場を許容してゐたから、つひに抽象觀念に死んで行く傾向を以つてゐた。これは泣菫の技巧的死滅の傾向よりはまだしもましてあつたか知れないが泡鳴の苦悶的情熱にやがて壓倒される運命を持つてゐた。然し有明のは官能開放に於て先鞭をつけたことを忘れてはならない。敏のはすべて飜譯だが、之が爲めに泰西の近代風をわが詩界に紹介した功績は決して世人の忘るべからざることだ。

第七章　第七期(明治三十九年以後)

詩界の第六期は以上の如くして終つたが、ここに章を改めて、その後の形勢を述べて見やう。『明治文學史』の著者は、この第六期を結ぶに當り、「新體詩界當時の形勢は、藤村晩翠

が一世を指導したりし時とは著しく變遷し、一代の詩人二家の境地より更らに一歩を進めんとす」と云つたのは一歩も二歩も(進めたり)と直したら、それで滿足だが、この時に「方り、曩に存せりし如き指導者を失ひ、暗中模索、各種の研究試驗をなしつゝ未だ安住する所なきに似たり」とは、藤村晩翠と他の新進詩家との間に價値上に對した隔膜でもあるかの樣に見えて、實然の狀態を誤傳する云ひ方であつて、却つてその事情に暗い渠身づからが「暗中模索」の狀態にあつたのではなからうかと思はれる。岩野泡鳴が、當時或人の「今の詩壇は群雄割據と云はんよりも、小天狗割據なり」と云つたに答へて、「詩界消息」自百合に於て、「いまだ割據なる語を正當に用るまでに、人物の出て居らぬを覺え候。たゞ數名のものが、之より發達の途中にあるのみ」と云つたのは、多少謙遜な言てあつたが、その「數名のもの」のうちには、泡鳴自身を初めとし、有明、泣菫、林外、並にその他を含んで居たのに相違なかつたらう。その詩家數名は、いづれも一個の見識と素養とを備へて、他人の指導を待つ樣なことはなかつたのである。

三十八年十一月、春風道人は日々新聞に於て、『現代の新體詩』を論じ、この第六期に相當する時代に云ひ及んだところに於て、左の如く云つた。

> 日清戰後の初期詩壇に於て、自然を歌ひ、穩かなる戀愛を歌ひたりしものは、明治三十四年前後に及び、高踏的戀愛を歌へる星菫詩となり、明治三十七八年の今日は、更らに轉じて象徴詩流行の兆を呈し、星菫の時代去つて、夢の時代來りつゝあり。詩形に在りても、戰後、七五、五七のなだらかなる調に統一せられんとしたりしもの、今は再び六四、八七、五五、七七、七六等の種々なる詩形を見、その技術次第に纖細巧緻となりて、中には遂に小刀細工に陷れるもあり。趣味に於ても、嚮に光明平和を歌はんとしたりしもの、今は成るべく暗澹たる趣味を歌はんと期し、嚮に清新溫麗の調を出さんとしたりしもの、今は却て窈冥慘凄の調を出さんと勉め、客觀的描寫を用ゐることゝなり、感情的に歌ひ出したるものは、幻覺的に寫し出すことゝなり、悲哀の快感を味ひたるものは、恐懼の快感に耽らんとしつゝあるを見る。而して、嚮の明治三十四年前後に於ける星菫時代の中堅として、與謝野鐵幹氏等を擇びたる代りに、今は忽ち象徴時代の中堅として、蒲原有明、岩野泡鳴、薄田泣菫氏等を擇ばんと欲するものゝ如し。

この最後の中堅三家の問題に關しては、各々その特色を說明して置く必要がある。かの『春鳥集』が出たのと前後して、

片山孤村の『神經質の文學』が帝國大學に出て、獨逸の表象派を紹介して、暗にこの派の勃興を非難し、中島孤島は『暗黑なる文壇』を讀賣新聞に草して、例のトルストイやノルダウの說を借りて、表象の鼓吹を非議し、長谷川天溪は『表象主義の文學』を太陽に論じて、之が歷史を說明し、角田浩々歌た讀賣に於て『比興詩を論じて現代の詩風に及ぶ』を出した。かうも多數批評家の問題となつた表象詩を標準にすれば特にこの傾向を標榜した有明が、この時代の代表者てあるべきだが、この傾向の裏面に必らず存在する神秘暗憺たる苦悶的情熱を本位とすれば、之れを最も良く發揮した泡鳴の詩風が、この時代を代表する權利があるのだ。また、かういふ傾向には、技巧がなか〳〵必要になつて來る點から云へば、泣菫の効績も決して一段を下だつたわけの物てはなかつた。

島村抱月は、同三十八年、日々新聞に於て、かの『囚はれたる文藝』と同じ立ち場から、現代の新體詩を形式、技巧等の智力的處理に依つて成るばかりと見て、概してクラシク主義の流行と見做していいと云つたことがあるが、これは渠が外國から歸り立てて、當代の文運が渠の留守中にどういふ變遷をしたかといふことを、まだ知らなかつたのだらう。かのダンヌンチオやメタリンクが實行して居る智力の情熱化が、既にわが國にも行はれて居たのを知らなかつたのてあらう。

且、その『如是文藝』欄に於て、表象主義を解釋するに、カライル流の舊式の論法を以つてし、「斯樣な表象主義(シムボリズム)など申すものが何故に東洋的(これはヘーゲルの解釋)かと云ひますと、相對界を消して行く形の思想に應ずるからてある」と云つた。わが國て云へば、有明の表象詩の傾向は多少この方てあるが、泡鳴のは抱月の所謂「消極的」てはなく、「相對的若しくば物質的活動の豐富を是認」して、而もその上に尙苦悶して居るのてある。渠は苦悶に苦悶を重ねてそのデカダン傾向の極點に達する時が來ると云はれてもかまはず、その刹那の生命に慟哭するのだから、「その頂點に安立の地を見出さ」なければ、積極的てないといふ理由はないのだ。よしんば理由があるにしても、矢張それには消極架空な神や佛、理想や觀念を持つて來るに過ぎない。有識者を以て任ずるものに限つて、そんな下だらない形式ばかりの宗教や哲學の理論を擔ぎ出して詩人に向ひ、自づから物識り、さらいもの〳〵樣に澄まして居る癖があるのだ。詩人は苦悶その物に最上、積極の生命を有して居るのてある。現詩人のうち、渠等物識り連の意見に最も多く動されて、涅槃や安住をいいことの樣に振りますのは泣菫と鐵幹とてある。もつとも、最近になつて兩家ともまた新自然主義の聲に動いて來た樣だが、それならそれていいから、安住氣取りを脫してしまうがいいのだ。

三十九年に這入つてから、二月の帝國文學に於て、小山鼎浦は『神秘派と夢幻派と空靈派と』いふ論文を出し、綱島梁川、木下尚江を神秘派に、泉鏡花、夏目漱石を夢幻派に入れたのは、問題が違ふから、こゝてそのよしあしは云はないが、現代の詩人を大抵空靈派に數へ、

神秘派及び夢幻派とやゝ相似たる光彩を帶びて、之と實質の甚だ同じからざるを、予輩は呼んで假りに空靈派と爲す。彼等は綺音麗語を綴りて宛ら神界の窈冥を辿り、靈境の玄微を闡くが如くなれども、その神と呼び靈と言ふもの、畢竟修辭の粉飾に止りて、何等實感の生氣を傳ふる者に非ざる也。即ちこの種の作家は神秘を戀ふが如くして、實は空靈を戀へる也、否、戀へるに非ず、只戀ふるが如くに歌ひ、且、語る也。…前田林外、岩野泡鳴の如き、流石に生命の呼吸察ばしき者あれども、他の群に作家に至りては、眞に心臟の皷動を以て、靈を呼ぶ者幾人かある。予輩は現代詩界の名星たる薄田泣菫の近詠を讀んてすら、遂に斯の如きの數を禁じ得ざる也。

と歎息し、泣菫の同年一月に明星に出した『わが行く海』（既に紹介した）を引用して、

斯の如きは必ずしも難解の句に非し、故に讀過數番、或は作者の意はんとしたる詩境を髣髴せしめ得べし、而して之と同時に、その全く無意義なるを悟りて、何人も堅然失笑すべし。

と攻撃し、更らに進んて、

蓋し空靈派の特質とも謂ふべきは、一に修辭を過重する餘り、詩想捕促し難くして、宛ら謎語を讀む感あること。二に內部生命の率直なる發露を卑しとして、眞情を蔽ふの傾あり、從つて描くところ聽ふところ、人間的興味に遠きこと。三に好んて神秘的言語を用ゐ、而かもその言語たる、何等の實證を指す者に非ざること、是也。

と說明した。

渠、鼎浦は耶蘇敎信者の立脚地に立つて評詩の筆を執つたのであるから、神と安心とを與へなければ、詩は空な物だといふのであつた。宗敎的安心をほのめかさうとする泣菫等に取つて、泣菫の所謂「詩は小生に於ては修養に候」の斷言に對しても、不滿足な感がなきにしもあらずであつたらう。然し、泡鳴は既に公然と

われに　神なく、　且は　死なく、
ありと　いふべき　この　思み。

と歌つて居た位だから、同年、蓋宗敎、蓋哲學、蓋美學を打破する爲めに作つて、單行本として出した『神祕的半獸主義』のうちに、この評家に向つて答辯をしたのはかうてある。

小山鼎浦氏の論文に、僕を空靈派の一人に數へてある。かく見られたのは、僕に取つては知己を得た樣な氣がしたが、『その神と呼び、靈といふものは』云々と云はれたのは、鼎浦氏が宗敎信者の一人てあるので、矢張り神又はそれに類する虛構物を假現せずには居られない側の人だといふことが分る。此の數へられた他の作家のことは今こゝに論ずる餘地はないが、僕は決して氏の所謂修辭的粉飾を弄して居るものでないことは、これまての議論て見ても分るだらうと思ふ。半獸主義は空靈主義てあるから、かういふ哲理を以つて創作する作物に、神佛がないのは無責任ではない。神とか、絕對とかを設けるに從つて、その思想は枯死して行くのを知らない人々が多い。尤も、創作上の巧拙から、僕の詩には口でいふだけの用意があらはれて居ないと云はれるのなら、それは別問題とならう。

以上の有明、泡鳴、泣菫の外、まだ多くの詩人がある、その諸詩家のこの期に於ける狀態を春風道人の記事から拔いて見ると、

日淸戰後の十年間に於ける初期の趣味を趣味とし、今猶概して穩かなる詩を作りつゝあるは、河井酔茗、尾上柴舟、蒲安月郊、山本露葉、横瀨夜雨、小山內薰、諸氏に

して、必ずしも特色を同ふせざる乍らも、皆幾分か島崎藤村氏等を中心とせる時代の色彩を帶ぶる上に一致す。

而して…成るべく豪放の趣味を歌はんと勉めつゝあるものに、土井晩翠、平木白星諸氏あり。艷麗なる詩を作らんと期しつゝあるものに、前田林外氏あり。凱切なる詩を作らんと心掛けつゝある人に、兒玉花外氏あり。用語の富みを以つて勝る弱冠詩人石川啄木氏もあり。外に昨明治卅七年頃より譯詩に手を着けつゝある上田敏氏等もあり。

實に明治三十八年は、早稻田文學記者の云つた通り、「新體詩壇は總じて生氣發動の趣きを呈した。」而して、その翌三十九年からは、また詩壇の形勢が變つて來たので、第七期に入るべきものだが、餘り現今に近い事情てあるから、餘論として、この章に述べてしまうつもりだ。泡鳴は、太陽の新年號に、『黃金鱗』と稱する五七調の敘事歌曲（凡そ二百八十行）を出した。上田敏は之に對して、藝苑に於て、「氏がこれ迄の作品中最も優れたるものならむ。題材の新奇なるを賞するにあらず、常に新境地を開拓せむとする氏が勇氣は、時に或は余をして追蹤することを得ざらしむれど、此詩は熱烈の情を迎ふるに、藝術の訓練（但しこの者の範圍內ていふ）を以てし、遒勁の妙を捉へたり」と云つた。渠泡鳴はまた、

四十年の太陽新年號に、「四三、四五」を標準の七九調、懐舊詩篇『うらうづ貝』(二百行以上)を出した。渠の九歳の時の初戀を歌つたものだ。泣菫はまた、早稲田文學の三十九年七月號に於て、七五調の史詩『葛城の神』(五百行以上)を出した。上田敏は之に對して、「海田氏の新作に至りては、日本文學史上に特筆すべき堂々たる雅健の長篇にして、廉價なる涙、或は又更らに廉價なる笑をもて、同情を強ひ喝采を需むる平俗文學流行の今日、頗る人意を強うするに足る作なり」と賞した。有明はまた、四十年の太陽新年號に於て、七五七、五七五句交互調の敘事歌曲『人魚の海』(凡そ百三十行)を出した。之に對して、早稲田文學記者は「從來有明氏の作、殊に敘事詩に於て、晦澁の嫌が多かつたに引きかへ、此度のは誠にすら〳〵として、分り易く歌つてある。技巧が圓熟したのであらう。……近來の佳作たるは確かである」と云つた。

この三家はその他に多くの短篇をも發表したが、泣菫は表象詩的技巧を眞似ながらも、その詩集『白羊宮』を見て分る通り、ます〳〵クラシク趣味を以つて固まるに至り、泡鳴はまた單純な表象詩て滿足出來ない渠從來の傾向をます〳〵自覺して、一時ロマンチクの極端に達した情熱を、直ちにデカダン的な自然主義に向け。有明はまた、自己のいいとした表象詩の、單にこと更らめいた技巧手段に過ぎなかつたのを悟つたかの樣に、泡鳴の主張する自然主義的表象詩派の方に傾いて來た。泡鳴は世の作家並に評家の餘り無方針なのに激して明治三十九年『神秘的半獸主義』の書を著はし、形式哲學と傳習宗教と理想派的美學の傾向とを打破して、この新自然主義を唱道したのだ。然し、その後作者自身が讀賣紙上て云つた樣に、「形式論理て固つて居る大學の學者髪には、僕の自由な論理が到底こなし切れなかつたし、素養の少ない文學者連には、僕の趣味ある哲理もたゞ乾燥無味な食物であつたらしい。」早稲田文學記者は、最近詩界の報道に於て、自然派と自然主義派とを混同して、泣菫をも後派の部類に數へたが、泡鳴が明治四十年に這入つてから、早稲田文學の『日本古代思想より近代の表象主義を論ず』並に帝國文學の『自然主義的表象詩論に於て論じた通り、泣菫のは一種の傳習的比喩をやつて居るに過ぎないので、かの眞正な自然主義派の樣に「その根底から心理的自覺を有して……それが燃えて來ると、自然に表象的活動の呼吸が感じられる樣になる」底の行き方てはない。泣菫は、小説界に於ける藤村の如く、河井酔茗流の自然派の最も進歩した者に過ぎない。自然主義の表象詩は、また、長谷川天渓が浩々に與へて云つた樣に、「言語とその排列その物と」ばかりてはない。渠はエルンイン、ラムボウ、近くば有明の虚癖をばかり見たのてあらう。だから、早稲田

文學記者が、

泣菫氏に在つては、題材を山林田野の風物に採つて、その個々に直ちに自家の感情精神を求めんとし、好んて官能に愬へんとする點に於いて自然派的てあり、有明氏に在つては、必らずしも山林田野の風物に多く題材を藉るといふことはないが、主として手近き身邊の事物を捉へて、これらの中に生活の興味感想を味ひ、且、何物かを暗示せんとして居る。

と見做して、之に類する渠の所謂自爲派を一括して後、泡鳴氏はその用語句法の上には……缺點を脫せぬながら、多く標象(表象)的形式によつて、人生の痛苦を歌はんとした點に於いて、前述の自然派的傾向とその歩調を同じうしてゐるものと見られる。

と云つたのは、少し事實を轉倒して居るので、泡鳴は渠等の跡について歩調を同じくしたのではない、寧ろ渠等がこの傾向になる以前から渠等自然派よりも進歩した自然主義に據つて熱烈な苦悶を歌つて居たのである。たゞ渠はその外形がロマンチクな方面に深入りをし過ぎ、且人の嫌ふ醜語獸想を好んて用ゐたので、多少その感想が世人に看破せられなかつた跡のあるのは事實てある。今一つ云つて置くべきは、同年露伴が諸賢に於て四行詩を唱道したと前後して、臥城と晩翠が律詩と稱して、支那の律詩に當る八行詩を初めたことだ。今、臥城の『埋火』一篇を例としよう。(その俳句調てあるのはかの美妙並びに藤村の同調失敗を探り返してゐるに過ぎないが。)

灰の面の　稍崩れたる　午すぎの
埋火や、若き　男と　女と　物語る。
薄日さす　障子に　映る　鳥の影、
香に　蒸して　あからに　火照る　炭の顔、
寒牡丹　音なく　散らふ　卓の上、
妻琴の　緒絶え　空鳴る　床の前。
えましさの　悲しみを　生む　一瞬に、
手放てば、一人の　えにし　呪はれね。

同三十九年には『白羊宮』の外に、花外の『ゆく雲』並に『天風魔帆』、林外の『花妻』、月効の『寂ざめ草』、白星の『釋迦』、清白の『孔雀船』、晩翠の『東海遊子吟』、泡鳴の『泡鳴詩集』、等が出た。最後の詩集は、著者の『夕潮』と『悲戀悲歌』とを合本にしたばかりだし、その他も『花妻』を除いては、別にその作者の進歩をも退歩をも示めしたものてはなかつた。たゞこの林外の第二集は、第一集と比較して、殆ど別人の作の樣に興が乘つて居なかつたので、帝國文學記者などは、少し酷てはあつたが、「思想の貧少、技巧の皆無、吾輩は林外を稱して空

零(空靈ではない)詩人と云ひたい」と冷かした。なほ、問題となつたのは、米野口、その他十餘名の詩人が、英米の詩人と合同して出したあやめ會詩集である。その第一集『あやめ草』は三十九年に、第二集『豐旗雲』は四十年に出たが、第一集に對する角田浩々の批評が、豹子頭の名を以つて讀賣新聞に出た。その文中に於て、評家の詩人に對する態度が如何に無禮でもあると同時に、クラシクな偏見を以つて創新なまたデカダン的な詩風に當つたから、第一にその槍玉に擧つた泡鳴が、『あやめ草評を讀みて、豹子頭君に答ふ』を讀賣紙上に發表したので、評家の議論は、第三回目位から、その態度と見解とが一變した。また、同會の第二集が出るに先立つて、會員の一人が無實のことに騷ぎ立て、同會はおのづから世間の笑を招いたが、それも、前田林外の脫會と共に、納まつて了まつた。それから、三十九年十一月に出た小山内薫の『夢見草』は、その散文詩を集めたもので、なか〳〵この詩體の面目を發揮したのがあつた。別に又細越夏村の『靈笛』があるが、まだその特色を認められる作はなかつた。

三十九年八月の文章世界に、詩評家を以つて任ずるかの櫻井天壇が『當今の新體詩人』を發表したが、これを以つて當今の詩壇を結論した物と見ても大抵はよからうと思はれる。その抜萃

現時の新體詩は、その内容とその詩形と共に豐富にして、趣味の色彩亦多樣なり。詩形研究者として從來單調の格律を破りたる者、泡鳴、泣菫、有明、林外、白星等皆然らざるはなけれど、泡鳴得意の八七調は比較的完璧に近きを證するに似たり。俗語を詩化せんとする技巧は泣菫の最も努力する所なれども、例の奇妙なる馬子唄の囃の如きものは、未だ成功せりとも見えず。泡鳴は時ありて無遠慮なる俗語を混入し、讀者をして其大膽なるに驚かしむる事あり。彼は蓋し言語に二種の「醜」の美あるを覺り、之を詩中に應用せんと欲するの希望ある者に似たれど、此の如きは詩の技巧上最も困難なるべく、時に詩の技巧を無視して平然たる事ある泡鳴は、「醜」語の美化といふが如き試練に成功する事蓋し不可能ならむか。上田柳村亦時に俗語を混用して好才なき詩技を示めせども、俗語の混入が一篇の詩趣と如何許り相消長すべきかの如き立ち入れる問題には未だ觸接せざる如し。漢語佛語の混用は白星の詩に最も多く之を見る。白星の詩調は遒勁を以つて本色となせども、彼は詩中の樂素を全く閑却し去る者なれば、その漢語、佛語も調和的詞美を爲す者少し。……その他、新體詩特有の新造語と國語制約の破壞とに至りては、現代の詩人多少之を爲さざるなく……林

外の詩に最も多し。吾人は林外が『夏花少女』を出したる時、既にその弊を見たれど、暫く彼の新詩語の圓熟を待たんが爲めに、多くの評家が林外を罵倒したるに拘らず、吾人は或る程度まで彼を辯護し置きたり。然るにその後『花妻』を出し、『あやめ草』中の『印度哀歌』を出すに及びても、その新詩語は何等の圓熟するものなく、言語の連絡等に於て無理なる者多きは、大に吾人の憾とする所也。……古語の復活及其の應用は現代の新體詩は第二期(明治六年以前)のそれよりも遙かに盛なり。柳村の詞藻に萬葉語、謠曲語等、雜然として混入するは更らにも言はず、泣菫が二三年以來、俄然として古語の驅使に自在の手腕を揮ひ來りたるは、最も注意すべき現象ならずや。……古語の幹旋が自在となりし結果、泣菫は二個の方面に於て第二期時代と逕庭するを見る。その一は詩風に沈靜の妙を增したるにあり。その二は情熱のやうやく冷却し來れるにあり。……然れども更らに精細に觀察せんに、泣菫の詩が感情の直接性を失ひたりとは、寧ろ彼の叙事詩に就きて謂ふべき評言にして、その叙情詩に至りては、今猶昨の如く情緒たる物の具現にあらざるかと思はるゝ者少ならず。……感情の直接性に乏しきものは、單に泣菫の叙事詩のみならず、有明、柳村等、奇も技巧を以て詩の生命と爲す者に共通點也。……技巧主義に成れる詩歌は、性格ある詩歌たる事難し……柳村、有明等に性格の詩少きは即ち是の故のみ……象徴主義の詩は情趣のみの詩なり。……兎に角、情趣といふ者が重きを置かるゝに至りたるは、近代詩歌の豐富を致せる所以なる事を斷言するに憚からず。

かう斷言して、次ぎに「現代詩人に對する短評」を試みて曰く。

すべての詩人の中、思想の深きを以て第一位を占むべきは泡鳴也。彼の神祕主義は眞面目なる人生の實在に根據を置けるものなりや否やは一再吟味を要する所なれど、眞實なる人生當面の事實を把へ、之を解釋せんとするの氣魂に於て、而して又その痛快なる解決に於て、優に日本詩壇の冥想的方面を代表する大立物也。好漢、惜むらくは詩語の選定時に甚だ蕪雜なるものあるを……泣菫は詞遣の豐富なる、感情の純粹なる、方今叙情詩人の第一流たり。叙事詩の才亦頗る見るべしと雖も、詩中の人物性格、及び動作に對する彼の同情少きを以て見れば、未だ叙事詩の全詩を得たる者と謂ふべからず。有明は、象徴詩の功績以外に、更らに二個の功績あり。……リフレーン(繰返し)を用ゐるに非凡の技を示せるはその一也。從來蕪

流の美學が唱道したる劣等感官の說を否定し、嗅味の二官も美學的たり得と告白せるはその二也。……彼は日本新體詩第三期(明治三十六七年後)の陳臭也。……林外は空想の多彩を取るべく、ラールブールラール(藝術の爲め藝術)の意氣を珍とすべし。……柳村は飜譯者にして詩人にあらず。『海潮音』は佛の象徵主義の詩を輸入したる者にして、其功偉大也。然れども美辭と麗語とを鬪釘補綴し、所謂錦のつゞれに類するもの、往々にしてこれあるは吾人之を贊せず。……撫子(小山內薰)は修辭に苦心する詩人なれど、最大級の情熱的文字を用うる事少なく、詩品清迥也。……酔茗は十年一日の如く進歩もせず退歩もせずして詩を作る。七五調に於ては殆ど卒業期に達せり。夜雨は悲哀の詩人也……たゞ彼の悲哀は必らずしも人生大の悲哀にあらず、寧ろ可憐美と相須つもの也。……晩翠の詩想と詩形とは、第二期に於て既に固定したるが故に、その後大なる開展なく、同一格調と同一契調とを操り返すのみ。

以上のうち、泣菫の敍事詩的方面よりも、その敍情詩的方面を取つたのは、渠の敍情詩に於て、內外詩人の摸倣が多いこと、その感情の純粹なる」はわが國の敍情派(藤村等の)時代に屬すべき古臭い性質があることゝを忘れて居たからであらう。渠の敍事詩に、評家の云ふ樣な缺點があるにしても、渠は寧ろこの方に渠の特長を發揮して居たのである。また、有明の劣等感官說否認を以つて來るなら、之と同じ樣に、かの陳腐な理想派的美學の傾向を早くから脫却し、今も尙之と挑戰して居る、泡鳴の暗憺たる獸的苦悶美の功績をも擧げなければなるまい。それから、また、外に一家の風を備へて居る與謝野鐵幹、兒玉花外、山本露葉、高安月郊等は、天壇の批評に乘らなかつたが、これらの詩人のことは、春風道人の言を引用したころに、多少の報道があるから、讀者は分つて居るだらう。殊に鐵幹に對しては、岩城の言がよく當つて居る、乃ち、かうだ。

鐵幹は世と共に推移して、凝滯せざる靈活の點に於ては、當代及ぶ者なく、模倣の巧妙却て自家の特色を失ふと雖も、彼が一群の詩才を率ゐて、『明星』を經營する所以は即ち茲に存ずるが如し。

『明星の詩風』に對抗して、別にロマンチク主義の旗色を鮮明にした『白百合』は、編輯發行者の一人であつた岩野泡鳴が、自己の自然主義の段々確立して來た爲め、並にその他の理由を以つて、同誌から手を引いてから、追ひ〳〵さびれて來て、四十年の春、終に廢刊することゝなつたが、明星の方は、まだ續いて居て、それも後者の末路の樣に餘り勢力はなくなつたが、尙さきの技巧派に加ふるに、早稻田文學記者の所謂自然派(自然主義派にあらず)を標榜して、編輯者鐵幹を初め、既にこれまでに擧げた同誌の仲間並に平野萬里、北原白秋、秋庭俊彥、末吉安持等を紹介して居る。

然し、今の明星派はすべてまだ若い人ばかりであるから、その經營者が本年の饗宴に出した『詩話』て云つた言葉を借りて云へば「一般に摸倣が好きだ。一人の詩人が少し異つた事を歌ふと、すべての作者がそれを直ぐに眞似て作る」といふ有樣て、早稻田文學記者は之をいい方面に解釋して、「この派の人々の作品を通觀すれば處々より種々の傾向の影響を總合し得ることゝなると云つた。して、その自然派的傾向の影響は腰辨當(森鷗外の別名)の作から來て居るところが多い。渠は早く心の花に於て「小犬」を歌ひ、小犬が路傍に寢て居るところを人に足を踏まれたので、行路難だといふわけもないことに持つて行つたことがある。三十九年からの作も、それと對した違ひはない。渠は、早稻田文學記者に據ると、

好んて寧ろ極端なる市井卑俗の事物を詠じて、必らずしもこれに主觀の生活の興味を托せんとせず、單に寫生的にこれを敍寫して、卑俗なる市井の事物、卑俗なれども人間生活の實際と密接なる關係ある市井の事物に對する興味、即ち、換言すれば、實際生活に對する興味を誘はんとするに止まり、その興味その物の內容若しくは性質方面に至つては、敢てこれを表はしてない。

要するに、渠の樣な作は、外國に於けるこの種の氣の利いた即興詩風、たとへば、アーサーシモンズの所謂「市街の詩」、「眼前にあるもの、短篇詩」たるアーネストヘンレイの作の樣なのを眞似そくなつたのであつて、ヘンレイが「ザタイアドミドサマー」(疲れた中夏)、「スロトリングロンドンタウン」(怠づむロンドン市)と云つたのと、鷗外が「角の毛電車」、「吸くて喰へましねえ」と云つたのと、詩脈の高まり方が違つて居る。藝術の深い保證がないのは、逍遙の樂劇に贈が附いて居ないのと同前、學者のあたまからかうした風のものも面白からうと云ふ位の餘技に過ぎないのだ。いづれも考案ばかりで結構て、その作に生命があるのが少い。今藝苑第五號に出た渠の作『雫』の全文を引用して見よう。

寒き雨　電車　を　籠めつ。
ゆきかひに　絲　きしろへば、
ほどばしる　靑き火　ふたつ。
人　いきれ、曇る　がらす　を
まじろがて　しばし　まもりぬ。
窓つら　の　雫(しづく)　小紋　の
二つ　三つ　寄りては　流る。

おもひて は そこはかとなく
浮び來る、やがて ぞ 消ゆる。
鐸は 鳴る 神田 須田町。

早稲田文學記者は、かういふ「平淡通俗」な詩は勿論、「その官能を刺戟して、鋭敏なる感想を喚び起さんとする」有明、泣菫、泡鳴等の詩風につき、

一面より考ふれば、標象主義はやがてその發芽に於いて已に近代自然主義と相抱合すべき素質を有し、自然主義もまたやがて標象主義に到つて、恐らくはその極に達し得たりとなすべきであらう。

と云つたのは、佛蘭西の表象派の或部分―たとへば、メタリンクやユイマンの如く、自然の根底を遠ざかつた表象專門の、從つて舊宗教の抽象的觀念を爲たり顏に振りまはす、枯死乾滅の詩風に達する惡弊を承知して居たか、どうだか分らないが、自然主義と表象主義との一致點を認めて居たものとすれば、渠も、泡鳴が『半獸主義』以來唱道實現して居る自然主義的表象詩派が、現代並に將來の詩界を風靡すべきものであることを示めしたものであらう。泡鳴はたゞ詩論をするばかりでなく續いてその論旨を體現した詩篇をあやめ會詩集、早稲田文學、太陽、文章世界、中學世界、中央公論、改革後の文庫等に出した。乃ち、『闇の盃盤』、『褄とる君』、『朱のにじみ』、『春曉』、『行く春』、『朝』、『葉卷きのくゆり香』、『嗜息』、『月と猫』、等は最近のそれだ。

惡臭 つひに
却つて なつかしく、
こゝろは 溶けて
をみな の 身に 添ひぬ。（うらこづ貝）
兄は その頸 振り向けて、
若き 血しほ ぞ 亂れける――
口づけ したる者、
父の ひとみに 燃えて 見ゆ。（朱のにじみ）
白む 伏し所 に 夢の かをり、
ゆるむ 節々 花を 開く。（春曉）
青葉 顫ひて 息を 凝らしい
小徑 をのゝく 露は 繁し。（行く春）
くゆらす 煙 の
中より 見え來なる、
くちびる 燃えて
ひとみ を 凝らす人。（葉卷のくゆり香）
死はも わが身 を 獄に つなぎ、
肉は 魂とも 燃えて のぼる。（闇の盃盤）

かういふ思ひ切つた肉感的デカダン思想を緻密な音律に彫

刻して歌つて居るのは、現代の詩人中には泡鳴一人であるのだ。

今、おもな詩人のうち、泡鳴、有明、泣菫、並に鐵幹の明治三十九年四十年に於ける作風の一端を擧げて、讀者の比較の便に供しよう。泡鳴の『葉卷のくゆり香』――

ひそかに 君が
つけたる 卷煙草、
葉卷き の かをり
この身 に 染めて より、
かさねて 飽かぬ
出會ひ の 苦しさよ。

よそ目 を 避けて
會ふ 度毎に、君、
熱るる 胸 の
ほむら を 訴ふとも、
別れし 跡よ、
思へば、人の妻。

獨り し あれば、
いよいよ、なつかしや、

くゆらす 煙 の
中より 見え來なる――
くちびる 燃えて、
ひとみ を 凝らす人。

眉間 の 色香
佛へど、妄執 か――
知力 を 卷きき
覺むれば、且、凍り、
紅 連 の 熱 は
身を 燒く 阿鼻地獄
罪 呼ぶ聲 は
底より 響くとも、
はだへ は 裂けて、
血しほ ぞ 踊る われ、
君 もて遊ぶ。
君、われ もて遊ぶ。
互ひ の いのち
今更ら 惜まれて、
苦しむ ひま を
樂しき 夢の世 ぞ。